骨

13

深瀬基寛・随筆集

日本の沙漠のなかに

Y 300

筑摩書房

骨 十三号 ¥ 50

昭和三十三年三月一日発行

編集者 山前實治

発行者 依田義賢

発行所 骨発行所

京都市左京区下鴨泉川町五三

電話(78)〇七九六 依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願ます

京都市中京区御幸町御池上ル 双林プリント内 山前實治

電話②四三八二

# 骨

No. 13

1958·3

同人の顔　　深瀬基寛

## 深瀬さんの Profile

### カキ蕎麦

山前実治

蕎麦は真夏、種子をまいて、秋になると、ほかの雑穀よりも、ひと足さきにみのる。みぢかい日かずで、いちはやくとりいれできるのだ。しかも簡素な製法でたちどころに手ごろな食べものになるのだから重宝このうえない。むかしの修験者が常食にしたと、きいたが、なるほどとうなずける。

わが愛する深瀬さんは、この蕎麦が好物なのだ。そして、蕎麦かきが、得意だと知った。それを深瀬さんは、あえて、「カキ蕎麦」と云われる。「日本の沙漠のなかに」は、ふかくみがきのかかった知性のきらめきのうらで、ふるさとのあじのように、野生的なかおりが、ほとばしっていて、したしさをみなぎらすのだ。たしかに、「日本の沙漠のなかに」と「カキ蕎麦」。この結びつきには意味がある。

### 日本の沙漠のなかに

富岡益五郎

「おお、オアシスは、オアシス」はと多くの人は、叫び求め、又多くの人は求めてもいない。はっきりと、沙漠の荒耗と熱風を、身に感じて、云わざるを得ない人、「日本の沙漠のなかに」の著者。はげしい情熱を、村風子然とした外貌の何処かに秘めて、この碁盤縞の都会、矛盾の三重の塔の上に、あぐらをかいている碁盤縞の街の、そのはすかいの小路にある一杯呑み屋でチビリ、チビリと盃を、またビールの乾杯を、誰と干しているのだろう。誰とでも世界の良識とだ。

### 「熊鷹」にて

井上多喜三郎

北野の天神さんの通りに「熊鷹」という、深瀬さん愛顧の酒場がある。私がおもいついて、縄のれんをくぐってゆく夕は、約束でもしていたかのように、待ちうけていてくれられるから不思議である。

ここでは深瀬さん伝授のお国(土佐)名物「鰹のたたき」が作られる。藁火でいぶし焼にした鰹を、ぶつ切にしたものだが、生にんにくを添えてたべると、野趣があって、フレッシュで。即ち深瀬さんご自身の持味のような気がせぬでもない。

月に二、三回は恋人のように訪ねてゆくのだが、このごろむだ足を使うことが度重っている。私のカンもはづれがちだ。これは深瀬さんのにおいがすっかり私にしみついて、鼻の感覚がきかない故なのだろう。

### カメラ考

佐々木　邦彦

エッセイ集「日本の砂漠のなかに」の、口絵となっていた写真には、深瀬さんらしくない演出があった。どこかポーズがわざとらしく、いつも「骨」の会合でお会いしているときの、洒脱な感じがうすれているように思えた。こころみに手だけのこして、あとを全部かくすと、下手な石膏細工のように見える。ところがこの写真は実にいい。正面きられると、一癖も二癖もある写真となりやすい深瀬さんの顔である。それが人生の粋も苦労も噛みわけた、まさに酒仙の風格がにじみ出ているのは、依田義賢のカメラ技巧を裏ずけているもので、おそらく深瀬さんのポートレートとしては出色のものとなろう。この次ぎに本を上梓されるときはこの写真を口絵としてほしいものである。



### 深瀬仙人

依田　義賢

仙人というものは、霞を喰って生きているというが、霞にカロリーや栄養価がどの位あるだろうかなどと、考える奴には、もはや、仙人の仙たるものを解することは出来ないのであろう。ところで久米仙人というのは、洗濯をしている女性のかしこを隙見して、神通力を失って地上に落ちたとある。さすれば、仙人というものは、その様な助平心を起し得る心情形象を持つ人間に近いものだとも云える。霞は地上より発する、うん気であると、俗人が考え、これを食するものを仙人とする論理と、このへんでは微妙に錯雑する。思うに、仙人は、地上より発する俗気を、何らかの神通力をもって、浄化して、類稀なる食物(もはやこの時は精神と化すものと思う)として、摂取するのに違いない。ストロンチュウム90も、濾化されていることであろうが、仙人がこの食物をとり、しかも、尚、超俗しきれずにさまようのは、その食物が充分に浄化され切っていないという論法と、浄化したって、所詮、それは俗気を含むものであるからそれを浄化し、世俗と切りはなしたものであると思うのが、間違いであるという説とがある。我は天上人なりと、思う仙人が往々にして、現世俗処生にまどい、淫欲、名誉欲、金銭欲に、うろたえ、ジャァナリズムなどというのに、横目を使い、たちまちにころりと墜落するもろさを持つのではなかろうか。

さて、わが深瀬老は、いささか、仙人の匂いを持っているが小生思うに、この先生は、天上を飛翔する仙人の類ではなく、地上を彷徨し、橋脚によりて、昇華を思索し、眼ざめれば酒をくらい、流れに濯ぎする女あれば、かのもの、川面に写らばやと、横目どころか、洒々として眼鏡をあげて、あたかも婦人科医の局部を診察する如くする。俗に倦きたる(倦きるとは嫌うのでない、飽食したるのちの贅沢なる心なり)老爺というべきで、真に通俗の醍醐味を知る仙人であろう。世の中では、通俗ということを、卑しむこととして、はづかしそうに云う奴が多いが、馬鹿野郎、出来るなら通俗となってみろ。ちょっとやそっとで、通俗になれるもんか。

### カルテから

荒木　利夫

深瀬さんの「日本の沙漠のなかに」が、本棚から消えている。誰かが持って帰ったそうで、しまったと思いながら、何々しながら、記憶へ《たてから横へ》《たての文明と横の文明と》と、反射的なノックだ。たてに流れている川、よこの水が沢山流れこんで、ことなった大きな川になって流れている川。もう、たてでも、よこでもない川が、流れているんだが、見た目には、たてに川が流れている。横の水を忘れて。どの川も、みなこの原理にちがいなさそうだ。日本の川も、外国の川もだろう。では、川をそれぞれちがった川にしている風土とは、一体なんだ。そしてまた逆に、川は風土を変えてゆくとも云えそうだ。たてにも、よこにも、――スプートニクがぐるぐる廻り、エクスプロアラーが廻りはじめ、それらの円周も、われわれの体のなかへじかに入ってくる。「日本の沙漠のなかに」のことなど、あるアナーキーな詩人と話していたら、彼は本の名をさかんに「沙漠の日本のなかで」という。読んだかどうだか感違いなんだが、感違いであるとともに、その人の日本に対する感じ方が、正直に出ているのであった。

山前実治詩集
**花**
装画・佐野猛夫
山から掘りだされた紫水晶のような
珠玉ばかりの詩集
限定 300部 ¥ 100
発行所
京都市東山区大和大路通五条下ル南松原町 文童社

## 編集後記

（北窓を開く）季節になった。梅の花がどこからか匂ってくる。マントなしで歩るく野径。私の胸の底で、うたっているのは誰だろう。『骨』13、六ケ月ぶりに発行した。今年こそは活溌にやりたいとおもっている。同人会を毎月開いているので、一応満された気分になっているのが、遅刊にもかかわっている。会合での話題はテープレコーダーにとったりしてあるが、再聴してみると、構成も自然に出来ていて、なかなかすばらしい。雑誌へもだすつもりでいたが、スペースが大変なので割愛した。この間は「現代詩のわからなさ」というよりは「現代詩のつまらなさ」について論議された。

本号から同人相互評欄を設けてまづ深瀬さんをやり玉にあげた。次号は山前君の予定である。カメラは依田君が、その腕のあるところを披歴する。荒木君の詩がないのはさみしいが、中共貿易と取組んで過労、一月以来病床についている。経過は至って良好、この期をのがさないで、10号分程の詩をかきためて、毎号遅稿のうめあわせをするといっている。

梅棹君は昨秋、東南アジアへ探検隊長として出発した。「心ならずも『骨』例会にも出席できず――わたしの壮行会をしていただいているのに――申しわけないことです。この一月間は、ほんとにキリキリマイをしました。明日の朝、神戸を出発します。二月末か三月はじめに帰ってきます。（112、梅棹）」次号にはその珍らしい土産話を掲載したいものとおもっている。

（井上）

☆からりとかわいた、晴れわたった日は、街をあるいていても、さわやかだ。つめたいきよい水の流れにおよぐ若鮎のように。けれど、日本の風土には、こんな日は一年のうちに数えるほどしかないのだ。こつんこつん咳入らせられ、滅入りこませられる陰湿な日が、いつまでつづくことか。外から内へ、うけ身の姿勢が、かくも見事に身についてしまったのだとしたら、こいつは何としてでも、はねかえさねばならない。どこまでも、内から外への方向を一途に目指せば、せっぱつまった躍動も燃え熾るのではないか。

☆今度こそは、今度こそはで、やっぱり遅刊。なにかにおっかけられているような気持にすこしの変り目もない。こんど、故あって、詩集「花」を出した。読んで下さる方に、手渡しして差し上げるたてまえなので、お目にかかれない方には、残念だが差し上げられないことになる。

☆依田が、この間、毎日新聞映画コンクールで、「脚本賞」を受賞した。仕事の実績を賞讃されたのだから、こんなうれしいことはない。

（山前）

井上 多喜三郎
**抒情詩集**
民芸紙豆本
限定 100部・非売品
「秋の雲」 他11篇
発行所 文童社



## 同人

荒木 利夫 京都市北区小山東元町二六
井上多喜三郎 滋賀県安土町西老蘇
梅棹 忠夫 京都市左京区北白川伊織町六六
佐々木 邦彦 京都市東山区山科大塚森町一六〇八
佐野 猛夫 京都市左京区下鴨梅木町一九
富岡 益五郎 京都市左京区下鴨岸本町二一
西山 英雄 京都市伏見区深草願成町八
深瀬 基寛 京都市北区小松原北町六九の一
山前 実治 京都市東山区大和大路通五条下ル南梅屋町
依田 義賢 京都市左京区下鴨泉川町五三

## 骨 13 目次

深瀬さんの Profile 同人 2
運命 佐々木邦彦 6
雨の夜曲 他二篇 富岡益五郎 8
メルヘン 他二篇 依田義賢 4
鈴 他一篇 天野美津子 12
むかでながやⅡ 他二篇 山前実治 14
松尾孫日記 深瀬基寛 16
彼岸 他三篇 井上多喜三郎 18
編集後記 井上・山前
表紙・挿画 佐々木邦彦
カット 佐野猛夫

14

# 骨 14

## 目次


山前君の Profile　同　人　2
東京点景　富岡益五郎　5
むかでながや Ⅲ　山前實治　7
新宿　依田義賢　8
小鳥と木と花と　佐々木邦彦　10
メモ　依田義賢　12
かなめ籠　深瀬基寛　14
蚯蚓他二篇　井上多喜三郎　16
―座談会―
日本語と詩　同　人　18
東南アジア風物詩（写真）　梅棹忠夫

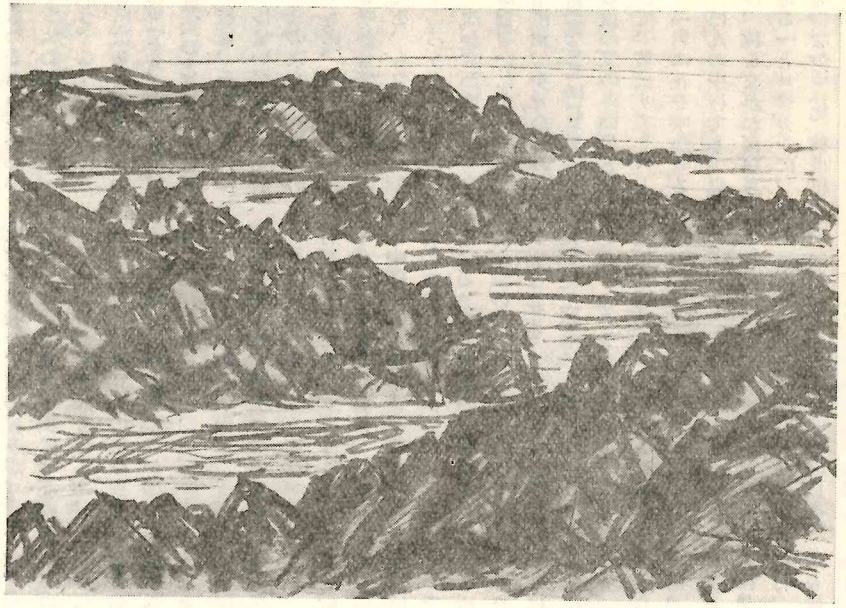

編集後記　井上・山前
表紙・挿画　佐々木邦彦
カット　佐野猛夫


骨　十四号　¥ 50
昭和三十三年八月一日発行
編集者　山前實治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方


【骨】への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前實治宛
電話③四三八二

# 骨

No. 14



1958·8

同人の顔　山前實治　撮影 依田義賢

# 山前君の Profile

## 花咲先生

依田 義賢

この先生という呼び名は、えらい人に奉る先生というのではない。山前君が、飛騨で、小学校の教師をしていたという意味の先生である。この花咲先生は枯木に花を咲かせる先生ではない。彼は小学生に云い聞かせるような口ぶりで、「わたしは、(朝暾と)枯木になど、(噛むように)ハナは、(早口で)咲かしません、(おしえるように)岩に、ハナを咲かせるのです」と、大人に云う。なかなかどうして、大変おそろしいことを、そのように、さも、童話風に云うのである。これで、默っていると、これは少々、腹の黒い男になるのであるが「わかりますか、ふん、わかりますか」と、すぐ云う。こゝが人の好さのまる出しになるところで、いつまで、たっても、都会風にはならん、野暮天のところである。もっとも、彼は、そんなもんになったら、しまいだと思っている。良寛さまのように、飛騨の雲と風とともに、いて、気ながく岩に花を咲かせて見せる、素朴な、純情を、もっとも、尊んでいるのであろうが、彼は、そこまで、なかなかゆけん。まず、貧乏が彼をいためて、良寛さまになるには、少々ひがみが強くなり、良寛さまになるには、怒りすぎる血の気の多い男となった。そして、彼はリアリストになった。「岩に花を咲かせるためには、ほんの少しでも、亀裂を見出し、種をまかねばならないのである」とロジカルに、考えざるを得なかった。彼は根を、亀裂の中に、のばして行った。辛棒強い、彼の営みが、はじまった。すると、根に、みみずや、しけ虫がたかりはじめ、彼は、はげしく、この虫けらどもを、憎悪した。花はなかなか咲かず、たくましい、葉がいっぱい茂った。葉は次第に、手織木綿のように、丈夫になって行った。それが骨のようになって行った。その時、グループの「骨」が生れた。彼は、いま岩の中に、髄を根のように張り、骨の上に、花を咲かせようとしている。童心の花を、純情な、飾り気のない、野菊のように、質実な花を。山前先生は、ええ、先生じゃ。「わしゃ、こうと思ったことは、やるぞ、やりとげてみせるぞ、ほんとに」

## 詩集「花」への おてがみ

天野美津子

いたゞいた御本は、どの頁を繰ってみてもいい香りがしました。花の匂いは何処から漂ってくるのか、私にはわかりませんでしたが、どの詩からも、私は高く匂うものを感じとりました。名も知らぬ花は名も知らぬ香りを発していました。

山前さんの詩は、一見花びらのように繊細でつつましやかですが、この花はもともと岩の上にも耐えられる程強靱で、茎や枝や葉脈の細い通路を経て開花するほど柔軟性に富んだ生命力なのですから。

きめの細い生活感情と痛ましいまでに行届いた言葉へのいたわりは、山前さんが、絶えず、きずだらけになったいくつかの骨を、胸の中に沈ませておられるからなのでしょう。誠実と忍耐は、多くの場合、誰よりもその人を苦しめます。私が山前さんに男性よりも、父性を感じるのは、その為かも知れません。最も孤独な男性は父性的だと云えないでしょうか。



日頃のむしやくしやが溜ると、愚痴をこぼしに、私は山前さんのところへ電話をかけたくなります。受話機からは、いつもはぎれのいい返事が流れて来ます。一日の仕事を終えた山前さんと、山前さんの影のような自転車を中にはさんで、私は寺町を四条通位まで歩いてゆきます。おそばなど御馳走になっているうちに、私はいつか平静で朗らかになった自分に気づくという工合です。

山前さんという人は不思議に温かい人です。詩集「花」の、そこはかとない香りも、山前さんの人間性と源を一つにしている詩的アルファではないかと思うのです。

## 香水社長

井上多喜三郎

山前君の「双林プリント」へは週に二、三回は必ず訪れる。用事なんかないのだが、ついふらふらと立よるのは、彼の人徳のしからしむるところ。帰りには寺町のすすけた居酒屋で、牛のシッポをかじりながら、コップ酒をひっかける。少し酔がまわってくると、彼のエンゼツは次第に雄弁になってくる。

プリント屋の彼は、器械の蝶つがいを改良して、能力のよいゼット式を考案したり。タイプ原紙のつぎ合せに、ラックニスを発見したりしているのだが、特許なんてケチなものをとりはしない。

忙がしさをやたらにつめこんでいるカバンの中に、このごろ「花」という詩集が入っている。名刺のかわりに、サインと交換で進呈するのだが、詩集の脊とぢへは香水を注しこんでおく。彼が女の子にもてる秘訣は、このへんからきているのだろう。

## 自転車に乗つて

富岡益五郎

山前さんは忙がしい。昨日も多分夜十時を過ぎて「むかで長屋」に帰ったようだ。自転車に乗って風の如く行って了つたかと思うと、ニコニコしながら、フンワリ帰ってくる。双林プリントの仕事場で、社長の山前さんは、ワイシャツにネクタイを締めて、輪転機を廻わしている。楽しそうだ。色々の原稿を調えて、販行の形に作り上げてゆくことは、創造の喜びだ。それよりも、山前さんは、この仕事を愛情で包み、抒情の流れの中に漂わしめているのだろう。澄み切った抒情は、冷くない水晶のような結晶を産みつける。昔から調子を変えない結晶作用を続けている。最近、十年余りの間の愛誦の短篇を盛って刊行した、小さく、愛すべき詩集「花」の作者は、これに似たいくつもの未刊の詩集を胸にして、仕事の中にも、自転車で風を切っている時にも、むかで長屋でも、休まずに誦い続けている。双林プリントの仕事が段々大きくなって、コンクリートの建物ができたとしても、やっぱり山前さんは、毎日「むかで長屋」から自転車でやって来ることを止めないだろう。

## 山前さんのこと

佐野 猛夫

いつもニタニタと笑い乍ら、大へんハダサワリのよい人なのだが。ところで自分のペースを乱されたり、芯にひびを入れられたりすると、ズバッと切りつけ、えぐる。一歩も引かないところもある山前さん。ささえるものむ持つ強さと云へましょうか。その山前さんが詩を語り、詩を朗読する風貌はこよなく美しい。いつだったか依田さんのローマ詩集を語る夕……そっと彼女にささやくように朗読する人を見た。詩を楽しみ、詩に生きている人だなあとひそかに

思った。それが實治さんだったのである。「骨」の集団をささえる大切な一人である。

## 飛驒男

佐々木邦彦

なにしろ忙しい男だ。忙しいといえば「骨」の同人は、それぞれ年輪をかさねた忙しさの中で仕事をしているのであるが、彼の場合はその忙しいという性質が少々ちがっている。忙しさを自分で買って出て、しかも引き受けたら、全身火につつまれながら立ちむかっているように、傍から見ると感じられる。「えらいわァ」彼の唇は時々ゆがむ。が、彼が一杯のコーヒーを手にするとき「岩の上にも花は咲く」という彼の詩をいつでも思わせる。疲れたといってくゆらすバットの煙のかげから、鋼鉄の面をありありとのぞかせる。彼は疲労の看護人ではない。

いつの年か秋の白川郷を歩いて、谷間の小さな分教場で、宿直の相当の年輩の先生と一夜語りあかしたことがある。飛驒のよさについてという私の質問に、人の性質が非常に誠実なことだといった。彼は飛驒男である。飛驒といっても白川郷の上流なので、山国も山国、ちょっとやそっとの山国ではない。彼と話していると、飛驒の人は誠実だという言葉をあざやかに思い出す。飛驒の山国が彼の背後にひろがって見える。

「花」という詩集を出した。彼らしくもない詩集だ。しかし読んでいると、彼が胸の花をしきりに気にしていることがわかる。胸の花は飛驒なのだ。それは誰もがうたえるという花ではない。彼の誠実さがうたいあげる花なのだ。誠実であるばかりでなく、彼は多分に実行力をもっている。どんな困難ものりこえて実行にうつしてゆく。かがやかしく飛び廻る実行力。野次馬根性の私などは、大いにやろうとどんなことでもすぐに飛びつくのであるが、あとがつづかない。彼の根気と実行力を少々見習わねばと自戒して見ることがある。「骨」が不定期ながらも、その刊行をつづけているのは、その仕事の面では忙しく活動をつづけている同人も、ことに「骨」に関してはなまけものぞろいの尻をひっぱたきつづけ、いつも裏方の役を易々と引受けてくれる彼の実行力が、大いにあずかって力があると私は思っている。

## 白樺

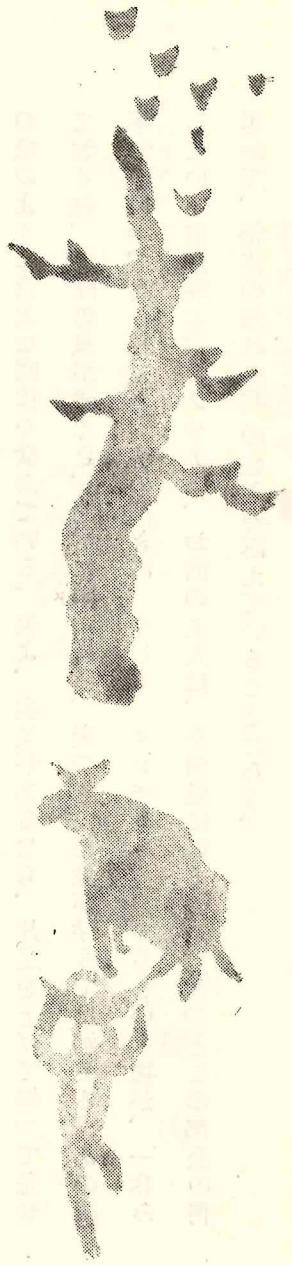
荒木利夫

比叡の頂きに駐車場ができた。ターミナルのざわざわした人出を、そのまま比叡の山上にほりだして、じじむさい銭形の禿をこさえたと、雲上の天女をなげかせるのである。その禿の一隅に、白樺の細い若木が十数本植えられている。何故セメントと一緒に、素朴純情な白樺を、ここへもってきたのか。ちぐはぐな奇妙な感情誘発を計算したもののようである。実はいまいましい計算である。白樺には何の罪もなく、白樺は、僕に山前君の第一詩集「飛驒」を想出させた。だから全くいまいましい。

山前の「飛驒」の装禎につかわれた白樺の皮から考えて、それの白樺の幹の太さは、おそらく径六、七寸もあったのだろう。その詩集のために、故郷の庄川の見える飛驒の山で、何本の白樺が山前君の父の手を待ったのであろう。白樺の皮を、売れもせぬ息子の詩集のために不便な山奥から送ってよこすいい父のおかげで、息子の山前も、人がいい。

詩集「飛驒」の中に「自転車」という詩があった。二十数年たった今も、自転車のことを〈骨〉で書いていた。白樺と自転車が山前の性根である。





# 東京点景

富岡益五郎

東京ははちきれるぞ。膨らみ切ったゴム玉のように。中味は砂利と、セメントと、鋳鉄の混合物。ガッチリと粉ね固め、空に向っては高く、地下に潜っては深く、四方に造営を

ミヤオ族の少女　　撮影　梅棹忠夫

バナナのプランテーション　　——カンボジアにて——

## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六〇八
佐野猛夫　京都市左京区下鴨梅木町一九
富岡益五郎　京都市左京区下鴨岸本町二一
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
山前實治　京都市東山区大和大路通五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

## 編集後記

夏が炎えている。自転車のスポークに、麦藁帽の上に。僕の呼吸も炎えている。『骨』14、ナツニモマケズというところで発行した。

『骨』の月例会には、同人がいろいろ消息をもちよって、たのしく話しあっている。五月の会合には、東南アジアから帰った梅棹君が、まつ黒な顔で現れた。むこうでは「日本上等」で大カンゲイをうけた由である。現地写真は、次号にもつづいて発表の予定。

Profile の撮影は依田君だがなかなかの好評である。同人の撮影もその大半を終った。次号には富岡さんの登場を願うことにした。

依田君の〈異母兄弟〉が、チェコの国際映画祭でグラン・プリを獲得した。

深瀬さんはこの秋停年で京大を退かれるのだが、紀念に随筆〈童心集〉を出刊される。装禎は佐野猛夫君である。

私は仕事で隔日位に京阪へでかけてゆく。汽車が電車にかわって、ゆき帰りの時間が二割程短縮になったのはよいが、汽車では書いていた手紙や原稿が、電車では、振動がはげしく書きづらくなった。従って友人諸君への音信も、とだえ勝ちになって申しわけがない。いつだったか病後初めての講演旅行に、津市へ出かけた深瀬さんが『汽車と電車は乗客の人種が違うような気がする』といっていたが、これはおもしろい感覚である。もちろん電車には米も積んでいなければ、闇屋ものっていないのだが。特に夏季で助かるのは、電車は烟をはかないことだ。京都へは逢坂山と東山の長いトンネルが二つもあるが、以前はこのトンネルをくぐると、白いシャツが、一ぺんでくろずんでしまった。汽関車がもやす石炭の、あの情熱的ないきざしのなつかしさは、わからぬではないが、けむりの抒情を排除した電化は、現代のエスプリに通うものがないでもない。（井上）

＊

〈骨〉の例会では、いつも、いいたいほうだいに、詩についてかたりあうのが、さかんである。去る四月十九日の例会では〈日本語と詩〉について、はなしあった。わかりきったことにはちがいないが、こうしたことが、あんがいおきざりにされている。いちばんだいじなテーマだとおもう。テープにいれてあるのも、知らないで、しゃべっていたひとがあったりして、不用意に、だいたんに、ものをいっている。いろいろと、問題も、矛盾もふくまれているとおもうが、そこは大方のげんせいな批判と、叱声をのぞんでいるところだ。これからもこうしたこころみをするつもりだ。（山前）

15

# 骨 15 目次


—座談会—
関西語と詩　同人 2

新宿 I　依田義賢 8
雨期 二篇　天野美津子 10
府籠の中から　富岡益五郎 13
柿　荒木利夫 22
挽歌他四篇　井上多喜三郎 30

詩集「飛驒」収録 I　山前実治 18
詩と画を結ぶもの　深瀬基寛 14
草刈集（一）　佐々木邦彦 24
富岡さんの profile　同人 27

裏磐梯山（素描）　西山英雄
東南アジア風物詩（写真）　梅棹忠夫
表紙　佐々木邦彦
カット　佐野猛夫
編集後記　井上・山前



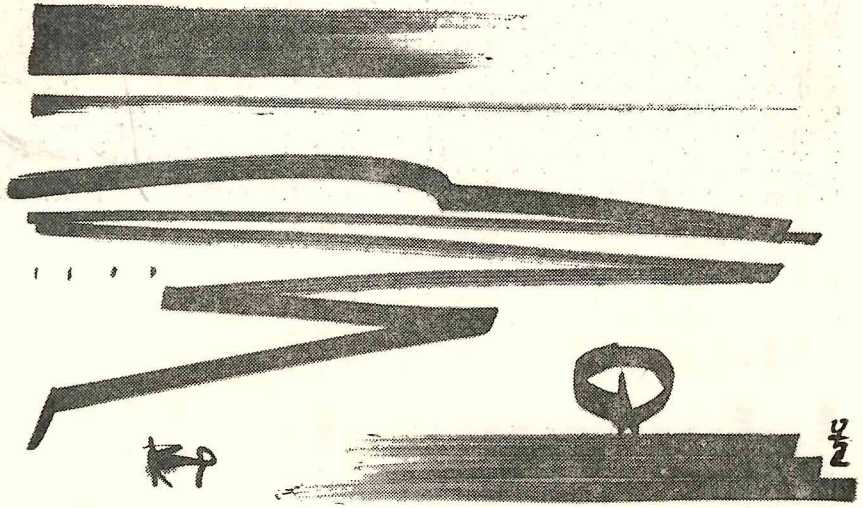
骨 十五号　¥ 50
昭和三十四年三月二十日発行
編集者　山前實治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方



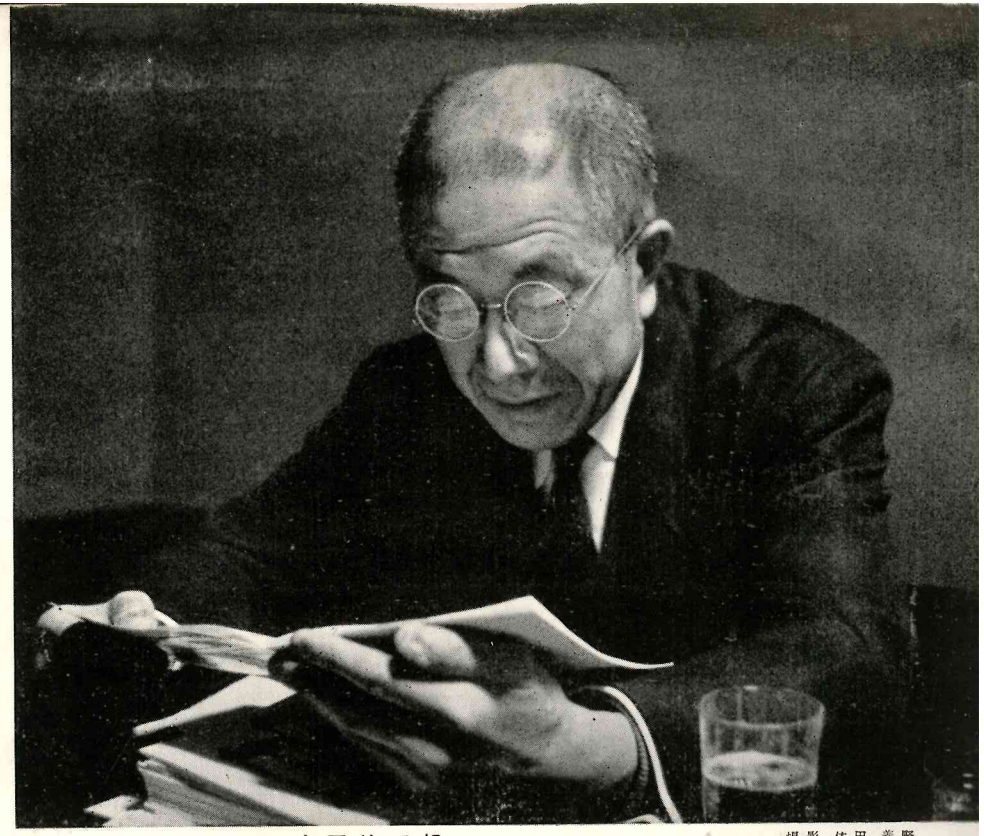
【骨】への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話②四三八二

# 骨

No. 15



1959・3



同人の顔　富岡益五郎　撮影 依田義賢

参しているが、仙台紙子としてその声価のたかかったものは、白石紙で作られたものである。また公卿公家諸大名などが、夏の礼服としてよく紙の織物をつかったが、紋織ちりめん紙布などの紙布織も白石の特産で、高級品としてもてはやされた。

佐藤氏からおくってきた袋物は、蔵王山産きはだ染、会津産くるみのかたから染、会津産くるみの実の表皮染、紺、青、あい染など、白石紙を加工してつくられているものである。茶羽織とか紙子のれん、札入れ、古帛紗、ふすま紙などとずい分応用されている。

日本でも数すくない純楮生漉のみちのく紙が、みちのくの香をこめておくられてきたとき、ながいあいだ私はその感触をなつかしんだ。紙はいつまでもみちのくのおしゃべりをやめようとしなかった。

## ブロッケン現象のこと

「ブロッケンの妖怪」として、ドイツのブロッケン山で、しばしば観測されて報告されたこの現象を、七月十一日の午後五時ごろ剱岳の別山尾根で体験した。

なにもブロッケン山にかぎられたことはなく、どこでも見られる現象であるが、日本の山岳地帯では、地形や気象の関係で、見られるところと、見られないところがある。北アルプスでは、常念岳ではよく見られるが、白馬岳方面になると、その報告はすくない。剱岳方面は出会った人があったかも知れないが、あまり報告はなさそうだ。

立山連峯と剱岳の中間を一つの尾根が東北にむかってのびている。これが標高二千九〇〇米の別山尾根である。その日は西の空がからりと晴れて雲海がとてもすばらしかったが、東の後立山連峯方面は、どんちょう状の雲が垂れさがったまゝ、じっと動かなくて、白馬岳から針の木岳にかけての、連峯の片鱗すらうかがえなかった。

ふと気がつくと、そのどんちょう状の雲に、私の影が濃くうつり、その影の周囲が七色の虹の輪をもってくっきりと彩られているのを見た。ブロッケン現象だ。御来迎図に描かれている仏の御光だ。山越えの弥陀として描かれた浄土変の仏の円光だ。

私の山歴もかなりになるが、こんなみごとなブロッケン現象にあったのは始めてである。数年前に八ッ岳の横岳を、朝早く歩いたとき、わずかな時間ながら体験したことがあったが、きわめてうすかった。ところがこの別山で見たものは十数分もつづき、剱岳の写生をすませて立上ると、また見られたので、おそらく三十分も、じっと見ていればつづいていたであろうと思われた。

私は手をふって、私の巨大な影にむかって声をあげた。影もしきりに手をふった。虹の輪はさらに濃さをました。別山の頂上に硯池という残雪の水をたたえた小さな池がある。私はその池のほとりにケルンを積んだ。剱岳は斜陽にそまって、もの倦い樺色をのこした。ケルンには風がこもって、ひゅうと海女ののど笛のように鳴った。夕陽は最後のかがやきをくるめかせながら、雲海の彼方にらんらんとゆらいだ。硯池はみしみしと凍る音をひびかせた。溶けはじめた残雪が、急にまた夜の冷えの中に呼吸を凍らせはじめたのであろう。私の影からやがて虹の輪が消え、私の影もこの日この時かぎり、ふたたびと同じ現象としてあらわれるということもないであろう時の翅をおさめて、いつのまにか消えさっていた。涅槃のような夜が私をとらえた。



## 富岡さん Profile

### 富岡さん

佐々木　邦彦

野人のようで紳士、端正な風格を持しながら、なかなかの情熱家、深瀬さんと多喜さんとともに「骨」の三奇人とかげながら呼んでいる。深瀬さんが仙人なら、富岡さんはさしずめ和尚さんといえよう。

弁護士のNさんから、ある故人の遺家族に対して月極めの扶助料を富岡さんが一人で集めていられる話を聞いた。

「毎月雨の日でも風の日でも、その日になると、きまって歩き、その日はちょっと上って行くようすすめても、決して上ろうとしない。まことにそういうけじめをはっきりつけていられる人で、その遺族の中には息子にぐれたのがいたりするので、扶助するということも疑問をもつことがあるが、富岡さんの熱心なことを見ていると、ことわりきれなくなる」というのであるが、富岡さんの一面を聞かされたようで感心した。私などは約束したことでも勝手な理くつをつけて（自分に都合のよいように）破ることもあるし、人にはめいわくのかけっぱなしである。富岡さんに会うと、その眼ざしに一すじなものをいつも感じて自分のいたらなさを思い知らさせる。

若い時はずい分詩を書かれている。やはり雀百まで踊りを忘れずの通り、このころ「骨」に書かれている詩を読むと、その情熱がまっすぐに若い時代につながっていることが感じられる。

十四号の「骨」の座談会で、深瀬さんが指摘された批評（オーソドックスという問題を、西山英雄さんと一しょに語ったことがある。富岡さんはその時、かならず私らの手でやりたいといっていたが、一日も早く富岡さんの画壇に対しての批評の建設を望ましく思っている。

### 新築祝盃記

井上多喜三郎

益さんが修学院村に新築したというので、「骨」一同でお祝いにおしかけることにした。晩秋の雨が降りしきる日であった。叡電の修学院駅からかなりの道のりがあって、ときには夜更けて帰る益さんの、千鳥足などおもったりした。枝道にそうて小川が流れ、ものすごい勢いで、赤く濁っていた。益さんの新屋はその小川のほとりに建てられていた。玄関を訪れると、式台の上に、大きな犬が坐っていた。耳を垂れておっとりした犬である。（あとからおききすると、この犬は盲目の由であるが、こうした盲目の犬なんかを、家族の一員として飼っておくところ、益さんらしくておもしろいとおもった。）すでに山前、依田、荒木の諸君と、天野美津子さんが来ていた。玄関横の八畳位の部屋に通された。板間なので和洋両方に使用できる。食卓を横に竝べて座蒲団が敷かれていた。二方はガラスの出窓で、私の正面には修学院山が雨に烟っていた。前景にわずかな竹藪、柿紅葉、ひなびた納屋、それが美しく調和して、玉堂さんの「彩雨」ならぬ風情をくり展げていた。雨の強弱で、霧のながれが濃淡になり、景趣がうっかりかわった。食卓にはとりどりの馳走、スキ鍋があたたかい湯気を立て、酒は八醉

心〻。ほどよく血液が逆行して、舌たたのしく、青春の花が咲いた。はては巻紙に、聯句をうみつけては、打ち興じた。辞去した頃は、すでに夜のとばりがおりていた。幸い雨はあがっていたが、濃霧がたれこめていて、途中で拾ったタクシーのヘッドは、十米先さへ照らさず、夢の中にいるこころ持ちがした。

「骨」からの新築祝には、金木犀を三本。この間も植木屋さんが肥料を施してくれたそうだ。益さんの詩嚢が、木犀のにおいで、沐浴をする日も近いであろう。

## 休火山

依田義賢

益さんは休火山である。火山脈中の有力な山である。胎内には革命的な火を燃やし続けている。熱いヒューマニズムと純真なロマンチシズムを内包して。彼の理知が冷え性を昂じた上に、お役所仕事が、外皮を厚い壁にして鎧わせることになった。その間に、休火山になった。死火山になりそうなところで、火山脈に終戦の変化が起り、くづくづと、活動しはじめている。何が馬鹿々々しいことか、誰が嘘つきか、真偽の鑑定には、鋭い批判の慧眼を持っている。さしづめ、山上の火底湖というところ。この山バタくさい山容だが、生えている樹木や垢はしつこい、京都風の東洋風の味いを添えている。発言のしかた行動の、おっとりとしている所は、本来の冷静さとものぐささから来ているが、いささか、無気力を強いられて、自嘲的に冷却しすぎた結果であるかも知れない。或はぶつぶつとつぶやき、ぼやくように、精神を胎動させているのは、百年千年というようなスケールの活動の根源を知っていて、ゆっくりと爆発しようという魂胆かも知れない。

骨山脈の休火山益五郎、ゆっくり巨大な爆発を起せ。

## カルテから

荒木利夫

文化人といわれる類型は、化けているか、化かされているか、化かすか、「化」ときりはなせないようだ。「化」という転換と反応の鋭敏な個体である。よきにつけ、悪しきにつけ、と言いたいところだが、人間の理想に少こしでも近づこうとする精神を、悪しきものとはちょっと考えられないから、本来ならその「化」はよきものであって欲しいものだが、何しろ「化」という運動の形態は、人間に関する限り古来「ばけもの」であることが多いようだ。文化という傘から手を出し舌を出したり、額に文化という三角をはりつけて足を見せなかったり、文化という襟からやにわに首を長くして油をなめたり、絵にかゝれると、これでは恰好がよくないから、もっとスマートな道具とポーズをつかうだけである。この類型人の、ものごとを知っていることの広くあさいこと、浜名湖の口の洲のごとしで、又特急列車こだま号が、浜名湖口の鉄橋で行きちがうごとく、東西の時間が一日二回はその浅瀬の上をすりぬける。想うてみれば、どうやら俺の呼吸も「化」のニンニク臭が強く、いやに見すぼらしい。見廻せば、あいつもくさい、あいつもだ、と手がつけられなくなる。そこで「文化人」から「化」をとってみたら「文人」となった。だがこの文人たるや、古来いうところの風雅をことゝするデイレッタントの文人とは違う。「化」をとった文化人である。一体どういう人間がそれにあてはまるだろうかと、想いをめぐらそうとしたら、



富岡益五郎の丸刈頭の端正な顔がうかんだ。

修学院離宮は、音羽川のはこぶ砂の扇状地に造営された。音羽川は美しい水の小川だが、雨の日は砂ににごってはげしく山の谷水を流す。その音羽川の流れを真横に聞き、大根畑を前にし、扇状地のすそで富岡氏は、比叡の峯と山を仰ぐ。修学院は後水尾上皇の造営にかゝるが、上皇の天皇退位は、徳川幕府に対する抵抗であったし、あの権力誇示ふんぷんたる金ぴかの徳川の東照宮に対し、畑のあぜ道につながる簡素な修学院を企画した上皇はまさに当代の文化人であった。上皇ほどの文化人は、一夜ひそかに一文人化けて畑のあぜ道をぬけ、村娘と愛を語らったかもしれない。上皇の抵抗精神はその村娘のせつない血のうずきを通って、ひょっとすると富岡氏につながっていそうでもある。そうすると、富岡氏もその限りでは、やっぱり「化」の入った文化人でもありそうだ。

## 益々壯也

山前実治

富岡さんは、真夏の暑い最中でも、きちんとネクタイをつけ上衣を着ている。この気骨の姿勢はいつも、げんかくに端正である。いわゆる紳士とまちがえられるのは、こうした外見のたんなる風貌のゆえだ。どうしてどうして、正真正銘、すじのとおった野人なのだ。いつもふっと、ぼくに、鉄斎をおもわせるのは、あながち同姓だけのせいではない。詩精神にぶっつかってゆく気はくは、まさに、ますますかんで、たいしたものだ。

ぼくは、うかつにも野人といったが、富岡さんは、ほんとうは、やっぱり、まさしく紳士なのだ。いや、いや、貴公子なのだ。いわゆる紳士づらをしない紳士。いわゆる紳士をけいべつする紳士。理路整然とすじみちをたてて、かったつに、ものをおっしゃる。ときおり、観念的に、ものをおかんがえになる。それは、すべて美学的観念の一家言なのか。あるいは、野人として、本性があらわにしめされたときなのか。いずれにせよ、目尻に、いくすじかのやわらかいしわをよせて、にこやかに、つややかにわかやいで、そして、いともしんらつに論議はつくされる。見識はゆたかに卓れてくる。そのうえ、「俄然何かあるような気がして来た」「青年のように感動の鍛練を始めるのだ」などと書いて、「ぼくは、幼稚園ですよ」と自分の詩を見せながら、素朴に、またものをいう。おそろしく、どしようぼねのすわった、紅顔かれんの、幼稚園の大人であることか。

深瀬基寛

**現代の詩心**

筑摩書房刊

定価 360円

「現代の詩心」という書名はどうも氣にいらない。(詩心)の名づけをした私にとってこころがかりであるというのは、詩心という言葉があまりにも平板で、小松原仙人の大脳のひだが現れていないうらみがあるからである。学問のよさはものごとをただしくみることであるが、スジを通すということは仲々むつかしい。ましてユニークなスジを通すということは、しかし小松原仙人にとって眉の的を射落す位は朝めし前の藝当である。專門は英文学だがフォームはたしかに東洋であるということもおもしろい。大人たちにとって心当の書である。 (井上多喜三郎)

東南アジア風物詩（撮影）　梅棹忠夫

（上）　熱帯の登山隊　――タイにて――

（下）　シナ人宿の前　――タイにて――

## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪市東区今橋一ノ一五共立通信社支社内
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六〇八
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九〇一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
山前実治　京都市東山区大和大路通五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

## 編集後記

昨日も野径を歩いていてタンポポの花をみつけた。もうすっかり春だ。『骨』も遅刊ばかりながら15を編集した。

こんど同人に、共立通信社大阪支社長の大鋸時夫（オオガトキオ）君、「かんころめし」の町田トシコさん、「赤い時間」の天野美津子君を入ってもらった。

十一月の会合は西山君の文部大臣賞、深瀬さんの停年祝賀を兼ねた。十二月には西下中の草野心平氏をお客に迎へた。一月十四日夜九時から、『骨』企画、依田、井上共作による狂言《鳥羽絵草紙、屁合戦の巻》をNHK第2のマイクにのせた。次回の《鳥獣戯画の巻》は、山前君がかいてくれる筈である。一月の会では、深瀬さんの退官記念講演を、テープレコーダーで聞いた。

ときどき『骨』へ詩を投稿してくるひとがいる。しかし同人誌であるたてまへから、特に依頼した原稿以外は掲載せないことにしているので御了承願たい。しかしいつか依田君宛に送られた木下智栄子さんの詩は、同人間で好評であった、（井上）

＊

・まい月一回、かならずひらく同人の例会は、いつもたのしくにぎやかだ。みんな、それぞれにいそがしい者ばかり。わたしもいそがしさからぬけだして、かけつる。仲間のげんきな顔がそろうと、いいたいことをなんのえしやくもなく、いいはなつ。あつまるたびに、くったくのない議論がつくされてしまうからであろうか、雑誌の遅刊などはあまり問題にしない。

・せんだっての例会に出席を得た草野心平氏が、表紙の題字の書体について、ものいいがあった。ポエチカル――文学的すぎるといわれるのだ。なるほど、それぞれの感じかた、かんがえかたで意見のかわってくるのはとうぜんだが、おもしろい。しかし、いまのところどうともおもわないのでこのまま使ってゆく。看板の文字はときどき書体だけかえた方がいいのかもしれない。（山前）

大雑寫　そうつか・ひさこ（五才）

# 骨

16

## 目次


不確かな季節他一篇　佐々木邦彦　2
日曜日他一篇　天野美津子　4
或る日他一篇　富岡益五郎　6
ネオンサイン　依田義賢　8
鎖　他二篇　井上多喜三郎　20
義太夫に女体をWらせる　大鋸時生　10
骨か肉か　町田トシコ　11
詩集「飛驒」収録　2　山前実治　12
スキ焼の味　深瀬基寛　18
草刈集（二）　佐々木邦彦　22
ザッキンさん　橋本喜三　25
小景　杉本長夫　26
多喜さんの Profile　同人　27
虎　魚（素描）　西山英雄
表紙　佐々木邦彦
カット　佐野猛夫
編集後記　井上・山前



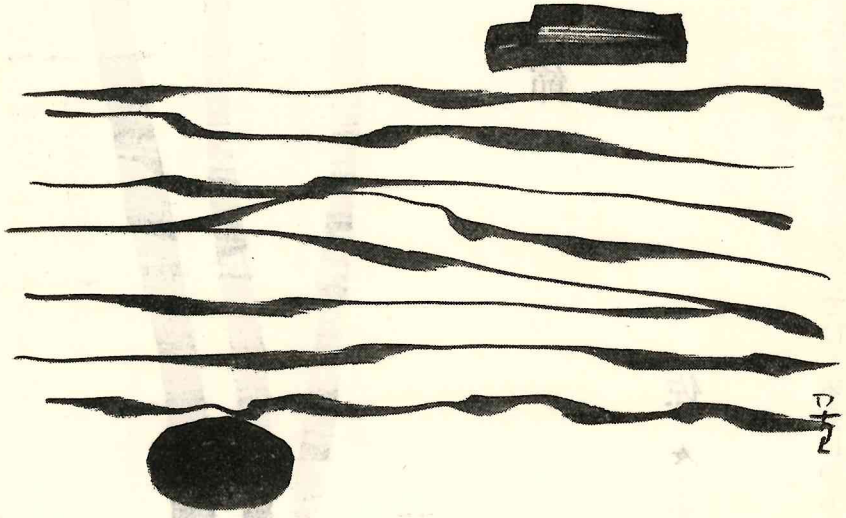
骨　十六号　¥50
昭和三十四年八月二十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方


【骨】への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㊐四三八二

16

# 骨

No. 16



1959・8

同人の顔　　井上多喜三郎　　撮影依田義賢

# 小　景

杉本長夫

坂道を登りつめると
老蘇(おいそ)の森がみえる
鐘や太鼓の音がしている。

やがて
小鳥を飼つている農家の
見事な椿の古木
あたりは菜種の花盛り。

男の子が二人で
田芹をつんでいる
こゝまでくると
私の足は急に軽くなる。

ほつこり甘いマロンのような
多喜さんの家もすぐ近くです。



## 多喜さんの Profile

### 多喜さんと云う人は

依田義賢

白髪まじりの蓬髪に（本当はベーラムをふりかけ櫛をかけているのだが、わざとしているのだそうで）着古した、煮しめたような背広によれよれのズボンをはき（これは貧乏に対する誇りの象徴として、ことさら着るものと信ずるが）風呂敷包を背負う（中に商売の呉服反物、詩の雑誌、知友のハガキ、自分の詩の原稿など、骨の会への土産の餅が入っていることもある）この姿は、多喜さんの商標みたいなものである。

巻頭の写真を、撮影するについて、同人に、どんなポーズがいいだろうかと、訊ねたところ、あの姿を、とらずして、彼はないと云って、背景は出来るだけハイカラ（この語感に注意されたい）なところがいいと云うことなので、まめに、彼が見る、外国映画のスチールのあるところを選び、京都の朝日会館の前で、とった。写真のノリもよいし、ポーズもよし、多喜さんの感じがよく出ていて、私としては、深瀬老像以来の傑作と思ったが、果して、多喜さんも、大喜びで、よほど気に入ったと見え、これを増焼して、役者のプロマイドのように、サインしては、女性などに、贈っていた。

多喜さんなるかな。

先日、バクの会と京都日曜クラブで、近江紀行をやった。この二つの会には、佐々木邦彦、佐野猛夫、私の三人も関係していて、みんな当日の世話役であったが、多喜さんに大変面倒をかけた。多喜さんは、地図や訪ねてゆく寺などの由緒の解説の原稿を丁寧に書いてくれた。双林プリントで、印刷して、当日みんなに配ったのだが。さて予定より少し遅れて観光バスが出発。多喜さんは、安土の老蘇村の自宅附近で、乗合す約束になっていた。きれいに舗装された道路も、中仙道に入ると、云うところのソロバン道で、砂塵が白くあがる、老蘇村が近づいて来たので、私が、メモを女車掌さんに渡した「老蘇村から、今日大変世話になった、純情詩人、井上多喜三郎氏が乗って参られますから、皆さん、拍手をもって、歓迎して下さい」アナウンスはすぐ放送された。老蘇の森が遠くに望まれる頃、前方の田圃の中に、三人ほど人影が明らかに、こっちを見て待っている。いる、いると、喜んで待ちうけ、バスを停めると、拍手で迎える、キッカケを失わしめるほど、多喜さんはもう、一生懸命で、調達した地酒の一升瓶四本、江州音頭の一流の頭の人と一緒に持ち込む。ようやく、上って、拍手をあびたが、坐ると、早速に、女車掌より、マイクをとり「それでは皆さん、これから、美しい車掌さんに代りまして、私がガイドをつとめさしてもらいます。右の方の窓に、見えておりますところの山が、佐々木一族の城のありましたところでございましてからに、今日の世話人の佐々木邦彦君の御先祖やそうで、佐々木君は二十三代の御当主やそうでございます」と、土のしみついたような、江州なまりでやった。みどりの青葉の爽やかな、中仙道の江州路。

鳴呼、多喜さんなるかな。

正月の成人式に、滋賀県の八幡の市役所から頼まれて、講演に行った。前夜、大宗旅館に落

着いたが、当夜、たまたま、多喜さんの原作により私と共同で脚色した、鳥羽絵草紙「音高き合戦（屁合戦のこと）」というラジオドラマの放送があるので、安土へ連絡して、宿へ呼ぼうとしたところ、まだ、帰ってなかったので、半ばあきらめていたら、電話があり「今、帰って来たんやが」（安土駅から、自転車で遠い道を）というから、「来まへんか」というと「だんないかいな」「かまへん」「ほなよせてもらいます、すんまへん」と、さし廻し車で、来た。こげ茶いろの羽織、着物も盲縞のようなしぶい茶人のような趣味で、ベレー帽を、かぶっていた。「やあ、こらまあ、折角のお招きやよってに、来ましたがな」多喜さんなるかな。

彼の風呂敷をかついだ姿は、軽薄な現代の面への抵抗である。そして、もっとも、モダンであるという、パロディであり、プロレタリアートへの、親和でもある。氏の民俗玩具、民俗美術は、愛好のしるしであり、世俗の知恵の、隠れ蓑でもある。

## 多喜さん

佐々木　邦彦

〔宍道湖畔からのおたよりありがとう存じました。気のむくまゝの写生行は、うらやましい限りです。松江はヘルン先生のことなど思われてなつかしい土地ですね。新緑の頃の湖の色は、美しいこととおもわれます〕多喜さんの便りだなあと私は思う。詩魂の若やいだ便りである。〝骨〟のグループでもっとも勉強しているのは多喜さんだと、会などでよく問題になる。ときどきすっとぼけて、特徴のあの安土なまり（滋賀県の湖東）で、「ほうか」とうなずいているように見せてはいるがなかなかどうして頑固である。その頑固は長い歳月をかけて培われた、いわば年期の入った詩魂から、自らそなえ得た身上であろう。勉強していると他の同人からいわしめるのも、その頑固さが多喜さんを磨かせているのである。なかなかのスタイリストである。評判の風呂しき包みをかついで、平然と街をのして歩くポーズも、スタイリストの多喜さんならではの感が深い。真のスタイリストにはわざとらしさが見えない。多喜さんの挙措動作、出所進退には、すべてわざとらしさがない。無類のさびしがりやである。そのさびしがりやであることも、私的公的の多喜さんの生活を支えて、天性の詩人を形成している。知人のさるデザイナー女史が、会えば多喜さんの眼の美しいことを呟くようにいう。険のない眼、濁りのない眼、といってきびしい眼でもあり、やさしい眼でもあると女史は絶唱する。も一つつけ加えて、知人友人を大切にする眼といった。いい得て至言だと思う。それだけに多喜さんに気にくわないことがおこると、顔面朱をそそいで怒る。さびしがりやの真骨頂を発揮、席をけって飛び出すぐらいではおさまらぬ。が、すこし日が経つと、けろりとしている。根にもっということはないようである。〝骨〟のグループは会えば口角泡をとばしたがいにいいたいことを、ずいぶんつっこんでいいあうのであるが、しかしそれを根にもつということはない。多喜さんはその潤滑油的な存在である。潤滑油といえばよく多喜さんのところに来いと招かれる。時に安土をたずねて、多喜さんのご厄介になっていると、あわただしい生活の上に、ほっとした息抜きを感じ、生活の潤滑油を体得する。約束してもし訪れ得ないときがあると



かえってこちらは三四日憂うつな日がつづく。多喜さんの親切さが身に泌みているだけに心ぐるしくなるのである。依田義賢は富岡益さんを、〝骨〟山脈の休火山と評した。多喜さんは複式火山とでもいうべきか。若い時代に爆発し、ながいことぶつぶつたぎっていたが、いまや地鳴りを起し、黒煙をもくもくとふき上げ、再度爆発の姿勢にある。低姿勢ではあるが、腰のすわった姿勢は、もはやゆるぐことはない。再度書きとめておこう。〝骨〟でもっとも勉強しているのは多喜さんだということを。

## 多喜多感

荒木　利夫

1　ふろしき包の中のかばんのこと。

多喜さんはふろしき包を肩にして歩く。

昔々、皮をむかれた白兎に、治療法を教えた白衣の人も、いつも大きな袋を肩にかけていた。あの大きな袋に何を入れていたのだろうと、思うようになったのは、多喜さんの肩のふろしき包のことを思うようになってからだ。多喜さんのふろしき包の中に、布製のかばんが入っている。そのかばんの中で、大きなかさを占めるものは、詩人、画人、文学少女、老いたるかっての文学少女、学校の先生、仲間、等々から来た、日附の遠くならない手紙や原稿や抹消したところのある鉛筆書きの詩稿が入っている。皮をむかれて可憐なわれわれ兎族に逢うと、彼はそのふろしき包をひろげ、かばんの口をひろげ、白い柔毛を生やすおまじないをするように、手紙類を見せてくれる。このおまじないは、私にとって大変たのしい。

或日の午さがり、熱帯魚の水槽が、あたりの光を吸いとってしまったような、人気のない壁ぎわの一隅で、彼は四度もふろしき包を、向いあった私に開いてくれた。私が気づかぬ、私のむかれた皮のきずが、ひどかったのだろう。

2　冬も開襟のこと。

多喜さんと私の出会は二十数年も前のことになる。東京からきた詩人I氏に招れて宿を訪れたときである。死を飼い馴らすこと、詩のことしか、私が思わなかった頃である。I氏と多喜さんは着物、私も紺がすりの着物、三人とも着物だった。戦争がすんで再び多喜さんに会うようになってから、もう十年近いが、いつ会っても多喜さんの襟は開襟シャツである。冬になっても、服の下は開襟である。徹底的にネクタイを拒絶している。虚飾の最たるものとネクタイを考えているにちがいない。そんなもので、なぜ、首くらんならん？　彼の徹底したこの拒絶の、ひろげた襟から匂う、潔ぺきなシャボンの香が、新しい風になって、湖畔の里や森のある町の、悲しみや喜びの窓や戸口を訪うてゆくのである。

3　郷土人形のエキスパートであること。

多喜さんは郷土人形や郷土玩具について、じっにもの知りである。そしてたいそう愛着をもっている。だから私は彼をこれのエキスパートであると考えている。正月になって、私が本棚の一番上の段にならべてみる十ばかりの郷土玩具は、どれも多喜さんから貰ったものばかりだ。古代のハニワのいろをした肥後の木葉猿など、その稚気を珍重している。多喜さんが郷土人形類のことをよく知っていることは、彼がみみずや、なめくじ、田螺を詩にうたうことゝは別のものでなく、彼の次元が、土であること彼の詩がますますユニークなものになるにちがいないという安心を私に与えるのである

## 近江のひと

深瀬基寛

巻頭の写真と寸分ちがわない多喜さんが不便な洛西の一角にぽつんと訪ねて来られてから何年になるのだろう。どんなつながりによるのか知らないが、気がついてみたら、いつのまにか私は〝骨〟の同人になっていた。多喜さんの本質は、「自然」という言葉の古義の現代的再生のような気がしてならない。むろん詩もそうだが、君の日常坐臥から（恐らく）商売行事の末端にいたるまで「自然」を踏み外したただの一瞬間も想像できない。彼の「自然」は門前の小溝の澄み切ったせせらぎの底に沈めた古伊萬里の小皿の味だ。むろん野犬の遠吠も多喜さん自身の小便も味の一部だ。

昨日スペンダーの「世界の中の世界」という彼の自伝をよんでいたところ、二十才のスペンダーが四十才のエリオットに初対面したときの回想が出ている。E曰く「君は何になりたいと思うか？」S曰く「僕は詩人になりたいと思います」E再び曰く「詩を書きたいというのなら解るが、詩人になったというのは解らんね」。

詩人を志願しないで四十年も詩を書いている商人というものに私は最大の課題を感じているのである。

水鶏なくと人のいへばや
さや泊り。

## 多喜さん

佐野猛夫

下手な人物評なんか御免だよ、巻頭のプロフィルは多喜さんのすべてを語っているんだからね、義賢さんはきっと、こう云いたいにちがいない。たしかに写した方も、写された方も自信たっぷりだし、私も全く同感である。あえて、風呂敷包みをおろして開いてみるのも、おろかしいし、どうしたものかと、とまどってしまうが、まあ、ダソクをつけてみよう。

江洲安土と京都を結ぶ東海道、このレールが彼の原稿紙みたいなもの、まきちらされるハイセツ物にも似て、点々と生れ出る素朴な詩、気取も、てらいもない、深い愛情を秘めた庶民性。彼の乗物にはあまりスピードはいりそうにないし、昔ながらの煙をはく機関車の方が、ぴったり来そうである。と云っても、古くさく、時代ばなれした、なんて云うことと全くちがう。近代の「骨」は充分通っているんだから。ただマクラ木の間に詩を綴るにスピードは邪魔だろう、と思うまでのことである。彼は田舎を京へ運びはするが、街を村へ持ち帰ることは好まないらしい。村に運ぶとすればそれは老多（家号）のものに限るだろう。江洲商人の本場近くに住みつきながら、てんでそんな、におい、は持合さない、持ちたくもない彼、否、持てそうにない彼である。ささえるものは詩であろう。彼にはもはや、きざな詩もおかしかろうし、近代性が鼻につく、むづかしそうな文字の羅列もつらかろう。てこ、でも動かない、良き意味の頑固さをもって、まかり通るのである。珍らしい人だ。

## 詩人

山前実治

〝詩人〟とは、おとなのなかのこどもである。とわたしは、わたしなりにおもっている。その〝詩人〟こそ、多喜さんのためにできあがった代名詞みたいだと、つくづくおもうことだ。それほど「骨」のグループのなかで、いわゆる詩人といえば、多喜さんを筆頭にあげる。

わたしと多喜さんとは、これはまた、詩作品のうえでも、生活のうえでも、たいへん対照的であるようにおもえるのだ。なるほど、性格のうえでは、わたしも、多喜さんも、ものごとに一言居士で、しかも怒りっぽい。だから、いつもふたりの短気といういやらしいムシが、正面衝突をひきおこし、ムカッパラをたてさせている。そして、すぐけろりとお、たがいにわすれてしまうのだから、わけもなにもあったものではない。この一面はふたりの相似た処世術に欠けたひよわさなのかも知れないが。ところで、すくなくとも、多喜さんは、いい意味での、たんじゅんそぼくな善人でしかも砂糖のようにあまい人格者であるのが、すこしだけ気にいらない。そのてん、わたしは、多喜さんにだけ対比したばあいにかぎれば、七重または八重人格で、しおっからい、（わたしは、二重人格などと、お上品ななまやさしいことは、とてもおこがましくて、よういわん）。

多喜さんという手織木綿のような詩人は、だれが書いても、あまりにも書くことが豊富すぎて書けそうで、さてとなると、もっとも書きにくい詩人ではなかろうか。

いつでも、どこでも、手品師のように、書きかけの詩稿をひろげてみせる。そのたのしそうな眼のかがやきのうつくしいひとは、めったにいない。

## 多喜さん

富岡益五郎

多喜さんは多喜さんである。多喜さんは、初対面の時から、多喜さんに向ってでも、他の人に多喜さんのことを語るときでも、「多喜さん」と呼ぶ以外に似合う呼び名を持っていない人だと思った。僕は初めからそんな気持だった。だが僕はまだその多喜さんの多くを知っているわけではないが、多喜さんの風格は格別なので、粗い肖像画の一枚位は書けそうな気もする。本当の画家なら多喜さんの肖像画を描くことも面白い画題でないかと考えたりもする。僕が画家なら一枚ものしたいと思う。多喜さんには一見、沢山の常でないつかまえ所がある。案外うまく描けるのではないか。僕は画家でないから仮に素描を試みるとしてその画題は「詩の呼吸を吐く人」というようなことにする。多喜さんは奥さんや子供のことを切々と「浦塩詩集」に歌っているが、今の多喜さんはそんな影を宿していない。大きな青蛙が池中の蓮の葉の上に静座瞑目している。池は蛙の宇宙だ。蛙の水中の行動は真直で全身的だ。多喜さんを語るについて蛙を引合に出すのは恐縮だけれども、これは造形の比喩に過ぎないのでお赦し願いたい。モヂヤモヂヤと大分白いものが混った毛髪を棚引かせているのは、水中深く何かを探る細かな水藻だ。いつも肩に、重た気で、軽そうな風呂敷包を片手でヒョイと荷いで濶歩する。何が入っているのか、それは不問に附してても良い、造形は極めて凡俗で、非凡だ。ジャムパーなど決して着ずに、いつも背広の上衣を着けているのはモラールの滲透を感じさせる。この度僕はとうとう書くべき原稿をサボって了ったので今にも多喜さんが叱咤勉励しに現れそうな気がして怖気を禁じ得ない。多喜さんは、やっぱりドラマチックで簡素な気構えで素描するのは無理だ。油で描かなければ描けないのではないかと思う。

## 多喜さんというひと

天野美津子

はじめて骨の仲間に入れてもらって多喜さんに会った時から私には何故か多喜さんと滝廉太郎のイメージがからみついている。最初同人のみんなが「多喜さん」と呼んでいるのを聞いておや何処かで聞いた名だなと思った。と云うのは、以前私が京大の電気教室の機関誌「電気評論」の編集部に勤めていた時にそこに偶然滝廉太郎の末弟に当る人がいて、滝さんと呼んでいたからである。

しかし多喜さんと滝さんとは単に発音が同じだと云うだけで背恰好風貌も少しも似ていないもっとも赤の他人だから当り前であろうが、にも拘わらず不思議な連想がしばしば起るのは、多喜さんのもつきめの細かい気質的な雰囲気が、私の知っている滝さんを通してあの有名な作曲家の血との似通いを感じさせるのかも知れない。名前の二字を取りながら、それが名前の感じに響かないということも、いかにも多喜さんの人柄にぴったりしていて、しゃれている。

風呂敷包みをひよいと右肩にひっかついだところは心易い田舎のおっさんという感じだが、なか〳〵どうして、みればみるほど隙のないいでたちで、演出効果を心得えているところ、心憎いほどである。

そう云えば多喜さんという人は実にいろいろな顔をもっている人である。少年のような眼付をした白髪の青年である多喜さんが愛を語るときは、何をどういう風に語るのであろうかと想像を逞しくさせる。神出鬼没恋の忍者とも云うべきか。

普段はにこ〳〵しながら世間話など何気なくしているくせに、一たん作品批評になると実に苛酷辛辣で骨というところは大体みんな手きびしいがその中でも群を抜いている—私など弱気な者はもうこの辺でかんべんして下さいと云いたくなる。これではとてもついて行けないがと内心おそれをなしていると、今日は大阪へ商品の仕入に出て来たと云って、元気かと電話をかけて来てくれる思いやりのある人でもある。安土の町の呉服屋さんというのもやっぱり多喜さんらしい。

シベリヤ抑留中に書かれたという「浦塩詩集」を拝見したが、言語に絶したであろう悲惨と孤独の中で、あれだけの豊かさと暖かさを失わずに居られたということは驚嘆に価する個性の持主だと思う。

生れながらの詩人とは多喜さんのような人を云うのであろう。


日本の寺・平等院

撮影

佐藤辰三

文

野間宏

B4判

¥480

美術出版社




## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪市東区今橋一の一五共同通信社支社内
桜井武雄　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐々木邦彦　京都市左京区下鴨中川原町
佐藤辰三　京都市左京区下鴨西梅木町一九
佐野猛夫　東京都北区岸町一の七中込アパート内
田中克己　京都市左京区修学院石掛町二〇
富岡益五郎　京都市伏見区深草願成町八
西山英雄　京都市東山区八坂二年坂西
橋本喜三　京都市北区小松原北町六九の一
深瀬基寛　京都市東山区妙法院前側町
町田トシコ　京都市東山区大和大路通五条下ル南梅屋町
山前実治　京都市左京区下鴨泉川町五三
依田義賢

## 編集後記

今日は土用の入りだ。ひまわりがもえている。くるくるくるくる。もえている。

新しく同人を迎えた。写真の佐藤辰三、作曲の桜井武雄、美術の橋本喜三の三君。田中克己君にも復帰してもらった。多士済々まことににぎやかになった

ビールで乾盃しよう。白珠の歯にしみとほる冷しビールの、そのホロニガさはまた格別である。

漫画雑誌のEHEに、同人の塩田英二郎氏が、

——それには、よい友達の中で、モマれて、きたえられていくこと、タノシンダリ、ヨロコンダリ、カナシンダリ、オコッタリ、することだと思います。エヘッ。

と書かれているが、「骨」に通うものがある。（井上）

＊ラジオドラマもこんどで第三回目作品が九月上旬の水曜日NHK全国中継第二放送で四十五分間、のることになっている。佐々木・依田合作《鳥羽絵草紙、飛び倉ものがたりの巻》。

＊ちかいうちに、ぜひやりたいことは、「骨」グループの詩画展だ。いつもはなしあっていて実現していない重要なことの一つだ。

＊「SY京映」で毎週土曜、日曜の最終回の休憩に、「まくあい詩集」の時間をもち、詩の朗読をはじめたのは、一九五七年五月のおわりからで、さいきん第百十五週目と、しようこりもせず、大衆につたない朗読をマイクをとおしてきいてもらっている。べつだんいいことだとも、みみわずらわしいことだとも、はんのうがないのがきらくで、つづけてきたが、ちかごろおもいもよらない学者から、しんせつなハガキをいただいて、きようしゆくしてしまった。

映画館では主目的が映画を観ることで、おせっかいなものは、どうだっていいはずなのに、しずかなのだから、うれしくなり、いっしようけんめいになってしまう。詩をスライドにして字幕にだすようにしたら、どうやら効果的ではあるらしいが、ガラスに細字で長い行数をかくのは、たいへんな努力がいる。

（山前）

17

# 骨 17 目次


連祷　依田義賢 2
夜井上多喜三郎 7
屑籠拾冨岡益五郎 11
退屈天野美津子 14
炎天の日のしずく他一篇　山前実治 16
挽歌他一篇　佐々木邦彦 26
動物園にて　深瀬基寛 8
和多久氏の倦怠と自虐　大鋸時生 12
我見是利他一篇　町田トシコ 18
邦彦画伯の profile　同人 28
アメリカ通信　町田トシコ 10
永源寺紀行　井上多喜三郎 20
表紙　佐々木邦彦
カット　佐野猛夫
編集後記　井上・山前



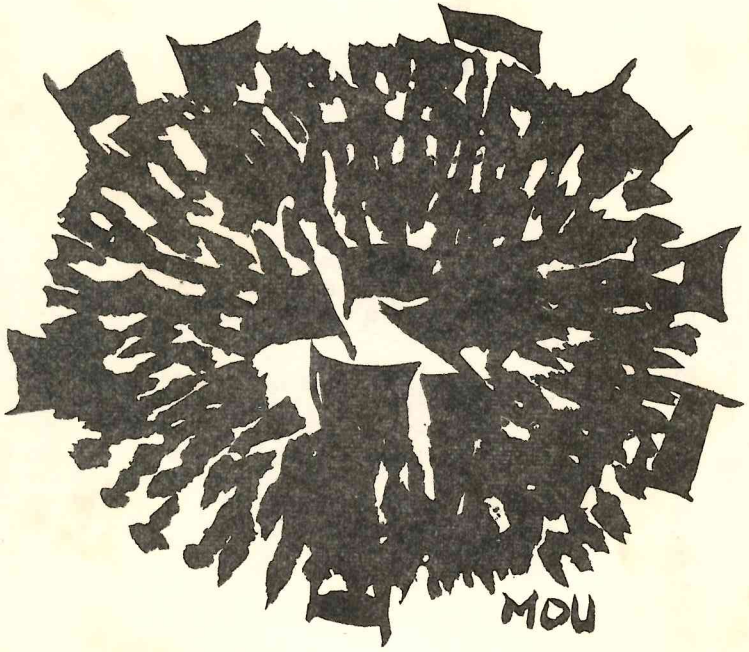
骨 十七号　¥50
昭和三十五年七月二十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方



（骨）への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル双林プリント内　骨編集室宛
電話㊐四三八二

# 骨

No. 17




1960・7

同人の顔　佐々木邦彦　撮影依田義賢

## 邦彦画伯の Profile

### 山の祭

井上多喜三郎

東海道線安土駅から南方へ三キロ、繖山と箕作山とにかこまれた小盆地に、私の村は点在している。繖山はその昔、佐々木氏が十数代にわたって、城をかまえたところであり、箕作山には、その一族であった佐々木六角氏が砦を築いていた。佐々木六角氏のながれをくむ佐々木君が、小宅を訪ねて、箕作山を発見したのも不思議な因縁といわねばならない。

箕作山の大半は、いまでは字有になっていて、正月の組寄りには、その年の松茸の入札がある。恒例の夕食がでて、神酒のほろ酔い機嫌で、札値はせり上るのだが、今年は拙息が四千七百八十六円で落札してきた。

谷を境に山の中腹から頂上まで、扇形に展いているかなりに広い地域である。下草が茂っているジャングルには猪がひそんでいたりする。地形は熟知しているので、平気でかけまわるのだが、それでいてときには道に迷って、とんでもない方角へでてしまったりする。それは山の神秘性のしからしめるところだろう。

村の人達は、山には山の神がいると信じている。正月には、男女のあそこを刻んだ一対の股木を供へて、山の神のまつりをしたものだが、戦後いつとはなしに取止めになってしまった。今年なんかのように、松茸の大凶作にでくわすと、山の神がまつりのないのをおこっているようにもうけとれる。

山と取組んで、山とは親類以上のつきあいをしている佐々木君は、幸い箕作山が祖先の地であることでもあり、来年の正月には臨時の神主にたのんで、にぎやかな山の祭を行ったらとかんがへている。

### 佐々木さん

冨岡益五郎

画家が好んで取組むモチーフはどんな根源から取り出されて来るのだろうか。この山岳ばかり、それも岩肌を克明に刻むような線で描き続ける佐々木さんは無条件に山を愛し、吸いつけられているのでないだろうか。人を容易に寄せ附けない岩肌に、佐々木さんは身体をぶっつけようとしている。

恐ろしく自主性の強い岩山、世界中のどんな美人も足下へも寄りつけない美しさ、優美、壮大、包容力、拒否感、慈愛、威厳、等々、山岳は容易な存在ではない。佐々木さんのように正面から、真正直に山と取り組む心は偽りがない。気の弱さを頑張って見せる努力だ。あの山の姿が座右銘のように、心中のどこかに懸っているのではないだろうか。

気の弱い佐々木さんは、詩に文字で以て、弱い心を駆って見せる。弱い心は心臓が人間的な動悸を打つから弱いのだ。それを言葉の象徴の中に隠そうとする。隠そうとするけれども明かに窺いている。そうすると、根気よく、身軽に岩肌に触れに行くらしい。

街では、酒場に、一見画家と判る風体で、気の強そうな面魂を装って、画家であり詩人である、人間佐々木さんの姿がよく見られる。佐々木さんの小さいブロンズをこしらえて、剣の岩襞に安置しておきたい気がする。



### わが絵師

深瀬基寛

戦後の禁酒政策時代に呑み屋の奥の院のチャブ台のかこみ仲間に面白い瓦屋がいた。焼けつくような瓦屋根が一日の仕事場なので帰りには芋酒のキツイのでなくては身がもてぬといっていた。彼の自慢ばなしといえばいつも、同じ職人仲間でも瓦屋だけが瓦師の尊称を奉られるということであった。その理由が面白い。つまり瓦はいかなる仏壇でもその上に乗るもので、自分はまだその瓦の上に乗っている。同じ職人でも仏師のもひとつ上の上段格だという。学校の教師たる小生の職分に抗戦するのが本音らしかった。なるほど学校の教師は今ではどう見ても職人以上ではない。それも芸をもたぬ、据り込みの上手な日傭人に過ぎない。むろん如泥の足もとにも及ばぬ。

孫娘のために色とりどりのマジックを買い揃えて、らくがきの相手をしているうちに、いつの間にか幼稚園通いの孫の立像が出来上った。北野の天神さんで桃の鉢を買って来て開花寸前のところを写生して学校の友人に見せたら「この梅は……」といった。佐々木君に見て貰ったら「この桃は……」といってくれた。とにかく多少の芸を認められたのが嬉しかった。小生のマジック時代の前に「青の時代」ならぬ「醤油画時代」というのが一寸続いた。さきほどの学校の友人にハガキに画いて郵送してみたところ「臭いのが残念だ梅雨にカビが生える」という批評であった。小生に醤油画を教えた絵師がやはり佐々木君である。こんどはその佐々木君が支那出来の絵筆を数本送って来て「マジックには発展性がないから、是非これをお使いなさい」と忠告してくれた。少くとも小生の芸に発展性のあることを認めてくれたらしい。このように後進を落胆させないことにおいて佐々木君はまさに理想的なわが絵師である。醤油からマジックへ、マジックから毛筆へとだんだん瓦の上へ時刻を計って引張り上げるところにも教師としての忍堪性がある。

いつか拙蔵の徳川中期の遠藤高璟の泥絵を佐々木君に見て貰ったところ、珍品だということであった。そこでこの十一月河原町の「すいれん」で催された「骨」展に参考品として高璟を出展してはどうだろうかとハガキで相談してみたところ、こんどは「それはやめときなさい」との忠告を受けた。火災が危険だという。その意味を推測するに「お前たち「骨」のラクガキは文字通り泥絵だが、高璟のは同じ泥絵でも瓦の上にある。上炎させるには惜しい」というくらいのところだろうか。美術史家としての価値感覚の表現と解釈していいだろう。

小生のマジック画に発展性を認められたところで頓坐してしまったが、依田義賢君のキケン絵巻に至っては、流動新展して行き着く先を知らぬ。先々月の安土での例会の席に、繰りひろげられた一巻を横からねらっていたところ、臨時に列席された土地のお医者さんに横取りされて残念で堪らず、翌日、お医者さんの懇意な老蘇の多喜さんに頼んで奪還に成功した。帰途京都駅から表具屋へ直行して表装を依頼した。百年後に起るかも知れない偽筆問題のために、多喜さんと小生でここに明言しておく。

かくの如く芸の遅速は同人内でもさまざまだが、酔えばお互に泥の如し。他日松平不昧公のような名君の出現を期待してやまない。

## 佐々木さん

田中克己

とても静かな人である。さう思ってゐたのが、作品は限りない恨みと悲しみとをこめた「ケロイドの頬」であった。作者の朗読をみな静かになって聞いてゐたのが昨日のように思ふが、それからもう七、八年たった。佐々木さんはあいかはらず静かで、詩を書くと同時に、山の画をかいてゐる。東京に来てからも必ず青竜展の案内をいただくので、僕はまたかならず見にゆく。何ともいえない美しい山を、彼は発見し、それを実際よりも、と思えるくらい美しく描き出してゐる。僕はいつもその前にたって見とれる。そのあと友だちなのでしばらくそこにのこって、見る人たちの表情を観察してゐる。女の子はあまり感動しないようだが、男はみな立ちどまって見つめる。そこで僕は変なことを思い出した。ある時あるところで、男色で有名な某作家と一座した。席酣はとなったあと佐々木さんと某氏とは相いついでトイレに立ち、そのあと佐々木さんは報告した。某氏に挑まれた、といふのである。この事件と佐々木さんの画が、詩が、男子を女子の上に動かすことと関連があるかどうかは知らない。僕も佐々木さんには敬服すると同時に、慕はしい人だと思ってゐる。しかしその理由は旨くいひあらはせそうもない。

## 佐々木君のMとW

依田義賢

こないだ、骨例会の後、「すいれん」へ、骨展の色紙の飾りこみを頼みに行った時に、天野のお美津ちやんに「あんたはいかにも、女なのに、大変M的論理をひき入れてるな」と話していた「もっと、W的な基礎の上に立った方が、ええのやないか」当夜例会に欠席したが折よく、表を通りかかって、山前君に呼び込まれた荒木君に、感想を求めると、例のぼやくような声で、「天野君がM的であったかて、ちよっともかまへんと思うがなあ」と云った。「むろん悪いとは云うてへん、M的論理を女体的に、とり込むという風に、出来んかということや」わかったような、わからん話だが、その時、横にいた、佐々木君を見たら、歯を開けばなしにして、「でででで」と笑っていた。男性的思想・女性的思想というものがあるかどうかわからんが、男性的感情、女性的感情というような、フィジカルな、生理的なものに、からんだ感じ方考え方というものはある。そうして、これは、当人の、性別にかかわらず、たしかにある。むつかしそうに云わなくても、よく云う、女性的男性　男性的女性、女性を含む男性、男性をふくむ女性というくちだ。人間の血液型は、A型AB型B型と分かれているが、男と女の、まじり工合が、「あの男は、男7.5女2.5、あの女は女9パーセント男1パーセント」と、明白に、分析してわかったら、面白いだろうなあ、と思った。云うまでもなく、この形成は、血液のように、不変の生理的なものでなく、生活環境、経験等の影響をうけて、変化するものであろうから、測定が困難ではある。佐々木君の顔を見ていたら、平然として、彼の場合は、どうであろうかと、非常に興味を覚えた。というのは、彼は、見るからに、そのような分析の要はないほど、たくましい男性であるが、万年雪をいたゞく、嶮阻な山を跋渉した、強い腰、慾どしい尻、盛り上った胸をもった肉



体が、どうかすると、大変、女くさい時があるからである。時には、おやっと思うほど、やさしく、くにやっとなるからである。彼の太い、重い、意志的なボリュームは男性であるが、それにからみつくようにある、繊細な、センチメンタルな抒情は、たしかに女性の感能であると思えるからである。画壇というところは、お女中方ばかりの大奥みたいだ、などと云う人もあるが、そこで、いじめられたり、いけずをされたりしたから、佐々木君がそんな風に見えるのだろうと考えてみたりする。そう云えば、彼が山ばかり描くのは、そんな画壇への憤りか、反逆か。或は、彼の内なるWに反撥してM的な山へ向っているのか、乃至は内なるWのMへの思慕か、はたまた、内なるWのMへの挑戦、和合であるか。この詮索をしてみるのも、面白い。案外。W的なものを、もっと、充実させて行ったら、佐々木君に、一層、面白い変化が見られるかも知れない。

## 絵に山の詩を

橋本喜三

佐々木さんは山男である。あのずっしりした体つきは頑丈で頼もしい。アルピニストなんてきざな肩書は似合はない。〝アルプス銀座〟を散歩したってうつりそうでない。熊の出そうな寂しい山道をぼそりぼそりと一人で歩いているのが一番性に合いそうだ。素朴な山男である。

体に不釣合に神経は繊細でシャープである。それに誠実で几帳面なところは、世の詩人のもって範とすべきだろう。佐々木さんの難かしい詩を読むのは、凡俗の輩にはまことに骨が折れる。骨の髄まで「骨」の詩人と、ひそかに畏敬を禁じ得ない。

ところが絵はきわめて直截簡明である。デコラティブな会場芸術派の青竜社にどうして飛びこんだかが解しかねる。あの古めかしく、楽天的で、後ろむきの事大主義者ぞろいの技能陣の中で、ただ一人、前を向いて芸術のために苦しんでいる。そして作品は、乱雑気騒ぎの壁面の中で、いつもきちんと行儀よく整頓され、都会的な洗練ささえも見せる。

知的で誠実な芸術は快いが、野性的な山男ぶりを、素朴な詩人の魂を、生のままで絵にぶちこんではいけないだろうか。あなたの絵に、はげしい山の詩を思う存分に語らせてほしい。

## 岳童抄

荒木利夫

### 1　岳童

谷川岳。八ツ岳。とても私が生涯登れそうもない山々。そういう山へ、佐々木邦彦は、いつの間にか出かけて、写生して、深呼吸して、雲霧の中を滑り降りてきて、いつの間にか、いつものように街を歩いている。画帳や絵具箱等、荷物の種類を一つ余計に、彼は肩にしなければならぬ筈だが、駅や車内で見るあの気負った登山族の、ものものしいいでたちを、彼もするのだろうかと、想ってみようにも想えない。彼は山のおっぱいを吸いにゆくのである。山の大きな手が彼の涙をかむ。山の大きな大きなおっぱい。おっぱいから唇は離れずに、彼は、雲の中から聞こえてくる鶯の声に耳をたてるのである。

### 2　醤油画

筆硯が出てくる。色紙が出てくる。彼の筆が食卓の小皿の醤油にのびる。色紙の墨の線や形に、醤油の褐色がかさなる。画が誕生する。こりやいいという声があがる。そこで深瀬沈子大

人が勝手に弟子入りして醤油画を始める。この弟子は葉書に万年筆で何やら線描し、醤油で彩色する。果物である。それをその場の佐々木先生に見せて自賛する。そしてこの弟子が醤油画と命名することになるのである。

3　竹林居

長いトンネルを抜けると山科盆地。ここは京都市東山区なのか、京都市山科区というのか、僕はいまだにはっきりしない。あちこちに竹林がのこっている。その一つの竹林の端を拓いて、彼は居をさだめた。山科というところは、どういうわけか、従来画家の余り住まない土地と聞いている。そこへ彼が移ったということ、彼をとらえたものは何だろう、そして彼がとらえたものは何だろう。

## エネルギッシュ

天野美津子

「骨」には仙人が多いが、反面仙人らしからぬ人もまた多い。もっとも仙人といっても表面だけのことで、個人個人の中味については、私は知る機会もなく、また伺い知る隙もないが、其処は女の嗅覚を鋭く働かして、まずまず間違いのないところをキャッチしたつもりでいる。さて、仙人らしからぬ第一人者は何といっても佐々木邦彦さんであろう。私は佐々木さんの第一詩集「ケロイドの頬」を拝見したとき、痩駆長身の青年画家を想像したものだが、残念なことに――果してそうであったか？　私は青白い男はキライである。――想像は全然当っていなかった。正確にいえば、絵もかけば詩も書く、恋もすれば時に悪事も働く？　という豊かなエネルギーの持主、全くエネルギッシュという言葉がピッタリの逞しい人だったのである。しかし、私が佐々木さんになつかしさを感ずるのは、あふれるエネルギー感のその逞ましさと太々しさの奥から、瑞々しい芸術への情熱がのぞき、繊細な神経の緊張がひらめく時、山にあこがれ、山に生きてきた佐々木さんの純粋さにコチンと突当る時である。あの〃ケロイドの頬〃の美しいロマンもこの同じ源から生れたのであろうと私は思う。風のある日には、周囲の竹藪が一日中鳴りつゞけているという佐々木さんのアトリエ。その山科のお宅へ一度お訪ねしてみたいと思いながら、果さずにいるが、竹の中のエネルギストは、案外孤独なロマンチストの顔をしているのかも知れない。

## 山の哲学者

山前実治

春の籔は大好きだ
すくすくのびた竹の青さに
ひきつけられて
かきわけ　かきわけ
まっすぐに　ゆくと
スマートな
山の鬼のあたらしい住居が
見つかってほっとした。

依田君と二人で新しい家へ訪れたときのメモ。

山は哲学する。山にいどむあの体力のすざまじさ。ほかのものを描くことを、山はいっさい拒否する。

ときおり、あのやさしいまなこでよそみするのが、玉にきず。タフなのはいいとして、いろけがありすぎてはたいへんだ。

佐々木君は、やっぱりどこまでも詩人なのだ。山がロマンチストのふところであり、おっぱいであるごとく、かれは山にとりつかれている。いい意味での気の弱い愛すべきヒロイスト。かれの傑作「ケロイドの頬」はわたしのすきな朗読詩のひとつ。



## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本一一七の一
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺二八五六
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
橋本喜三　京都市東山区八坂二年坂西
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
山前実治　京都市東山区大和大路通五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

## 編集後記

十ヶ月ぶりの字数かぞへに、短かい夜がしらんだ。

月々の集りで話しあっているのと、それぞれの分野に忙がしいのとで、遅延したがこんなのんびりした雑誌の一つ位、日本にあってもよさそうだ。

町田トシコさんはアメリカへ渡っている。

西山英雄君は日本画家代表団に加わって、中国訪問中だ。次号はそのすばらしいデッサンで紙面を飾ることにする。

佐藤辰三さんもカメラを肩にして、北海道へ空便の予定だ。

＊

朝、山羊のはりきった乳房をしぼる。クローバーやおおばこが、一夜のうちに、乳に変ってほとばしる。

詩作も又かくありたいものである。（井上）

※

どろどろの、流動体の、どろんこの、こんとんの、なさけない政治の、ありかたの、これほどふんまんやるかたないおもいにかりたてられたことは、いまだかってないであろう。

安保改正には、肝に銘じて、どこまでもどこまでも、抵抗を感じるのだ。

＜骨＞グループは、それぞれの分野で、いそがしいしごとをもつ連中ばかりで＜声なき声＞をはらのなかにつつみながら、行動には直接参加できにくかった。にもかかわらず、依田君が、街頭署名運動に、デモに、先頭に立って、参加してくれた。感謝感激。＜骨＞グループを代表、＜骨＞精神と行動精神を発揮して、健全であることは、ぜひ特記しておかねばならないことだ。

今号には佐野君がジグザグデモのカットを描いてくれた。依田君の「連祷」はシュプレヒコールで、何千人かのひとたちにつよい感動をあたえたものだ。

※

＜骨＞はなかなか出ない。けれど、毎月かかさない例会では詩についてのはなしはつきないのだ。大鋸さんの的確な評論ぶり、深瀬さんのひようひようとしたしんらつさ、依田君のつきない話題、多喜さんのぼくとつなねつっぽいはなしぶり……町田女史もアメリカからもう帰ってくるころだ。（山前）

骨

18

# 骨 18

## 目次


「田之助紅」所感　大鋸時生 2
バカに見えた汽車　町田トシコ 5
児童展　深瀬基寛 20
詩人往来　天野隆一 32
群　依田義賢 6
にんじん　他一篇　天野美津子 8
非情　佐々木邦彦 11
ある日やさしい人が動物園へくる　他一篇　天野忠 12
カタカナノウタ　山前実治 18
山羊の歌　井上多喜三郎 20
骨のあるおばあちゃん　山前実治 24
依田君の Profile　同人 26
乳のみ人形評判集記　諸家 22
竜間岸郊より　西山英雄 16
表紙　佐々木邦彦
カット　佐野猛夫
編集後記　井上・山前

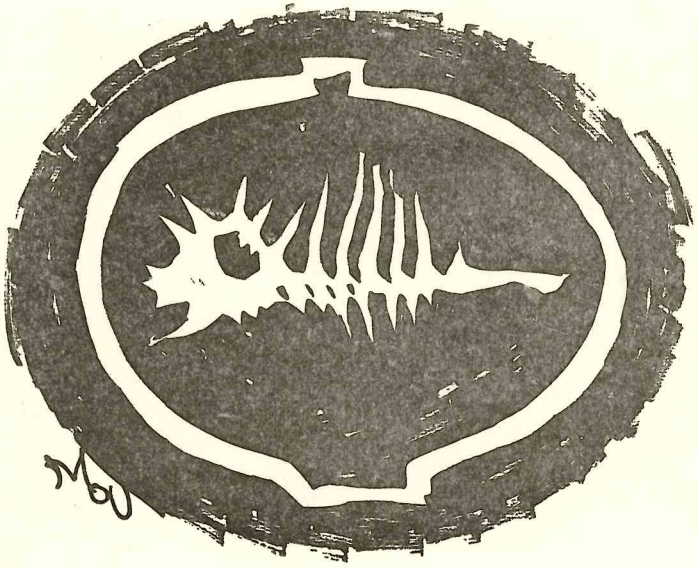

ゆみこちゃん
こんにちは
てがたくさん
よろしく


骨 十八号　五〇
昭和三十六年三月二十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）一〇七九六　依田方


（骨）への通信及び雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル双林プリント内　骨編集家宛
電話（231）四三八二

# 骨

No. 18



1961・3

同人の顔　　依田義賢　　海のプロペラ船にて

# 依田君のProfile

## 義賢センセイのMとW

佐々木邦彦

「何をいってるんだ。僕にむかって何をいうんだ。本音を吐くとか吐かんとか、バカなことをいっちゃあいかんよ。そういうところが佐々木邦彦のわるいところや。依田義賢を見そこなっちゃあいないか。いまさら依田義賢にむかって、知ったかぶりのことをいうな。」

いやはやとんだことになったものだ。人ずてに「金にもならん仕事でも一生懸命になる。損な性分や。なんで一生懸命ならんのかわからん。」と仕事の上で述懐したという話を聞いて、どんな仕事でも全身をもって、ぶつっかってゆくという本音を吐いていると思って、感銘をうけたといったつもりだったのであったが、依田センセイ何をかんちがいしたのか、真向うからいわゆる高姿勢で構えられて、私はびっくりしてしまった。いつの間にか、依田義賢がはるかに雲上人になりあがって、その巨大な影が部屋一ぱいにのしかかって見えた。今日は虫のいどころがわるいのかも知れぬと、私はいささか鼻白むのを覚えた。こいつ不手に喋舌ると、誤解の上に誤解をまねくことになるかも知れん。なにしろ才気喚発、自信の上に自信を積み重ねた強烈な自我意識をわきたたせる彼にむかって、こうこじれるとあがらう言葉の半言片句など、とっさに出てくるものではない。警戒しながら、わかったようなわからないような、それでも「私のいっていることはこうなんだ。」と説明をぼそぼそくり返したが、依田センセイの語気はますます鋭くなった。周囲の人人は、私が責めたてられているとでも思ったのか、じろじろと声をひそめて見ていた。

ようやくにして、私の言っていることが、なんであったか解ってくれたのか「骨のグループやないか、そんなことはお互いによく判っていることや。」と背をまげた。私は依田義賢の言葉と身体の屈伸関係と、その運動振幅の加減というものを、見ていた。語気が鋭くなると、首すじがしゃんとし、背骨がぐんと、それこそ音たてるほどに伸びる。それが身体がゆらり前屈すると、言葉も声もいつの間にか、普段の依田義賢にかえるのである。

いつか依田センセイと松下明治大人と私の三人が、宇治の鵜飼に招かれたことがある。招いてくれたのは未婚の女性二十人あまり、依田センセイは談論風発。大いに若い女性たちに喝采をうけた、川面に夕風が濃くなり、ビールの酔いもほどよくなったころ、依田センセイは妙に顔色が青くなった。ハハアと私は彼が生理的要求になやまされていることに気がついた。舟を岸にと、よっぽど船頭に呼びかけようとも思ったが、意地わるく黙っていた。センセイはこの処置をどうするかと、興味をそそられたからだ。堪えきれなくなったのか、つと立ち上ってみよしに行き、ひそやかに前をまくった。左肩が上って、右肩がぐっとさがり、夜空を仰いで「きれいだなあ。」とうそぶいた。「何ともいえん夜空だなア。」とつづけた。船頭は気の利いた男で、彼のその姿をうまく女性どもの視界からさえぎった。私はふなべりを白い泡が流



れてゆくのを見ていて、妙にくすぐったくなっていた。なんとなくいろいろの感歎詞を吐きながら、依田センセイは座にかえって、またもとの談論風発の姿にかへった。依田センセイともなれば放水などはしないものと思っていたにちがいない若い女性たちが、大いに親近感を抱いたことはいうまでもない。私はそうしたときの彼の挙錯進退に大いに関心をもった。怜悧な彼が冷々と人の心の深奥に斬りつける舌刀を用意しているかに見えて、秋海棠の雨にうたれた姿にも似て、言をひそめ声を変調して用を足すという図は、いまだ依田義賢は枯れずと思えたからだ。

普段の依田義賢にかえると私は、鵜飼の夜の彼を描いた。妙な印象である。もちろんながいつきあいで、いろいろな場面で行をともにした。会えば骨をたたえ、酔えばキケン絵巻をものし、さりげなく女性のあそこの話もし、いかなる会合でも中心的存在としてクローズアップされ、マスコミでは、一方の寵児として活躍する彼であるが、時として彼の分身である水泡の流れが、幾条にも描かれて、その泡の中ではじらっている彼が思われ、私は快哉をさけんでいるのである。

## 依田さんの眼

天野美津子

依田さんという人は顔の感じが大へんコワイ人である。もっともこのコワサというのは、陰険だとか、うす気味が悪いとかいう態の、ウェットなコワサでは決してない。健康で、ゴツンと底深く突当るようなものがあり、ファイトを煮つめたような根性丸出しの、コワサである。非情という言葉にはぴったりだが、冷さは不思議にない。よってくるところギラギラと大きな眼鼻の所為なのだが、この大きな眼が私には何故か肉眼のようには感じられないのだ。つまり依田さんのかけている眼鏡と合せて、二枚の精巧なレンズが、人間の顔の上にデンと居座っているという印象なのだ。大体依田さんの眼は、顔が笑っている時にも、めったに笑わない。私は、どこまでも対象に喰いさがる依田さんの、凝視の姿勢を何となく感じているのかも知れない。

男性でも女性でも、一二度つき合ってみると、おぼろげながら、人柄や性格など見当がつくものだが、依田さんの場合は、そういうムードが、外部へ流れ出す前に、突然人間そのものが飛出してくるか、又は断ち切れるかしてしまうので、時々面喰うことがあるが、これは非情の自己演出効果で、万事計算ずみの結果だという解説が必ず付くから詩人の性は善だがやはり曲者は曲者である。

しかし、これは依田さんの顔の印像であって、ほんとうのところは顔ほどではなさそうだ。いやむしろ、ギリギリの善意と祈りあればこそなのだと私は思う。もう二十年余も前に出された第一詩集〃冬晴れ〃もつい先頃の〃ろーま〃も、その底に流れているものは、純潔と素朴な熱意とである。

「骨」の中心演出家、例会の席では問題の眼鏡を時々、額の上まで引き上げて、演出もそこのけにまあまてと、話題をかっさらう人、ダイナミックな仕事ぶりで、アイディアで同人をあふる人、賑やかな艶画師、依田さん。ギリギリの場所で、ゴツンゴツンと抵抗しながら、眼玉をギラギラさせて、ジリジリ実験の進路を押し進めてゆく、依田さんという人は濁点のアルファを持っている人である。

## 真と戯と

荒木　利夫

その一つ。依田家の玄関を訪うと、母堂に迎えられることがある。六十才位と見える温顔の母堂である。八十才を越えられた円熟した活力の達成した顔である。昭和十六年に出た依田詩集「冬晴」の題字は、溝口健二氏が書かれたが、昭和三十一年の依田詩集「ろーま」の題字を書かれたのはこの母堂である。親思いの者は沢山いるだろう。親思いであることによって、実は、いつまでも親に甘えていることが多く、親孝行に縁の遠いことになりがちだ。ところが、親思いで親孝行なのは依田義賢だと私は思っている。前進座上演の「友染女房」を彼が書いたときは、母堂は七十代である。この「友染女房」を、母の若い日からつづいた健斗への尊敬と感謝と愛慕を、胸いっぱいにこめ、その感情をじっと鎮めながら彼は書いたのにちがいない。私が木屋町の家に病床の彼を訪うたのは、昭和十八年頃であっただろう。その数年前の彼の名シナリオ「残菊物語」のヒロインの後半の環境さながら、小路を入った昔ながらの京風な家の一間に、彼は臥っていた。彼が体の病弱をのりこえてきたのは彼の意志の強さにもよろうが、何よりも母のおかげにちがいない。彼は母に二度産んでもらったのである。或は三度かも知れない。私は遂に親孝行できなかった。彼の家と母堂の温容を思うたびに、私のできなかったことを、彼はしている、といつも思うのである。

その二つ。戯曲の戯は芝居の意味だが、戯作となると、むかしのよみ本類のこととなり戯画はざれえとも読むのだそうだ。さて依田義賢は戯画即ち鳥羽絵の名手。興に乗ると、たちどころに妙艶な名画をぞくぞくと生産する。私が欲しいと口出しするのを遠慮しているうちに、彼の筒にして艶なる長尺の絵巻はいつも誰かに所有権がきまってしまうので残念である。ところで幸い私は彼の変った鳥羽絵二枚を愛蔵している。一つは鳥羽絵の鳥羽絵たるゆえんの鳥羽僧正が、湖畔の屁合戦に耳を傾けるに至る絵巻二枚続きのうちの一枚。これは依田、多喜両先生共作の屁合戦が、NHK全国放送されてまもない頃の一夜、依田、荒木が四条小橋の畔なるフランソワ主人立野正一宅へ寄ったとき、立野先生のとりだした中国渡来の紙に、依田先生「これはなあ、高麗の長者がなあ……」と解説を自分で愉しみ乍ら、屁合戦由来の数場面を画いた名作である。一枚は立野先生がもっている。この時に限り、その一枚について私は所有権を宣言して、立野先生の抗議が出ぬうちに、その一枚を巻き、さっさと私一人帰ってしまった。半年ほどは、立野さんにわるいなあ、と思ったし、二枚揃えて置かないと折角の名絵巻だから、わるいかなあ、とも思った。

もう一枚は、押寄せる高潮に人がおし流されてゆく、伊勢湾台風の絵である。あの台風の数日後、私は黒い水の中の現地へ見舞に行ったせいもあって、彼がうす墨をふくませた筆を、或は重く、或はさっと撫でつけ、紙に白いところがどこにも残らなくなるのを、私は、じっと見ていたのであった。

## よたぎけん・よしかた君のこと

富岡益五郎

次から次へと、在る人間、無い人間をこしらえ、それらを利害や、人情や、恋愛で絡ませ、泣いたり、笑ったり、喜んだり、怒ったりさせ乍ら人間作りをやっている依田君は、医者が医者臭い人間であるように、劇作家臭い体臭を匂わしているように思う。名詩集「ローマ」の中の一篇「ローマの匂い」で謳っているようなそういう体臭、それも個性的な依田的体臭を匂わしている。詩集「ローマ」も、こよなく味い豊かな詩魂が躍動してのを、戯曲的な帛布で包んでいるところに、依田的な臭いを嗅ぐように思う。私にもし作曲能力があるものなら、詩集「ローマ」のあれこれを、シュプレッヒ・コールの形にして見たい気がする。劇的なリズムがあって、聞く者に木霊する内容を持っているからだ。依田君が行くところ、街頭の騒音の中から意味ある音を採収し、どぶ川の臭気の中にも人間の運命の跡を嗅ぎわけ、閑寂な田野の風景の中にも、そこに在ることの、適わしい人間を産み着ける。風景の中に陶然と酔うようなことはせず、人間が行動する場として新しい意味附けを企てる。アンテナとテープレコーダーとテレビの同時感覚的な勘を横溢させ乍ら、活力的な構想力を廻転させ横行活歩、神出奇没の振舞をする。依田君の構想力は近頃人工衛星に乗って金星への旅をしているかもしれない。受信した通信をメモに書きつける。このメモはいつでも皮鞄の中に忍んでいる。呑屋でビールを飲んでいる時でも、アンテナが震えるとメモが働く。こういう文句がよたぎけん君のプロフィルになっているかどうかわらぬが、標題を書く時筆のすべりでよた君の名の本当の読み方を続けてしまった。直さないでそのままにしておいか方が、面白いと思った。この方が立体的な感じがする。人々はぎけんと呼んでそれをよた君のこととしている。もう一人「よしかた」のよた君が在る。二重人格でなく立体的な意味ででである。「よしかた」がどんなよた君か、また色々と描いて見ることもできるが、フンワリと匂わしいておいた方が良い。思い出したが、よた君は酔余の興に、といってそうよっぱらったのは見たことはないが、人体の劇的葛闘の姿態を巧に捕えた戯画を即席で描くことがある。これはまさに「よた絵」ともいうべく構想は大変面白いので、珍とすべきである。現に深瀬先生もその傑作を秘蔵せられるところであるが、最近の先生の随筆集（「乳のみ人形」に出てくる）獲得に骨を折られたようである。この「よた絵」（語呂の上から与太絵と間違えないようにしてほしい）には「よしかた」と書く。これは一つの「よしかた」の現われとして今後の問題に残しておく。只見逃せないのは、「よた絵」は昨日今日の浅い修練ではなし得ない熟した味を持っている。忙しい依田君がいつの間にこんな絵を描く修業をしたのかと不審に思う。一体いつの間に原稿を書くのかと愚問を発したことがある程我が目に映る限りでは、原稿すら書いている時間があるのかどうか不思議に思う位だ。いつの間にか大作を完成しているなど驚嘆に値するというべきである。依田的スペースというものがあるのだろう。原子力学的スペースと云えると思う。

## 依田のカルテ

井上多喜三郎

「骨」仲間で一番売れっ子は依田だ。ことあるごとに、文化人代表でかつぎだされる。講演も仲々堂に入ったとの定評だ。「朝日」の（身の上相談）まで受持っている。ラジオやテレビで活躍している一方、演劇にも進出して、昨秋は大阪コマで舟

橋聖一氏の「田之助紅」を脚色演出して好評を得た。本職の映画も寡作ながら、一昨年は「荷車の歌」が昨年は「武器なき戦い」が、評番されたということは、彼がそれだけきびしい制作意欲をもやしているわけでこころ強い。

依田は「映画は芸術でない」といっているのだが、芸術なんてちゃちな言葉は、大衆に通らないというのであろう。その映画のよしあしは、客足にてきめん影響をする。千の眼ほど恐ろしいものはない。日本映画といえば、どうも泣かせどころをさしはさまないと気がすまぬらしい。依田のものにしてもそうしたさわりとまとまりが、ややもすると作品を古くしている。

依田はビール党だ。アサヒビールのほろにが会やタカラビールの麦酒会の模範会員である。ビールはしきりに排泄をうながすものなのだが、空瓶が林立するころになると、話が自然に下ってくる。彼の猥談はそのものズバリだが、いやらしさがないのは、ビールのせいなのだろう。野心すらふくまれていないのは、出来のいいカァチャンがいるからだろう。

## 屑屋の話

橋本　喜三

屑屋のおっさんの話――

〃依田はなぁ、二商のときはクラスでいつも一番の秀才やったんや。そやけど数学はちょっともでけへんね。わしは五、六番やったけど、数学がうまかったんで、いつも依田に教えてやってた。あいつ、いまは偉ろなりよったけど、わしにはうんと恩に着んならんにゃ〃このおっさん。例によって若いころ、祇園町で極道のあげく身上を傾け、おきまりのコースをたどったそうだが、どこか瓢々として唯秀才の名残を身につけている。

数学が苦手の詩人と数学の得意の屑屋。これはいける。〃それで〃と話を促すと〃おうち、依田、知っちゃはるんやろ。わしのボロが出るさかいもうやめや〃よれよれになったジャンパーのポケットからミルクキャラメルの箱をくしゃくしゃと取り出すと〃まあ、一つどうどす〃とあっさり話の腰を折ってしまった。わが家の人気ものである。

依田義賢は秀才である。代数や幾何はできなくても、人心の機微にふれ、社会の複雑な機構のなかに飛びこんで、たちどころに難かしい人生の方程式も解いてみせる。新聞ではしかつめらしい身の上相談の先生、安保斗争では頼もしい闘士だった。が、夜ともなれば　ヨッタキゲン　で詩人依田の弁舌は一きわ冴え、映画人らしいカンが鋭さを加える。コンコンチキチンの祇園囃子に合わせて阿波踊りをやってのけ、見事一等賞をとった才覚は、けだし依田氏の独壇場だろう。

詩集「ろーま」の出版祝賀会をバクの会で開いたとき、ぼくは「ジェット旅客機について」を絶讃した。魅惑的なうまさに頭からほれこんだからだ。「インドの足」には、かくあるべきといったような面倒くさい理窟を感じた。依田氏は、俺の詩が解らん男だと軽蔑したにちがいない。ここまで書いて、改めて何年ぶりに詩集を読み直そうと、本棚からさがし出したまま寝てしまって二日目の朝母堂の訃に接した。思いがけぬ因縁である。ただただしいが、素朴で誠実な「ろーま」の題字。

数学のできぬ病弱な秀才の息子を、遠くローマにまで旅立たせた母堂の、長い苦労を偲びながら、その安らかな遺影に深く瞑目した。初冬の陽ざしが明るく温かい日だった。



## あるものねだり

深瀬　基寛

日本の批評家は作家にたいして「ないものねだり」をするといわれ、そのことが作家と批評家のあいだの苦情の種にされることがたびたびある。わたしが依田君を知ったのはつい近ごろのことでシナリオ・ライターとしての同君の本領を語る資格をもたないことは残念至極だが、「骨」の例会を通じて接触しているうちに依田君の「うち」にあるものでねだってみたくてたまらぬものがいろいろあるのでそのうち二三を列挙しておきたい。欲しいものは欲しいと言っておくに限る。

一、仕事への熱情――本人の大事のもちものを横取りも切り取りもできないのは残念だが、その熱情があふれて余技として結晶したひとつの作品を、危ういところで横取りしてわたしは珍蔵している。それは一連の男女交歓絵巻だが、もつれて流れて極まるところを知らない。その墨線のダイナミックなリズム感には戯画とも余技とも片づけられない本格的なものがある。これはたしかにねだり甲斐があった。

二、この夏の例会が依田邸で催されてはじめて御家族の方々にお目にかかった。用足しの途中で失礼ながら廊下で、かねて噂にきいていた女傑（？）で高齢の母堂とふくよかな奥さんにつかまり、ながいあいだ立ばなしをした。このお二人はどうにも横取りできなくて残念だが、玄関から二階に通ずる、ゆるやかで大幅の階段にはひどく感心した。かつてわたしが登って降った階段では第一級のものであった。五百万円くらい拾ったら、こんな階段を作らんがために家を建ててみたくなるような、大幅のゆるやかな傾斜面であった。子供には絶好の遊園地であった。

三、高村光太郎作、少女ブロンズ坐像。この坐像は天下に二個しかないそうだが、同人の多喜さんの友情によって、日下依田邸に鎮坐ましましているそうだ。欲しいものは欲しいと言っておけば、お母さんや奥さんのような生身でないだけに、こんどはこちらへ流れてくることがあるかも知れない。現に溝口健二愛蔵の慈雲一行書が氏の歿後に偶然未亡人にねだってわたしの手元へ流れてきたんだから。またわたしの愛蔵していた鉄製坐牛文鎮を酒場で草野心平に自慢したとたんにその牛は心平の右のポケットに飛び込んだのだから、光太郎は時価何百万円か知らないが、義賢筆交歓図は時価を越えている。彼の母堂にも時価はない。「骨」の五十円はちと安すぎるかな。

## 生活者のメモ

山前　実治

きじょうぶな母の胎内にいのちをえたからこそ、どんなかべにぶちあたっても、手足をのばす。いのちの根元はたとえまずしくても、熱意と努力と責任ある行動性はやがてみがきのかかった知性をみのらせる。依田君が映画の仕事をつねに、映画は芸術的ではありえても芸術というのはおこがましいと謙虚な抵抗をぶつのはゆかしい。詩集「ろーま」には素朴で健康なもの依田君のどぎつい体臭が上昇している。詩のうえでテクニシャンでないのがいい。かれの戯画を描くときのたのしそうなかまえは、はたで見ているものもたのしい。おもいのわくまま手がうごくさまはうらやましい。スピーディに線をくみあわせてゆく直感力の正確さは美しい。

## 詩人往来

天野　隆一

かって私が詩雑誌「青樹」を出していたが途中「麺麭」と改題した頃、ある日私が家へ帰って来ると家人が「劉寒吉さんと云う方が来られましたが、不在とつげるとこれをどうぞといって置いて帰られました」と紙包みを差し出した。中にはアンパンが数個は入っていた。劉さんと云えばその頃小倉で火野葦平氏などと詩の雑誌「トランシット」を出していて、毎号寄贈されていたのと名前が一寸風変りだったのでよく知っていたし、又誰かから彼がパン屋の主人である事も仄聞していたから、そのパンが劉氏の店の製品であるのか、或は京都へ来てからどこかで買って来て呉れたのかふとその紙袋を見たが、何のマークも印刷されてはいなかった。私は何となく「パン屋さんがパンを持ってパン社へ来た」と口の中で二三べんつぶやいていたら、何の奇もないのに急に笑いがこみ上げてきて家人を驚かせた。

これも私が不在中の出来事である。夜遅く帰宅すると家人が青くなって告げた。お昼頃よれよれの着物を着て五十才くらい……もっと若いのかも知れないひげののびた人が来て、私は九州は長崎で詩を作っている者であるが、御主人の名前は以前からよく知っていたのでこの度東上の途中御寄りしてみたといったが、あいにく主人は今不在である由を伝えると、では又夜来るといって一と先ず帰った。ところが夜になって酒にぐでぐでに酔っぱらって再びやって来た。まだ主人は帰らないと云うと、自分がみすぼらしい風態をしているので居留守をつかっているのだろう、こうみえても自分は九州ではレッキとした詩人である。これを見てくれといって懐中から汗くさい綴込みの原稿用紙を出して振ってみせた。それには詩らしいものが一ぱい書いてあったやうだった。その九州の詩人は主人が不在なら帰る迄待っているといって玄関に寝ころんで動きそうもないので、ほっておいたら一時間程そうしていたが本当に私が不在である事が次第にわかって来たのか、或は酒がさめて来たのか、急に、奥さん実は私はこれからあっと云はす所存であるが、途中旅費がきれたので、名古屋迄行けば知人がいるので真にすまないが名古屋迄の汽車賃を拝借ねがいたい、とひたすらたのみ出した。いささかうす気味が悪くなっていた矢先でもあるので、兎に角二円渡したらすぐおじぎをして帰っていったといふのである。

私はその時二三日前にやはり訪ねて来た東京の詩人の事を思い出した。その詩人は夜で丁度私の在宅の時だったのと、初見ではあったが名前は雑誌で知っていたので兎に角座敷へ通した。その詩人は座敷の隅のうす暗いところに座ったまま底い声で「私の仕事も作品も行きづまった。いかに苦しんでも解決が皆えない。私の郷里は九州である。これから故郷へ一とまづ帰ろうと思い大阪から乗船するが、或は、いや多分途中で瀬戸内海で海へ飛び込むかも知れない」といったやうな事をぼそぼそとしゃべった末、長い沈然をして動かない。私はなんだか部屋の中が暗くなりその詩人の周囲にぽっと沃気がただよっているやうな錯覚にとらわれて、早く帰ってほしいと思ったが座ったきりなかなか立とうともしない。私は「死ぬなんて事は考へないで、一応故郷へ早く帰ってゆっくり詩の事など一時忘れられた方が、かえってその芸術の道を発見する早道ではないでせうか。失礼だが大阪までの旅費は出させてもらう」といって、当時それに当る金額を出した。詩人はしばらくもじもじしていたが、やがてそれを持って夜更けの外へ出て行った。これは余談だがその詩人は無事故郷へ帰り、その後、当時の満洲ブームにのって新京かどこかで一時満洲の文人として一寸知られていると云ふ事をきいて安心した。さてその頃、私の出していた雑誌がいくらか有名になるにつれて、度々いろんな詩人諸君が来訪されたが、初見未知の人に限って、西は大阪神戸、東は岐阜名古屋方面へのワラジ銭の出銭が増えて来るのには閉口した。西ゆきは比格的少額ですむが、東ゆきはその三四倍とられるので東行ときくと苦笑した。そして昔の親分連はなかなか腹が太かったのだなと改めて感心した。



## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本一一七の一
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺二八五六
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
橋本喜三　京都市東山区八坂二年坂西
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
山前実治　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

## 編集後記

早春は私の一ばん好きな季節である。ときには粉雪なんかしぐれて、うすら寒い日もないではないが、どこからか春の気配がただようてくる。

裏の庭に欅の木があった。高さは五米位、水浅黄の空をささえていた枝々の、網の目のように交叉していた美しさ。日光をこなごなにこぼしていた。

一かかえ余りもある幹にもたれて、目をつむっていると若い日の蟬たちの歌や椋鳥のおしゃべりがきこえてきた。

欅の木は戦後の、くるしい生活に追われて売払ってしまったので、いまはもうあとかたもない。

名残りをおしんでというわけでもないのだが、大きな欅の臼を、水屋にでんとすえている。

お彼岸ともなればよもぎ餅なんかを搗くのだが、よもぎを入れると餅はずたずたのはらわたになって、仲々かたまらない搗けば搗くほど、おいしくなるものだ。杵の音が景気よくきこえるのは、力がこもっているからだろう。詩を作るのもよもぎ餅に似ているようだ。（井上）

うまれが山おくの雪国のせいか、都会の季節のうちで春がにがてだ。梅桃桜とダラダラに花ひらく。一度にわあっと百花のにおいがたちのぼるのは、しょうにあって、やっと春がきたんだなと、地肌のくろさにほっとした安心感をいきがえらせる。雪国の春はせっかちで、みどりの夏のかがやきへかけあしする。

しぜんのうつりかわりで、春はやってきたが、ぞくっぽいほこりにまみれて花はさいている。そして世情もダラダラわるい方向へとあゆみをはこんでいる。現代というばけものの沙漠はは てしもなく、いつまでつづくというのか。

アジア、アフリカ作家会議東京大会が3月27日の歓迎パーティーを皮切りに、4月2日京都見学をしんがりに7日間の日程で開催される。骨グループは大体会員に加わり関西の運営委員として、依田、井上両君が世話にあたる。沙漠のいっかくに、ひよわいものどうしが、あたためあいはげましあい、ひとつのちからをもりあげる。（山前）

19

# 骨 19 目次


十一月　荒木利夫　2
出発他一篇　山前実治　10
孝子伝　天野忠　14
八他二篇　井上多喜三郎　16
鴨他二篇　天野美津子　20
荒木君のprofile　同人　6
硝子に吹きつけた孤独　大鋸時生　18
ベニス（素描）　西山英雄　12
表紙　佐々木邦彦
カット　佐野猛夫
編集後記　井上・山前


同人

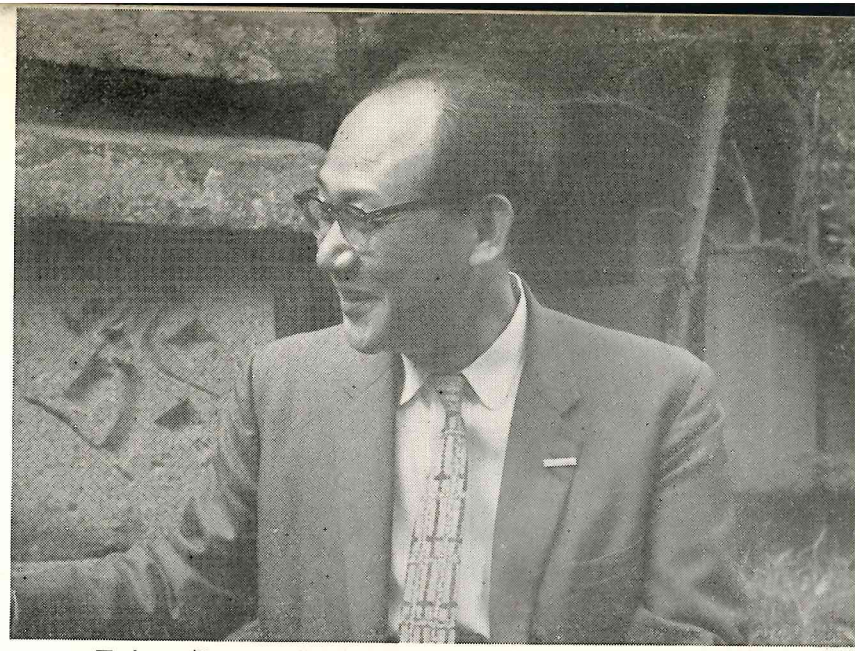
荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三
井上多喜三郎　京都市左京区高野清水町五
天野美津子　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺三八五六
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
山前實治　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三


骨　十九号　¥50
昭和三十七年二月二十日発行
編集者　山前實治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方
〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内・山前実治宛
電話㊀四三八二

# 骨

No. 19

1962・2



同人の顔　荒木利夫　撮影 依田義

# 荒木君の Profile

## 荒木君の眼

依田義賢

荒木君の眼は、鋭い。彼の眼はレンズのようになる。荒木君ほど情の濃い、いうところの気を使う男はないが、屈折度が強い。屈折を尊ぶ癖があるのでないかと思うくらい、屈折して、組みたてみがいたような眼を持つ。大変涙もろいのだが、涙にぬれる、眼を、はずかしがり、濡れるような眼は、上等でないと思っているらしく、すっかり、拭きとって、しかも、云うことは「ぼくの眼はガラス玉やさかい」というようないい方をする。正直ガラス玉かと問えば、「知らんなァ」というのはみえているし、「すごく、上等の玉やな」といえば「知らんなァ」という。自負もあり、誇りもあって、ほめられることが、いちばん、てれくさいという性質だからだろうが、そういう、あたりまえのような、批評では、ちょっと、云いあらわせない、いぢのわるさがある。いまここで、ちょっといろいろな、眼をならべてみて、彼の眼に近いものを、探してみる。孤独な魚の眼。ちがう。けものの眼。哲人の眼。ちがう。革命家の眼。ちがう。顕微鏡の眼。ちょっと、近い。近眼の眼鏡。ちょっと近い。えんまの眼。ちょっと近い。鬼の眼、ちょっと近い。餓鬼の眼。ちがう。河童の眼。ちがう。やきもちをやく女の眼。ちがう。潜航艇の潜望鏡。大変、近い。小児マヒの子供の眼。大変、近い。遠くて近きは他人の眼。非常に近い。地べたの底で泣いてる、地虫の眼。近い。天使の眼。大ちがい。狂人の眼。大ちがい。義眼。そういうところもある。試験管をのぞく、科学者の眼。非常に近い。そろばんをはじく、眼。非常に近い。つまり、熱っぽくて、薄情そうで、反省過度で、淋しいというところであろうか。アルコールが入ると、まるでかわって、偏執狂となる。

## 休火山

井上多喜三郎

荒木君は関西繊維機器の専務理事である。紡績機械の元締というところ。中国との貿易促進と取組んで、大いに活躍をしている。事務所を訪ねても、出張か外出が多くて仲々面会は出来ない。二、三十名もいるであろう事務員たちが、受付の女の子までが、専務さんと云わずに、荒木さんと呼んでいる。詩人の気どらないよさがしのばれてほほえましい。

退所時間は実に正確で、これは腰弁の特権であろうが、土曜日の昼には電話をかけてももういない。それでいて「骨」の月例会には、定刻に現れたためしがめったにない。「骨」の時間を浮気に利用しているのではなかろう。京都駅から電報で、欠席を申し越したりする。その律義さには感心せぬこともない、とだけをいっておこう。酒宴半ばにのっそり入って来て、まず徳利を賞め、盃を眺めながら、ちびりちびりと呑む。女の子をうれしがらせる術も心得ている。胃袋に酒がしみると、彼の弁舌に熱気が加ってくる。批評には一家言あり、仲々辛辣だ。愛すべきあまのじゃくである。

私は知っている。鳴動している彼の詩魂を。私ははがゆいのだ。



## 荒木の吸盤

深瀬基寛

二条城の梅園で催されたAA会議のレセプションの席の赤毛布の上に腰をかけたまま野間宏君を荒木さんに紹介された。野間君はむかしの三高生だったので紹介というのはおかしいかも知れないが、年月も久しくなるとこんな番狂わせも時にある。荒木さんと野間君とは同君の三高時代からの詩友であることをはじめて知った。僕が荒木さんを知ったのは僕が「骨」の同人に入れられたのが始まりなので、むかし荒木さんがどんな詩を作っていたのか全く無智である。いまは日中貿易が本業で、ずいぶん多忙らしいが、初対面の印象で最近まで僕は京都市上総町の高等学校の国文の先生とばかり思いこんでいた。僕は耳がひと一倍遠いので、とかく眼に映った第一印象を過信もしくは誤信する癖がある。今でも僕の深層心理では国文の先生なのだ。井上多喜さんの第一印象は左肩に投げかけられた風呂敷包なので深層心理が呉服屋さんで、老蘇のお店の敷居をまたいでからは三代四代のむかしにいくら堀り下げてもどこまでも呉服屋さんで、この印象はついには江戸時代の日本橋の三越呉服店の浮世絵のイメージと重なり合って始末におえなくなる。ところが荒木さんの先生説には合理的の説明方法が自分ながら全然見つからないのである。

あから顔で、はにかみ屋で、親切で、多情らしいところは見当がつくが、いまどきの先生ならもっとひねこびているはずだ。洋服の着こなし方にあるのかも知れないが、この点はも一度見直してから極めてみたい。

いまさっき多情といったが正確にいうと直情かも知れない。しかしそのあとへ「径行」とつけ足しては駄目だ。多情が悪ければそのあとへ「仏心」をつけ足すとよさそうだが、里見弴と来るといよいよ困る。大人になった子供というか、先生になった生徒というか、とにかく彼の本質を規定する前に是非とも彼に「自画像」という題で詩をかいてそれを内しようでよまして貰いたい。

こんなことがあった。「骨」の例会古唐津の小徳利を僕が持参した時、彼は飲みかけたビールを古草履のように蹴飛ばして、酒というよりもその徳利に吸盤のように吸いついてしまった。三条の「れんこんや」から千本の「熊鷹」まで直行したが、直行したがまだ離れない。なめくじなら塩をブッ掛ければ離れるだろうが、彼の直情を引き離すためには、酒嫌いの老婆の無愛想を以てするよりほかに手はなさそうだ。彼は吸盤を捲き収めて車の絶えた夜道をすごすごと帰って行った。

## 荒木さんと反語

天野美津子

荒木さんの感じは天に向ってうそぶいている感じである。黒い絹の中国服を着せて、石だたみの上に立たせたらさぞ似合いそうな大人の風貌だ。荒木さんのお仕事が日中貿易であると聞いて、これ以上の組合せはないと私は感心してしまった。それは二度とも土曜日の夕方だったと記憶しているが、帰りのバスの中から、一度は河ぶらを、一度は百万辺の本屋に首を突込んでいる荒木さんを見かけたことがある。街の雑踏の中で背広を着た荒木さんの後姿は、妙に窮屈そうで孤独な感じだった。私はふと、荒木さんくらい自分の処世を神経質に意識している正直な人はないのではないかと思

った。

「朱幃時代」の荒木さんとは全然違った感じだった。「堀割」という詩の強烈な印象は未だに私に残っているが、昔の神経質な風貌は、少しばかり黒いものの後退した広いオデコの片隅に、時たま怒りの影としてチラと覗えるばかりである。

第二詩集を出して間もない頃—私はまだ「骨」の仲間ではなかったが—阪急の四条大宮で偶然荒木さんに出合った。荒木さんは「よう」といい、暫らくしてから「えらい処で逢うてヒャッとした。詩集の礼状出してたな、確かに」といわれたのには、こちらの方がヒャッとした。筆不精の私は、詩集を貰っても余程でないと返事を出さず、そしてそれを気にもせずに過してきている横着さなのに、荒木さんの詩への愛は、そういう細い処にまで滲み出しているのかと思って、ひどく感激した。私はこの事から、荒木さんがテレるのは、こうした一途な精神の潔癖さをカムフラージュする姿であろうと解釈している。

だから、みんなが激論を飛ばす時には、静かに聴手に廻って「ふん、それで、それから」というような顔付で、腹の中では相手の意見を充分肯定しながら、わざと反対意見を出し、自分のいわんとするところを相手に喋らせて、「その通りや」と、はじめて自分の意見を出すというような屈折をするのだ。つまりテレるということは、荒木さんの批評精神の自己批判なのだ。

「お美津ちゃん、よう勉強しとるやないか」たまさか、どこかの雑誌に出た作品を意地悪く嗅ぎつけて、荒木さんは私を冷やかす。がこれは正しく赤信号である。「くだらん作品は載せるな、芸術の勝負は百年先やで」という叱咤の反語であることを、私は充分知っているのである。

## 一幅図

天野　忠

地蔵寺のくすんだ二階で、出版記念会があった。ふんだんにある酒は三級酒で、小芋のごろんと入った折りが出た、終り近く、荒木利夫はフイと立ち上り、小さな声でソーラン節をうたい、腰から上でおどり初めた。旧式な笠をかぶった黄色い電燈が破れ畳を照らし、いい工合のさびた雰囲気がたちこめ、無心におどっている男が、風になびく一むらの竹に見えた。あたりの景色が煙るようにしずかに、気持がおちついた。田舎の宿屋の茶掛けに、思いがけずしんとするこんな画の一幅を見ることがある。陶然として我が酔いに深く酔う手振りが、まことにしっくりと鷹揚で枯れている。

「ええソーラン節やな」傍にいた井上近江の人に思わず呟いた。「ほうやな」多喜さんもホッといきをついた。

荒木利夫は、ときどき詩も書く。（三六・十・一）

## 荒木利夫大人

佐々木邦彦

「ぜひ紹介したい人がある」そういって、荒木大人は電話にむかった。まもなく、あらわれたのが、日中貿易促進会関西事務所長の野口政広氏。むろん初対面であるが、野口氏は近藤良男氏とともに、私の個展を観ているという人で、画を通じては旧知の間柄、話はそれからそれへととめどなく展開した。

「野口君はなあ、えらい奴やで」荒木大人は、ちょっと酒が入ると、例のさびのある低音でそう野口氏の人となりについて



語りだした。私は荒木の話を、まるで音楽でも聞くように耳をかたむけた。相当に自分がその方面では中心的な人物として活動していながら、けっして自分をひけらかすということのない話ぶりが彼の話術の支えとなってこころよかった。骨の同人は勿論、友人知人の誰彼となく「あいつはやりよる」「あいつは根性をもっている」「あいつにはかなわん」と、あいつ、あいつの連続でありながら、しかし話は計算されていると思えるほど節度をもって崩れない。荒木の体臭がむんむんするほど発散した。野口氏が「いや荒木氏には私はいろいろ教えられていますよ」と、これもまた謙虚な口ぶりで、荒木の活動ぶりをたたえられた。信頼しあえるもの同士の美しさを感じたその夜の情景を、私はあたたかく日記にしずめた。ともすれば自己中心にものごとを考えやすい現実であり、その上自分を押し出さなければ、生きてゆけない社会でもあるが、そのために汚染しやすい感情は、他を批判したり、またはされたりすることをあまりに多く見せつけられている私は、荒木利夫の人間的に鍛練された感情の美しさというものを、彼の内部的な詩精神の美しさとうけとった。

こんなことを書くと「あまりいらんことを書くな」と、荒木は叱るだろう。それが卒直にいえる直情径行な性格である。展覧会もよく観ていて批評もするどい。感情的でなく、転嫁的でなく、一家言で貫いている批評精神もまた健全である。

## あまい顔からい顔

山前実治

あまい顔とからい顔の両面をうちとそとに、はっきり確立している代表的なひとがら。それがわが愛する荒木だ。あまい顔なので、めんとむかうと、ぼくはじきなぜかむかむか反撥をかんじてしまうのだ。およそ親しい友人でも「バカヤロ」と口にだしていえるのは、はがゆいいらだちをさそいだすあまさでつつむちからをもっているからだ。ふと、きをゆるさせ、ついあまえさせてしまうからだ。「朱幃」をだしていたころの荒木は、病身でじつに神経がこまかく、分析ぐせがあり、微に入り細にわたって科学的であった。そしてすこぶるするどいからい顔だった。ところでどうだ。いまの荒木のあまい大人の風格さえそなえて、堂々たるあまい顔。それだけに、誤解もうけやすいたちにもみうけられてしまう。

七・八年も前のことだ。四条通りの雑踏を小野十三郎氏と荒木とぼくがあるいていたとき、電車道を横ぎっていそいできた年増の女性が、下駄のくじきかなにかで、舗道に足をかけたはずみにバッタリたおれた。恥じらいながら起きあがろうとしたそのとっさに、荒木はすかさず肩に手をかけ「おけがはありませんでしたか」とおせっかいをした。ぼくは、その女性が衆人の注目の前であらわになったことのはじらいで必死と観たのだが、荒木のあまい顔は、そんなとき、じかに、素朴に、何の考慮もないのだ。哀しい善意がゆきとどくのだ。

戦争のさなか、詩集「磁針」を出したきりなのが、すこしものたりない。日中貿易促進運動にうきみをやつしていて、詩を書くのがすくなく、それでも書けばきっと力作をものする。仕事に詩精神を発揮するのだといっているのは、ぼくはまったく同感。しかしやがて、からい顔をかがやかせながら、鷹揚寛大なヒューマンが作品に飛翔するのをたのしみにしている。

いいえ　私にさえ私の心は見えないのでございますもの　あの方がお信じにならないといって　どうしてそれを恨むことができましょう。心の証しはひとりのもの　喜びも悲しみも私ひとりのもの。私たちは互いに遠くかけちがいながら呼びあうのが運命でございますもの。あの方がお近づきになったのは　ただ私があの方の求められる形に見えただけでございます　そしてまたそのように　私も自分を偽ってきたのだとしますなら　私たちはお互いに夢をみていたのでございます。

もはや諦めております。あの方はやがてお去りになりましょう　そして新しい方がまた恋人としてお現われになって。しかし例外ではございますまいその方も。幾日もむごい雨に降り込められ色褪せた私を御覧なされば　お前は雨に心を移したと　離れて行っておしまいになるに相違ございません。

行末のすべてが見えるような気がいたします。こうして私と一緒に暮しております多くの女たちのさだめも　みなひとつでございます。うす紫も紺青もまだ紅を帯びた稚いのもすでにこの事を知っております　それ故に私たちは互いにひとつの悲しみの柄のもとに寄りあい　はかない力をこぞって　時の終る日を待つばかりでございます。

照り　かげり　つぎつぎに来ては去って行く人の　折々　さまざまの稲妻に照らされて自分の姿をかいまみる闇の中の物の象のように　いつまでも　おなじところにとどまっている　私たちは魂でございます。



## 編集後記

「骨」も一ケ年ぶりである。はじめの申し合せに、同人の原稿がそろった時発行しようとのことであったが、それぞれに忙がしくて無理な注文だ。毎月の例会で親しく話しあっている故か、雑誌のでない空間が気にならない。雑誌を続刊しているような錯覚さへ起しそうだ。今年からは季刊に改めたいとおもっている。本号扉のカットは、佐野猛夫君の骨バッチの原画である。バッチは銀で作った。

立春吉日。雪にあけくれた〈大寒〉がたち去るとたんに、晴天の好日がつづいた。暦と気象の不思議な関連におどろいている。これは年令のせいなのだろか。私も正月には着物の袖口に赤い布切をのぞかせたりして、還暦をむかえた。少年のころ記憶しているおぢいさんのようなおもいは毛頭ない。年長の小松原仙人や冨岡の益さんも同感のこととおもわれる。

へんな話なのだが、ニキビ時代には、セックスが勉強のじゃまをして大弱りをした。せめて六十才位になったら、落ちついていい仕事をしたいものだとたのしんでいた。頭髪がまっ白になり、老眼鏡も十三度をかけている。それは問題でないのだが、生活にふりまわされてばかりいて、詩に没入出来る時間にめぐまれないのは実にはがゆいことである。かつて斉藤茂吉博士が、義弟にあたる巨人出羽嶽の、そのはらはらさせるような相撲ぶりを批評されたことがあったが、出羽嶽は小さい対手に苦もなく転されながら「相撲は先生のような素人にはわかるものではない。春日野親方位にならなければわかるものではない」といっている。四十年余り、それも下手くそその詩をかきながら、いつも彼の言葉をおもいだしては、不甲斐ない私自身をなぐさめている。

天野忠君が同人に加わった。わざわざ紹介するまでもない古い仲間である。新刊詩集〈クラスト氏のいんきな唄〉はユニークなテクニックを遺憾なく発揮したものであり、その演出の巧妙さは、読者をたぶらかさずにはおかぬだろう。選れた詩人のみがもつ至芸である。

西山英雄君は昨年芸術院賞を受賞。ヨーロッパへでかけた。すばらしいデッサン展を、東京と京都でひらいた。桜井武雄君もソ連へ旅行した。西山君は絵画的な8ミリを、桜井君は音楽的なスライドを、もちかえって私たちをたのしませてくれた。共に目でみる美しい風物詩であった。

依田義賢君はカイロのAA作家会議に出発した。ローマ、パリなどを訪ね、三月上旬帰洛の予定であるが、こんどは〈カイロ詩集〉でもだしてほしいものだ。豊富な話題を期待している。

（井上）

詩精神があくまで批判精神であり、知性にみがきをかけたところの反逆精神であり、縁の下のちからもち的行動精神であることを、いまさららしくかんがえさせられる。依田君がA・A作家会議でカイロに旅だったのを先日京都駅の寒風のなかで歓送をした。たいへんご苦労をかける。百年河清では気がながすぎるといってしまえない重要会議だ。

20集からは、装いをあらたにした表紙にしたい。ぼくはなんとかして隔月発行にしたいものだと意気ごんでいる。あまり雑誌の体裁にとらわれないで、作品ばかりでもいいともおもう。同人の放談もなるべくテープにおさめておいてすこしでも載せてゆきたい。

（山前）

# 骨

20

# 骨 20 目次

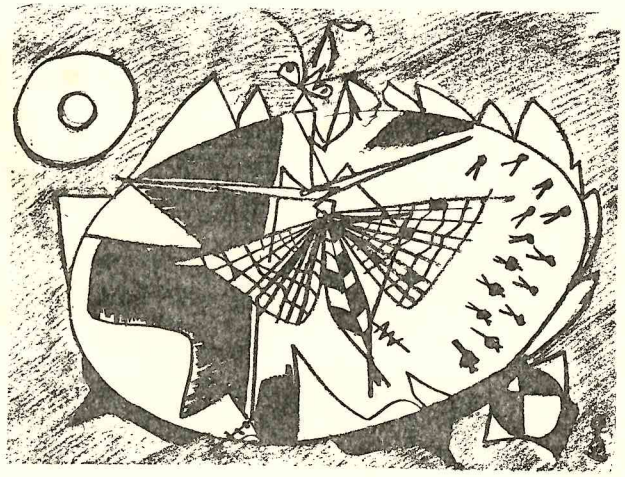

美っちゃんの Profile　同人 2
ツタンカーメン　依田義賢 4
一市民の勤勉生活　天野忠 5
古い家　天野美津子 6
飛騨山脈　山前実治 14
我説・忠義をめぐる雑念　大鋸時生 8
父の骨　田中克己 13
詩集「栖」感想　諸家 16
詩碑と詩集　十和田操 21
多喜地蔵　小高根二郎 22
私も話したい　岩佐東一郎 23
多喜さんの詩　川口敏男 24
表紙　井上多喜三郎
カット　佐野猛夫
編集後記　井上・山前



骨 20 号　¥ 50
昭和三十七年九月十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方
〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㉒四三八二

# 骨

No. 20



1962・9

同人の顔　天野美津子　撮影 依田義賢

## 美っちゃんの Profile

### 戦斗的

天野　忠

赤ん坊をおぶって、大学前の喫茶店で詩論をたたかわせていた彼女をよそながら見たのは、戦争前のことであったと私は思う。彼女がテーブルを叩かんばかりに激して語るたびに、背中のおとなしい赤ん坊は、ゴクンゴクンと彼女の首筋に頭をぶつけて泣きもしなかった。その赤ん坊が、聞くところによると、もう大学生になっているという。光陰矢の如し。時間のたつのは何とも見事なものであって、激しい勤めのあと、しんどい家事や気苦労のあと、僅かの時間を盗んで彼女が詩を書くとき、おとなしい大学生は母親の傍でひっそりと、フランス語の教科書等を繰っているのかもしれない。その戦斗的な彼女を、私の奥さんに間違えている人がいて、「奥さんの詩はすごく元気だが、御亭主の方は愚痴ばっかりたれてみっともない」と云ったそうな。私のほんとの奥さんは、そのことを人伝てに聞いて或種の複雑な表情を示したが、私の方はといえば、意気地なく単純にしょんぼりとしたのであった。

### 受難者の肌

依田　義賢

天野君は、若い時から、大変な苦労をして来られたと聞いている。その苦労がぎりぎりとしめつけられるようなもののようであったし、ずっと、永く持続して来ていただけに、それに堪えて来た天野君には、大変、強い芯が育って来ている。傷も深いようである。その傷は、暗くよじれて、こぶのようになって、肌にかたく残っている。もうそれを、決して、ほぐすことは出来ないというと、感傷的にきこえるが、それはつらいことだが、何も、それをときほぐす必要もない。けれども、その傷痕を、天野君はまだ、匿していることに、問題がある。問題というのは、いけない欠点というのでなくて、それをうたいあげてくる時に、ほとばしる涙は（乃至、もう涙は涸れて出ないなら、涙の出ないということを）

天野君をもっと豊かに、うるほわせるのでないだろうか。やさしい風貌をしている天野君が、例会のあとなどに、化粧くづれをなおしたりしているのを見ると、女だなあ、と思うのだが、どうかすると、があっと、筋骨のたくましい、風雪に硬くなった、男性の肌合いがさらけ出て、驚かされる。そこで、僕などは、もう少し、女としての良さのようなものを出したらどうだろうと、言ってみたりするが、言っているうちに、余計な話だと思って、どうでもいいよと言ってみたりする。俗にいう「男めろ」なら、それもよかろうが、そうじゃなくて、男のような肌になってしまった部分が多いというのだし、それが、暗い旅を続けて来た人の埃と陽焼けが常慣れになってしまっているようなので、黙ってしまうのである。大変な勉強家で、勉強の時間がない職についていて、これを嘆いていながら、次次と詩を作り出す。手慣れたうまみがあるのは、もう、永い詩歴から、当然だが、もう少し、ふれたくない苦労の傷痕を歌ってほしいと、かねがね思っている。苦労にも、かかわらず、決してひねくれないで、善良な心を持ち続けて来た、天野君の態度は、きっと、美しい浄化をするだろうと思う。そういう意味で、まだまだ、沢山のものを持っている人である。



### 殻

井上　多喜三郎

天野君は「骨」グループの紅一点というところである。（町田のおトシさんがいるが、もう女は廃業しているようだ。僧籍にあるというわけでもないが、白一点というところであろう。）

毎月の例会には、必ずといってよいほど出席してくれる。美津ちゃんがいると、なんとなくにぎやかな雰囲気が湧いてくる。「女は得だなあ」とおもわずにはいられない。（得をしているのは男側なのだが。）

ときどきコンパクトを取りだしては、鼻の先をたたいたりする。「誰れがためにする化粧なのか」。しょせんは女のかなしさと云うところであろうが、天野君は独身生活の苦労と、それを支えている理性の殻のようなものをつけているので、そうしたしぐさが何かわびしくて、矛盾しているかのようなおもいがせぬでもない。その殻にしても天野君としては意識外のものなのであろうが、その殻を破ることが、君の中の女を生かすことだと、私は信じている。君のパッションが、自然のかたちで、炎え上る日を期待している。

関大事務室の休暇すらない忙がしさの中で、たえまなく勉強し思考して、詩をかき、シナリオをかいている。それが君のいのちとなっている。それ故なのだろうか、過去の暗さはみられない。君が大学生の娘さんを持ちながら、文学少女のような純真さを失はないのは、何によって庇護されているのであろうか、年老いたお母さんの、かけがえのない愛情があるからだ。その点実に幸福だといいたいのだ。

その幸福を幸福として殻を破ることだ。それはエスプリの問題なのだが、君の詩はすばらしく輝き魅力を増すことだろう。

### 失礼・美っちゃん

山前　実治

ぼくがはじめて、天野美津子の作品の批評をひとことかいたのは、昭和28年4月号の「詩学」であった。「詩と真実」2号の「広告燈」一篇が目にふれて、「すこし観念的な詩想が気になるが、単に広告燈の自嘲にとどまるものであるのなら、それまでのこと。」と失礼した。

美っちゃんには、たしかコルボウ詩話会でいっぺん拝顔しただけだった。そのときの印象にのこったものは、やたらにタバコをふかし、すわったかっこうで、なにか、女性的なものはすこしも感じられなかった。もはやその頃、二人の子持で、立派な独りのお母さんであったのだ。ぼくの視野にはオールドミスくらいにうつったらしい。これまた失礼した。7年ほどのち昭和33年の春、たしか依田君の紹介と、「赤い時間」のすぐれた詩集をわざわざ手渡しで、いただいたのを契機として、頻繁にたずねてくれるようになり、親しさがくわわるほどに、さらにまた、女性らしからぬ詩人天野美津子を発見した。「美っちゃんには、どうしても女性が感じられない」など、いつもへらずぐちをたたいて、最大の失礼をしてしまう。

とかく女流詩人には、ハッタリが、きになることがあるのだが、美っちゃんには、それがない。ただ正直に、勉強ひとすじであるのには、あたまがさがる。積極的に精力的に、くいさがる精神はまさにだいじょうぶである。ともすると、中絶し、退化しがちな女流詩人のおとろえなど、けっしてみせない。

詩集「赤い時間」の「三分」はぼくの朗読詩の逸品だし、近いうち、きっとまた意義ぶかい詩集を、上梓するであろうことを期待している。

聖人が〃仁義〃をもって、天下を治める目標としたのは、こうした理由からだと考えられる（本当かいな、の声あり。大爆笑おこる）

さて、忠義に戻りましょう（笑声）。忠義という言葉は、ある圧力、権力によるか、社会道徳律によるかは別として、〃忠〃を強いられる環境にある立場から、自己を押えて、〃忠〃にしたがうことを意味している。本心からの〃忠〃でなく、いわば封建社会なればこそ発生した形式的〃忠〃なのである。このことは、義母が本当の母親でないことを意味し、義理が、人間本来の〃理〃にはかなっていないが、社会的条件に反しないため、心ならずも自分のものでない〃理〃を尊重する言葉であることから理解していただけよう。

君主が、隷属する人民や家臣に〃忠〃を要求したことは、階級主義的封建社会を確立するための必須条件として当然であった。そうした世界に安住するため、それを順奉するのを〃忠〃といわずに〃忠義〃と称えていた点を注目したい。歌舞伎脚本などで発見される悲劇は、武家社会においては、忠義が、庶民階級にあっては、義理が主因となっている。いずれも没我と忍従を征服者たちに強いられていたからである。『寺子屋』で源蔵夫婦が嘆げく有名なセリフ〃すまじきものは宮仕え〃とあるのは、なまじ扶持受けたばかりに忠義の制約から逃れられぬ立場を嘆いたものであって、竹田出雲ら町人作家は、武士階級のそうした非合理をつき、見物の大衆は、同じ観点から、気の毒な武士たちのさがに同情したのである。そして自分たちは〃世の中に義理の二字がなかりせば〃と自らをかえりみて、封建世界の暮しのつらさ、むつかしさを自己批判し、諦観していたとみてよい。

敗戦により日本民族が、権力主義から解放され、まがりなりにも〃忠義〃のきずなから脱し得たればこそ、今や〃忠義〃という文字を、ほとんど廃語にし得たのだが、その民主主義が、ほんとうの意味を確立する社会にまで到達し得ないので、いまだに浪花節的な〃義理〃の尻っぽが活きていることにも思い当っていただきたい。忠が本来の言葉として、相手を尊重しながらも、自分の心をまっすぐにして屈しない意味で使用され、義を外ずした理が、大衆の心の支柱となるのでなければ正しい民主主義社会でないともいえると思うのです。（拍手あり）。

いや、これは、とんだお説教になってしまいました（笑声）。私の言いたかったのは〃忠義〃という言葉にさえ、それだけの内容がある。つまり漢字で表記されていることによって過去の、いや将来にも大切な、日本民族の思考が発見できるのであって、仮名書きとなり、ローマ字書きとなってしまっては、こうした重大な手がかりが消滅してしまうことを、みなさんの注意喚起を求めたかったのです。青少年の教育上の負担を軽くすることは当用漢字の励行で一応やれる。しかし成人したのちまでも、それ以外の漢字を使用してはならないということの愚かしさを指摘したかったのです。我々の祖先は、いみじくも言いました。角をためて牛を殺すなかれ（拍手おこる）。ただ今の拍手は、私の言わんとしたことを、ご理解願ったからだと思います（笑声）。これ以上もうすことはないようですから、このへんで長談義を終わらせていただきましょう。ご静聴ありがとうございました（拍手なりわたる）。

＜註＞この卓話が終ったのち、和田　久氏は、忠義等々の語源の出典につき多くの質問をうけたが、づるしやもを決めこんで、ついに答えなかった。

（録音責任者附記）



# 父の骨

田中克己

昨年の夏、純粋の大阪人である父が七十八才でなくなった。遺言はわたしが聞いたのでは、短歌一万首を残すから何とかしてくれ、というのだが、そのほかに骨を賀茂川に流してくれ、というのがあって困った。これは伊勢にいる弟の嫁が「お父さん無茶なことを」といってきかない。計画だけでなく、お寺からもすでに地を分けてもらって、近々には墓も建ちそうである。その墓に赤い字でならぶのは、もとより今の母である。わたしはそれを知らぬ顔しているより仕方がない。

こんなことでわたしもこのごろやっと、骨よりもさらに大切な魂の問題に気がついた。父は臨終前まで「地獄の方が面白いがナ」といっていた。わたしはちょっとちがう。面白いことなどもうごめんである。平安にねむりといって叱り、「そうか」といって遺言状から消したとかで、なるほど遺言状には書いてなかった。

歌のことはともかく、しかし骨ではわたしは相変らず困っている。というのはわたしの母は家をわたしに継がしたことにして、父の家に入り、まもなく死んで父の家の先祖代々の墓に入ってから四十何年、そこへ父が死んでやっと一緒になれるのだが、わたしを幼い時から育ててくれた母は、父の墓を建てたいと一心に思っている。（父の墓は大阪の寺町で蕉門の十哲のひとり野坡の墓と同じ境内になる筈である。）

井上多喜三郎
詩集

# 栖

＊

堀口　大学

こざっぱりして気持のよいご本、そしてまことに読みよいご本と、感服しております。

＊

田中　冬二

先づ巻頭の一篇を拝見—ついであとは終りの方から一篇一篇味読させていただきましたが、こころひかれる作品多く本当にたのしい限りです。流石に多喜さんの詩集だと感銘しました。詩集というものは、時に終りの方からでも、中程からでもどこからでも、読みはじめてよいものだと思いました。

＊

岡崎清一郎

本日は御著「栖」をありがとうございました。此度はまた貴下の詩碑が建立される由大賀。万才であります。なんと喜こばしいことでありましようか。

＊

緒方　昇

おおよそは「骨」誌で拝読したものですがこうやって一本にまとめられてみると、意外のボリーユムにあらためて驚き、井上詩学に叩頭したい思いです。

＊

大江　満雄

「私は話したい」をはじめお作品の一つ一つに血の通っているものをかんじ愛読いたしました。

＊

中村漁波林

親しみやすい身近かな感じの息吹きで、ホット安心しながら再読しました。

＊

古谷　綱武

「栖」をいただきまことにありがとうございました。ぼくが若い日に安土でお世話になったのももうずいぶん昔のことになってしまいました。なつかしく思いだします。

＊

津軽　照子

近ごろたのしく拝見、犬は血統づきの犬より野良犬こそ可愛う御座います。

＊

能村　潔

「栖」の中のお作とりどりにすばらしく、ここ数年、こんな傑作ぞろひの集を手にしたことがありません。敬服に堪へません。順を追って愚見を述べさせていただきましょう。

「魚の町」破天荒の試み、じつによく関況に肉迫、いな、おそらく〈実況は、この詩にふり廻わされている〉といった方がよいかもしれません。〈……屋〉の連続の中に、一種のリズムが、ちゃんと用意されているのも、さすが。「初戎」—まさに、そのとおり。生きています。「執」の〈奉公袋〉への連想。ただ頭が下がりました。「その手」白眉。〈2〉の方が、この作に限らず、〈反歌〉のような役割をしている作品の多いのも、あなたの特徴のようです。「暮しの歌」愛の深さ、童心のままの純粋さに衝たれました。傑作。「臍の緒」も同じ。最後の三行、特に貴い。「早春」愛は野良犬にも及んで、後半はすばらしい。最後の一行など、特に、私の胸をぐっと詰らせました。「蚯蚓」のアイロニー。「種子」傑作。最後の抑へが利いています。いつも、そうですが、これは特に。「鎖」は「暮しの歌」と同じ寝床ながら、〈意欲〉というか、〈生きている意志というのか、そういったものをつかんでおられ、「その手」と共にこの集の三大高峰を形成していると私は思います。「八」「慣」「平」みな敬服。



かって「月曜」を出しておられたころの印象が、私の記憶の底にしみついていますが、あのころは象牙のように清楚ではあったが、この「栖」のように、あなたじしんを、譬へば、幼少のころ、私などのよくやった、蛭を裏返しにした—残酷な意味ではありません—ようなよそゆきのあなたでなく、あなたそのもの、といったものが、実によく出ているような気がします。多喜文学の涅槃は、ついに達成された、という感じです。お慶び申しあげます。

＊

安藤　一郎

平明で淡々とした言葉に、長い人生経験が泌みこんでいるのがわかり、思わずハッとさせられました。

「初戎」のような大阪風物も面白い乍ら、「その手」や「臍の緒」や「早春」や「山羊の歌」や「鎖」や「慣」などを味わい深くよみました。犬や虫の詩が多いんですね。

＊

小野十三郎

結晶度の高いあなたの近作を、こうしてまとめて拝見できますことを、うれしく思います。すべての作品が針の先で、銅板に刻みつけられたように安定していて、まったく見ごとです。詩人はいろいろな試みをやっても、年月の磨滅に耐えるようなものを残さなければならないと、あなたの詩を読んで、あらためて思いました。

老蘇の小学校の庭に建てられたあなたの詩碑はどんなものでしよう。こんどの式には参列出来ませんが、いつかまた御地を訪れたとき、あなたと二人で見にゆきたいなと思っています。

「犬」という詩好きです。前に雑誌で読んだときも思いましたが、あなたらしい詩だな。反物の包みを肩にかけて、老蘇の街道を歩いているあなたの姿が見えます。

＊

田中　克己

「栖」という詩集は、上品な裝ていと同時に、このドギツイ世の中に、詩とはこんなものだ、詩人とはこんなものだと、懇切に教えてくれる作品ばかりである。

＊

木下常太郎

近来まれな珍重すべき好詩集です。

日本に生れ、生きた人によって、日本語で書かれたなつかしい詩集です。魂の底まで国際化した大都会の人には絶対に書けない作品集です。

＊

三浦　逸雄

あなたの詩には、明確なイメージの対立を体験的にするどく構成して、純粋なポエジイにしておられるところ、西洋の詩人のような明るい知性をかんじさせます。習俗的な日本の風趣を素材としながら、新しさをもっているのは、そのせいかと思われます。先年来朝したイタリアの代表的詩人のウンガレッティ氏と相通ずるものがあって、微笑して読んでいます。

＊

野田宇太郎

近来にない立派な内容をもつ詩集です。しかしこれは商店などに並べるものでなく、もっとしっかりしたところで、心臓に近く、ふところにいつも抱いて歩くべき詩集です。

＊

寿岳　文章

私の場合、印刷や造本の視角から批評を求められることが多いのですが、（実は小生として不平）、「栖」はその不文律をつき破り「海老蟹」や「その手」や「早春」や「犬」

などから受けるイメージのあざやかさをまずたたえずにいられません。動物に托しての人間批評の適切さ、鋭さに深く打たれました。日本の政治をこねまわしている人たちに、この感覚の一かけらでもあったならと、天を仰いで痛嘆したことです。小生専門（?）の造書の方から見て、近来稀なできばえであることも、申し加えさせていただきます。

＊　ハルヤマ・ユキオ

イクオテル
ノン
ウノリイ
エシジガル
ニナア
ハリル

＊　壺井　繁治

あなたの詩集にはあちらこちらにユーモアが溢れていますが、これは何かあなたが物事を達感したところから生れてきているように思われます。大晦日のすすはたきを歌った「執」は何気ない、さらりとしたうたい方ですが、ここに日本が潜った歴史の一断面をよみとらずにはいられません。あなた独自の歌い方で、一種の「達人」の詩となっています。げじげじ、蛞蝓、みみずなど、どちらかといえばひとにいやがられる虫けらにインタレストを寄せているところに、あなたらしいなにものかが感じられます。これもあなたのユーモアと関連があると思います。

＊　奈良本辰也

栖という詩集ありがとう御座いました。開いて机の上に置くと、貴方の顔が目の前に浮びました。力強い詩です。

＊　北園　克衛

シャボンを知らない犬や朝顔のラッパに、昔の作品を思いますが、年とともに人間の心のレンズもちがっていくものですね。多分、それが本当であるのでしようが、変化というものは、何かしら佗しくもあるものです。

＊　北川　桃雄

井上さんの詩には庶民生活の暗い形象が出てくるが、それが少しもじめじめしないで明るい感銘をあたえます。老詩人の健康な年輪から生みだされるからでしよう。

＊　小杉　放庵

詩はわからないながら「鎖」に心を留めました。一ばん短かいので「霜の朝」「挽歌」以前拝見しましたが、やはり心に留って居ます。

＊　八十島　稔

「栖」の名。雅兄の高著に、ぴったりした感じがいたします。「骨」は私の愛読の誌、そのまた一頁を毎号飾っていた玉詩のことですから、よくよく覚えている作品も多く、ひとしお敬虔さを覚えています。

どのうたもどのうたにも雅兄の美しい生活の息吹きがありますが、就中「栖」の主題を中軸にした「八」「慣」や「平」の諸篇、それから「蚯蚓」の各篇、「山羊の歌」などを愛誦していると嬉しくて目頭が熱くなりました。「暮しの歌」の手織木綿のふとんの味私もなつかしい思い出です。

＊　木下　夕爾

ちょうど今の季節の故でしようか先づ「私は話したい」を拝誦ふんわりした気持です。「霜の朝」は短かい詩ですが、実にきびしい大きな作です。「魚の町」「初戎」の二篇あ



なたの新しい面で感銘ふかく憶えました。近頃はこのように美しくたのしく読み入ることのできるものが少なくなりました。

＊　平光　善久

瀟洒な装本がなによりもお作にぴったりだと感心しました。味わい深い作品の数々。しかも独特な技法が生きているのに、やはり年期がものをいうのだなと思いました。「魚の町」や「初戎」全部、声に出して読んでみて未だかって味わったことのない詩の味を感じました。「執」「臍の緒」「蚯蚓」「私は話したい」「鎖」「八」「慣」なども愛誦の詩になりそうです。特に「臍の緒」の最後の章圧巻です。臍の緒が好きで、それに生の意義を見つけて行こうとする私には格別です。ちよっとほかの人にはわからないだろうと自負したいほどの共鳴ぶりです。

＊　中村　千尾

井上さんの詩はいつも読者を楽しませてくれます。それは井上さんの明るい人徳がたくまずにそのような方向へ詩を向けさせるのでしよう。いつも若々しい井上さんが、詩の中でニコニコ笑いかけているようです。栖は井上さんの愛情深い生活の記録だと思って拝読致しました。明るく、もの悲しく、軽妙でピリットした作品は、やはり井上さん独自のものと感嘆して居ります。

＊　福田　泰彦

丈夫な手織木綿のような御詩集、ありがとうございました。「もさっとした大きな」手で、しかしここに綴られている文字は、一字一句、まことにきめこまかい、ゆるぎのないものと読ませていただきました。「涅槃には象や牛と泣いていたやつ」こういうふうに書いた詩人は、先生以前にはなかったように思います。「蛞蝓」、その人を見るような詩で感動しました。「鎖」という御作もすきでした。私の周りでも何度か「夜がしらみ」ました。そしてこの頃になって、ようやく、知性とか理性とか呼ばれるものは、「詩」の、ほんの一部を受持つものにすぎないことがわかって来ました。「つまらない雑種にはシャボンのにおいなんかわからないだろう」ケストナーがうすぎたなく見えます。私はまだ「犬に吠えられる」とかなしいおもいがする年令ですが、一生懸命に暮して、いつかはこんなふうに言えるようなひとになりたいと思って居ります。大切に保存して、いつまでも薬のように読ませていただきます。

＊　相馬　大

とてもすばらしい味。渋い味の作品。一作一作を味わい深く拝読いたしました。それは珠玉の一篇一篇でした。これほどまで考えながら味わえる一篇一篇の作品におどろいています。これは生活が詩であり、詩が詩人であることを約束、生まれるべくして生まれ出た詩だと思います。作りごとがない。偽りのない詩だと思います。生意気なことを言うのではなしに、こんなに美しい心の人がいることに不思議さを感じます。私は本当にうらやましいです。「人面の大きな岩」（ホーソン）で少年アーネストの求めていた詩人その人ではなく、老人アーネスト自身だった物語の中にあらわれた真実の人のようです。

＊　長田　恒雄

なんともいへない温かさ、正直さが行間にあふれていて、そのなかにちよっと古武士のような勁さもあり、六十年を生きてきたひとの詩魂のたのもしさがうれしいです。

＊

小林儀三郎

貴詩ににじみ出ているあたたかさには大変打たれました。本来の詩人にはそれが一番必要で大切なものではなかろうかなどと愚考致しております。

＊

嵯峨　信之

さすがに永年の御精進が、言葉と言葉との間をきびしく結び、深くかつ淡彩な映像が、素晴らしい効果をあげているのに敬服いたしました。

＊

笹沢　美明

井上さんには一度もあったことがないが、タキさんといつの間にかいうようになって大変親しみをもっている。時々湖畔の秋の芦狩などに案内状を気軽に送ってくれる。そんな点でも親しみを感じるのかも知れない。素適な人柄を想像するばかりである。

今度の新著詩集をひもとくと、ひねったり裏返したりする現代風の詩とは反対に、誠に素直である。自然発生的とも言える詩風で、平穏な見方感じ方をしているのが目につく。老蘇などときくと端唄でもきくようなひびきがあって、江戸風を感じさせる地名だし、昔の志賀の都を連想させる静かな湖面の柔かな光さえ感じる。そこに生活している人らしい特性が作品の上に現れている。よい意味のディレッタントなのだろうか？。

＊

安西　均

「骨」も「コルボウ」も、お会いした方はほとんどないといってよいぐらいですが、昔からひそかに懐しく尊敬しているグループです。私が井上先生のお名前を覚えたのは、戦争まえの「文芸汎論」だったと思います。詩は趣味でない、詩は私の宗教だとおっしゃるお言葉は、私などにはやはり鞭です。

集中どれも愛唱いたしますが、中んずく「魚の町」のような、すさまじい名詞の羅列羅列というよりも奔流に圧倒されます。このなまぐさい魚の町のおそろしさ。おどろなす詩の小路に踏みこんだ詩人の姿に息をのむ思いがしています。

＊

小寺　正三

「暮しの歌」「臍の緒」「平」など、深い感銘を受けました。

＊

正富　汪洋

世の中の酢いも甘いも嘗めて来た俺だ、今さら、よそ行きの顔なんかしないぞ、お嬢さん芸のような詩なんか作れったって作れないや、ありのままの俺の、わがままの詩だ、何となりと見るが良いといったような態度に見えるが悪くない。巻頭の魚の町には、並べも並べた商店の名の数々を、でそのあとに「うなぎのねとこのような小路を奥さんの旦那の妾のストリッパーの親爺の腰弁の女中や小僧の冒の腑がひしめいている」と結んでいる。少々人を食った形だ、「初戎」では「商売繁昌笹もってこい商売繁昌笹もってこい商売繁昌笹もってこい商売繁昌笹もってこい」を、いろいろの文句のあとに三ページの中に七回入れているが耳障りでない。いい音楽感だ。

＜詩界67＞

＊

鳥巣　郁美

一つ一つ生活のふかみにつながる言葉、＜鎖＞＜夜＞の行間に走る戦慄。詩をそのまま生きておられるような御日常が、この詩集ににじみ出ています。



# 詩碑と詩集

十和田　操

まだ生きている詩人の詩碑が近江聖人の碑のように近江に建つのは、近江詩人会ポエッスクールに百四十一回中、百四十回出席した優等生の表彰ということばかりではなく、新刊井上多喜三郎詩集「栖」を、昭和三十七年五月十日以後のある快晴の早朝、寝床の中から首を出して、四十九分間で読み終ることによって、なるほどこれでは、この詩人が死ぬのを待っておられなくって詩碑が建つのは、むりないことと、なっとくがつくのでありました。月並の「おめでとう」のハガキなんかで受取証みたいなものを出しただけではおけない予感がしましたが、手元にビンセンやフウトウが切れていたので、手紙を書こうにもすぐにまにあわず、失礼しておりました。

八

この簡素な板屋根の栖で私は寝ころんでいる。

よいあんばいに天窓もあいてある

から発せられたもの、この詩集も、いや多喜さんの全詩集もここから発せられたもの、

朝顔が小さなラッパをふいていた

そのラッパの音、そのラッパの曲の趣く

十文に二文たらない親和感

岩佐東一郎が昔からタキさんタキさんと、私の顔を見るたびに、タキさんのうわさをしていましたが、その人の詩碑が建つたわけが、いまやっと判ったような気がしました。「私のような無名詩人にとっては分外のことだ」といっておられるが、それは詩人の自由なのだが、マスコミの有名詩人などは詩人ではないということだけは私にも分っている。くやしかったらマスコミで詩碑を立ててみろだ。

…小溝のなかでふやけた飯粒が鎌首をもちあげる。

…どれだけ遅くなっても風呂敷包の結びめだけは解いておく

…終日大へんご苦労さま

近江の詩碑に刻んでおきたいことば、それからこの暮しの歌の2も。

「早春」のほえないルンペン。臍の緒の雪隠。

炎天の道の辺でうんこをしている犬の歌。

種子―指の間からうたいながらこぼれてゆくその小さないのちは

慣―神さまこれでよいのでしようか

山羊の歌―天使のウンコのような目やにを

蚯蚓―愛は営まれるくらがりの中で

みみずには目もない耳もない

はじめへもどって

魚の町、初戎――長い間私はこれが多喜三郎詩の看板だという印象だったが、その次に挽歌もそうだと思っていたが。「その手」から以後すばらしい進展、円熟、あらためて多喜三郎の手を握りたい。

大学先生といっしょに東一郎、冬二が詩碑の除幕式に近江に出かけると岩佐君から便りがありましたが、下旬とのみでその日は分らず、もう出かけるころかも知れない、詩集を見たら自分も出かけなければならないような気になりましたが、考えてみたら、やはり出かけられないことが分りました。岐阜の山奥の父母の墓まいりにも、出かけるとなると大頭痛。ひまがあっても金がそろわなかったり金がそろうときはひまがなかったり。下戸がもらったサントリー一本、封を切って除幕式の日に、ひとりで、近江の空に向ってささげ「栖」の最後の詩に寄せて、平に尊兄の御健康を祝すとしましよう。コウロギはまだ早いが、コウロギのように詩碑のまわりで声をあげて、コロコロと。湯気がもくもく立ちこんで――それは私のタバコのけむりです。

# 多喜地蔵

小高根二郎

僕は多喜さんになん回ぐらい出会ったことにならうか？　たぶん多くて四五回にとどまってゐる。

そのくせ、ホコリをかぶって陽に焦げた彼の顔――微笑をたやしたことのない彫りの深い慈眼は、まるで幼な友達にでもあったかのやうに、消しがたく克明に僕の心裡に刻まれてゐる。それに、彼はいつも大黒さんであるかのやうに、風呂敷包を忘れずに携へてゐたことも印象ぶかい。依田義賢さんのお宅で詩の会があったときのことである。定刻に参集して所在なげに加茂川など眺望してゐた二三の者のために、駈けつけたばかりの彼は、「暮しの歌」の詩句のやうに、さっそくアト・ホームな手つきで風呂敷包の結びめを解いた。とりだしたのは商品の反物ではなく江州産の土偶だった。その上、笹飴かなんぞも器用にとりだし、それを一本づつ僕たちにあてがってくれた。飴をなめなめ、素焼に泥絵具をぬたくった素朴な土偶――道祖神たちのみだらな構成に、破顔一笑せよ……という趣向である。おかげで開会前の互ひにひとみしりしたばつのわるさや、待つ間のながさを忘れさせていただいた思ひ出はなつかしい。

この多喜さんの思ひつきと善意は単純だが単純なだけにほのぼのと暖い。その日は晩秋であったか、初冬であったか、かなり冷えこんでゐた記憶があるが、多喜さんが破れぬやうにと気を配って携へてきた土偶は、妙に暖かかったやうに印象してゐる。

多喜さんの詩集「栖」を開くと、その善意の多喜さんが風呂敷包を小脇に佇んでゐる。包をかかへた左手の不自由な掌に小さなノートが開かれてゐる。右手にはチビた鉛筆。彼はそれをなめなめノートに一心に書きこんでゐる。八百屋の隣は肉屋です。肉屋の隣は罐詰屋です。そのまた隣は牡蠣屋です……。彼は「魚の町」冒頭の詩句〈京の錦の魚市場は高倉から堺町柳馬場富小路麩屋町御幸町寺町へと続いている〉という町並に沿って、その一軒一軒の前に遍路さんのやうに佇み、看板をたしかめ、看板と店内の商品の当否をあらため、それからチビ鉛筆をなめていちいち記入していったにちがひない。『骨』の読者の中に誰か井上多喜三郎研究家がゐたら、町並と多喜さんの詩にある店屋があってゐるかどうか今のうちに確認しておく必要がある。

多喜さんに大黒さんと遍路さんとになってもらったが、こんどは地蔵さんになってもらはなくてはならない。この間できた詩碑には『私は話したい』が刻まれてゐるさうだ。

目白やきつつきと
熊やリスと
きき耳ずきんなんかかむらないでも
君たちの言葉が解りたい
私のおもいをかよわせたい
もろこやなまずに
亀の子や蝶々に
降りそそぐ日光の中で
やさしい風にふかれながら
つばなやたんぽぽと
ゆすらうめやあんずと

この気持を実現してゐる唯一者は地蔵さんだ。路傍に佇みながら、乾燥した馬糞の藁くさいほこりを浴び、目白やきつつきに聞き耳を立て、もろこやなまずに気をつかひ、たんぽぽの種子の旅行をうらやんでゐる。それは地蔵さんであり、多喜さんなのだ。

僕は所用あって老蘇の森の近くを二三度自動車で通過したことがある。その時はからずも窓から首をだし、あたりの風物を見廻してゐた。そしてなぜか空気を胸一杯すひこんでゐた。ここらあたりが多喜さんの領分なんだぞ……と思ったからである。道の向うから風呂敷包を背負ひ自転車を漕ぎながら多喜さんがやってこぬかと想った。が、誰ともゆきあはなんだ。私は路傍の地蔵さんにゆきあはないかと道路の左右に眼を走らせてゐた。そのときの気持はいま判ったが、多喜さんの微笑をたたへた慈眼の代りをせめて地蔵さんに求めてゐたのだらう。

## 栖

井上多喜三郎詩集

限定　250　　¥200

発行所「骨」編集室

井上多喜三郎君は有眼の士によって高く評価されている得がたい詩人である。「栖」は将来貴重な存在となるであろう詩集である。

（堀口大学先生談）

（パロディ）

## 私も話したい

――多喜さんに――

岩佐東一郎

芝犬や三毛猫と
雀やガマと
イヤホーンなんかつけないでも
みんなの冗談が解りたい
私のコトバもきかせたい
金魚や熱帯魚に
なまこやひとでに
赤ん坊や精薄児に
すぎていく日日の中で
やわらかなこころとこころを
耳やひとみと
くちびるや表情で

――一九六二・六・一――

# 多喜さんの詩

川口　敏男

## 春

天使がとび越える小川
モロコが一匹うまれます

この詩は井上多喜三郎氏の豪華な詩集「花粉」の作品で昭和十六年の奥付がある。

この簡素な板屋根の栖で私は寝ころんでいるよいあんばいに天窓もあいている

これは詩集「栖」の八という題の詩である。前者のみずみずしいまでに微笑ましいエンゼルは、すっかり成長して、自分の栖をよいあんばいに天窓もあいている程、童心が美しく結晶して、この一連だけでも詩人の人生感がうかがえるほど、おうらかに美しく、そしてのびのびとしている。

何というすんだ美しい詩心であろう。多喜さんの詩には暗い翳がない。どんな悲惨な生活にも明るい天真爛漫な天使が笑っているのである。

## その手

2

はげしい吹雪になった
すすけたその手にらんぷが灯っている
目刺しのような家族たちよ

これだけきびしい生活の苦痛も、いささかの、くったくもなく、これだけ枯れた手法で唄っている。多喜さんの詩はポエジイを、エンゼルでくるんだようで、この作品など、実に象徴の極に達していて、詩感も語感も省略されて、それでいて詩人のあたたかい息吹きが甦がえってくる。実にくらしいばかり、うまい詩である。

恐らく、多喜さんという詩人をミキサーでつぶしてみたら、詩だけが滾々と流れでてくるのでないか。多喜さんの生活そのものがその詩になっているのでないかと思う。これだけポエジイを生ききつた詩人も少いと思うほど、純粋な詩心で貫らぬかれている。それだけに現代という見方からすれば、その思想の発想、表現方法において、イメジの扱い方が単調化したおそれもあるが、多喜さんのもらす詠嘆の言葉に却って無限の詩がふきでている点が、詩人としての強みであろう。はげしい流派や感情のアツレキの多い詩人の世界で、しかも、都会というにはおよそ遠い生活のなかで、こんなに詩をうしなわなかった詩人も少なかろう。

久しい以前に僕は多喜さんの美しい雑誌「月曜」でおせわになった。そしてもう何十年になるのに一度もあってはいない。しかしあの丁寧なるるとしたたどたどしい雅味のある筆跡とともに、いつでも多喜さんの姿が彷彿するようも思えるのである。多喜さんがもっと東京に近かったらどんなにか活躍せられていたらうと思う。しかもこんなことには全く無頓着に多喜さんは「それでいて、翌朝になると、うようよとうまれてくるやつ」のように蛞蝓や蚯蚓のように、「エスプリなんかつまつていない。つまっているのは土くれだけだ」というようなセンスのある美しいエスプリの詩を無限にのばしていかれるように思う、しずかにも美しくすんだ詩集「栖」である。



では二、三の文芸誌が、年に一回程度、詩の特輯号をだすだけで、週間誌なんかはみむきもしやしない。「文春」は短いものながら毎号のせてはいるが、読者はそれを看過している始末である。売れないところに、詩の純粋性が失われないのかもしれない。

詩は難解なものであると、大衆におもいこませた罪は詩人にあるのだが、近頃難解な詩が姿を消しつつあることは喜ばしいことである。それは筋の通らないキザなつまらぬ詩のことなのだ。詩の難解は、詩法の一要素でもあるのだが、詩は詩人だけのものではない。考えるべきである。

先に田中冬二さんが詩集を、小野十三郎君が詩集と詩論集をだした。いづれも高度のすばらしい作品集であるが詩は青春のものときめこんでいた昔からみれば、六十歳七十歳になって詩をかき、詩集をだすようなことは、夢にもおもわなかったであろう。詩の青春は、詩自体のものであって、年令にかかわりはない。八十五歳で天寿を全うしたヘルマン・ヘッセは、死ぬ一週間まえ詩をかき、その前日まで推敲の加筆をしていたとのことであるが、絶筆の詩にみられる不撓の精神には感動させられ力づけられるものがある。

（井上）

近江詩人会の発起と熱意で、還暦を迎えた多喜さんの詩碑が安土町老蘇小学校の校庭の一部に建てられ、37年5月20日盛大な除幕式が挙げられた。五月晴れの薫風のなかで、堀口大学、田中冬二、岩佐東一郎の諸氏のほか八十数名が参集、なごやかな記念の会を意義あるものとした。

この機会に出版した詩集「栖」に寄せられた諸家の感想を、本号に収録した。

映画「釈迦」の作家、八尋不二氏が同人に参加した。

（山前）

## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺二八五六
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町
山前実治　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

## 編集後記

今日は雨。暑さを追いだすかのように遠雷が鳴っている。秋刀魚を焼くにをいが厨からながれてくる。夕餉の肴は秋刀魚だな。口をついてでる春夫先生の

「秋刀魚の歌」。

あはれ
秋風よ
情あらば伝へてよ
あはれなのは詩人族だ。空腹をかかえながら、金にもならない詩をかいているのだ。この国

# 骨

21

目次


大鋸時生の Profile　同人　2
豪傑　天野忠　4
糸の世界（他二篇）　天野美津子　8
ペニィ銅貨　八尋不二　13
霜にとけたちちいろのあけび　山前実治　16
「私は話したい」　深瀬基寛　14
厠と女性と演劇とのかかずりあい　大鋸時生　18
表紙　山前実法
カット　佐野猛夫
編集後記　（山前）



骨 21号　定価 80
昭和三十八年一月十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方



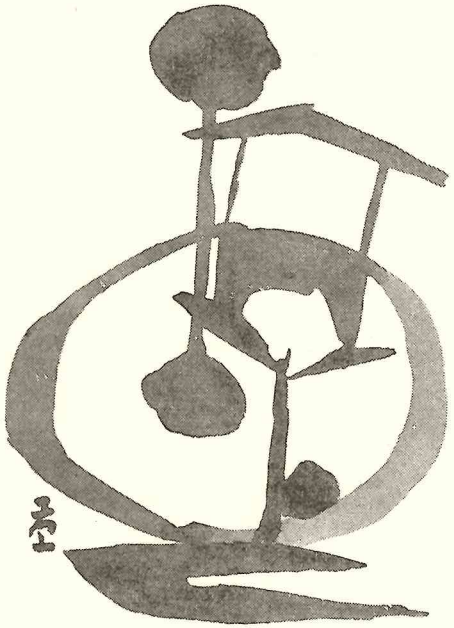
〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㉒四三八二


骨

21

# 馬

No. 21



1963・1

同人の顔　大鋸時生　撮影依田義賢

## 大鋸君の Profile

### 大鋸（のこぎり）

依田　義賢

はじめて、大鋸さんに逢ったのは、NHK（BK）の社会時評を、大鋸時生、梅棹忠夫、依田義賢のメンバーで、やることになった時で、BKの部屋で、紹介された時、大鋸さんは「わたしの名前を、みんな読むのに困るらしいですな、大のこぎりとは、読むのは、おそらく間違いだろうと誰も思うでしょう、そんなら、さて、何と読むかで困ってしまうでしょう」私も、新聞の劇評などに名前が出ていた時は、「おおのこ」と勝手に呼んでいた。よく考えてみるとのこというのは、のこぎりを略していう、俗語なんで、いやしくも、姓にそんな読み方はするものではない。「おおが」と読むときいて、これは予想もしなかった。鋸は「きよ」である。「だいきよ」はないとしても、「おおきよ」と、読むならわかるが「おおが」とは。まさか、鋸から鋸屑（おがくず）が出るからという、わけでもないだろう。大鋸時生の名前は知っていたが、劇評家というだけで、詳しいことは知らなかった。ただわけもなく、その名から頭においていたのは、歌舞伎通ということで、それはわたしの頭の中では「関屏」の大伴黒主と共にあった。黒主が大鉞を持っているのが、大鋸と関連して、そう思うにすぎないが、逢ってみると、偉大な体軀の壮年で、頭髪を乱れるがままにしている、圧倒するようなヴリュームを持つい男であった。黒主のような悪ではないことは次第にわかったが、はじめのうちに端倪すべかざる人物に見えた。氏は、その時共同通信の大阪支店長であった。ジャーナリストと言えばまさに、そうであろうと思われる、豊富な博識の、俊敏さを持っていた。この人、一挙に斧鉞を加えるという速断があり、これに、力があった。大木を両断する大鋸らしいところだ。われわれのチームの、社会時評は、大変好評で、予定されていた、時期の倍もやらされて、半年も続いただろうか、このチームが別れるのは残念だと言い合っていた。たまたま、骨のグループの話が出て、そら、面白そうな会だなというので、わたしが連れて来て、呑みあっているうちに、同人になったというわけである。大鋸だけでなかった。小鋸も使う、器用な、律義の人だった。

### 理論派いじわる

山前　実治

正々堂々、とうっかり口滑らすと、正々はよけいだとたしなめる正確な熱情家である。

### 人ちがい

天野　忠

大鋸氏について私は云うことがない。ほとんど何も知らないのである。知っているほんのすこしのことは、でっぷりした偉丈夫で、何処か、そうそう、ソ聯のヴァオリニストみたいな風貌で、きさくな人柄で、和田久氏なる名前で奔放に皮肉、諷刺の如きものを明快達者に書く人であるといったことぐらい。

私は大鋸氏とそっくりのタイプの人を、広島の何とかいう賑かな街の映画館の前で見かけたことがある。前のことで、勿論大鋸氏を存知上げない頃で、その偉丈夫は、秋口であるにかかわらず、素肌に浴衣一枚をひっかけ、蓬髪を埃り風に靡かせながら、うしろに手を組んで悠然と絵看板に見惚れていたのである。裸体の、たいへん美しい足を長々と見せびらかした西洋の美女が、あごをひいて、じいっとこっちの下心を見すかすような眼を光らせた大きな絵看板であった。それは十分間位は嘆賞するに足るほどの美女であって私も彼と同じような磊落なポーズで、人眼がなければしみじみと観賞の欲を満たしたかったのであるが、雑踏の中で心ならずも遠慮せざるを得なかったが、その人は、おそらく身に備わった貫禄の重さで、山中に一人野鳥を聴く人の、不思議に身に沁みとおるようなしずけさをたたえて見入っていたのである。

後日、大鋸氏と初顔合せをしたとき、私はガクゼンとして彼の広島の偉丈夫を思い出した。背広を着、上品なネクタイをつけ、まるまるとした膝を組んで悠然と盃を口にしながら、件（くだん）の人は、そのとき、きさくに誰かと、国語問題について話し合っていたのである。

### 素描

井上　多喜三郎

「骨」19に〈硝子に吹きつけた孤独〉を書いた大鋸時生君は同人を水族館の魚族になぞらえて、それぞれのプロフィルを、愉快に捕へていたのだが、この（ズバリあてましょう）の司会者は、さしづめ熊野灘あたりで水揚げした抹香鯨というところであろう。大鋸君の体駆は堂々としていて、ゆたかなおっぱいをさえくっつけている。硝子の水槽にはとてもはいりっこがない。脊骨は太くて温かい血がたぎっている。浄瑠璃をきいて涙をこぼすあたり、可愛いいところがないでもない。腸からは竜涎香が採取できるというのだからたいしたものである。秋の好日、〈電通〉という池の中でのんきそうに游泳しているが、ときどき塩水を高く噴き上げてはおもいを海原に通わせている。

### あたたかい

天野美津子

はじめて例会でお目にかかった時、〃おや、荒木さんのご親戚かしら〃と思ったほど、ボリュームといい、頭の形といい、笑い方まで、大鋸さんと荒木さんとはよく似ている。似ているということは偶然の一致だが、性格もどこか共通なところがあるのではないかと想像したりする。つやのいい広い額と、少し後退して無雑作な、くせのある髪は知的な魅力だ。人様の容貌をかれこれいうのは失れいだとは思うが、四十才をすぎたら、人間は自分の容貌にも責任があるそうだから、許していただくことにする。

豪放かと思えばデリケートで無雑作そうにみえて緻密で、こわい人かと思うとやさしさが覗くので、本性を摑む隙がない。隙がないというと、大へん冷い人のように聞えるが、人間味があってあたたかい。何もかも知っているくせに、時々とぼけたような顔をしてみせる、ユーモラスなあまのじゃくの一面もある。新聞人であって実業家的で大学教授のようにも見える百面相は、行動半径の大きさからくるのだろう。あらゆる立場を理解し、客観視することができる生れついての批評家というべきなのだろうか。

いつぞや冗談まぎれに、マフラーを交換したことがあったが遂にお返しする時機を失って、そのまま私のものになってしまった。私はいまも愛用させてもらっているが、私のうすい貧弱なマフラーは、恐らく風呂敷にもならなかっただろうと、すまない気がしている。大鋸さんのは上等であたたかい。

みもみの行列なんかは、用紙が備えつけられるようになったからだけでなく、後を絶っている。それでいて劇場経営者側の観念は、やはり四十年前と同一なのだから驚きというほかはない。

元来、劇場経営は文化事業のひとつと申すべきであろう。いくら商業ベースを確保せねばならぬからとて、文化をしやぶって、しやぶりつくそうとの態度を露骨に出されたのではたまらない。そうしたおション女性を犠牲にして巨億の富を貯え、文化勲章までせしめておきながら、例えば文楽人形浄るりの、企業としてのうまみがうせると、古典芸能は国家が保護育成すべきであるとばかり、おっぽり出す精神には、がまんがならない。

ついでだが、和田　久氏は、演劇入場税低減を叫ぶ文化人の戦いについては、袋叩きを覚悟のうえで批判的である。女性を便所で苦しめ続けている演劇企業家たちを便乗させていることへの反省がなされていないからだ。手前勝手に大劇場をつくり、いれもの維持の経済ベースから高料金を決めている劇場の利益まで、なぜ大衆が護らねばならないのであろう。松竹系といわず東宝系といわず商業劇場の現実を考えてごらんなさい。初日と三日目と中日すぎとでは、まるで違った舞台となるときだってある。番付に記載された場が平然とカットされ、配役が変わっており、ときには主要な役者の休演を通告もしないですませている。最良の状態におかれた舞台生産が真面目に考えられていると申せるかしら。これが一般商品だったら、どうなるだろう。牛罐の中味がくじらだったと雄叫びした文化人が演劇に限って、妙に同情的で、大資本に唯々諾々なのが不思議でならない。入場料というものが、観客に提供する芝居の生産費によって決定され、その支払いにあたって厳しい吟味がなされることなく、劇場経営を賄ったうえ利潤をふくめた数字をはじき出して請求される方式に無関心なのは、どうも平常と思えない。和田　久氏としては、稽古をろくにさせず、セリフもうろ覚えの役者を舞台に狩り出しておき、観客の鑑賞に支障があろうが、なかろうが入場料さえいただければ結構ときめこんでいる劇場には、特に高率の入場税を課すことによって、消極的な入場制限を誘導し猛省を促す措置を提案したい心境である。収容人員数と女性便所との比率を基準とするのも妙案だ。とさえ思いつめている。入場税を、公演が良心的に行なわれていることを条件に減率するというのならば、論なく双手をあげて共鳴したいのだが、それにしても、〃良心的〃の判定で一悶着あるにちがないお国がらを思うと安心ならなくなる。

いずれにしても、えらい政治家が、かりそめにも男子便所にはいった女性をあげつらったばかりに、文化日本の恥部が、かくも複雑な要素で、おしつつまれていることが明らかになるのだからたいへんだ。〃住みにくい国日本〃と和田　久氏は天を仰いで嘆くのであった。

いまさら　らしく、かような怒りを暴発させたのは、団十郎公演をきっかけに、劇場が繁栄してきたのを、いかにも劇場の努力のように唱えて、も早や不振はぬぐいさられたかの如く、のほほんとおさまりかえっているからである。度しがたいのは、女性便所を忘れてはばからぬ今申した人々だ。重ねて天を仰いで嘆くとしよう。



## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野　忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺二八五六
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町
山前実治　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

## 編集後記

拓く土地はない。痩せ土をいかに変質させるかにひっかかっている。大地に落葉を待っているだけで解決をみない。土も草も黄いろにみえる。空も太陽もぼけて失調。

舌にのせた土の辛さ。酸っぱさ。熱情を汗とともにたぎらせるのだが塩っ気はとぼしくなるばかりだ。敗けたことにけろりとするのはいっこくもはやい恢復方法。ひとりの人間にたちかえることのせめてもの栄養摂取法。

すぎさった日痩せ馬を崖にひきずりおとし殺し埋めた土地を開墾していると白骨がガラガラ。身につまされてもいられない。ふかい穴を掘り、かたつける気魄。やすものの善意をつみかさねるサイノカワラ。蛆虫どもの悪霊の執念。ふきとばされるのは生木の燃え殻。水気おおい葉っぱの火の粉。おめでたい詩を書いているやつ。そいつをおのれにおきかえるおろかもの。火をたきつけると白骨はもえきって肥やしになるので重宝。

骨を掘る。（山前）


山前実治詩集
# 岩
佐野猛夫装画
A6判美本80頁
定価三〇〇円
送料三〇円

あたらしいとか　ふるいとか　まずいとか次元にこだわらず　素朴にリアルに行動生活と詩精神を平行してきた趣きのある詩作品。昭和十年より二十六年にいたるあいだの作品のなかから自選した三十一篇を収めた。第二詩集「花」ののこり全部である。

著者の作風の一端については、昭和三十四年九月四日朝日新聞が「水切れよく出来た土びんのスマートさめいた山前実治氏が心にのこる」と評している。

発行所　文童社
京都市東山区南梅屋町二〇六

杉本長夫詩集
# 呪文
佳品32篇　A5美装
価二五〇円　文童社刊

荒木二三詩集
# 短調
珠玉27篇　B6美装
価二五〇円　文童社刊

# 骨

22

# 骨 22 目次


| | | |
|---|---|---|
| 佐野猛夫の Profile | 同　人 | 4 |
| 燈　台 | 天野美津子 | 6 |
| 音楽を聞く老人 | 天野　忠 | 9 |
| 俗 | 井上多喜三郎 | 14 |
| わたしは黙祷 | 山前実治 | 17 |
| 詩人―染人―学人 | 深瀬基寛 | 12 |
| ぎおん阿呆陀羅経 | 依田義賢 | 18 |
| 表紙 | 大鋸時生 | |
| カット | 佐野猛夫 | |
| 同人消息 | | |



同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
田中克己　東京都武蔵郎市吉祥寺二八五六
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町
山前実治　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三



骨 22 号　定価 80

昭和三十八年十二月一日発行

編集者　山前実治

発行者　依田義賢

発行所　骨発行所

京都市左京区下鴨泉川町五三

電話（78）〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います

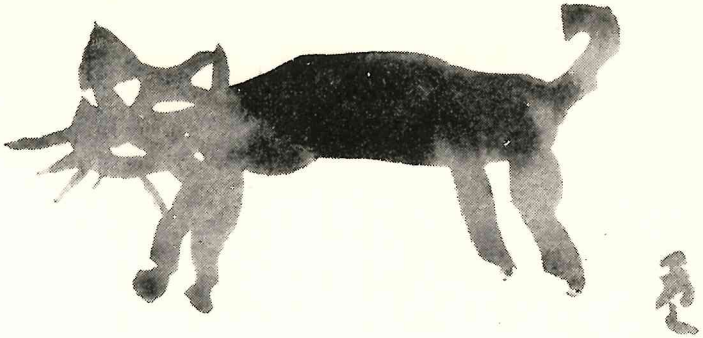
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛

電話㉒四三八二

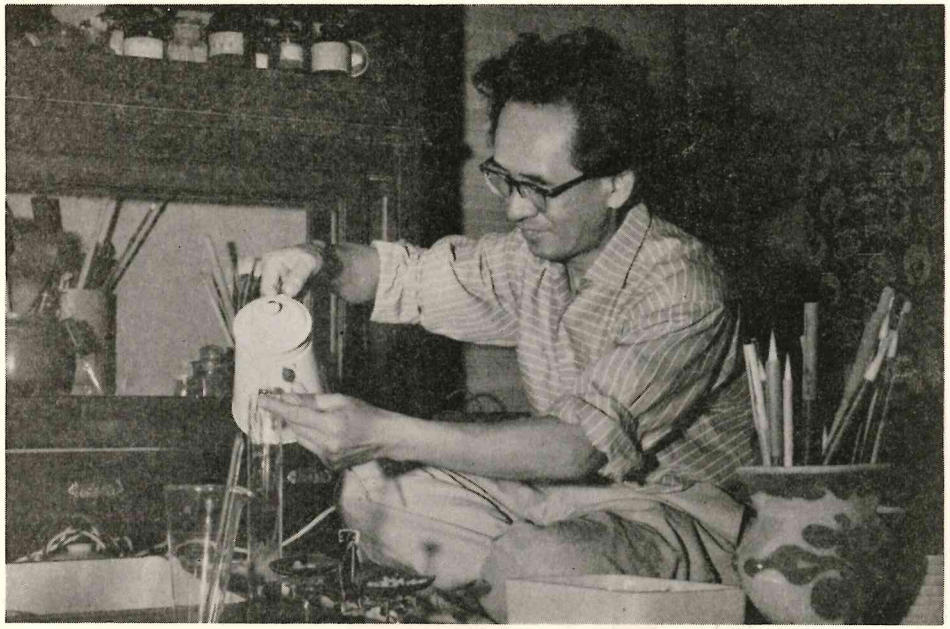

22

# 骨

No. 22



1963・8



同人の顔　佐野猛夫　撮影 依田義賢

## 佐野君の Profile

### すまないでいる

依田　義賢

佐野君の作品を見ると、どうして、ろうけつ染で、こんな深いデリケートな表現が出来るのかと、感心する。彼の作品は大変詩的である。憂愁な詩である。彼は夜の世界にとじ込もることが好きだ。夜の中で、ムリムリと眠れずにいる。白い神経がある。おそらく、彼は太陽の光がこわいのであろう。太陽の街には味気ないがさがさした混雑のあるのが、たまらなく厭なのかも知れない。わたしは、太陽の街に待ちかまえていて、彼が戸口から少しでも、身を出したら、すかさずつかんで、ひきずり出したい衝動を覚える。彼は、だが、用心深く、戸口から眼鏡をきらめかして、のぞくだけで、人の姿を見かけると、厭な顔をして、猫のようにひっこんでしまう。わたしはだんだん、彼を太陽の街へひき出したくて仕方がなくなった。「余計なことを考えるなよ」と彼は迷惑そうに、顔をそむけて笑うだろう。

松羽目を使った、応接間を建てようと企てたところ、単純なきびしいものが仕上って、満足していた。たまたま、出入りをしている人が、とにかく置いてみてくれと、鉄製の衝立を持ち込んで来た。菱形のガラスを連珠にしたすだれがついている豪華なものだが、単純な応接間には、どうも合わない。然し、こういうものがあった方がいいのかどうか、わからなくて、佐野君のところへ、電話をして、実は、かようしかじかと訴えて、見てくれませんかと頼んだところ、忙しいところ、これから見に行ってやると、気軽に云ってくれて、喜んで待っていた。佐野君はやって来ると、応接間を見渡してから、椅子に座り「これかァ」といって、へへへと笑う。佐野君のこの笑いに、出くわすと、心臓のあたりがはづかしさに縮んでしまった。「こんなもんを置くなら、君を軽蔑するな」という「だから、置くのやないのや」わたしはいうのだが、彼は、わたしが気に入っていると思い込んだように「これはいかんよ、この応接間が泣くよ」というので、弱った。佐野君はその衝立の作者も、それが昔の展覧会に出品されたものであることもすぐ知って、その出来栄えについてたづねてもあまり云いたくない顔で、ただ、にやにや笑っていた。その衝立は間もなく、引きとってもらった。何か災難から逃れたように、救われた気持でいると、幾日かして、ひょっこり佐野君がたづねて来てくれて、「気になってなァ、ちょっと来たんや」と、入って「ああ、これでええがな、すっきりしたがな」と、佐野君も、ほっとしたような顔であった。「何も置かん方がええよ」というのへ、僕が、佐野君の作品をはめたような衝立みたいなものはどうやろうと、きくと、「もしおくのやったら」と佐野君は、紙片に図柄を引いてみて「陶器のこんなものが出来たら」と、額の連結したようなものを描いたりしていたが、改めて、応接間の中を見まわして、「ここには何もおけんなァ」といった。それから今日まで、遂に、佐野君の教示によって、何も置かないでいるが、日がたつほど、彼の云った言葉のきびしさがわかって行った。

その時、わたしが佐野君の作



をほしいと申出た。お金をとってもらうつもりで、無躾に云ったのだが、「そんなもんいらん。祝いに何か持ってくるよ」というので、弱った。しつこくいえば怒りそうな様子だし、仕方なく厚意をうけていると、間もなく、「鶏卵と羽毛の図」を、奥さんが届けて下さった。煮抜きの卵を切った断面を右下において、それからとび立つようにならんでいる羽毛は、まるで、秋の夕陽を配したうろこ雲の出ている空のようで、一見して、ほろっと涙ぐむような、すばらしい作品であった。数カ月後に、また変りのマスカットの図を届けられた。電話でお礼をいって、また、譲っていただくにはどうすればと、値づけも、無礼で云いかねていると、「おいといてくれたらええのや」と、いうばかりである。わたしは、いまだに、すまなくて、嬉しい負担に苦しんでいる。

### 友情小鼓

井上喜多三郎

佐野やんとのはじめての出会いは、≪バクの会≫で催された依田義賢君の詩集（ろーま）の出版記念会であった。感想をのべた私のことを、「づけづけものを云うけったいなおやじだ」とおもったそうである。その一言居士の、たたりということにもなるのだが。二、三年前高島屋で、小合、稲垣、佐野三家の展覧会が催された。小合さんの蠟や稲垣さんの型に対して、佐野やんはデッサンを竝べておいた。それは会場のバラェティを計算しての、出品でもあるようだが、「デッサンなんかつまらないぞ、君の本命は蠟でしかない、まともに勝負すべきだ」といったものだ。サネハル曰く「佐野君がおこっとるぞ」。そんな佐野やんではない筈だ。佐野やんの感覚はとてもするどいが、すぐ刃こぼれなんかしてしまう、けちな安全かみそりではない。巨木にいどんで、木樵がうちおろす、あのボリュームのある鉈なのだ。

絵のすきな私は、ひまをみつけては色紙におもちゃ絵をかいている。郷土玩具ばかりでは能がないので、武者小路先生のむこうを張るというわけではないのだが、かぼちやゆうりりんごと、取組むことにした。いつか出来たての数枚を持参して、佐野やんにみてもらった。どうもうまく色がでなくて、われながら不出来だとはおもっていたのだが、「この玉ねぎには水気がない」と手きびしくやっつけられた。「玉ねぎに水気があったらくさってしまうぞ」とまぜかへしてはみたものの、生気のないしなびた玉ねぎでは、長屋のおくまばあさんも、みむきはしないだろう。めがしらがいたくなり、涙がポロポロこぼれるような絵でありたい。佐野やんの一言居士も、私のそれと、通じるものがある。

### 潔癖の人

山前　実治

たいへん親しみ易いのに、どこかこわいのは、取組んだ仕事に潔癖だからだ。≪骨≫の仲間はひと癖もふた癖もある連中ばかりだ。佐野兄は印象的にはしごくおだやかで、僕は根が単純で、親しさに甘えてしまい、忙がしい人だとは知りつつ、拙著詩集≪花≫≪岩≫の装画の頼みを口にしてしまった。またとない友を得て、僕の貧しい作品をふかく厚みのあるものに飾ってくれた。ただありがとう、ありがとうと肝に銘じている。詩は書かないが、詩精神にきびしい人で、美大の教授だったことも多喜さんから聞いて知った。

〈夜明けは間近いが
わたしは朝を知らない
わたしの知っているのは
夜だけ
ものの生れる時を知らない

わたしの朝は夜のつづき
使いついえ失われてゆく時だけ
ああ、朝がほしい

なんまいだ　札はなんまいだ
とかくこの世は金の縁
金の切れ目が縁のきれめよ
金のあるうちゃ
ちやほやと
大尽さまとたてまつり
払いがわるけりゃ
塩まかれ
二度とこされぬお茶屋の敷居
伊左衛門あのむかしから
金を運んだ奴のまけ
けれどもこっちゃは商売で
せんど遊んであげたやないか
もっともだ
もっともだ
遊んだ金が惜しいなら
お茶屋なんぞへ来ぬがよい

〈とはいうものの
金と義理とにしばられて
人間らしさを奪われて
肌をゆるして添え寝する

わたしはそれが口惜しい
人間さまをそまつにする
そんなおなごも悲しいが
人をとじこめ思うさま
あやつるものに腹がたつ
せめておまえの恋の意地
たてておくれよ見せてくれ
正直いちづのかたらいが
どこにあるのや人間の
命をもやしあうような
はげしい恋はどこにある
かけ引き　そらごと　だまし合い
うそつく奴のお腹をさいて
はらわたとり出し
輝いた　太陽の下へ
出しちゃろか

〈ああ、
わたしは行きたい坂の上
真赤な日の出の太陽が
わくわく輝く坂の上
わたしは新しい雲のよに
はじらいおののき
風といっしょに朝のうた
声もさやかにうたいあぐ
幼い時に知っている

朝の坂
そうでなければ雪の道
暗い夜から降ってくる
しろいしろいしろい雪
あとからあとから降ってくる
しろい雪に包まれて
まっしろしろの積んでいる
雪の峠をのぼりたい

さて　なんまいだ　なんまいだ
なんまいだ　なんまいだ



## 同人消息

**荒木利夫**　組合の仕事が忙がしいのは事実のようである。中共への貿易問題もからんでいて、大阪にいる舌の彼が、東京で、おでんやの屋台へ首をつっこんでいたりする。近頃堂々の貫禄がそなわり、いわゆる重役タイプの一級品となった。どかんと椅子に腰かけては、詩というものは産まれないようである。

**天野　忠**　長男は米国に留学中であり、次男は高知大に在学。おつむがてかてかはげてきたのもむりからぬところである。奈良（女子大図書館）への電車通勤の日々であり詩の虫にもかわりがない。最近第一芸文社の「花の詩集」を編纂した。

**天野美津子**　八月末には能登半島から飛騨白川郷へと旅行をした。長女は関大、長男は洛北高校生。険しい人生を女手一つでよくもここまでたどりついたものだ。近作をまとめて詩集「零のうた」を発行する。

**井上多喜三郎**　老来（本人はまだ三十五だとはいっているが）雑用が多く、落ちついて詩と取組めないとこぼしている。信楽を中心とした古茶壺を集めて得意になっている。

**梅棹忠夫**　京都大学アフリカ学術調査隊の隊員として、東アフリカ、タンガニーカへ六月出発した。主に遊牧民に関する人類学的研究をして来年三月に帰国の予定である。

**大鋸時生**　演劇批評で活躍、ゆるがない信念をもっているのはたのしい。〈骨〉の例会には、必ずでかけてくる。

**桜井武雄**　彼がつくるお玉杓子の変化はむつかしいとの評判であるが、それだけにユニイクな存在で、京都音大の先生である。

**佐々木邦彦**　「詩か絵か」と同人がやかましかったわけでもなかろうが、このところ画業に専念している。今秋は東京へ進出、大丸で近作展を開催した。

**佐藤辰三**　おそろしいカメラの目である。便利堂三十年在勤でたたきあげた執念である。

**佐野猛夫**　蠟染のモデルをながらくつとめていたドラ猫が老死したので、その命日には奥さんがかかさずに、お寺詣りをしている。さのやんは美大教授で多忙を極めている。

**田中克己**　詩はやめたといっているが、なにかだまされているような気がせぬでもない。田中君は日本詩壇の正統者である。

**富岡益五郎**　国立京都博物館の副館長といういかめしい肩書をもっている。夫人との間に子種がなく、大きな雑犬を飼っている。盲目の老犬なのだ。

**西山英雄**　スペインを中心にシシリー、クレタ、イリザなど地中海諸島を順遊してきたのだが、どんな画材をひっさげてかえったのかたのしみである。

**深瀬基寛**　京大病院に一年半、自宅に帰って療養生活中である。畳の上での気分は格別の由である。枕頭に並べた丹波の徳利や仙崖の大黒さんと話すのが日課である。ときどきジャーナリストがやってきて、エッセイなどをひきさらってゆく。

**町田トシコ**　昨年アメリカ旅行から帰ってからは、本山（西本願寺）特派の説教にかけまわっている。口八丁のとても元気なおばあさん（といってはおこられそうだが）である。

**八尋不二**　大映の大物映画のシナリオととりくむのはいつもこの温厚な不二さんだ。篤実な風貌は、つねにうちがわから放射していて詩を書かない肌ざわりのいい詩人だ。

**山前実治**　痩身の陣頭指揮はいまにはじまったことではないのだが、よくも体力がつづくことと感心している。腸がわるいといいながらもバイクをのりまわしている。高売と詩とは割りきっているとはいっているが友人に詩集の出版をたのまれては、赤字をだしたりしている。夏以来からだのこわれを医者がよいでつくろい中である。

**依田義賢**　「悪名」は大もてで、東光和尚の原作はとっくにネタぎれの盛況であった。テレビやラジオの注文にめをまわしながら文化運動にも活躍多忙である。（I）

# 骨

23

## 目次


天野忠詩集
しずかな人しずかな部分批評抄　4
白い花　他二篇　安藤真澄　7
忠君の Profile　同人　10
彷徨のはて　杉本長夫　15
桃の花　他一篇　天野忠　16
病室で　他一篇　天野美津子　17
病院で　他二篇　山前実治　19
活　他二篇　井上多喜三郎　20
天野美津子詩集　零のうた批評抄　22
表紙　富岡益五郎
カット　佐野猛夫


同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町一六
天野忠　京都市左京区下鴨北園町一の九三
天野美津子　京都市左京区高野清水町五
安藤真澄　京都市中京区御前通丸太町下ル
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐野猛夫　京都市左京区下鴨中川原町
佐藤辰三　京都市左京区下鴨西梅木町一九
杉本長夫　彦根市丸ノ木町三六
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺二八五六
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
八町尋不二　京都市東山区妙法院前側町
田トシコ　京都市左京区下鴨神殿町
山前実治　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

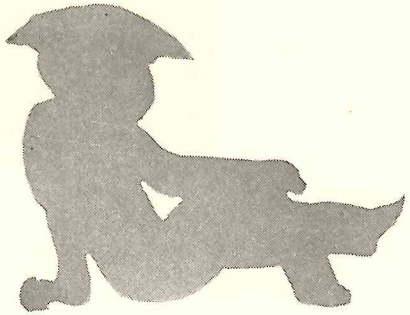

骨　23号　¥100
昭和三十九年十月一日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方
〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㉒四三八二


# 骨

23

# 骨

No. 22



1964・10

同人の顔　天野　忠　撮影　依田　義

## 天野　忠詩集
## しずかな人しずかな部分
—批評抄—
諸　家

＊　三好豊一郎

御詩集ありがたく拝見いたしました。いつもながら軽妙で省略の利いた作品に接し感銘いたしております。現代詩刻下の流行は長たらしくヒネクれておるので（小生もその限りですが）貴兄の作品からみると要領を得ないものが多く、新しい行ワケ散文にみえます。小生昨夏から妻記に入院していますが、春には退院できる見込でおります。ますます御健筆をお祈り申上げます。

＊　藤原　定

貴詩集ありがたく拝受しました。実りのない方向へ知的懐疑的に走ろうとする（私をも含めて云うのですが）中にあって、生の虚しさを噛みしめながら、些末なものの中にある永遠といったものを感じさせ、また深く人間的な温かさを感じさせてくれました。あつく御礼申しあげます。何卒御身御大切にまた時折りこういう詩集の恵みを与えて下さいますように願います。

＊　天野　隆一

貴詩集「しずかな人しずかな部分」山前兄から受取りました。随分御精進で敬服しています。これは半歩前進で、なかなか興味深く、「しずかな人しずかな部分」の反対の面を片足づつ踏んまえて、作者は今後如何に延びるか、一人のオーソドックスな詩人の経路を立体的に見守りたいと思います。それに対する賞讃と危懼、少なくとも作者は今までのコスチュームをぬぎ、常着で歩き出しましたが、これはやはりその人の一部分ではありませんか。

＊　堀口　大学

御新著拝受、楽しく拝読いたしました。詩集はこのごろよく貰いますが、こうした楽しくもあり、分りもするものはごく稀れなので、特別によろこんでおります。略儀ながらひと筆おん礼まで。

＊　小高根二郎

暖冬の一日にご恵送いただいた貴集は、まさに春の前ぶれのやうに拝見いたしました。さつと一読「しずかな部分」の方が私の理解に近いやうに感じられました。こちらの方が旧作に属するのでせうか？詩を怠っている間に、すっかり遅れて了っているのかもしれません。それにしても後記のないのは残念でした。それがあれば、私のさうした健康診断ができるのでしたに……それは歯が抜けているような寂しさです。

＊　河野　仁昭

前略御著作拝読いたしました。しんみりさびしくさせられたり、一人でくつくつ笑ってしまって、家人に怪しまれたりいたしました。最近いくつかの小説と詩集を読みましたが、もっとも感銘深く拝読いたしました。簡単ながら一言お礼申し上げます。

＊　清水　高範

新年早々に大変立派な詩集を御恵与下さいまして深謝いたします。内容は、枯れていった表現の中に何ともいえないものを感じさせてくれます。幾つかの御作品は詩誌で拝読しておりますので、親しみも感じ熟読の妙味があります。そしてだんだんどうにもならぬもの人生の寂しさを差し出されるように思いますが、その事は単に寂しさとしてだけでなく、そこに一つのそしてどんな意味があるのか、も少し考えたいとも思います。さてこれから先、天野さんはどんな詩をお書きになるのでしょう。「しずかな部分」を読み終ったあとそういう感想も残ります。

＊　富士　正晴

詩集「しずかな人しずかな部分」ありがとう。あなたは実に不思議なお人で、詩が老年に近づくにつれてます ます良くなって来ます。普通につつましく暮らしていることがつもりつもつてツヤがにじみ出して来たという感じです。「日常の眺め」という詩の後半でわたしは思わずふき出してしまいましたが、こういうことはまことに珍らしい体験でした。お礼まで。健筆を祈るというよりは長寿を祈るといった方が適しいでしょう。

＊　堀内　幸枝

——巻頭の「しずかな人」何度でも読み返したい実にいい作品に存じます。その他の中にも、人生と生活の中の味を淡々と語って気張らなく肌に感じられる作品を多く発見しました。楽しく読まれる詩集と思います。

＊　黒田　三郎

正月に立派な御本をいただき、うれしく存じました。あなたの御作品にはいつも親近感を感じます。次々といい御本を出され、敬服にたえません。どうぞ今年もお元気で御活躍下さいますよう。

＊　鶴岡　冬一

詩集「しずかな人しずかな部分」多謝。悔恨と静ひつと無の世界！ますます深まる詩境を寿ぎます。

＊　足立　巻一

おん詩集、わたしのようなものにまでお恵みいただきお礼の申しようもございません。正月休みにゆっくりたっぷり味読させていただきました。人生の、老年の寂寥がずっしり心に重く残りました。そのうち何篇かは詩学などの雑誌で感銘した作品でございますが、詩集にまとまるとまた感銘を新らしくいたします。人生を深く重く沈めたお作風とひそかに敬服しておりました。わたしもことし満五二才になりましたが、いまなおテライを捨てきれず、素直なしずかな人になり切れぬのを深く恥じております。

＊　竹中　郁

いよいよ手に入った語りくち
清らかできもちよろしく
小生右手少々痛み　うかぬ日々です。

＊　武田　豊

大変立派な御詩集が、新年いち早く出版されておめでとう。御労作のかずかずいずれも星のようにかがよいて、重ねて感銘深く存じました。いずれもあなたの面目躍如たるものがあり、再び詩壇の反響を呼ぶに違いない「彼岸」「日常の眺め」など、ほんとうに読みあかぬほどに私の心をひいた、この庶民的は好だ。この出版記念会にはゆきたいと思う。しかし夜は眼がうとくて駄目だ、出来れば昼にねがいたいものだ……。

＊　安藤　一郎

新年三日の朝、お贈りの詩集「しずかな人しずかな部分」が届きました。作品の一つびとつ実に興味ふかくよみました。「しずかな人」「乞食」は傑作です。「季節」も面白く「村で—」「日常の眺め」「夫婦」「田舎」

など淡々としているようで、長い人生の歴史があり、こういう作品は容易に書けるものではないと思いました。詩のよみ初めに大変よい詩をよむことが出来たとうれしく存じました。あつく御礼申上げます……。

＊

**平木　二六**

玉詩集拝受いたしました。新春の机上ですぐに三読しましたが、あなたの静かな風格と姿勢に何時もながら惹かれました。なかでも「しずかな人」「何たる不覚」「夫婦」「日常の眺め」「すきま」などに非常に粋なあかぬけした日本の詩の美しさを感じます。「重たい手」をいただいたのは昨日のように思いましたが、月日のたつのは早いものですね。「重たい手」は当時小生もH賞にすいせんした事を思い出します。小生も多年病弱、非才を歎いていますが、ことしはどうやら久し振りで一冊の本が出せそうです。出たらすぐお送りしますから御笑覧下さい……。

＊

**大木　実**

先日は思いがけなく新詩集「しずかな人しずかな部分」をいただき有難く嬉しく拝受、ここ数日、毎夜とりだしては拝読いたしました。こんどの新詩集では、人生をすでに半ば過ぎた人の悲哀感と虚無感が透明な明るさにつつまれて結晶し、みごとだと思いました。なかでも「夫婦」は特に見事だと思いました。さりげなく巧みなく、しかも深い感銘を受けました。他では「何たる不覚」「彼岸」を私は愛読いたしました。又「みみず」は対象をみおとして背後の底しれぬものを感じさせてぶきみですし、「うなぎ」は大らかなおかしみを感じさせます。詩に永い年月をかけられた詩人の詩集を読んだ喜びを味わいました。それで角川版の文庫本の「詩人全集」からあなたの詩を改めて読み直したりいたしました。

＊

**伊藤　桂一**

――御作中「みみず」「好日」「何たる不覚」等、特に興深く拝見いたしました。いかにも詩らしく書くスタイルが嫌いで、何でもなく書かれていることに詩の本質があると思っていますので御作に共感を覚えたわけです。もっとも「村で―」のような、また別途な才質のあることを見のがしているはずはありません、この詩には豊かな可能性があると存じました。大へん感銘いたしました……。

＊

**引野　収**

――生と死の意味をこんなにしずかに考えている人のあることに感動しています。生きることのそつけないやるせなさ。五十歳という年輪の持つ実にしずかな老いの充実。私も今五十という年に奇妙な怖れとあこがれを抱いています。人生にこんなしずかな部分があつたのかと見忘れがちにしてきたみずからの歳月に今更のような愛惜をおぼえます。人生のこのありふれたぼんやりしたことども、あくびをしたりぼかんとしたりしているこの「生」のまことにしずかな部分の意味の重さに今胸搏たれる思いであります。歌の世界の伝統派おおよその身辺雑報歌と若い前衛亜流の華麗な空虚に心寒々しいものを感じさせられておりますだけに、人間不在の言葉の羅列には激しい憤りをさえおぼえます。詩才にめぐまれぬ私もせめて生涯をかけて「生の意味」の重たさと「熱い詩」としてこの国の古い定型一行詩で問い続けてゆきたいと希っております。そんな私にご大兄の詩集は誠に有難い心の鞭になりました。厚く熱く感謝いたします――。



# 白い花

**安藤　真澄**

野戦では兵士がシラミを可愛がった。
花子さんだとか、雪子さんだとか、
自分の恋人の名を附けて呼んでいた。
敗戦のあげく日本は娼婦と、シラミの国になった。
到る処に、シラミがハンランして、人は皆虚無の
　なかにいた。

そのシラミのなかで妻は死んだ。
竟識を失った妻は、何度も頭の方へ手をあげよう
　としたが、もうその気力はなかった。
妻の黒髪はシラミの巣であった。

家主の庭に、白い木蓮の花が咲き、
夜明けの薄くらがりのなかに、ひろがるその白い
　花は、妻の死体のように蠟たけて青白く光って
　いた。
くされた木株の中でうごめくみみずのように私は
　それを見視めていた。
あれから十八年
詩も酒も恋も月も、娼婦もシラミも、
過去のものは皆遠ざかった。

## 忠君の Profile

### 肉身譜とフスマ

荒木　利夫

私が大事にしている詩集のうちに天野忠氏の詩集がある。と書いても、忠さんの詩集は、私の書棚の、それほど大事でもない他家の詩集や雑書といっしょに並んでおり、とりだすと、天の埃りを窓辺ではたいたり、口で吹いたりしている。本に限って、蔵いこんだり、原形保存することが、大事にしているとは限らず、むしろ長い間のいつのまにか頁の下のすみの方に、かすかな汚れがうかんできたり、カバーの角がささくれてきたりしても、大事にしているといえるのが本であろう。

そういう数冊の忠さんの詩集の中でも、私が大事にしているのは、昭和九年十一月発行の詩集「肉身譜」である。それ以前の忠さんの詩集、昭和五年の「聖書の空間」（大沢孝、野殿啓介との合著）と昭和七年の「石と豹の傍にて」は私は持っていない。「肉身譜」は忠さんの二十三、四歳頃の作品と考えられるが、鋭く凝結した抒情、練磨されたスタイル、すでに見事な詩才を結晶している。

忠さんの戦後に出た詩集「小牧歌」「重たい手」「単純な生涯」「クラスト氏のいんきな唄」「しずかな人しずかな部分」と前記の「肉身譜」を通じて、その詩集の名づけ方はいかにも忠さんらしい。さりげない風でいて、実は考え考えて、凝って凝って、とどのつまりさりげない名を選び出して、何でもないような顔をしている。「クラスト氏のいんきな唄」におけるクラスト氏のフイクションは、凝り性の果のさりげないうまさで、小面憎いと思うひともあろうし、だまされているひともありそうだ。

大分前だが、一時、忠さんを僕らはにせ牧師と呼んだこともあった。そう呼ぶ気持には、何かにせ牧師的なものの匂ひがするので、そこから脱却してほしいというねがいがあったのだが、それは、僕らにそう思わせる忠さんの演出であったのかもしれない。或は忠さんの一番苦悩のときであったのでもあろう。もうその時期は過ぎた。

関西には天野忠のような詩の名手がおるが、又、富士正晴のような詩の名手もおる。富士君、野間君らが出しておられた同人誌「三人」の最終号（昭和十七年）も、私の大事にしている汚れた本だが、忠さんとその富士君が、戦後の世の中のほとんどが暮しにくかった頃、私の記憶ではほぼ時を同じうして、それぞれ別の出版屋さんの編輯をやっておられた。確かに二人とも良心と見識をもった編輯才能十分の人であると思っているが、同時にまた、私は思うのだが、そのまま営利出版業の編輯者をつづけなかったことを二人の幸いとしたい。

随分前だが、忠さんの家で、外国書籍のカバーで部屋のフスマを帖りたい、と忠さんは僕に話したことがある。長らく忠さんの家を訪れてもいないし、どうなっていることか。完成したかと聞いてもいないが、忘れがたい。長らく海外留学中の息子さんからの、たまの手紙を、忠さんは心の中のフスマに、ひそかに、そしらぬ顔で、たんねんにつぎつぎと帖っているのかもしれない。



### 忠さんのこと

安藤　真澄

天野忠ははげ上った額を光らせて不機嫌な、そして不愛想な顔で独り詩を書いている。天野忠に会ったのは何処かの出版社がつぶれて編集長の彼が失業―自分の蔵書など出して古本屋を初めた頃だった。この古本屋には田中克己や、本家勇、近隣にいた児玉実用やらがよく訪ねて来た。僕もその仲間でコルボウ詩話会が結成された、昭和二十四年頃だったと思う。古本屋に座っている彼は、シャガルの画に出てくる不愛想な男の顔に似ていた。一寸つき合い憎い、人嫌いなそれでいて人を刺すような皮肉をいう男で冷めたい感じがしたが、よく談じると親切な気のいい男であった。詩も人よりよく読み勉強もしていた。自分の詩には神経を使っていて自信と誇りを持っていたようである。奥さんは忠の文学活動に理解を持っていて、僕らが行くと忠とは反対にいつも愛想よくもてなしてくれた。

忠のニヒルな詩が漸く現実的な光を放ってきたのは、コルボウ詩話会に入ってからではなかろうか。風俗的な僕の詩に対して彼も小市民的な詩を書くことにめざめて来てから、詩もいちじるしい心境を示して来た。スタイルやテクニクも彼独自のものを書くようになり、しばしばH賞などの候補にあげられるようになり真に彼のために喜ばしい、併し彼は二十年ばかりの間に多くの詩集を刊行し、詩誌にもあちこちやつぎ早やに詩を出しているが。矢張り詩集は「単調な生涯」あたりが頂点ではないかと思う。彼は多く詩を発表することを誇りとしているようだが、僕はもっと自重することをすすめるのである。濃度の薄いアルコールを度々飲まされても、僕らは酔はなくなるばかりだから、ここらで焼酒のような強い酒を一発放して貰いたい、H賞などというようなものより、芸術院賞かノベール賞の候補になるような横巾の広いすばらしい詩を書いてもらいたい。

### ピアノ線の涼しさ

天野美津子

上品できやしゃで、シャープな天野忠さんと、野暮の見本のような丸太棒的私の、どのイメージを掴まえて、誰が、何時、ご夫婦と勘ちがいしたのか。住所がたまたま京都の左京区で、姓が同じで、男と女で、ふたりとも詩を書いているという一致からしいが、ほんとうはつい最近まで、大先輩である忠さんには、たまに顔を合せた折目礼する位で、親しくおしゃべりする機会はなかったのである。だから柔和そのものような忠さんの、辛辣な批評家の一面を知るまでには、少し年期を必要とした。実際忠さんの話しぶりは行届いてソツがなく、たといやっつけられても、やっつけられたことに満足のホホエミをもらさずには居られないというような、手のこんだ仕掛けがあり、ユーモアたっぷりに洗練されている。ところが私はというと、そのソツのなさや、洒脱さには全く弱くて、静かで気の弱そうな忠さんに、気の強そうな私が内心畏れをいだくのはそのためである。それは最も、教養や実力のちがいからくる冷厳な現実の然らしめるところであるが、いわくいいがたくもたもたしているところを、スラリ適確にいってのけて、涼しい顔をしていられるのをみると、私は自分のオーバーな恰好が、針の力につつかれて油汗を流している清水坂のあの鬼みたいに思えて、実

にみじめになる。忠さんはみかけの細いやさしそうな、しかも硬度の高いピアノ線を何処かにかくしているのだ。キイひとつ叩いて、相手の感動の全音程をなり響かせる術をもっている人なのだと思う。誰かがいつか、忠さんのことを「骨」で一番小面憎い奴といったことがあるのを思い出して噴き出した。こんな風に書くと、忠さんは、大変人の悪い冷い人のように聞えるが、いつかみんなで河ブラをした時、「みみっちい、いやらしいといいよるけど、生活の事書かな、他に何書くことがあるね」とぽつんと呟くようにいわれた言葉を、私は今も忘れられない。私はその時、忠さんの中に傷つきやすい、誠実な生活者をみたと思った。私も同感である。私は間違っただろうか。最後に、もし忠さんと私とに似ている点がありとすれば、それはアルコールに弱く、みんなで中華料理のテーブルを囲んでいるとき、アルコールの代りに咽喉をうるおすものとして、ワンタンがすすりたくなることである。

## いけず

依田　義賢

京都弁でいけずというのがある。広辞苑によれば、いけずは、いかずであり、いけず者は、わるもの、ならずもの、不良ということである。ところが京都では、多く婦女子が使う。例えば、ある女性が、真顔になって、なにか一説を述べている。たいてい、それは、彼女の得意な考えである。すると、それを、悪しざまにいうのでなく、からかったり、茶かしたりすると、彼女は、「いけず」と、叫ぶ。こういう場合、その揶揄がいかにも、彼女の説の欠陥をついて、うがち得て、論説者たる彼女が、まさに、二の句がつげないというような強いのから、彼女の論説にパラドシカルなパラフエーズをさし込む才蔵役のような役目をする軽いものまである。それはともかくとして、婦女子（軽蔑していうのでなく、女性的という意味の）の感性が指摘するところの、ある状況であるところに特徴がある。昔はならずもの、不良の意であったのが、意味をかえて、虚をついてくる、疑瞞をあばく、ほどよくあしらいはしないという風なもの、毒舌屋、むくつけきものなどをいうようである。

さて、われわれ（京都人の一人として）は、いけずというのを次のような性質に解していっている。いけずは、意地悪に属するが、いじ悪のように、どす黒く、うらみ深く、肉体的でないもの。いじ悪のように、本能的、低次元的精神でないもので、いけずは相当の教養と洗練された趣好を経ていて、常ならぬ精神であると思う。その精神はだから繊細で鋭い。相手を鑿すほどな力を持っているが、いじ悪のように、鈍器で多量に打撃を加えるようなことなく、また、ねちねちと長時間、相手を責めさいなむ風なものを持っていない。極めて軽妙で、しんらつで、鋭く微妙に、相手の致命点を刺す。然しながら、いけずは本来、いぢ悪のように、積極的な憎悪に燃えた攻撃的精神でなく、本来、その欠点を曝く批判的な精神である。ただ、その批判は、壮調壮大な大演説のような形のものではない。そういうやり方がはづかしくていられないたちである。口辺に、にやりと皮肉な笑をたたえて、大たい、低い声でいうものである。敢えてするということもないのである。

以上の点から見ると、いけずの精神は、日本歴史などに見られる公卿とか御殿女中などによく見られる精神で、高雅な生活の中に行なわれる、しようもないのから非常に悪らつなものまである精神である。つまり、貴族的である。外面、大変、柔和であるが、内面は複雑で深い。総体に、庶民的な地を這うような意味での、或は、大衆的（普遍の）健康さをもたず、孤独で、厭世的で、不健康で、死を讃美するような点があり、人の幸を快く思わず、人の愁いを喜ぶ、悪魔的な本質の、その蒼白い、神経となっている。

天野忠は、二十世紀のいけずの老人である。



## 忠君素描

井上多喜三郎

彼はいつも古色蒼然とした洋服を着ている。これは親爺ゆづりの、それが自慢のイギリス製だ。こんどの写真も、てっきり「クラスト氏」だとおもっていたのだが、あにはからんや糊のきいた浴衣を、袴のように着ているのには驚いてしまった。両手を膝の上に置き、口をへの字に結んで、「子曰く」といういでたちである。少々目尻は下っているが、彼に関する限り、女性とのうわさ話はきかない。ひたいの禿工合もよろしく、このごろとみに色艶を増してきた。詩も又老練、そのレトリックたるや定評があるが、近時構成がドラマ風になっている。そのおもしろさこそ、彼の身上ともいえるのだが、それにしても気取った洋服や袴なんか、かなぐり捨ててほしいものだ。

## 不思議なラシヨナリスト

杉本　長夫

便りなどを書く場合でもそうだが、気楽にペンのとれる相手とそうでない人とがある。人について語る場合も同じことで、忠さんなどはざつくばらんにものの云えるほうで、畢竟それもその人柄によるものであろうか。

忠さんも私も明治四十二年生れの酉であるが、性格はまるで違うようだ。その話のふしぶしから窺える思慮深い几帳面な処生振りには感服もし、いつも我身の反省の資としている次第。自堕落で、無計画で、感情的な私には、彼の合理精神はまことにまぶしいほどのものである。貫録の点でも、頭の禿具合からみて、彼の方に歩がある。只共通な点と云えば、二人とも腎臓病に苦しんだ経験を持つことぐらいであろう。忠さんはその心がけの良さで完全にもとの体となり、私は永年の不養生のせいか、いまだに膠着状態にある。

先日、日本現代詩人会の役員諸氏が西下されたとき、関西の会員達と南禅寺の壺庵で会合があったのだが、忠さんは私の傍でなにくれとなく口に入れるものについて注意して下さったがその親切には身にしみるものがあった。

彼の詩には、例えば『ニューヨーカー』に現われる詩とどこか共通するものがある。彼の詩を英訳してここに出せば、『ニューヨーカー』の読者にはきつと受けるにちがいない。と云うのは、日本人には珍らしい軽妙洒脱な機智があるからだ。しかし一面隠花植物的な感じがあり、低い処でくちぶえを吹いているところは、やはり東洋的でもある。最近の詩集『しずかな人しずかな部分』におさめられている「村」などは、彼としてはめずらしく衝撃的な作品だが、彼、持前の転換法で、吾々を恐ろしい緊張から救ってくれる。彼には彼の計算があってどんな詩でもその効果をのがすこ

とはない。まことに、才筆自在、端倪すべからざる詩人、それが天野忠である。

## 親愛の交遊小記

山前　実治

忠さんとは、昭和十年の春、北川桃雄氏を主宰格として、同人誌「リアル」が創刊号を出したときからの、ともに同人であったのが、友人としてのきっかけであった。「リアル」第二巻第三号(昭和11年12月発行)に北川桃雄氏が随筆を書いているが、モデルは貧しかったぼくだ。

「用があって下鴨のY君の所を訪ねると、二階借りをしている同君は、仕事の最中だったので、其のままでと云ったが、一服という形で一休みし出した。部屋のどこかで小鳥の啼くような声がする。それを云うと、縁日で五羽十銭で買ってきたヒヨコで、仕事に疲れたら一緒に遊ぶのだという。みかん箱から出されたヒヨッコは西日の射す古畳の上で、砂を掻き分ける格好をしたり、走り廻ったりしていた。幸い山は見えるし、何か田舎を想うものがないと、と彼は云った。前の甍の間に、比叡が夕映えているのであった」

忠さんが、眼光のするどい北川氏の描いてくれた、そのころの、ぼくの部屋に、たった一度きりとつぜん訪ねてくれた。いかにも都会風な瀟洒な背広服姿が、ぼくの網膜にやきついている。神経質な気質の詩人らしい当時の詩人で、田舎者まるだしの野人であるぼくとは、たいへんに対照的で、すくなからずどぎまぎしてしまった。ひび破れのはいった、ふちのかけた茶呑茶碗についですすめた番茶を、口につけなかった、貴族的な潔癖さが、庶民であったぼくにはつよい印象としてのこってしまったことだ。

親密の度を倍加したのは、なんといっても、昭和二十四年初夏、京都在住の詩人を結集して「コルポウ詩話会」が発足し、高売柄ぼくが世話役をやり、会の所在地を忠さん宅としたことと、そのころ、忠さんが古本屋を経営していたことが、気楽に頻繁に訪ねたり、訪ねられたりするようになってからのようだ。昭和二十二年の冬飛騨白川郷上流で開墾生活をやっていたとき、ぼくは苦労して京都へ住む家をさがしに出て来たついでに、六角通堺町の辺の出版社に勤めていた忠さんを、リュックを背負って乗馬用ズボンの労働者の山着姿のままで訪ねたことがあった。そのときの忠さんの最大の親愛さで、近くの喫茶店イノダで、ぼくの好きなコーヒーを飲ませてくれた。戦中から七、八年ぶりで、しかも山の生活のさかなに飲んだあのうまかった味をわすれることはできない。

京都の詩人に天野隆一、天野美津子と天野姓が三人いて、ともにみんな親しい間柄の連中ばかりで、一緒に会うことはしきりにある。便宜上、親しいがゆえになんの遠慮もないままに、いつのまにか、隆一さん、美っちゃん、忠さんと呼ぶようになってしまっている。ほんとうは忠(ただし)なのだ。まことにあまのじゃくらしく、忠(ちゆう)さんと云う。どうやらこれは、ぼくがいいはじめたようで気がとがめる。が、ご本人も、むかしの貴族的風貌を喪失して、結構小市民的とやらに、ぴったりして、こずらにくい言葉を流麗におっしゃったりできる、大人ともなったので、いっこうおかまいなしなのが、なによりだ。「しんどい、しんどい」としんきくさく云っていながら、忠さんは、だんだんと健康をとりもどしてゆくようだ。うれしい。



# 彷徨のはて

杉本長夫

旅に出て
見知らぬ町の
森閑とした通りを歩いた
そこは行き詰りになっていて
古びた洋館が立ちはだかった。

表札には
わたしと同じ姓がでていて
入口のいまどき珍らしいノッカーが
注意をひいた

それはむかしわたしが
ある因縁で手に入れて
大切にしていたものと
寸分違わぬしろものだった
おもわずそれに手を触れると
待ちかまえたように扉があいて
顔を出したのはまぎれもない
死んだはずのわたしのおとうと
「おまえ　こんな処にいたのか」と
みとがけるように上りこんだ。

それから幾日過ぎたであろうか
ある日ふと二人して釣に出かけた
夕方　おとうとの釣場にいくと
釣竿だけが河原にのこり
えさの赤蛆が散らばっていた。

# 天野美津子詩集
# 零のうた
## ―批評抄―
諸家

＊

**安藤　真澄**

現代詩への色々の実験へのこころみも漸く終って――それは無駄な道でもなかったかも知れないが、今それらの詩が美しく昇華して、詩集「零のうた」となったことを心から祝福いたしましょう。

＊

**安藤　一郎**

現実と人間性に対する批判を錯覚とか空想で示した、かっきりとした作品が少なくないと思いました。「退屈」などには気味悪い想念があって、思わずハッとしました、詩劇「颱風のくる夜」にも、それがあります。粘り強い創作力に敬意を表します。

＊

**足立　巻一**

文明を底の方から告発する憎しみが、嘆きのうたや絶望の詠嘆に堕落していないのに、まず感銘しました。もちろんわたしのことを反省して。純粋な怒り、たじろがぬ強さをみごとだと思いました。一方、〝鴨〟もおもしろく思いました。いま年末でバタバタあわただしくくらしています。正月になってゆっくり読みかえすつもりですが、かえって、あわただしい生活のなかで、お詩集は強い印象を与えたのかもしれません。ただ著者について生年が書いてないのはどうしてですか？　やはり天野さんも……これはチトかんぐりかも知れません。

＊

**天野　隆一**

いつも立派な本を出されるので感心して居ります。前半読了しましたが、一寸女性の作品と思えない気がしました。いづれ全巻読了してから考えてみます。

＊

**荒木　二三**

大変特徴のある詩集だと思いました。「生きるということはどういうことなのか。その確証をつかみたい」という後記の言葉が一応あてはまるようですけれど、よく見るとその確証への希望をそのまま作品にあらわしている作者とは別のあなたが、もう一人おられるのではないかという気がしました。それ故この作品はやはり芸術の作法にかなったフィクションだと思いました。無論このことがこの詩集を軽くしているわけでは全くありません。フィクションでない文学作品なんてありえないのですから――作者は理性でこの人生を探求する――この人生の論理的意味の解明というのが全体のテーマだと思います。「考えていること、考えたこと、考えようとすること、考えたいこと」を憎まずにはいられない――理性に照らされて満足のゆくものが何一つないからです。結局死に落ちつくより仕方がない。「勤勉」「修羅」への傾向です。フィクションだというのは、そしてもう一人のあなたがおられるような気がするというのは、このような理性の絶望にも拘らず、あなたが生きておられるという事実なのです――恐らくは感性の酔いと泥の中に、忘却、心身脱落、自己ギマン、逃避の中に――涙の流れることです。でも作者について語りましょう。論理的に意味を追究するのですから、どうしても散文調になり、ウイットが調味料の役目をするようです。成功していると思われるのはそうした傾向のもの「詩劇」、散文詩風の「退屈」「あじさい」等だと思います。一方どうしても説明的になって、それが詩的高調にキズとなる場合があると思いました。「目をとじると／わたしを探す子供たちの姿が見え／目をあけると／ひしめいてぼうぼうと燃えている屋根が見え」という四行は、むしろ前の六行によって、小さく狭くされているような感じがしたのでした。まことに独断的なことを申しましたが、ここに作家が必ず通



らねばならぬ大前提が提出されており、このような確実なデッサンをへて、はじめて立派な作品が生れるのだということは、はっきり認識しました。御精進いのります。

＊

**鮎川　信夫**

大へん興味深く拝見いたしております。

＊

**安西　均**

現代詩の手法の、一つの極限を示しています。

＊

**赤石　信久**

この詩集は現代に生きる詩人の苦渋、というより、一箇のサラリーマンとしての人間の苦渋が生々しく画かれています。天野美津子の人間が、例えばあなたはある会社の事務員氏であり、それも可成り古手の方の、会社の人事などにも神経を費す立場にあるような地位に思われる。そのあなたには多分二人の子供（小学生位）があり、先祖代々の古い家には、年とった母親が住んでいる。そのあなたは多分会社には極めて勤勉で滅多に休むこともできない。たまさか風邪でも引けば、その休日の権利を無上の「幸福」と考える実感に私は共感しました。あとがきでは「神経も肉体もいたって健全」と云っておられるが、肉体の方は至って健全であられることは確からしい。併し神経の方は少し複雑でありましょう。併しこの神経は種々な悩みに堪えぬき、「勤勉」にある死を予感し乍ら〈それまで生きていよう〉とする太さがあると思います。このような死との格闘が各所にみられるのは、あなたが人間のかなしみを深く体感しているからなのではないかと推察するのであります。又この詩作品にはやはり母がありま す。いわゆるお母さん詩人といわれる浅い母ではなく、しかと生きねばならぬひとりの母の弱さの中の強さ、執念のような強さが感ぜられます。いずれの作品も技巧的にはこれ以上望むべくもなく、どの一篇をとってみても、天野美津子の人間が赤裸々に露呈されておりますが、「一人多すぎる」はテーマとしてもぞっとするものを共感するサラリーマンは多いのではないかと思いました。「更迭」もサラリーマンでなければ感じ得ない実感でしょう。ぼってりした重みのある詩集です。今後ともこの道で格闘の巾を広げ、より鮮烈な詩精神が開花されるものと期待できます。

＊

**井上　俊夫**

今度のあなたの本は、「赤い時間」の延長線上にあり、あなたの資質には根本的な変化はなかったと私は見ています。しかし、全般的に淡々たる詩風の中にもホリが深くなってきており、さすが詩人の年輪をあらためて想起させます。一言のもとにいって、依然として私小説的な発想が詩作の中軸にあるようですが、無論、それはありきたりの私小説ではなく、神秘的で不気味な逸脱に興味があります。この第三詩集を有力なステップとして、あなたの文筆活動がますます盛んになることを期待しています。

＊

**和泉　克雄**

いつもながらのたくましいお精進の作品を拝読し感服いたしました。あなたの詩への姿勢は後記にのべられているように、非常にきびしいものが感じられます。「みがく」「不眠」「鴨」等の比較的短い詩にあなたの絶唱を感じました。

＊

**板倉　鞆音**

この前の「赤い時間」三分など大変好きで座右に愛蔵いたしております。今度の詩集ちょっと拝見したところでは、言葉が一段と落付を持っているようで、これからゆっくり拝誦しようと楽しみです。

＊

**井手　文雄**

たゆみない御精進に打たれました。これからゆっくり、味読いたしたくたのしみにして居ります。詩劇はじめの方一寸拝見、大変面白そうです。

＊

**遠藤　嘉基**

おもいがけない方から、おもいがけない詩集いただきました。能村さんはわたしが五高時代に詩誌を出していた、その折からのおつきあい。とっくに、詩を書くことから、別の世界に飛びこんでしまったわたしではありますが、「詩」に接することは、魂を清めてくれるおもいが致します、〈零のうた〉わたしに批評する資格はございません。しかし「詩を通じて生きる」ことのできるひとは、幸福だと思いますね。〈道程〉を身近に感じとりました。それから――散文詩。よく、くわしくはわかりませんが、そういう分野におのびになる方ではないかしら、などと、ふと、詩集を拝見しながら思ったことでした。

＊

**榎本　和子**

「零のうた」とうとう出来ましたね。一頁一頁が貴女の生活の足跡のように、ずっしりと重い本に思えます。お正月静かな時、繰り返し読ませていただきます。貴女にお会いする毎に、いつもそうですけれど、作品集を手にとって感じます真摯な生活というものを。

＊

**岡本　潤**

〝車輪〟〝赤い時間〟とあなたの作品をずっと拝見してきた私にはこの詩集もまた感銘深く拝読しています。「道程」「零のうた」に、自分を問いつめられる深い内部心象を感じ、「勤勉」「不眠」などに日常性のなかでの不安といったものに共感をおぼえながら。

＊

**遠地　輝武**

大へん立派な御本ができてなによりです。

＊

**大島　博光**

現代の資本主義機構にたいする痛烈な批判に共感をおぼえます。その批判精神が、零の方へ、無の方へ、無機の世界の方へとずり落ち、逃げこんでしまうのは惜しいように思います。「人間は蜘蛛だ」――「人間はなんて可愛いいのでしょう」しかし、この現実を批判し、現実を変えることのできる人間は、やはりすばらしいものではないでしょうか。希望をつかみとりましょう。

＊

**木下常太郎**

零のうたにうたわれているように、われわれの生存はまったく惨めで哀れです。しかしこうした詩を鏡に自分の姿を見ると幾分救われます。こういう鏡がなければ自分の姿を知ることさえ不可能になります。

＊

**木下　夕爾**

内容外観とも立派な出来栄えの御本です。以前の御著も大切にしていつでも手に取れる場所に置いております。今、ひととおり拝誦したところですが、「一人多すぎる」の中の全部、「鴨」の中の、「鴨」「不眠」、「あじさい」の中の「雨期」「面」「夕闇」などに最も心を打たれました。ことに「面」は短いが仲々味のふかい作品だと存じます。――田舎ぐらしで始終詩のすがたを見失いがちな私も、久しぶりでこの心を鼓舞された思いです。

＊

**木村三千子**

「赤い時間」が出版されましてから、もう六年の歳月がと、その早さに驚きますが、その間に御多忙な毎日の中から、これだけの重量感と充実した内容の作品を次々と書いてこられた偉大さに、私みたいなものと違った、ずっと高い次元に立つていらっしゃる天野様を感じております。

＊

**黒田　三郎**

きれいな御本をありがとうございました。あなたの御作品をまとめて拝見できて幸いです。

＊

**小高根二郎**

早速拝読いたしておりますが、女人として珍らしいほどの骨格のたくましさ、言葉の正確、思惟の重厚さにいまさらながら吃驚いたしたことでした。いづれ拙誌に寸評を書くつもりでございますが。

＊

**児玉　実用**

「日常が詩である」「日常の中にこんな詩の世界がある」そういったことを、先ず何よりもひしひしと感じたのは御高著でありました。実際日常一番よくあること、それを拾えば立派な詩になるものを、われわれはつい大切にしないで、心の世界からコボしてしまっています。それを貴女の「詩人の眼」はシカとつかまえてはなさず、そこから発展して詩品が完成されたり、詩品の一隅にそれを位置させたり、まことに素晴らしいものです。「日常」なんて言う言葉を使いましたが、それは「生活」と等価値語のつもりなのです。だから貴作はまったく「生活から生れた詩――そして時々幻想が現実をより真実にしている」ということを痛感しました。そう言ったものを、これはまた、実にもってありのままのことばで、過不足なく表現されています。そのことは言うべくして仲々出来ないことです。詩を書く時には、誰しも、どうしても「詩を書いているのです」と言った気持が、ことばに制約を加えて来がちのもののようです。ところが貴作にあっては――多少はそんなものがあるのかも知れませんが、あるいは逆に非常におありなのかも知れませんが、少くとも作品面では――全然そう言ったものが見えないで、実に自然に自然のことばで詩を書いてられます――羨ましいほどに。感服の至りであります。現実の彼方にある尊いものに憑かれた、そうであればこそ現実が一層大切である勤労人としての現実感、うそ偽りのない人間の本性探求（或いは告白）、現代人の現代に対するサタイヤー、それらを表現されるに当って、暗示的影像がまた大変鮮かであります。時に散文的説明性や論理性がある以外は、どの作品も立派なものだと敬服いたしました。貴著の標題にもなっている「零のうた」にはたしかに力の入ったものを感じ、底流をなす思想もよく響いてくるものがあるのですが、詩流に沿って案内されてゆく間が大分シンドク、行き着いた時「無のシルエットを抱きましょう」と言うことになると、「零」には、最初と途中で持たされた斬新なものへの期待が、フラストレーションとなって残るのです――それは私のヨミが拙いからかも知れませんが。私には、それは惜しいことだと思われました。「鴨」篇の〈不眠〉〈燈台〉〈退屈〉は佳品、〈鴨〉はその中の逸品だと思います。「あじさい」篇では〈あじさい〉が何と言っても素晴らしいものだと感読いたしました。思い切って歌われた女ごころ、このように思い切ってうたいたいと、つくづく感じ入ったことです。詩劇は大変立派なものです。こう言った構想が無論私なんかには出来ないだけに驚嘆が一入でありました。多分お忙しい日々でありましようのに、その日々が、いやその日日を詩で支えてられる真摯性に敬意を表してあまりがあります。そんな御生活からなればこそ、こんなにいい詩が生れるのでしよう。

＊

**河野　仁昭**

「鴨」が好きで、なんども拝読いたしました。「鴨」のセクションの作品は、「一人多すぎる」の観念性と、「あじさい」の日常性の中間にあって、わたくしには面白く思われました。「危険をおそれてはいつまでも空の高みへは昇れない」（この詩句には多少ひっかかりますが）とうたっておられますが、昇ることを志向することがすでに危険ですらあるような人間存在の暗い重たさが、詩集全篇を通じてずっしりと感じられました。

＊

**西条　八十**

平明で、徒らに抽象的でない御作風――殊に「更迭」のような、新しい詩境を拓かれる御努力に敬意を感じました。

＊

**坂本　遼**

いい詩集でしたね。後半の詩にはことに頭を垂れました。専門の詩人だけでなく、会社員も工員も打たれることは間違ないと存じます。

＊

**清水　哲男**

ぼくにとっては「あじさい」の中の「車中」「夕闇」等、天野さんの静かな生活の眼の所産（しかし、その背後に激しい生活が秘められた……）が、最も魅力的に感ぜられました。

＊

**杉山　平一**

あなたの詩は、私はよくわかります。詩の向う側詩以前がわかりすぎて、私には切ないのです。山口瞳のサラリマン生活描写を私は高く買うものですが、あなたのサラリマン生活の歌も私にはかなしい。「幸福」なんていうの好きです。「車中」も好き、「一人多すぎる」「更迭」、それに「おみやげ」「夕闇」もよいと思いました。「鉄棒」とか「芋あらい」は、わかりすぎて弱く見えるもののようでした。私自身がそうであるように、あなたも少し説明しすぎる解説しすぎるのかも知れません。あなたのお名前は「四季」の頃からおぼえていますし、ウスイの本のときもかいておられましたが、このごろの生活感情（世帯じみでなく）と強くメカニックなものをおもちの境地は知りませんでした。でれでれの抒情のような感じがしていました。詩劇だとかながいものはまだ読んでいませんが。

＊

**杉本　長夫**

神経のゆきとどいた大変見事な御本で感服いたしました。

＊

**相馬　大**

がんと心の打たれる詩というものは案外、身近かに住んでいるものだと思いました。「雨期」この作品にはまいってしまった。訪ねて来たのは雨である。これはヴェルレーヌのうたった雨ではない。日本婦人のみつめている雨だ。青春の雨ではない。この雨はなんだろう。しかし、雨なんだ。詩とは何か。筆者の言う「詩を通じて、生きるということはどういうことなのか、その確証を摑みたいという希望を賭けてきた、といった方がより適切な場所に立っているようである。」そんな場所に詩はあるだろう。しかし、その立場に立って詩をみつけられるだろうか。詩がわからなくて困っている私を、この詩集「零のうた」はいっそうわからなくしてくれた。しかし、何かを考えさせようとしている。が、さびしくやりきれない水がいっぱいこの詩集からあふれてくる。そんな詩が「一人多すぎる」であり「零のうた」「鴨」「芋あらい」「退屈」「回転木馬」「雨期」「古い家」「夕闇」などである。私はスマートな詩よりも、これら諸作の中に人間を、生きた人間を感じた。さらに深く考えさせていただきます。

＊

**竹中　郁**

身辺些事をよく詩としてとらえられました。ただもっと省略が効くとよろしいが。

＊

**田中　冬二**

昨年七月以来殆ど家に籠って居りますのでゆっくりと少しづつたのしみつつ拝読致したく思って居ります。先年木屋町のれんこん屋でお目にかかった時のことなど、時折なつかしく思い出して居ります。

＊

**武田　豊**

洗練されて角のとれた思想、磨かれてなめらかになった表現、いずれもうらやましいことに存じました。「おみやげ」「夕闇」など一つの悟りさえ感じられ、「修羅」にある覚悟をみるように思いました。ちょうど同じ頃に忠さんの詩集をもらいましたが、その庶民的な風景がどこかに通じていて、何か京都風な句、形を造っているような気がしましたが、僕だけが思ったのか知らん？

＊

**鳥巣　郁美**

零という言葉に沿った全編のなかに、生をぎりぎりまで追いつめた人間の、疲れに似た空しさを読みました。日常のなかで、多くの怒りに出遇いながら、遂にそれをも極限から見てしまう自己の目、女としての目、生きるためのたたかいを肌に刻みつけるようにうたわれた詩の数々。集中〝零のうた〟がやはり印象的でした。そして詩劇もむつかしい主題の展開に何かと考えさせられております。さっぱりとした装幀のよいお詩集、厚く御礼申上げます。

＊

**那珂　太郎**

しっかりした骨格をもった、正統的な詩風に感銘いたしました。

＊

**永瀬　清子**

御作品の巧みさ強さにおどろきました。いずれくわしく感想かかせていただきたく存じます。

＊

**南江　治郎**

集中何んといっても「一人多すぎる」から「零のうた」までの詩篇がずばぬけてすぐれているように感じました。あとがきに「詩を通じて生きるということはどういうことなのか、その確証を摑みたいという希望を賭けてきた」とありますが、詩に対するこの素朴なそして或る意味では必死なお心持が、私は非常にすきです。私も二十年間サラリーマン生活の経験もありますので、それが肌に感ぜられると共に、一面サラリーマン生活をこんなに鋭くリアリテイに描かれた現代詩は稀有のものだと、そのユニークなあなたの存在を尊いものと感じました。

＊

**中野　嘉一**

先般「赤い時間」頂き感銘ふかく読ませて頂いたことを覚えていますが、今度の詩集も興味ふかくよみました。前の詩集に比較して人間的な深み、人間としての意識過剰が加わって来たように思われます。いつも頂いている「骨」20号で、貴方のプロフィルに就いて、同人の方が書かれて居られるのをよみまして、この詩集を味わいふかくよんだ次第です。

＊

**中河　与一**

幻想の世界にふかく興味をもち居られる有様、興ふかく存じました。絶えざる御精進うれしく益々御丹精祈り上げます。

＊

**能村　潔**

「赤い時間」よりも更に、一層、生活の中に密着、そのテーマのとり上げかたも表現も、隙のないものになってきておられるのに、畏敬の念を禁じえないものを感じました。心ゆくまで繙かせていただきます。

＊

**浜田　知章**

卒直にいってあなたの詩精神が衰弱していると思いました。たとえばハイデッカーが「存在の牧人」と「無の座席」という二つの極をわれわれの前に呈示するとき、呈示されたものの認識作用は動き出さないかぎりポエジイはないのであって、あなたの「零のうた」全篇を流れている人間疎外は疎外状況としては余りに一般的ではなかろうか。天野美津子もある安定期に入ったのだと断じざるを得ない。しかしそれはまた結構なことでもあるが。ふれれば血の出そうな「鴨」を私は愛する。「危険をおそれてはいつまでも空の高みへは昇れない」

＊

**菱山　修三**

一読して何かあふれるようなポエジイを処理されるのに、旧来の方法ではどうにもならないものが、作者にあるような気がします。もうひと工夫なさって下さい。

＊

**富士　正晴**

荒木利夫君が送ってくれた「骨」であなたのことを読み、ずいぶんお若く（年令的に）想像していたのでびっくりしました。年末ざわざわしていますので、年があけてからゆっ

くり拝読することを楽しみにしております。これからも大いに頑張って下さい。

＊

**藤原　定**

現代の生活の奥深くある云いがたい思考と感情を剔抉して下さったという高度のおもしろさがあり、生の苦渋を詩法のミューズが救いあげていると感じました。

＊

**福田　泰彦**

「零のうた」という題名は必ずしも私の好みではありませんが、一読して素直に諒解できました。「あとがき」で現代詩に対するおこころのあり方を片鱗、散文的に述べておられますが、私もそれに近い気持を平素から抱いております。全巻通読させていただいて、或意味での類型が気になりました。無論、類型といい条、そのパターンはあなたを含む何人かの詩人の形作ったそれであることを忘れては居りませぬが……。「勤め人」の詩がボヤキのまわりをうろつく時代は了ったように思います。田村は「立棺」の中で「われわれには毒がない」と書き、吉野弘は「たそがれ」で「納屋の隅の／光の失せた鍬を／思い出す／時刻だ。」と書きました。これらの詩句に気絶せんばかりの感動を覚えた記憶がありますが、いま「零のうた」の中にそのように、私を叱たする語の見当らないのが残念です。あなたの何篇かのお作が「勤め人」のボヤキだと言うのではありません。自らに言い聞かせている――のですし、そのような契機を与えていただいたあなたに感謝したいのです。「車中」「幸福」「休日」「雨期」「風のある日」など、私は読みません。「幸福」は特にいやです。「修羅」はいいお作です。涙が出ます。切ない、特に二聯目、こんな切ない詩句を知りません。「不眠」もすきです。「歩きながら熟睡するため／夜は十年来眠らない」と書いたことがありますが、「私の背後で立上る何か」の「何か」が不満なことを除けば、私などの及ぶところではありませぬ。一九六〇年代、京都という古い土地の、ガタピシの中小企業の、機械と人間の、半分づつみたいな状態で生き伸びねばならなかった一技術員が、生と死とをどのようにふまえ、明日にかけるいわれもない心をどのように打ち消し、良心を時には死で守りたいとさえ願った、証言のための小さな捨石にでもなれば、と、つまり書くことによって報われている詩人になれればと、……でも悲しいことばかりつづいて、私にはもう書くことがなくなったかのようでございます。少くとも御高著によって勇気をふるい起されるまでは。高名な先輩の御労作に、不逞なことを書いてしまったかもしれませぬ。でも詩集の御礼はこのように書くのが本当かと思いますし、改めて自分を見つめさせていただいたうれしさ？は覆いようがありませぬ。「修羅」の二聯目、生涯忘れることはないでしょう。

＊

**真壁　仁**

おつとめのなかで、休まず詩作にはげんで来られたご努力に頭がさがるおもいです。そういう生活の張りがどの詩の中からもひびいてくるような気がします。それは生きるということのきびしさと、それにたえる精神の格闘のひびきでもあるのでしょう。あなたの詩の骨太さや強さもそこからきているようにおもいます。生きるということの「確証」をつかみたいという詩作の動機をかたった「後記」の意味がよくわかります。私はここ数年詩らしいものを書かずにすごしてきたので、今年は少し詩作の生活をとりもどしたいと考えています。そんな矢先きにあなたのお仕事を拝見できて大いに力を鼓舞されております。いっそうお元気で詩作を続けて下さい。

＊

**三好豊一郎**

前詩集「赤い時間」にくらべると、一段と落ちつきがみえ、詩境の進展を感じました。小生昨夏以来療養中ですが、今春早々退所の見込がつきました。貴女もお元気で活躍の姿なかなか大変のことと存じます。



＊

**山中　散生**

貴女の詩歴を確認するに十分な出来栄えと感嘆のほかありません。とくに独自の格調の美しさ、言葉の転位の鮮やかな手法は眼に泌みるほどです。

＊

**山村　順**

「燈台」「鴨」「魚の目」小生の好きな作品です。他にも佳いのがありますが、言葉の多いのは、一寸気になりました。

＊

**山村　信男**

この詩集はこれを読んだ者をして、なにか作者に話しかけ、心をこめて語りかけずにはおられない不思議な親しみが溢れております。この集の幾篇かはたしか「骨」なんかで読んだ記憶が鮮やかによみがえってまいります。が、雑誌で読んだときの、一、二篇のその場かぎりの単発の感動ではなしに、こうしてまとまったものを手にとって読みますと、まったくずっしりと重たい感動に、いつまでも余韻のゆらめきが消えそうにありません。また、これは、ひとつひとつの詩が独立してその存在を主張している詩集ではなく、それらが溶けあって大きなひとつの詩を形成している詩集とも思えます。集中、〝あじさい〟は作者の質素な生活の語り口が、彩やかなイメージの衣をまとって文学に昇華された稀有の一篇であり、おそらく天野様自身にとっての絶唱ではないかとさえ思われます。この一篇だけでも優にこの詩集の存在価値をになって余りあるほどです。この詩のなかに語られている無常という相が、あじさいのあの透明に青ざめていく象をかりて、それが女の妖しい性をダブルイメージさせることで、いっそう濃く強くひびいてまいります。それは巨きな自然のなかに、びしょぬれになり、むごく乾され、つながれたものとしての存在に身悶えしている女の性の哀しい美しさというものがにじみ出ているからでもあります。ただ、ここには滅びに向うものの美しさに傾きすぎて、気丈なもの、反撥するもの、〝多くの女たちの運命はみなひとつでございます〟と云うときの、大づかみな諦念に対立するものが語られなかったのが気がかりですが、そういうものを導入すると、この詩はきたなくなり、にごり毀れていくのかもしれませんが……。しかしそういう気丈なもの、反撥するもの、諦念に対立するもののなかにも、新鮮な美しさがあることを、心におとめになってほしいと思います。〝雲間を洩れる刹那の稲妻に照らされて、自らの姿をかいまみる闇の中の物の象のように、いつまでもおなじところにとどまっている、私たちは盲目の魂でございます〟この最後の三行はまったく私の心を揺ぶりました。まっくらな闇のなかでぽうと灯っている花のような魂、塞がれた生涯を前にして枯れてゆくもののあえかな美しさ、このあとに一管の哀しい笛の音色がきこえてくるような気がいたします。それから〝ございます〟語調を用いられたのは、ある種の歯切れの爽やかさを、やわらかく残すことで、まったく内容に適ったものと感心させられました。この詩集の内容は、三つの区分と詩劇で構成されておりますが、「一人多すぎる」では、外部の状況に対する渇きと怒りとを実生活の接触点で受けとめたうたが、「鴨」では、内省的な面の日常の徒労が、祈りが、がんばりが、「あじさい」は、即物的なスケッチで生の断面を呈示し、諦念と死へのおそれが、それぞれ語られているように思いましたが、先にも記しましたように、この詩集全体がひとつの大きな詩でありますから、こうして細分することはそんなに重要ではないかと思われます。それを押しきって〝あじさい〟を除いた他の個々の作品に触れますと、私の好みから〝零のうた〟〝回転木馬〟〝夕闇〟が好きです。特に〝回転木馬〟の世界は、私が〝ノッポとチビ〟21号に発表した〝闘牛〟の世界とあまりにも似ているように思われ、身にこたえました。そのほかでは〝みがく〟〝燈台〟〝休日〟〝おみやげ〟〝修羅〟〝鴨〟〝芋あらい〟〝退屈〟など、あたたかい作者

の体温がそのまま伝わってくるようです。ときには少し単調で即興的なうたに流されて平凡に過ぎ、またそれが愚痴に落付いていくようなものもありますが。欲を申せば〝あじさい〟のような作品がもう一、二篇ほしく思います。作者は、置かれた現在の位置に甘んじ諦めているようで、実は外部の状況へたち向う強靱なバネの反撥力を秘めておられるのが素直に読みとれます。自己の世界をきっちり抱いて、その世界のなかで誠実にうたいだされる日常は、私にもひとつの共感を与え、生きる励みを与えてくれるものです。私など詩をつくる場合、危なっかしい背のびをして、なんでもないことにむづかしいコトバの衣を着せ、その上にこってりとした比喩の厚化粧をするのですから、いかに自分の詩作態度が虚しいかが、こういう詩集に出会うとつくづく感じられ反省させられます。それが未知の領域を開拓するための前衛的な試みという美名のよりどころがありましても、やはり救われない実感として私を捉えます。難解さが深遠に通じ、平易さが安易に通じるというのは全くナンセンスですが、貧しい私どもの全生命を抱擁し、激しく搏ち、すみずみまであつく火照らせ凍えさせる詩は、全的に理解されるものであることが、詩としての資格を保持するぎりぎりの条件だと思います。ですから、わかり易さ、誰にでも理解され親しまれる詩であることが、何にもまして先行することは自明のことです。詩集のあとがきにもありましたが、詩が芸術であるよりも、詩を通じて生きる意味、その確証を摑むために希望を賭けるという立場、姿勢は、しかし並大抵ではありません。それに希望を賭けるということと、虚しさを賭けるということはうらはらであり、何かとんでもない間違いをしているような気に襲われながらも、書かなければ止まないひとつの業に、私も身につまされる者として、惜しみない声援をおくるものです。天野様に注文のひとつは、これからできるだけ老成をさけ、柔軟な若さに充ちたみずみずしい情感をいつまでもうたいつづけてほしいと云うことです。また、たまには生活の日常から横道へそれて、女の執念に彩どられた妖の世界を深く掘り下げてほしいとも思います。なお詩劇は、詩劇自体があまりよく解りませんのでなんにも書けないのですが、これを実際に舞台で実演するとなると、この詩劇の核心である幻想の部分が、とうとつで奇異な感じをおこさせるのではないでしょうか。第一場の母、娘の対話部を「静」とすれば、幻想部は「動」であり、最後にまた「静」にもどります。その「静」と「動」とをつなぐのは、無気味な颱風の予感と、それが外れたという開放感です。けれどそのつなぎによっても、幻想部はドギツクかけ離れた感じがいたします。ですから「静」から「動」の世界へ、できるだけ違和感をなくして移行させるには、「静」の後半からダイナミックな助走をつけておくことが必要なんじゃないかと思うのですがどうでしょうか。

＊　　和田　徹三

これが現代詩かと不安になっておられるようですが、前詩集より一層コクができたと思いました。アクチュアリティがどうのこうのといわれますが、私は何よりも人間がとらえられているかどうかという観点から詩を見ます。それが最も現代的な詩の見方だと信じています。貴台の詩は前よりも立派になられたと私は思います。

＊　　織田喜久子

巨大な、メカニックな現代社会のなかで、遮二無二追われている我々は、一個の消耗品にすぎないのであろうか。そのような自分を見つめて嘔吐し、抵抗している姿勢、また時折一人の物思い多い女にかえった作者の横顔が、適確・豊富な比喩と、巧みに屈折した語法で表現されている。これは〝車輪〟〝赤い時間〟につぐ彼女の第三詩集であるが、あとがきで彼女自身が「詩を通じて、生きるということはどういうことなのか、その確証を摑みたい」と言っている通り、誠実な一人の生活者の内部を浮き彫りにした好詩集である。

（「響」第5号）



## 編集後記

今夏のきびしい暑さにはよわった。四十日近くの炎天つづきで、干上ったのは、畑作物だけではなかった。台風14号の通過が、ようやく秋のけはいをもたらした。机上の一輪瓶に、末娘が挿した鶏頭は、この爽やかな季節をうたっている。病臥中の深瀬老も、元気をとりもどしたようだ。天野美津子君は大事なところの故障で、再度入院をしていたが、もうすっかり快復をした。お祝いのしるしに、詩集『愛のうた』の批評抄を特集した。本号は又天野忠君のプロフイル号であり、『しずかな人しずかな部分』の批評抄もかねた。こんど私たちの古くからの詩友であり、第一次〈椎の木〉のメンバーであった安藤真澄君と、故佐藤清民の愛弟子であり、滋賀大教授の杉本長夫君を同人に加えた。両君共詩への執念にかわりはない。

私はいつも〈詩人学校〉の若い人たちにいっている。『趣味でやるなら詩はやめ給へ』と、少しきびしすぎるいい方ではあるが、真剣に取組んでこそ、詩のたのしさは湧いてくる。生きるよろこびが存在する。

私たち人間にとって、死をおもうほど、恐しいことはないのだが、このごろになって、やっと死は考えぬことにした。『日々を充実することだ』と。そのわかりきったことを、たしかめるために、こんなに年月をくってしまった。安心できたのは詩のおかげである。

それにしても、朝日新聞の新人国記（大阪府）で、庄野潤三氏は『伊藤静雄の門にはいってはじめは詩を作ったが、詩は大変なものだと悟って、散文に移った』とかかれていた。一篇の詩をものにするために、三年や五年の間、あたためていた素材もざらにある。

いつかサンデー毎日が、大宅壮一氏のインタビューをのせていた。それは大野伴睦氏への批判問題についてなのだが、『和歌、俳句は日本的雑草だね。適当の温度と湿地があればどこにでも生える。』といい『とかくメダカは群れたがるというが、どうもメダカばかりふえ、一匹オオカミというものが少なくなってきた』ともいわれている。詩人としても考えさせられる、毒舌ならぬ至言である。

朝日新聞の文芸時評では、毎月林房雄氏が、詩をとりあげている。詩人がはじめて脚光を浴びた。その好意にも答えるべきである。

（井上）

☆

六月二十日神戸市における現代詩講演の夕の翌二十一日午後一時から東山南禅寺山内壺庵で西脇順三郎、安藤一郎、木下常太郎氏を囲む懇親会を、初夏の緑滴る小半日詩の話をはずませた。会する者東京からは三氏の他上林猷夫、横部得三郎、鍵谷幸信の諸氏、神戸からは竹中郁安永稔和、岩本昌久の三氏、岡山から藤原菜穂子氏、京都の「RAVINE」の天野隆一、荒木二三、本家勇、「ノッポとチビ」の河野仁昭、大野新の諸氏その他、三十数名の盛況であったことは、〈骨〉有志世話係として胸なでおろしたことだ。〈骨〉がおもいだしたようにしか出せなくなったのは、ひとり編集者の責任である。ふくざつになる身の囲りの患わしさのせいでもあろう。たしかに身辺多事、雑然とした世情に立ちむかって、年ごとにおたがい忙しさにおいたてられるのはどうしたことか。平和とはもっとゆたかにものをかんがえるゆとりのあることではなかったのか。

（山前）

# 骨

24

## 目次


| | | |
|---|---|---|
| 西山英雄画伯の profile | 同人 | 4 |
| 作品 | 西山英雄 | 14 |
| 北の海 他二篇 | 安藤真澄 | 8 |
| 墳 他七篇 | 井上多喜三郎 | 10 |
| 神話 他一篇 | 杉本長夫 | 16 |
| 隠れ場所 | 天野忠 | 18 |
| 蠅 他一篇 | 天野美津子 | 20 |
| 天野美津子追悼 | 右原尨 港野喜代子 織田喜久子 大鋸時生 天野忠 | 22 |
| 表紙 | 梅棹忠夫 | |
| カット | 佐野猛夫 | |


## 同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三
安藤真澄　京都市中京区御前通丸太町下ル
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
桜井武雄　京都市左京区北白川小倉町五〇
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
杉本長夫　彦根市丸ノ木町三六
田中克己　東京都武蔵野市吉祥寺北八五六
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
八町トシコ　京都市東山区妙法院前側町
山前尋不二　京都市左京区下鴨神殿町
依田義賢　京都市東山区大和大路五条下ル南梅屋町
　　京都市左京区下鴨泉川町五三


骨 24号　¥100

昭和四十年七月十日発行

編集者　山前実治

発行者　依田義賢

発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㉒四三八二


24

# 骨

No. 24

1965・7

同人の顔　西山英雄　撮影 依田 義賢

## 西山英雄画伯の profile

### 情熱

依田義賢

いつの程からか、私は芸術家は死ぬまで、若い気持でいなくてはだめだと思うようになった。年と共に、枯れて淡彩になる。曝れてゆくのが自然だという言い分の方が、素直な考えなのかも知れない。然し、そう諦めるのは、哀しいと思い出したのだ。年をとりゆくうちに、考えも深まり、余分のものを捨ててゆくのが立派な生き方なのだろう。若くあろうというのが無理で、若いつもりでいるのは、いつまでも浅薄、幼稚だから、いられるのだといわれたら、これも、また、つらくて、深い考えを持つような人間にならねばならぬと、自らを叱咤したりする。なあに、いつまでも若い若いと思っていたって、思うは当人ばかりで、はたから見れば、深まりもせず、老成するのでもなく、次第に衰えて行っているものだ、なんていわれては、情ない。

むかし、竹内栖鳳はいつまでも若い絵を描いたと教えられた。なるほど、若いのだろうと思ったが、なにか、老人が若化粧をしたり、派手なヅボンをはいて、若がっているようで、いやだった。わたしの若くありたいというのは、エネルギッシュである、生命力の壮んな相をいうのである。はみ出している、豊かにあふれている、そういうものをいいたいのである。梅原龍三郎がチューブをしぼって、鯛など描いて、絵具のもり上っているのを、はじめて見た時、どぎもを抜かれると同時に、我が意を得た思いがした。ルノアールの華麗な豊満さ、ピカソの精力、そういうものが、私を勇気づけて来たが、私の周辺では、佐々木邦彦兄が山に打ち込んでいた気迫に感動したことがあり、いままた、私をゆさぶったのは、西山英雄兄の華麗なダイナミックな仕事であった。天地もゆるげと、などという字句をいうと、天野忠さんあたりから、にがい顔をされそうだが、そんな壮大な規模のどよめきがそこにあった。またもや、忠さんを引き合いに出して済まないが、忠さんは、私が大きなことを描いたりすると、はづかしくて、仕方がないように、からかって叱る。詩人なら、とても出来んことをやるから、君は詩人でないという、そうかも知れない。絵描きはその点は、違うように思うのだが、そういう教祖的、山師的ロマンが、西山英雄の絵になしとはいえない。それが悪いとはいわない。この山師が(山をよく描く)はづかしがりやで、ギッチョで、むらむらと来て、描いてゆくらしい、なんともいえぬ、ぬくとさが、西山氏の絵のよいところだと思うが、最近少し、感照的に静もり、華麗さがきれいごとになったのは、老成の域に入ったのか、衰えたのか、火の山、西山よ。もっと、怒れ、もっと火をふけ、天地を鳴動させよ。西山英雄兄は、大ロマンの抒情詩を描く大仕事がのこっている。氏はそれの出来る人だ。

### 西山さんのこと

富岡益五郎

骨の今度の号に西山さんを料理しようという。それだから、山前さんは、私に書かねばならないと厳命を下した。私は厳命に喜んで従う気持になっている。だがさてとなると画伯西山さんをどう書いてよいのか停迷している始末である。西山さんから三年前に出されたスケッチ集も頂戴した。個展も拝見した。その前に数点の絵に展覧会で接している。時たま一緒にお酒を飲んだこともある。だがさてとなると私の理解の遠いことがわかって来る。画伯のことは絵画を賞めたり、貶したりすればいいのかも知れないが、出来難いことだ。それでも書かねばならない。

この前京都大丸での個展を、あの時は楽んで見に行ったが、もう一度見たいと思う。あの時の印象は残っているが、一々はとても思い出せない。コーヒを飲んで見ても、ウイスキーを舐めて見ても仲々眼の前に出て来ない。仕方がないから、頂戴した画集を眺めながら、多少の他の記憶を交ぜて、呟くことにして責を果すことにきめた。

最近のこと西山さんに面と向って貴方の絵には穴があると云った。穴とはどういうことか。何か抵抗を感じるものが時々ある、という意味だったが、実はそれが全体の中に処理されてうまく納っているところに、穴のようなものを感じるということだった。穴とだけの云い方は適当でなかったかもしれない。その時、私は少々お酒が廻っていたようだ。西山さんも既に同じ道中に居たわけであるが、少しも気に障えた様子はなかった。と思っている。以前にも時々直面してこの種の言葉を吐いた記憶があるが、いつも西山さんは直素に聞き流してくれた。私は自戒を要する。

お酒に強い西山さんは見たところ頑健である。一緒にいると精気が発散するのを感じる。それでつい一ト言云いたくなるのかも知れない。頑健と労作とは確かに無関係なものではない。画家の場合にもそれが重いファンクションとなって色々の形で創作に影響を与えることは見逃せない。ピカソのようなのはいくら老いても衰えない頑健さを持っていることは周知の如くであろうが、彼の絵には肉感的なものがある。西山さんは風景ばかりと取組んで、人物を描かないが、もし描けば、どんなことになるのか、と大変関心が湧く。西山さんは日本人だから東洋的である。ピカソのような精力とは違う。鉄斎は晩年程力の籠った絵を描いたが、フイヂカルに云えば鉄斎とピカソとは正反対であろう。現存のピカソと比較して悪いが、八十八歳で没した鉄斎と八十を半ば越えた(84?)ピカソとは長命であったし、あることは羨ましい。しかも気力がますます盛になり行くことは学ばれないことかも知れんが学びたい。西山さんも長寿であってほしい。西山さんはものにこだわらないので長生きと思う。

西山さんは今幾つかな。とにかく今、永い永い画法と画技の修練を経て、創作の情熱を托すべき方法を身につけている。画面一杯に捉えるコンポジションは外へ溢れるようだ。強い色調の秘術は本当に秘術の感がある。時々これが余りに強いと思うことがあるが。

日本画の畑から出て、西山さんは日本画でない日本画を描いている。只々絵というものを描こうとぶっつかって行ってこんなことになったのかも知れない。思うに日本画と洋画とを区別することは伝統の上に立っている現実的理由からで、ないと困ることもあるが、無視するところに創造の場所も求められる。それは画家自らの意志に係ることで、自由である。西山さんの技法はいわゆる洋画に接近していると云って間違ないと思う。自由に技法を駆使して自分の表現欲が満されれば良いのだ。日本の現代画壇を世界の中において思う時、この問題は大きなことと思う。日本という所は錯綜した、面白くもあるが、難儀な問題を沢山抱えており、絵

画のこの問題も一つの問題だ。

さて西山さんは、ややこしい中で、一つの絵画を拓こうとしている。色々の苦闘があると思う。西山さんの馬力は何気ないような振りをして突き進んで行く。西山さんの情熱は裏磐梯や桜島に満足し切れず。南欧へ駆り立てた。その地で活動的に製作に没頭している姿が彷彿として来る。「南欧の明るさがひきつけたのだ」「ギリシャ、イタリヤ、スペインと対象がどの様に変化しようと、私の描く風景は、私のいぶきであり、いのちであるのだ、そして製作にかりたてずにはおかぬ（一九六四年、個展目録記）とは西山さん自身の言葉である。これだけの言葉を聞いて、西山さんの絵を見ていれば、余分のことは云う必要がないのかも知れない。まさに西山さんの人と絵とを見ているとこの告白は率直だと思われる。南欧を漂浪して、うまいデッサンを沢山描いて来た。帰って来たらこなれた色調で次々と製作が生れた。昨年の個展を見せて貰って、さすがに西山さんは一息ついたところのように見えた。初めに書いた通り、南欧の旅のスケッチ集を飽かず眺めながら、あれこれと思っていると、私の好きだと思う絵が判って来た。序にここに駄文を重ねることとなろうとも、また主観的な評価に留ることを知りながら、最後に附加えることを許してほしい。

色刷では「古物屋」―一番好き。「ノートルダム」。黒色刷では「マジオーレ寺院」「アテネの漁港」「ヴェニスの水路」「モンマルトル」「シャルトルの寺院」「ポンテヴェッキオの夕日」―私には夕日が一寸気にかかる。勘弁して下さい。

## 個展のことなど

井上多喜三郎

この間京都大丸で開催された渡欧作品展を観にでかけた。画伯はちょうど居合せはしたが、会場は大へんな賑いで次から次にやってくる訪問客の応待で、とても忙がしそうであった。作品を一巡りした私は、その間隙をぬうてこえをかけた。「デッサンはいいな」と。へんな挨拶だが、入口に並べられていた数点の、デッサンのすばらしさがついロにでたのである。「皆がそんなに云うので、わざとデッサンの数を少なくした」なんて苦笑していた。

あの稚拙気に曲ったラインで構成した画面の、不思議な確かさ。それは執拗に素材を、反芻した左証である。

画伯の赤を基調としたエネルギッシュな描彩の美は、西洋画に近い。日本画にはみられないボリュームを内蔵し、パッションが躍動している。

たとえば油画は、絵具をもりあげたり削りとったりして、仕上げてゆくのだが、その味をこなして、日本画のタッチに、どのように生かすかは、むつかしい問題である。それは西洋詩に誘発された現代詩の有り方と、同じであるともいえるのだが。その精神や思想もさることながら、表現する文字の発生や、絵具の性質に、原因する問題が、多分に含まれているようだ。それはともかくとして、西山君の意欲こそ興味深いものがある。

この二月南九州へ旅行して、念願の桜島を指呼の間に眺めてきたのだが、西山君の「桜島」におどろいた目には、本物の影はうすかった。桜島の体臭や精神までも、西山君が描きとってしまったからなのだろう。

## 西山さんのこと

佐野猛夫

柔と豪をおりまぜてのすさまじい制作意慾、あくことをしらない探求とバイタリテー、更にねつっぽさも加えて、西山さんとはこういう人であろう。これらの精力を駆使することによって、この人は、かぞえきれない素描とタブローをものにしていった。そして自己をしっかりとつかみつつ走りに走った。この作画遍歴は大きな自信となり、多くの示唆と感銘をよんでいった。

スケッチブックの上にほとばしる西山さんの腕は感動と充実にみちている。その素描はもはやタブローとよぶべき質のものであろう。その対象にぶつかる情熱は、このときすでに燃え切ってしまうのではなかろうかとさえ思わせる、作家の純度がもっとも美くしく高揚したときと思われるだけに。

強烈ないろどりとたくましいタッチによるダイナミックな制作に、この人の本領はあますところなく発揮されているが、燃焼の場はやはり初めの、ふれあいの時にある様に思えてならない。ことほどに、この人の素描にみる生命の躍動は美くしく生き、観者へ吸引力は大きい。

行動とねばりの持主西山さんは、感動が生んだ素描を母体として、次元を進め大きな飛躍の道をたどることだろう。作家のきびしさ、と喜びをかみしめつつ。

## 西山氏の制作二三

荒木利夫

四条大橋畔、南座の舞台の中ひろいどんすように丹頂鶴が翼を思いきりはばたかせ、群をなして飛翔している。清新雄渾、画図の作家はわが西山英雄氏である。どんちようの鶴はとびつづけて久しいがつねに新鮮でバイタルだ。

原作は井上靖、脚本依田義賢、中国の鑑真和上は河原崎長十郎、わがこころに近いこの人たちの「天平の甍」ともなると、このどんちようの鶴が、どっしりと舞い下って、祈りのような誓いのような熱い羽音を、観覧席の私の耳につたえてくる。

西山氏の制作のなかでも私につよい記憶をよびおこすのは「磐梯山」と「天壇」、題名はちよっと違っているかもしれない。磐梯山の麓をめぐる機会が私にできたのは、その画を展覧会でみた数か月のちのこと、バスの車窓の磐梯山が、おもむろに形をかえてゆくのを私はみつめた。私は西山氏のつかまえた角度を探求していたのだ、爆裂のはげしい山にむかった西山氏の角度を。≪而今の山水は古仏の道現成なり≫正法眼蔵のこの一行が私は好きで、山をみつつ時折この一行を思い浮べ、山は生きている、山は動いておる、と声なくつぶやく。山登りなど出来もしない私でさえこう感じるが、西山氏の描く山は、彼のいのちと山のいのちがぶつかり、高まり、こんとんし、奔り、あふれる、そのこと自体の姿であろう。「天壇」は二、三年前、日本の代表画家数氏が招かれて訪中したときの作の一つ、見事な力作であった。

彼の画は、画でありながら、キュービックな塊を造型する。朱と褐色と緑がその塊を回転させ噴きあげる。彼はいう、制作にかりたてずにおかぬ衝動こそ大事にしたいものである、と。彼はインスピレーションなどと唯心的な、神秘めいたことはいわず≪衝動≫と即物的な認識を明確にいう。まことにたのもしい正真正銘の現代作家である。

昨年秋の南欧作品展で、彼は南欧の風景と人間の歴史のかもす風土への感動を健康に描いたが、私をとらえたことの一つは、製作に示された南欧の空の表現についての彼の探求であった。かずかずの色の空があったが、その一画の黒の空は黒く、底知れぬ空の深さに彼の眼は吸いこまれて、宇宙のはてまでいっていた。

## 天野美津子追悼

昭和四十年二月二十四日十二時四十分　永眠

# 春寒

右原　尨

天野美津子の死。あっちにあったものが、不意にこっち側に入れかわって吊り下った儘、そのまま今も動かない。

二月二十五日は、俄かに白いものがちらついたりして、大阪でも珍らしく寒い日。昼すぎ電話に呼び出され、織田喜久子さんを通じて、始めて、この容認しがたい悲報を受けとった。彼女は前日十二時に息をひきとったと云うのである。

昨年六月だったか、京都医大病院へ見舞った私は、つねに変わらぬ豊頬の評判通りノーブルな美人としての彼女と語り合い、死に就いては何んの懸念もなさそうな話し振りにまるっきり安心して帰った。それが最後の別離となろうとは露知らず、間もなく届いた退院通知も当然のこととして疑わなかった。仮りに最悪の病気だとしても、結構それで全快して現在健康に暮している婦人の例を身近に見ていた為かも知れない。男の迂濶も甚だしい。それとも彼女の生活法には、男性の迂濶を大いに誘い出し、又そう云う状態において自他を安心させるようなエチケットが本来あったのであろうか。少くとも、生活者としての彼女の現実感覚はなかなかに堅実で、容易なことには弱音を吐かなかった人である。後刻、依田義賢さんの口から、〈彼女が人前で泣いたのを見た人があるかな〉とのお尋ねが出た程で、そう云えば、私など数年のつきあいに過ぎなかったけれども、彼女の涙には一度も接した事がない。彼女は、女らしく泣くよりも、近代自我の持主として、屢々ぷりぷり憤っていたようだ。誇りある、条理立った個我の結晶――そう思いながら、このぷりぷり屋さんの大きく感じさせる二つの目の拡がりの中のさわやかさを愛し、僅かに癖と見える、口唇をややゆがめて語り、語り倦きない甘い苦さめいた主張を、私は一歩おいて眺めたのしんでいたのである。みたまよ許せ。深瀬基寛さんの書物を汗ばむほど固く握って、T・Sエリオットを、熱心に教えて呉れた貴女を前に、あと幾年経たぬ生命とも知らずに、馬鹿者の私は、ともすればそんな呑ん気さ加減で座っていたに違いない。あわれは、こうして生き残っている不明の者の上にこそ濃く流れていよう。そのエリオットに踵を接して、貴女は何処の国の荒地をさまよい、何処の国の春寒にその骨を晒しているのか。あわれを乞うには、もう遅い。

せめても今夜の、お通夜にはと、京阪淀屋橋ホームに駆けつけたのは五時過ぎ。尚のこる地上の薄明かるさからホームに漂う螢光灯下に立つと、時と場の遠近法が奪われてか、私自身、光りの中のしみのように心貧しい他人のように感じられて悲しかった。荒廃の生活のせいで体をこわしている私には、特急も急行も使えない。不安は羸弱の肉体にまで迫っている。鈍行から鈍行へ乗り移らねばならぬ私は二度も途中の駅で放り出された。大阪と京都の間には声もなく巨大な闇がおりて立ちはだかっている。きゆんと空気をひき裂くような寒気に身を竦めながら、発車して行く足の迅い列車を恨めしそうに見送らねばならない。乗客は起って小刻みに歩くか、飛び込むばかりに列車に消えるか、背を重ねて改札へ散って行くかである。冷めたいペンキ塗りベンチこそ私に相応しいか。殆んど京都に近く臨みながら、私だけは一層京都から遠ざかるような気持に襲われてくる。彼女もこの線路の上を走ったことであろう。ある筈だ。生きて此処に取残されている私の位置と云うものは故人からふりかえって一体どんな処なのか。などと、上ずった思いに、小突き回されている間に、不図私は、頭痛のようなものが、先刻から頭を冒していることに気付いた。きびしさを加える冷え込みと当惑の果てに、私は鈍い吐気さえ催していたのである。

惨憺たる恰格で終着駅京都三条に着くと、大原行バスが数分前に出た許り。――果たせるかな、ここまで記して流感と肺炎にやられ、目下も静養中の態たらく。

私は駅前の小さなコーヒショップに腰を下して一息入れることにした。彼女も大のコーヒー党だった。彼女と梅田OS裏あたりをのし歩いていた頃の張りのあるオフイスガールらしい風姿、黒いベレ帽のよく似合うモダン女性の確信にみちた歩き振り、殊に詩集〈赤い時間〉を引携げ、勢いこんで東上した前後の頼母しさは忘れられない。嘗つての日を思い出すまま、拾ったタクシーの運転手が親切だったことも手伝って、高野清水町におりたった私は、やっと落つきを取戻していた。雑踏をきわめる大阪とは打ってかわって、夜の京都もここまでくるとどこか物静かで近くを流れる水の響きにも春めいた気配さえあって、季節と大地の息吹を、私は深々と吸い込んだ。高張を掲げた建付の頑丈な喪家のまわりだけ灯と人影がひっそりざわめいていた。

私は、小柄で気丈夫なお母さんに会った。病院ですれ違った妹さんに会い、悲嘆でいろあおざめた二人の遺児にも会った。彼女が一時小さな出版社で一緒に働いたと云う、前田初枝さんにも十年振りで会えた。前田さんは落胆の痛さをがっしりした体一杯に支えながら、重い目をおとし、口をこわばらせて、何か〈駄目になりました〉と語った。祭壇の前で目をつむったが、生きて通じるものは、依田さんの思い遣りを止める供花だけで、ちらちら動く通夜客の肩の上に和装の故人の写真が正面に、場違いの感じで懸っていた。場違いは、私ではないのか。前から押し返されるようにそう自問した瞬間、私は、又後頭部を短く掠める頭痛を感じた。

先着の港野喜代子さんの促す声にひっぱり出されて忽徨と喪家を辞去すると、表口で待ってくれた荒木利夫さんと共に、一足先きの〈骨〉の人々の後を追った。異物をくらった生きものみたいに私はうろたえ、地に足がつかなかった。

こころもあらず河向うの依田さんの新居へ、皆さんの後についてお邪魔した。井上多喜三郎さん、山前実治さん、木村三千子さん等初見の方ばかりであったが、ストーブを囲んで話すうち、大阪の連中と違って大変に家族的

な雰囲気にほぐされ、私はやっと心の温まりを覚え、再度どうにか落ちつきを得た。京都らしい千年の夜のゆたかさとくつろぎ、彼女は、その短い晩年をこれら〈骨〉の人々に愛せられ生涯のうち最も安定した日々を送ったのだ。この人々の見守りを受けて彼女の第三詩集〈零のうた〉が上梓されたことは何よりの幸いであったと云えよう。今回は東京へ顔見せにも行かなかったろう。だが、奥さんや美しいお嬢さんの心尽しの接待に恐縮した余りにか、私は柔かい上質の絨緞の上に少しばかりお酒を零した。ラクダ色に映える絨緞が寸時に黝くぬれ、それが音もなく厚い布目に泌みとおるのを身動きもせず、粗相をした申訳けなさに一層体を固くして見つめていた。その数秒の時間の経過の中で、私を遠巻きにしていた頭痛の感覚がふるえるこの指尖きにまで来ていたのか、とも思えるのであった。

彼女は四十歳を半ばこえた若さで、生きながらに他界へ連れ去られた。エリオットの第三の目、と云う注目すべき設定を力説した彼女が、その不増不滅の原理、第三の目の世界へ衰えはてた肉体と共に旅立ったには違いないが、云うなれば死は、良き意味の現実主義者であった彼女をだまし打ちにしたとしか思えない。たぶん私の頭痛の正体もこの痛ましい事実から撥ね反って来た類のものであろうけれども、頭痛の発生は、あの日悲報を伝えた受話器を握ったまま棒立ちの私が、奇妙な午後の光波の歪みの底へおちこんだ時から始まっていたのだ。天野美津子の死の実感はどうしても私のものとはならない。実感が湧いて来ない限り、この頭痛はとれまい。

## 苦(にが)い花

港野喜代子

あなたと知りあった
この十四、五年の間に、
あなたは出会う度に言った
——又、はじめからやるよってな——
何度か、この言葉を言い放ちながら
あなたは、いつも、苦っぽいが
あけすけな声で笑いゆすって
煙草といっしょに
煙色の想いを
腹の底から
吐いてみせた
正面から近づいてくる時のあなたは常に
いくらか、すきのある疲れっぽい足どりだった
たが
がらがらと話しつくして、大またで去る時
あなたの肩つきは、びっくりするほど
がっしりと、脊中に強さを見せていた
——何かなし、書かなあかんよってに——
時にはめらめらと怒り、時には空を見据え
時にはかなりの酔をみせ、時にはさくばくと
色んな思いを ゆらしてはみせたが
——シュウンとする閑はないもんなあーと
自分で、自分を押し切りつづけたあなたは
男たちが、気易げに使う京女とか
大阪女とかの、そのどの型にもはまらなかった
一人前に職場をもって、一人前に子を持ち
詩をたぐりよせては男をつき放し
文学をねっとり息づいてもみせてあなたは
野心も充分に熟しはじめていたのだ
大ざっぱな構えにみせながらひそやかに
磨ぐ心に焔をあてていたあなたが
死の二日前も
開ききった瞳孔に
小さな水色の花をすかして
うんと苦い微笑しかけの口もとをして



うなずいて見せた あの暗号は何か
あなたの無残な途中死にを泣くが
あなたの後姿は、今日の今日も
少しのかたむきもみせずに
ベレー帽の首もとに
ショルダーを引上げ
大またに構内を横ぎる
あなたは苦い花の資格だ

## ふがいない先輩

織田喜久子

親しい人の死に会ったとき、自分に何がしの責任があるように思う人は多いというが、天野さんに対して、私もまたそうなのだ。

「自分はガンになるのではないか」という不安を彼女が洩らしたのは二〜三年前だったろうか。それが、いよいよ筋腫ということで、大阪中央病院で摘出したあと、ガン細胞らしいものが発見されたというので、二ヵ月ばかり毎日、京都からレントゲン照射に通っていた。その間、何度か、例のにこにこした、しかし多少疲れたような顔を見せてくれた。ところが、間もなく、どうもお腹の調子がおかしいので転移でもしていないか何処かでみて貰いたい、というので、私の知り合いの成人病センターの医師に紹介した。幸い胃にも腸にも異常はないというので大喜びして、阪急ビルの「風車」で彼女がご馳走してくれた。ビールの小瓶だか、コーヒだかで祝盃をあげて。だがその頃、ガン細胞は骨盤のあたりに移行しはじめていたらしい。間もなくまた前のような症状にもどった彼女が京大で診てもらったときは、もう手術の出来ぬ絶望状態だったということを、私は秋になって、そのとき診た助教授からきいた。レントゲン照射で抑えられる、などという医師を信じた彼女と、そんなものかと思っていた自分の迂濶さが悔やまれてならない。その時の手術は開腹をしなかったということも、私はずっと後になるまで知らなかった。

彼女は女学校が私と同じで三年下と言っていた。私は音楽・裁縫・図画などというのが苦手で、上級校の受験前に必死で勉強しても十何番にしかならなかったが、彼女はテニスの選手などしながら三番で卒業したらしい。その頃の京都府一といえば名が通っていたから、よっぽど頭がよかったのに違いない。私を時おり先輩と呼んでいた彼女は、いろんな打ち明け話もしたが、やはり遠慮があったのだろう、無理を言ったり、泣いて悩みを訴える、というようなことはなかった。だから、彼女がどこまで死と対決していたかは分からないが、生と死の間で、肉体の痛みと同様に、精神もまた苦しみぬいた筈だ。彼女にどういう顔で会ったらよいか、私は、いつも重い心で訪れていた。亡くなる三日前に会ったとき、すでに死のすぐきわにいた彼女は、酸素吸入の苦しい息の下から、ふた言、三言、意識のたしかな言葉を洩らしたが、もしやと期待した遺言めいたことはきかれず、彼女がひとりで歩いている深淵は、私どもを近よせることをしなかった。彼女を献身的な愛の手で介抱していた愛娘の紀子ちゃんさえ、それは同様であったらしい。

今ごろ、彼女はどこにいるだろう。

## その〈まふらあ〉には毒性があったか

大鋸時生

〈このごろの 美津っちゃんの詩。すごいね。すごすぎる。死ぬんじゃないかしら〉

思えば、不謹慎な言葉を吐いたものだった。まさしく、口にすべきではなかった。なまなましい仲間の反響に得々としていたのだから愧しい。この、おっちょこちょいめ。

その少しまえ。美津っちゃんと、まふらあの取りっ替えこをした。酒の勢いをかって、その夜の、なんとはなく影うすい佇いを、かばいたい激情が動いたからである。かぐわしい詩集に魅せられるものが胸筐にうづくまっていて、とりどりな陰影をあやなす詩章のひだ　ひだの合い間にほのめく微妙なものを、欲求不満とかいだ　ぼくの不逞な魂に災いあれ。いかつく頑丈な頸にまつわっていたわがまふらあに、不遜にして冒瀆的なろまんの発展を希ったのでもあろうか。

後日、そのまふらあは、ぼくのひそかな反省を包んで持ち主の手に帰った。いや、これも、この期に及んで、口にすべきものではなさそうである。

にしても、惜しみてもあまりある閨秀詩人の死を知らされ大きな衝動をうけた直後〈言いあてたね〉と、電話してきた荒木の言葉は、ぼくをがあんと、どやしつけた。瞬間、息をのんだことである。

お許しあれ　天野美津子さん。

残された自署のある詩集を、ひざのうえに開らいて、ぼくは深く首を垂れ、静かに、その冥福を祈るばかりである。　合掌

## 面

天野　忠

この雑誌の二十号の巻頭に、天野美津子の写真がある。夏の涼しげな、ブラウスの十字架にかかった、女キリストのように、両手をひろげた彼女の、モダモダと慰やし難い魂のしょっぱいものが、深刻に重厚に、くっきりとえげつないほどに、浮び上っている。

顔の上にだけではなく、下敷きにされた庭石に、その石の肌の襞に、ビリビリとしみこんで「苛烈」とでもいうしかないほどに。

もう一つ彼女の写真がある。詩集「赤い時間」に出ている。ベレー帽をかぶり、ふくよかに円満に色白の彼女は笑っている。小肥りの、当時三十八才の彼女の写真である。

女キリストの美津子と、円満小肥りの美津子とを、裏表に合せると、彼女の「面」という作品になる。それは「苛烈」であり、またふくよかに「円満」でもある。

――私は面ばかりになってしまったのだ…

家の中での面、暮しの中での面、美津子は「面ばかりになってしまった……」ことを書くことで、もう一つ裏の、ほんとうの底の心が、そうなったことを喜んでいたのではなかったのか。彼女は苦しみ、書き、「面」を持ったことで、もう一つの面を作ったことを承知し、そして安堵し、それをいじめたり、可愛がったり、時には甘えたりして、それを詩に作る作業の途中で、死んでしまった。

何故そんな「面」を、彼女は作らねばならなかったのか、たとえ、それがどんな面であったにしろ、天野美津子という詩人は、その土台の上に心細く立って、せめてしたたかに、その正直の「面」を歌うしかなかった。そして、そのふくよかで、苛烈な面といっしょに、我慢して、我慢して死んでいくしかなかった……。

私たちの持ち時間は僅かだ。賢明な理屈や、素早い学問のはやるこの時代に、用心深く、命を大切にして、その命のために正直な詩を書きつづけていきたいものだ。たとえ、どんな「面」を私たちが持つにしろ。



## 編集後記

今年の冬はばかに長く、春を素通にして、夏がやって来た。不順なのは季節ばかりでない。お化けのように、きのこ雲が出現したり、泥んこの銃声が、はるかにきこえてきたりする。人間社会にあいそがつきたというわけでもないのだが、このごろは花と一しょに暮している。牡丹、つつじ、ゼラニュームにバラ。花をみていると、つまらない意識が停止して、こころがから(無)になる。花の中から新しい意識は手をあげるのだが。太陽がふりまく光を浴びながら、とび交っている詩。なかなか捕へられない。

〈24〉は西山英雄君のプロフイル号とした。日本画壇の逸材を、同人の俎上にのせた。

天野美津子君が子宮癌で病没した(前号では全快したようにかいておいたのだが)最初の手術から十ヶ月。病魔と対決して気力だけで生きてその苦闘の中で詩をかいた。本号の遺作がそれである。文字もしっかりしているが、後のは少しふるえてみえる。共にすごい作品であり「凧」は絶唱に価する。凧は戻らぬ青春を、古下駄は自己の肉体を、象徴している。かへすがへすも残念である。

深瀬基寛老の病状は、殆ど心配がなくなった。奇蹟のような生命力が病魔を克復した。ながらくの就床で、足の自由を失って「赤ん坊同様歩き方の練習を始める」そうである。居宅の庭越しに見える立命館の孟宗竹も、爽やかにそよいでいる。

この間は草野心平君が上洛して、阪本遼君や矢内原伊作君等をまじえて、南禅寺の壺庵で小宴を開いた。心平君の発案で、田楽の台板に寄せ書をして、深瀬老へおくった。細雨のけむる春宵であった。〈心平の黒髪匂う壺庵かな伊作〉。

五月22 23日は「骨」の散歩。湖北地方の風物を、探勝にでかけた。大鋸、八尋、安藤、天野忠、依田、山前、佐々木の諸君と私。ゲストに武田豊、井本木綿子、木村三千子の三君が参加した。含山軒、孤蓬庵の庭園もさることながら、渡岸寺の十一面観音の容姿には、恍惚となった。古橋という山村には廃絶した鶏足寺の仏像を保存する収蔵庫があったりして、感心をした。賤ヶ岳の古戦場からは、余吾湖がしづかなたたずまいをみせ、飯の浦や月の出峠が絶景を展けていた。宿は湖畔の尾上温泉。温泉とは名ばかりの、ひなびた砿泉宿なのだが、手にとるようにみえる竹生島の、その風趣はすばらしかった。(井上)

**鮎**

あらっぽい　ながれの　きよいしぶきに　もまれ　いきりたち　生長した　鮎。

せめてもの　もてなしに　鮎をくわえる。

いきはずませるところ。

ふかいくうきの山のふるさと

**憤懣**

えへらえへら笑ってすますのはどうだ。ごまかしの人生などどれだけのねうちがあるのだ。どこが世界中で住んでみたい国かと問われたら、それは即座に答えられない。詩人の孤独とはそんなものだ。孤独とはしかるべく奢ったものだ。

**出発と終点**

出発とは何を意味するのか。終点とはどれほどの重要性を示しているのか。楽しむとは何を求めるのか。

自然現象では霧の状態があいまいな意志を見せる。

煩悶と楽しみとは一致点に立つことがあるし、愚痴は怜利に交叉して、平行線はかんがえられないのに錯覚が虚飾する。こんなはずではなかったが、日ごとまどうことおおく、わずらわしさだけがましてゆくのは僕だけのことだろう。(山前)

# 骨

25

# 骨 25 目次


八尋不二さんの profile　同　人　4
悪性感冒ビールス戦線　町田トシコ　9
砂漠のノート　依田義賢　11
挨拶 他一篇　天野忠　13
北の国 他一篇　安藤真澄　15
袋 他三篇　山前実治　23
〈骨〉放論　天野忠　富岡益五郎　山前実治　荒木利夫　佐々木邦彦　17
表紙　依田義賢
カット　佐野猛夫


同人

荒木利夫　京都市北区小山東元町二六
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三
安藤真澄　京都市中京区御前通丸太町下ル
井上多喜三郎　滋賀県安土町西老蘇
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九
杉本長夫　彦根市丸ノ木町三六
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷一丁目八七〇
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八
深瀬基寛　京都市北区小松原北町六九の一
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町
山前実治　京都市東山区六和大路五条下ル南梅屋町
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三

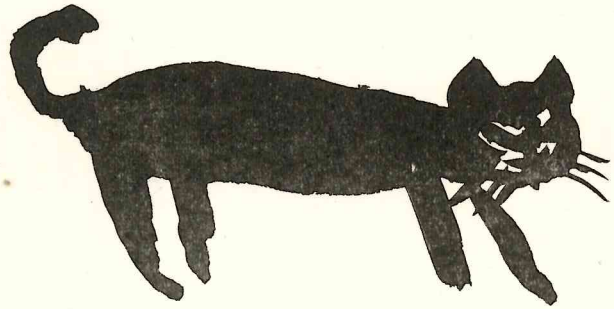

骨 25 号　¥ 100
昭和四十一年一月十日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話(78)〇七九六 依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㉙四三八二

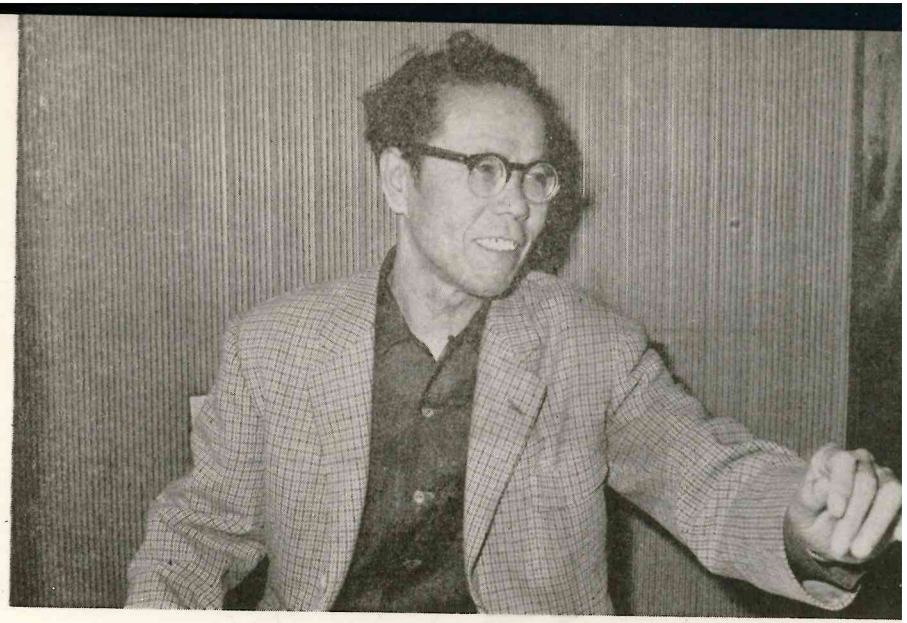

25

# 貘

No. 25



1966・1



同人の顔　八尋不二　撮影　依田　義賢

# 八尋不二さんの Profile

## 八尋不二の正体

大鋸時生

八尋不二の新らしい本『百八人の侍』は、ちかごろ、ぼくを最上にうれしがらせたもののひとつである。ぼくだけでなく、わが家の奥さまも、大いによろこんで愛読してござる。

このことは、ぼくにしろ、わが奥方にしろ、その青春を、日本映画が、活動写真から脱皮して若々しいエネルギーを野放図なまでに炸裂させた、よき日に生活したからである。八尋不二が躍動する筆致で、あたりかまわず書きなぐる若き映画人の思考と生活に、郷愁をはずませて得たからである。恐らく『百八人の侍』を、こうした立場から読み耽けった人々は数多いことであろう。

しかし、そうした回顧趣味ばかりで、この本を受けとったのでは、八尋不二は、きっと、むくれるに違いない。つまり、映画に情熱を燃やし、死に身となって取り組んだ仲間たちを、水滸伝の百八人の落草に仮託した精神を、大切にせねばならぬということであろう。さらに言えば、この本は、八尋不二の〝正体〟を巧みに露出させておいて、さあ、わかっておくれよーと語っている感じが強い。

梁山泊に呼保義宋江をリーダーに仰いで、中国全土から集まった百八人の侍たちを貫いていたものは、言うまでもなく反骨精神であり、官僚機構のあざとさを打破しようとする正義感であった。と同時に、ある意味での独善があって、それが、彼らの行動に、ひとつの枠をはめているといえるのである。八尋不二は、この解釈に怒りたつことだろうが、残念ながら、ぼくのような第三者からみると、水滸伝、ひいては、この本にあるグループ意識に、なにがしかの抵抗を感ぜずにおれないのである。

ところで、八尋不二は、自分の正体を、ジクソー・パズル的に、『百八人の侍』に、はめこんでいるのだが、ま正面から、それを整理して素直に回答してみたのではつまらないから、ぼくも、他を語ってみよう。

八尋不二は、まさか、先鋒使・呼保義宋江や副先鋒使・王騏麟盧俊義にぎしているのではあるまい。といって、自らを偏将たちの末坐にすえるほど、つつましやかな侍とは思えない。軍師・智多星呉用や神儀朱武では、少し地味すぎる。やはり、正将たちのうちの人気ものに加わっているの気慨は、持っているのであろう。とすると、暴れもので愛すべき花和尚魯智深、黒旋風李逵、硬骨漢の行者武松。智謀の武将・豹子頭林沖。こうしたところに、しぼられてくる。もうひとり、なんとはなしに目立つ存在である神行太保戴宗もある。

これらの面々から、いったい八尋不二が、ひそかに、なにをもって任じているか、を考えると実に愉快になってくる。八尋不二の期するものと、ぼくの目するものとに、必ず差がある。そこが、またおもしろいところなのだ。では、八尋不二の〝正体〟は、今あげた五人のうちの、ずばり誰れか。

〝骨〟の仲間たちで、ひとつ投票してみてはいかが。ぼくは、この小文で、すでに答えたつもりである。ついでに荒木利夫の言葉を借りると、百八人の最後の侍は、山前実治であるとか。お笑いに附言しておこう。

## 不二さん

安藤真澄

不二さんという人は、いつも前むきの姿せいで歩いているが。たえず後にも気をくばっている。一見淡々としているようで、吾れ関せずというような顔をしているが、絶えずあたりに気をくばっている。漂々としているようでも、しんの強い人のように思う。この間、朝日から出した、「百八人の侍」という本を読んで見ると、偶像の釈迦を生きた人間の世界に引き戻して、各地の仏教徒から抗議をくったが。それを押し切ってやったところは、この侍の意志の強いところである。四十年も映画の世界にいて、少しも汚れていない、厭味や強がりなどをいわないが真に純すいな立派な人のように思う。それにいつも若々しい気分をただよわせているのに驚く。

## 柿

荒木利夫

窓を明けはなった。東の山はまだ影濃いが空はもう金いろになっていた。太陽が昇ってくるその直前のいなかの朝を、教林坊の離れの二階にひとり居るのは私。左右の寝床はからで、私はまだ蒲団に坐って景色を眺めたり、庇に近い柿の実を見たりしていた。いなくなった八尋さんと多喜さんとどちらが早く起きたのか。

去年のおそ夏の頃だったか、大阪通いの私が、朝のバスに乗って扉がしまったとたんに、定期入れや財布を忘れてきたのを思出し、それと同時に目の前のシートに八尋さんが坐っているのを見つけ、二言三こと話しているうちに、加茂川の向うの橋詰に着き、いそいでおろしてもらったが、その折、彼は北山の裾まで足をのばし上賀茂の社の森まで散歩しての戻りのようだった。徹夜仕事もあろうし、朝はおそいのがあたりまえなのではないかと思われる人の、早起に出あったのであった。

前夜、多喜さんのあとをとぼとぼと、僕らは中山道（なかせんどう）を歩かされた。もう少しで教林坊に着くというところで、多喜さんの立寄った家の門燈にすかして、標札を見たら、石寺という地名が読めた。教林坊の庵女さんの話では、このあたりは石の多いところ、ということだった。八尋さんは観音寺山へ登っているのであろう。教林坊は観音寺山の麓なのである。傾斜のきつい山のようだ。

筧の貯め水で顔を洗い、私は藁を撒いてある厠の荒壁の小さい三角窓から、朝日をうけとめた木立や畑をのぞいて愉しみ、この坊のこじんまりしたしずかな名園をひとり歩きをさせて貰い、二時間近くもして漸く八尋さんが帰ってきた。路がなくなって、路のないとこを登ってきたというのである。ズボンの裾をからげ、すり傷切り傷を見せる。石の多い荒山にちがいない。猪突方式というよりは悲願一徹型である。山頂近くの観音正寺へ漸く出たというのである。最近、八尋さんのエッセイ集「百八人の侍」が朝日新聞社から出たが、彼自身、侍である。早起励行、柿の木の骨組の侍である。観音寺山には佐々木氏の城があったのだと、後日八尋さんから聞いた。観音寺山の上から、琵琶湖を背にして木の茂る低い安土山の城跡を、彼は見下していたにちがいない。

やがて、前夜のとぼとぼ路も、今朝は豊かな稲束の列に迎えられて歩き、老蘇の森を抜け、早帰りの多喜さんの宅に再び戻った。ひろい裏庭に出た。五六本の柿の木の黒い枝に、柿の実がなって、青空の中でつややかに光つている。もう熟して落ちそうなのもある。その下で口を大きくあけた。落ってはこない。多喜さんが梯を柿の木の幹に立てかけてくれた。私が上って熟柿をとった。八尋さんが上って熟柿をとった。手をどろどろにし乍ら、二人は柿を食べた。欅の高い枝を鳥が移つった。

八尋さんの昭和十二年頃の作だというシナリオ「武蔵風土記」の冒頭の一こまを、その時私はどうして思い出さなかったのだろう。その一こま。

満月

たわわになっている柿の実。
子供が四五人。
ポカンと口開いて、見上げてる。

## 寸見不二さん

天野　忠

私も活動大写真時代からの映画好きだから、時代劇という名前はたいへん懐しい。その懐しい時代劇のシナリオライターという職業の人を私は三人知っていて、一番古くは中学時代からの親友に藤井滋司（改名して滋人）がある。目下彼はシナリオライターではないが、彼を思い出すたびに「大阪夏の陣」を書いていた頃のあの妙に華やかにやつれながらの凛々しい表情を思い出すのが癖である。二番目が依田義賢で、三番目が八尋不二さん。

時代劇のシナリオライターという人は、外面たいへん鷹揚で世間識りで若々しく派手な感じがするようだが、内幕は少しみみっちいほどの神経のこまかい、どちらかといえば人生派風の下手趣味に執する気質の濃厚なところがあるようだ。そのポーズは古めかしい例えで嫌だが、素浪人の気慨を持った一匹狼というところであろうが、依田義賢なんかはその中でも最もスマートな、しかも貪欲な狼であろう。八尋不二さんは知合ってまだ間もないから何とも大きな口は聞けないけれど、「百八人の侍」という本を読むと、この人もなかなかの曲者的侍であって、自分で自分の幸不幸或は運不運というものを、押しピンで、ピチンピチンと壁に張りつけるみたいに冷静に始末していける腕力のある人らしく思える。自らのいう「おくて」の人徳を備えており、適度に孤独そうでもある。藤井がいつか「あの人はずっと誰よりも大人だから」と云っていたが、昔から大人であって、ひょっとしたらこのごろの方が準大人に、つまり文学青年風になり下った節も見うけられる。四海波大方静まって、自らを犒らうほどの屈托のない心境かも知れん。

私は彼の豪華な出版記念会に二度とも行きそびれたが、絢爛たる女優さんからべったりと花束なんか贈呈されるときのシナリオライター不二さんの顔がどんな案配であったか、それを見られなかったのは一寸心残りであった。依田義賢なんかは、シャアシャアとあごをすくって、この場面を巧みに演出するであろうが、六十才を越して尚「おくて」の不二さんは、依田義賢ほどには器用にあごをしやくるまいと私は思う。処世度胸もまた然りか。

## サムライ

依田義賢

明治の人には、大なり小なり、サムライの心が流されている。八尋不二さんもそうである。私も明治生まれではあるが、明治も終りの四十二年生まれで、その影はうすい。なにか、話をしていて、合わないことがよくある。どうやら、私の年代あたりから、がらっと変るようである。例えば、浅草オペラの話が出る。私は京都の者だから、浅草などに、なじみのないのはあたりまえでもあるのだが、浅草オペラといわれている、ペシミズムの心持は、私には、充分理解出来ない。ペシミズムは、現世利益に、絶望した、或意味では、ロマンチシズムを基盤にしているところがある。私などは、明瞭に、実利主義的な教育、（イギリス経済思潮）を受けて来ているように思うが、極めて、現実的で、現世主義である。現世を否定している人たちに対して、現世を肯定する立場に立ち、楽観的のようであるが、そこがちょっと、またちがうのである。現世を否定的に見る、明治人間は、世間に対して、愛着や期待や愛情があるから、絶望するので、私のように、現世を肯定するものは、どうでもよい、今日のあり方を



そのまま肯定する風な、それだから、極めて水臭い現世に愛着を持たない心持でいる。ということは悲観しないばかりか、楽観さえもしないというのかも知れない。不信の上に立っているということも出来る。そうして、虚無的にならない、或はなれない。そういう人間である。心貧しい人間といえるだろう。時に、がつがつしている。そこへゆくと、不二さんは、（或は明治人間は）心が豊かである。餓鬼のようにならない。なれないのである。なっては情無いのである。そういう奴は、見下げ果てた奴なのである。心にもなく世辞をいい、叩頭辞儀をする。そういう奴は、下の下の人間なのである。そろばん高い考えを持つのなどはやりきれないのである。誇りが許さないのである。名誉にかかわるのである。私はそのような餓鬼の心に育てられたから、いけないな、情ないなと思うようになり、心豊かなものに、心をひかれ、憧憬し、現世を変えたいように思うよう努力しようと、つとめた。不二さんは、現世に失望しつづけて、この現世では、決して負けないで行こうと思った。そして、仕事をし、努力しようとしては、厭気がさして、投げたりして、嘆息した。私とは全く対照的な在り方になった。そう、私は理解している。不二さんはサムライである。人の下ウマに入ることをなにより、嫌い、蔑しみ、人を使っても、絶対に使われないと思う。使われたってええやないか、損して徳とれ、面従服背、参ったと傷つかない先に云って、勝ったものに、悲しげな眼をむけて、べろりと舌を出している。そういう人間は、だかつの如く、軽蔑する。全身、鎧わざるを得ないのである。骨のない奴を嫌う、骨を正しくして、骨に弱っているとこもあるのである。骨なきを骨たらんとす。などという奴は、許せない、嘘つき野郎の、汚ない奴と、罵るが、時には、そうなったら、気楽だなと、思ってみたりする。世渡り上手な奴が、癪に障り、一層、高級の世渡りをする。身を粉にして働くような阿呆な奴を、軽蔑して、身を削るようなことは決してしまいと思う。私などは人に少しでも悪くいわれると、悲しんで、小心よくよくとするのだが、不二さんは、どんな罵倒にも、毅然として、肩をそびやかしている。

或時、私が、死ぬのはこわく、死んだら、なんとかして、私が生きているように、この姿をのこす方法はないかと思うと、云ったら、俺は、死んだら、粉にして、どこかの山から灰のように撒いてしまいたいと云った。私はびっくりして、不二さんの顔を見ていた。

## 八尋不二さん

とみおか・ますごろう

九月十八日、八尋さんの「百八人の侍」出版記念会に出席して、一本を授かった。この本を読むのが、八尋さんの文章に接する初めてである。シナリオ作家の本命であるシナリオを読んだこともなく、あの有名だった「釈迦」のシナリオも映画も、私にとって現在では忘れ物をしたようなことになってしまっている。大変申訳ないことであるし、私自身にとっても残念であり、忘れ物を取り返したいような気持でいる。記念会では祝辞が沢山あった。さすがにその席で祝辞を述べる程の人達は、八尋さんと特別の間柄の人達ばかりと思われ、軽妙、洒脱、飾り気のない言辞が降り潅いだ。祝辞を受けている八尋さんは泰然として大学教授のような印象を受けた。本来の知己同志の雰囲気の中に私は一夕を過すことができて楽しかったし、八尋さんを今日知るようになった私のようなものも、もっと知ることができたように思った。骨の会でも、いつも落着いていて、何処か俠骨を感じさせる人である。

骨の会は、時に自然の論戦も行われることがあるが、大抵放談、雑談が渦巻くのであるが、その中でいつも静かな人である。今年（一九六五年）の滋賀県での茸狩りや、その前のやはり滋賀行も八尋さんが行こう、行こうということで決まるのでなかったろうか。こんなその時々の八尋さんの為すことで、私は骨の一人として八尋さんを理解していた。「百八人の侍」を一読するに及んで、その処々に出て来る文章に、それ以上に一巻を通じて流れている何かに、今迄八尋さんについて受取っていたものが思い合わされて親しみが湧いて来るのである。「百八人の侍」は、映画界のことを余りよく知らない私のようなものにとっては面白く、有益な本である。私は山中貞雄を昔二三の映画を通じてしか知らず、しかもその限りで高く評価していたのであったが、百八人の侍の一人として浮々と人物を眼前に紹介され「人情紙風船」を観た頃のことをあれこれと思い出すのであった。

「百八人の侍」は一つの映画史であり、八尋さんの一代記でもあるが、その底に八尋さんの生き方が強く窺われ、叙述されている人物や、複雑な場面場面は、八尋さんの筋書きで登場し、八尋さん描くところのドラマでもある。この一本の登場人物は著者自身名附けている通り侍なのであるが、八尋さん自身侍だと見抜かれた一節がある。八尋さんはやはりどう見ても一番侍というべきであろう。

## 円熟の紳士

山前実治

同人の皆が八尋さんについて書いたのを、編集者という立場で一読した。一致してサムライとみている。たしかに「百八人の侍」という著書は大変賢い書き振りの好ましい本である。僕の名前が最後の頁にでてくるが、「百八人の侍」には何のかかわりあいもない。全くお笑いぐさの何者でもない。ただしかし足掛七年程「時代映画」は殆ど実費に近い値段、亀岡の印刷所より遙かに安く見積って毎月号を重ねたのは事実だった。営利を目的として営業している印刷屋である限り儲けるのは当然なのだが、推して知るべきで、こんなこと今更書いたりして、失礼とは知りつつも活字にしておくと、いきさつも残せるゆえ許されよ。

初対面は依田君のところで、商取引のときだった。「時代映画」編集者の木下君水島君その他雑誌の編集同人一同と一緒だった。大体映画界の人たちに、僕には幼稚な田舎者として、一目おいていて親しめない潔癖さがあった。依田君藤井君だけ位しか（小坂哲人君は斉藤英三君の紹介で知っていたが）知人はなかった。僕等には映画人はこわい人たちばかりという、いつの間にかそんな先入観が強く、僕を圧迫していた。昭和の初め頃から映画のタイトルに八尋不二の名前を相当見たし、新聞か雑誌かで、日本のシナリオライターの元老格だということも知らされたりしていて、とにかくこわい人としか、僕は思っていなかった。初対面のときも余り口数云うでなし、木下君にすべてを交渉させて、「本当に出来るのかね」と念を押された位だった。

しかし、「八尋不二シナリオ集」を出版される時から頻繁に会う機会に恵まれ、だんだん親しくなるにつれ、何の変哲もない大様な、しかもことほど左様に「円熟」した紳士であることに、僕を安心させてくれた。そして、ますます、仕事の方も快調なのもふしぎだし、すんなりした足どりには、若々しい姿勢が保たれているし、温かい雰囲気をかもしだすのも、苦労人で粋人でもあるからだろう。僕など年ごとに怒りっぽく「角熟」してゆくばかりだのに、対照的で、はずかしい次第だ。



# 悪性感冒ビールス戦線

町田トシコ

私の四肢の自由を奪った
キサマの悪党ぶり
相当な腕前だったぞ！
だが、キサマを
だれが赦せると思うか
キサマは私を
死の門前まで引摺って行った。

ビールスの野郎よ
私はもがきながら叫わぬ四肢で
自分の手で自分の頭を叩き割ろうと
キサマを何度睨みつけたか
それでよかろう悪党奴！

ビールスの野郎よ
「死ぬについてはこんなにも苦痛を通らねば

## 1

ビールスの野郎よ
キサマは全くあきれた野郎だ
三十九度五分の高熱を揮って

僕らは祝盃をあげた
おたがいに生きているということで
四十年も昔　ここに生れ
いっさつの詩集をのこしフランスへ行った
友達を尋ねたが　彼の行くえは判らなかった
終戦のころ百田宗治さんもここに住み
夏炉の歌という詩を書いた
わたしは内地にいるのでわからなかったが
この寒い北国では
夏でも炉を燃くという
もうその人もこの世にいない

一九六五　札幌にて

## 北見

草もはえない冬の原野に放された馬が
わずかに残っている熊笹の根をくって
生きていたという
むかし野付手といった野にも
今は多くの人間が集って繁賑な街になった
その周辺には　誰が行くのか
呑屋とバアーが軒を並べている
銀座街というところが燃えて若い女が死んだ
どこやらの国では　自分のからだに石油をかけて焼け死んだ人もいる
くだらない戦争をきらって
つららの下った雪の中に　みにくい焼け跡が
残っている
網走。紋別は大雪
胆振　石狩は曇りと予報はいっている
わたしは札幌より一足早いという
凍った雪の祭を見て北見を去った



## 〈骨〉放論

天野　忠　荒木利夫　富岡益五郎
佐々木邦彦　山前実治

### 小器用ではいかん

**天野**　四分の天分と、六分の努力とが画家を支えているとしたら、まともな人の四分六ではあかんわ。

**荒木**　とにかく西山氏のああいう画（大丸での西欧のスケッチ展）を見ると特に反射的に佐々木君のことを思い浮べるもんなあ。本当に何とか奮起してくれんかなあと思う。

**天野**　つまり、感銘とか感動とか、そういうものを画でも詩でも、とにかく一寸でもばっとにじませるものがなかったらあかんわ。

**富岡**　小器用にこなしていこうとするからいかんのだよ。本当にぶっつかってやらへんのやから。

**山前**　小器用さというものはいつでも直ぐしりからめくれてくるんだ。忠さんなんかに詩の場合ひょいと小器用さといったものが、若いころに、ほんのすこしあったようだが、それではいけないとちゃんと心得てひきしめていた。

**富岡**　忠さんでも詩だけでめしを食わんならんということやったら、どうなります。それはむつかしい。矢張り人を見てね、作品の格と人の正反対もあるけどね。忠さんの場合はぴったりしているよ。

**山前**　つまりね、そういう利害関係もないということは、いつでも清潔におられるという一つの条件ですけどね。

**富岡**　だからね。このごろの佐々木君をみてるとぴったりしているんだよ。それがいけないんだね。病膏盲に入ってきたのだ。

**山前**　ああそうか、逆だね。逆だ。

**荒木**　そりゃ詩書く人でも、レコードの作詞を書いてる人でも、あんなうた書いてる人は矢張り詩は書けんね。

**富岡**　あれは詩ではないよ。

**山前**　はじめっからちがうよ。

**富岡**　ジャーナリストだよ。テレビ作家だよ。

**山前**　テレビ作家とか、近頃流行の一枚書いてなんぼのコピーライターですよ。歌手でも本当の歌手じゃないんだ。TV歌手なんだから性格はできているのだよ。

**荒木**　画家の名前をどうつけるかだね。

**山前**　やっぱりそれはパン画や。日本画の色紙ね。色紙を描く人を昔知っていたが、その制作振りにびっくりした事がある。戦争前のことだが、昭和13年頃かな、四国の男でね、日本画をやっていて、パン画、つまり色紙を物凄く何枚も沢山描くわけだ。どうして描くかと思って、あるときいってみると部室一杯に色紙を並べておいて、筆を振り廻すのだ。だあっと散るやろ、そこの散ったところを片っぱしから、だだっと何かの形にしていくんですよ。なるほど、ああいう多量制作の方法もあるのだね。当時1円か80銭かだったのだろうか。

**天野**　富士山だとか、達磨さんだとかにしてしまうんやな。

### 書くしんどさの中で

**富岡**　しかしね、東京で一流の下位の画家で僕の親友なんだけど、色紙がよく売れるんだ。どんどん色紙を描いている。その話をきいてあいつ惰落しとるんかと思ったら、惰落する男じゃないんだ。ただまあ、もうかるから人の求めに応じて描いている。売

れるから先方に出すと。これはね。色紙自身なるものは惰落してるんじゃないんだ。本格的ななぐり描きみたいなもんだ。これは本筋が通っているからいいんだ。

**天野**　しかしね、なぐり描き多量製作の中で自分を鍛える人があるね。それを逆にとって。たとえばあの投書小説なんかでパッと浮き上ってね。人気作家になる。芥川賞になった。その為に各雑誌記者がわっと来て書かす。徹夜して毎日々々百枚二百枚書く。書いているうちにね。筆が馴れて来るということ、そしてだんだんいいものが書けてくる。そういう人があるよ。

**富岡**　だからピカソが皿絵描いとる。あれは実にくだらんもんだけどね。あんなもの僕は500円でも買う気はしない。まあ、ああいうもんなんだ。画家の余技じゃないけどね、そういうものは。

**天野**　だからそういうジャーナリズムを逆手に利用して、そして自分の習練の場所にしてね、練習する。毎日書く。それは注文が来なかったら誰でも書けんということやね、ところが何月何日までに書け、そのために鉢巻して徹夜して一生懸命にやるということやね。そりやそのことの方がやね、何んの注文もなしに、何年の契約もなしに、とにかく傑作を生むために、じっと考えて机の上に原稿用紙を置くだけで、何かと、きっかけとか、刺戟がなかったら書けるものではない。むつかしいよ。

**富岡**　やって見なきや、詩でも書かなきや考えてばかりいては何も書けない。

**天野**　そこのかねあいがむつかしい。金は入る。書かねばならぬ。しかも書くうちには、書くしんどさの中で自分の腕を磨くということね。

**荒木**　忠さん詩では食えんから幸福やで。

**天野**　そら、幸福なんや、そういうこっちや。

**荒木**　原稿料稼がんならんとなったら苦しいやろな。

**富岡**　きょうびそれだけの詩人ちゅうなもんはあらへんわ。

**天野**　そんなもん世界にあらへんからね。

**荒木**　日本でも数人はおるやろか。

**天野**　いや数人もおらんよ。三好達治かて随筆を書くとか、どっかの学校の講師になるとか。萩原朔太郎だって慶応の先生やった。

**荒木**　画家でも学校の教授やったり、美術教室の主任教師やったり——。そこまでの実力をあがめられるということは、それだけの実力があるからや。

**富岡**　それは万人のうちの十人位だ。

**荒木**　画家というものはつらいやろね。

**富岡**　東京あたりでやね。30位のまあ一人前にならん人がねえ、どういう生活をしているかというとね、新橋の裏当りの廊下に住んでおる。廊下だよ。そういうものがおるよ、廊下住いだよ。女房も廊下で住んでいる。それでも画が描きたいから描いとる。

**荒木**　問題は自分が画が描きたいか、詩が書きたいかという根本はそれだ。ソ連やアメリカ、中国に行ったからというて、画描いたらめし食えるかいうたらそうはいかん。

**富岡**　もっとむつかしい。主人持みたいになったんではまずいし、もう一つむつかしい。

## 近代病は社会欠陥

**天野**　話が少し変るけども、このごろ50すぎ60前という会社なら定年前後、学校でも同じこっちやけど、そういうね、いわゆる臺がたった人が、ちょっと親しくなると、こういう時の席上の話が非常にさびしがってノイローゼにかかっている人が多いね。何でノイローゼにかかっているか。暮しは割に裕福で、例えば大学の教授なら相当給料貰えますよ。子供はかなり縁着いてしまうと、そんなに何も心配する肉親のことはない。しかるにノイローゼにかかって晩はねられない。人に逢うのは面白くない。人嫌いになる。どこか深山幽谷にひきこもってという気持になる人が非常に多い。



**富岡**　近代病やなあ。

**天野**　われわれが20代になかった病気を60前後のおっさんが切実に感じるんやね。

**富岡**　これは反撥力を失うてしもうてる人や。

**天野**　それで何でやって問い詰めるとね、つまり自分は何んにもこの世に残すことがなかったということをね、いうだけや。

**富岡**　つまりそりや又能なしやわ。

**天野**　善良であって、とんとん拍子っていうのかね。何んにもワシャ残さなかった。と、それが、あんただけに云うんやけど、深夜一人目ざめてねられんもんやからつい考えるけど、ただ一介の教師として、教壇に立って学生の前に十年一日の如く同じことをしゃべってきたけど、はたしてワシの業績はというと、まあ、優れた一冊の本もなければ、何を研究して何を達成したか、何もない。そりや確かに月給を貰って妻子を養い、娘を嫁入りさせたということは結構な事やけど、俺も直き死ぬんやが、一体何を残したかとね。

**富岡**　それは大変面白いね。

**山前**　しかしね、僕思うけどね、今はじまったことではない。その人が、それは遙か以前に退屈をしているし、真面目というやつが惰性でしかなかったのではないのかな。

**富岡**　そういう真面目な人やったら、例えばソヴエトやったらね。これは豊かな生活、社会主義をもって、生きているうちに、国のため、民衆のために勢一杯やったのに、こういう人たちはただ自分のため生活のためにしかやっていなかったのだ。

**山前**　対象物ははっきりしていたのに。

**富岡**　そういう人は世の中が変ってきたから、そういう真面目な人だからセンスがある。

**天野**　本格的な人間の良心というか。ところがある有名な生物学者にその話をもちかけたことがある。その人は割り切っている。わしはそういうことは思わん。60いくつでね。わしは動物と同じように、子孫を残せば、たとえそれがぼんくらな娘であろうと不良の息子であろうと、人間が、男が嫁さん貰うて一人の人間でも二人の人間でも、自分の時代の次に残しておけば、それで事は足りる。何が自分の事業かといえば、それはそれで結構。あと業績とか何とかいうのはつけ足り。それで満足している。というのだ。

**富岡**　それはぼんくら。その人の学問はなっていないな。それは動物の世界だけのことだよ。

**荒木**　人を見て法を説く。その人は親切な人とちがうか。

**山前**　いろいろ解釈はつくものだな。

**富岡**　その人は動物学的人生観をもっているから、ノイローゼなどにはならんわ。

**山前**　退屈したら一番、およそつまらんやろ。

**富岡**　有りうべからざることで、ノイローゼがあるなんちゆうことは社会欠陥だよ。

**荒木**　ノイローゼというもんは確かに増えているね。単なる精神的なものでなく、それが肉体としても根拠があるのだから、一つの症状だから、社会的ないろんな圧迫が人間の機能に作用して、機能そのものを弱らしている。ノイローゼというものはただ単なる精神病だとか神経だけではない。

**富岡**　ノールウェーみたいに、余り社会保障が行届いていて、ぼかんとしすぎていても困るしね。

**荒木**　肋間神経痛でも、社会的な束縛、圧迫を知らんうちに感じて、起っているのではないかな。

**山前**　現代文化なんて、アンバランスがはびこってゆくばかりだものね。

**荒木**　普通の月給貰っておりながらも、多少神経使うこともあるからね。

**富岡**　体質だよ。君は重役型なんだ。

**荒木**　そんな重役型なんて体質があるかい。阿呆な。仕事が丁稚兼書記長専務理事兼。

**富岡**　体質がそうなんだよ。あるんだよ。忠さんやったらそんなことはないがね。痔せ

型はね。なんぼ牛乳食うてもね。これ以上にはならん。

**荒木**　こう思っているんだ。周囲見廻したところ、敢て政治家に限らない実業家でも円熟するのは矢張り70才だね。だから俺もまだまだ50 60は鼻垂れ小僧だと思うと、すると気が多少ちがってくるんだ。その瞬間だけでも頭の循環が良くなるような気がする。そこで何糞という気やな。

**富岡**　いつ死んでもええと思っとったら一番いいんだよ。

**荒木**　それを思うと、さっきの友人の話ではないけど、一体何をしてきたんやと思うのや。そうすると何もしていやへんやないか。過去何もできなかってもこれは仕方がない。

**山前**　未だあるんだと。

**荒木**　そう未だあるんだと。お互に第一戦争っていうものが実際にあるのだもん。

**山前**　これはとてもお話にならない。戦後20何年経っても未だ戦争中だもの。アメリカの恩恵に依存していて平気なんだから。それで動いている。

**荒木**　財界でも。何でも。

**山前**　昔だったら内閣組織したら、伊勢大神宮に報告祈願にお参りしたのが、今度はアメリカにお参りして、何かしら握手の中で、独占資本の都合のいいような契りがかためられるらしい。

## 詩・神・信仰について

**山前**　佐々木さんは詩を書かんということにおいて僕はいけないと思うし、詩精神というものがあるのだから、それは大切なことだと思うのだ。要するに詩は書かねばいけないということですよ。

**荒木**　画家は詩によって触発されることはあると思うが、詩に逃げこむといけないしね。

**富岡**　しかしね、詩をやめて、本当の画をかこうというのなら、それはそれでいい。マネーでもいいやろ。

**荒木**　そんなことできやしない。詩のないマネーってどんなものやということになる。

**天野**　依田君でも佐々木さんでも同じことだと思う。次元は。依田君はあの四分六が逆なのだ。この人は四分六だ。それかとてわかりやへんが。

**山前**　その四分六に微妙なものがある。

**天野**　依田君に此の間もいうたのや。お前は詩は下手やと。第一は便通をよくすること。第二はインスピレーションというものを非常に大事にして、拝み奉ること。第三はいささかの煩悶と、羞みを持つということや。そのことをいうたのや。

**富岡**　それ依田君には合うわ。

**山前**　僕はその煩悶と羞みを置き換えるがね。何故（why）。そこが僕と忠さんとの変ったところだ。この人は羞みだという。

**富岡**　そのことをはっきり云える人を羨しいと思うな。

**天野**　依田君にはその羞みはない。

**荒木**　いわゆるこれが天野忠詩論のね、価値あるところだ。便通を良くするということはいいことじゃなあ。

**山前**　それは矢張りインスピレーションもありますよ。

**佐々木**　僕はこれがインスピレーションであるというようなことは云えないのだ。

**天野**　それはあなたは余りにも寛容と調和の持主だからだよ。（一同笑い）それは佐藤だよ。

**山前**　忠さんという人はなかなかふっと最近大変穿がったことをいいだしたからね。

**佐々木**　忠さんはいやがらせの年令となったのだね。

**山前**　つまりそれや。いやがらせをいえるようになったということは健康になったという証拠ですよ。今まで云えなかったということは、自信がなかったからだよ。羞みだとかいっていてね。

**天野**　今日は依田君の悪口いうぜ。わしは出



席しているのだよ。欠席しているのではないよ。依田君の段でゆこうぜ。百田宗治氏のことを思い出すと依田君は矢張り商売根性が逞しい。

**佐々木**　西山氏とこの間も話したのだが、画に対する考え方はわれわれと違うんですよ。

**富岡**　ちがうなあ。

**荒木**　西山氏とあんたと？

**佐々木**　しかしつきつめてみたら同じなんだ。

**天野**　詩の中でね。神様の神ね。神よとか神様ということばがでてくるやろ。それに対しては警戒しなければいけないと思うね。わたしは若い人達から時々云われるけれど、神様っていろいろ考え方があるのやね。まあわれわれ無神信心者はそうは思わんのやけどね。片瀬博子式のね。カトリックの神さんで、他人が神ということばを使ったら怒られる。自分だけの神さんと思う人があるのだね。そういう人にね。神の使い方の批判などしたら目の色変えて叱られる。この間若い四回生の女子学生に神よということばを無雑作に使うているけど、すくなめに使うたら効果的やと何気なしにいうわけやな、そしたらわたしは神ということばは、未だこれだけ使っても使え切れませんと反撥してくる。そういわれたら、その人の神さんは、わたしたちの考えている神さんとは違うのだからね。余り変な批評したらこわい。大学四回生の女の子が神よといって使うのは、仇や疎かで書いているのではないのだね。われわれには余りにも粗末に使っているようにしか考えられないのだ。

**富岡**　いやらしいね。しかし君は若い。

**天野**　年寄りはそう云うのや。恐る恐る云うたのや。それにも拘らず神という固定観念が書き切れないほどあるのや。

**佐々木**　どういうもんです。

**天野**　抒情詩で、巧いのです。六年や七年もやっている人なのです。詩の形は巧いのだけれども、本当らしさがないのだ。牧師で遊びなのだけれども。

**富岡**　聖書の一節だね。聖書は詩ですよ。

**天野**　教会へ行って、教会音楽などで、うっとりしながら、自然と初歩からずっと深く深く入ってゆく道程にある人にね。そういう人に、うっかり神よの神が多いとか、こんなとこへ持ってくるのはいかんとか技巧上のこというたんじゃまちがいですね。初めはキリスト教音楽、教会音楽で、気持ようジャズよりもその方がいいという高尚な意味で初歩で入ってきて、だんだん説教きいたり、本を読んでいたら、あたりの信者からいろんな影響を受けて、本格にすうっと入ってゆく道程の人ね。それでない人との見分けはむつかしい。

**富岡**　女性ね。女性はあれだ。憑かれ易い。

**天野**　われわれは無信心者でしょう。だからあなたは神という資格があるか式に、ぼんとやられます。

**富岡**　資格あります。

**天野**　それは老人のいうことや。

**富岡**　ちがうわ。老人でも何でもその論理はそうや。

**荒木**　元気やな。これは。

**天野**　びっくりしてるのや。わし。

**富岡**　その人はね。神を忘れなければ人間は完成しないですよ。

**天野**　そこまでの決意はそれはわからん。

**富岡**　可憐なお嬢さんだから。あはっはは。

**天野**　可憐でしかも熱心でね。

**富岡**　バッハはね。どんな人間性をもってね。にぎみでているその人間なのか。音楽なのかわからんが、バッハ音楽を一生懸命ききなさいと。

**天野**　そんな高尚な理論はわしはようわんわ。

**山前**　神っていうようなものはむつかしいやろね。

**富岡**　そんなものはないですよ。神っていうようなものは。

**山前**　ないという人と、あるという人とある

から、むつかしい。

**荒木**　ないからこしらえることができるのだ。

**富岡**　ないからあるんだ。

**山前**　ないからこしらえられるんだ。こまったものだ。神ってあるのか。ないのか。

**天野**　神を構成するものは矢張り人間の悩みであるとか、依りどころが何処にもないとか、そういうものが寄り固まって、神というものを拵らえているともいえるのだ。素材としては。

**山前**　その中にね。男性だけではない。勿論女性も対等にでてきますね。それで神というものが、男性だけのものではない。女性だけのものでもない。神は一切のものだ。

**富岡**　人間がその偶像にたよらなければならない弱さをもっている人だけが神にたよるのだ。

**天野**　偶像と知りつつ信仰する。これは一番強い。盲目的に只神様とかそんなんじゃないのだ。

**富岡**　偶像と知りつつ信仰するのは矛盾よ。

**天野**　矛盾だけれどもそれは一番強いと思う。

僕は詩を書いているけれども、詩の実在、そんなものはあらへんやないか。活字しかないのだからね。しかし詩そのもの何といっても詩（ポエジー）は信じているよ。同じことですよ。

**富岡**　それは違いますよ。詩は摑んでいるよ。詩は摑んでるとは心で摑んでいるだけ。

**富岡**　神を否定する精神が詩を生むこころなのだから。

**天野**　いや神を否定せずに詩を摑むこころもある。視野を広うせんとあかんわ。それは余りにも哲学的すぎるわ。

**富岡**　いやいや。矛盾だよ。二元論だよ。

**天野**　二元論をつかむということや。

**富岡**　つかむということはインチキだよ。テクニシャンだ。（笑）

**天野**　テクニシャンといわれたら弱いよ。

**山前**　成程。なんかこうわかるような感じがするな。おふたりの云わんとするとこ、わかるよ。真中っての生ぬるいのだけどね。本当わね。

**富岡**　僕の云わんとするところは生の人間。忠さんの云わんとするところは詩という芸術の世界だから、それはわかる。

**佐々木**　こういうことを僕はこのごろ山に登って感じるんだけどね。信州のアルプスで雲の平が好きで、よく行くのですが、二日がかりでないと入れないとこです。そこへ行ったら、いまそこにいろんな名称をつけているのだけど、非常に自然庭園が多くさんあるんですよ。何千年何万年と風雨にたたかれた石と池塘がある。水溜りがあるのだ。それも何万年かかってできた池がある。その水が澄み切っているのだ。そんなやつを見ていると、ここらで名匠が作ったのだとか云っている庭園なんか見られたものではない。くだらないものばかりだ。

**富岡**　それはそうだろう。それは本当の生の山なんてものは。僕は山男になろうと思ったこともあるんです。山には神秘があるし、もっと人間よりも強い力がある。

**佐々木**　お前馬鹿みたいに山にばかり登ってるなと云われますが、登る度にいろんなものを発見しますよ。穂高の岩壁に喰らいついたときには、これは何十万年かかって削りとられたその鋭角だけが残っているんだ。それが天と地を支えている稜線だけがあるんですよ。それを何遍登ってキャッチしようとしてもそれが捕えることができんのですな。行けば行く程ふるえるな。これを信仰といわれれば別だけどね。

**富岡**　いや未だ信仰は足らん。山は凄い。しかし山は惰落したな。山を人間が惰落させた。

**佐々木**　いや僕はそうは思わない。ドライです。人が惰落しとるので、山は惰落していない。

（文責　山前実治）



## 山前実治

### 袋

1

レインコートのポケットから袋をとりだす。
そのレインコートを　こまかく折り畳む。
その袋に入れる。
そしてオーバーのポケットに　ふくらませる。

2

ひとにあげると　よろこばれるといい。
ひまさえあると　大きいの　小さいの。
いろとりどり　いくつもいくつも。
袋を縫っている　おかあさん。

### 袋

わたしは　いまここに。
やすらいでいるすべをしりました。
おかげさまです。　おかあさん。

### 太陽がはじけでて

すれちがいにならないのは通じ合う善意。貧寒な鼓動を断然熱い躍進へ呼びもどし、重い足をはずませるのだ。おびただしい足どりのなかから、赤いひとすじの声の必然の美しさよ。至上の輝やきと若さを忘却におきかえないために、会うという真実がある。強い雨が鋪道をたたいたが、一瞬のうちに太陽がはじけでて、そして呼びとめたのだ。

十字路は整然としてうごきをやめない。

### しあわせ

しみじみ　しみこむ。
うみのそこへ　とけてゆく。
そんな　せつな。

# 骨

28

# 骨 28 目次


| | | |
|---|---|---|
| 日録 | 冨岡益五郎 | 4 |
| ルフトハンザで | 八尋不二 | 6 |
| 霜の朝 他一篇 | 町田トシコ | 8 |
| 北方の人 | 安藤真澄 | 10 |
| こなゆき他一篇 | 杉本長夫 | 12 |
| 生活 他二篇 | 山前実治 | 22 |
| 梅棹忠夫君の profile | 同人 | 14 |
| 表紙 | 荒木利夫 | |
| カット | 佐野猛夫 | |


(27集の表紙題字は西山英雄君でした。訂正します)

## 同人


荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三辻田（呼）七八―一二五七
安藤真澄　京都市中京区御前通丸太町下ル（〇七五）七七―四三五三（伊佐方）
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八―六三八四
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇六）二〇三―一二〇一
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五八―六九八三
佐藤辰三　京都市左京区下鴨中川原町六（〇七五）七八―一四二〇
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九（〇七五）七八―二四七八
杉本長夫　彦根市丸ノ木町三六（〇七四九二）二―五〇一七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷一丁目八七〇
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八（〇七五）五六―三〇四二
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町（〇七五）五四―六〇九〇
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八―二五〇六
山前実治　京都市東山区南梅屋町（文章社）（〇七五）五六―一六一七
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八―〇七九六



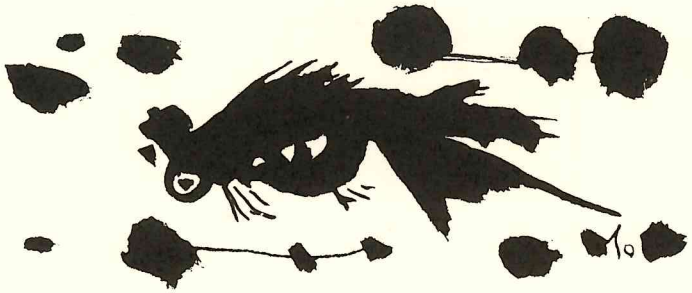
骨 28 号　価 ¥100
昭和四十二年六月二十五日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話（78）〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います。
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話㉒四三八二


28

# 骨

No. 28



1967・6

同人の顔　　梅棹忠夫　　撮影 依田 義賢

## 梅棹忠夫君の Profile

### 梅棹忠夫の片鱗

大鋸　時生

ぼくを〈骨〉に、はめこんだのは梅棹忠夫である。おもしろい仲間ですわ。あなたなら、あいまっせ。そんなぐあいの推選の言葉があって、それに依田義賢が合槌をうち、ぼくが、ぼうと燃えた。かくて詩人の集りである〈骨〉に詩をものせぬ同人が、ふたりとなった。梅棹とぼくとである。もっとも梅棹は、ひょっとしたら書くかも知れない。少くとも、あんなもん、へっちゃらや—ぐらいの気はありそうだ。ついでながらぼくは、活字にこだわり視覚で勝負しようとする傾向の詩作は好きでない。したがって、当分は傍観者でいたい。

ところで、梅棹忠夫の全貌をとらえることは相当に、むつかしい作業であろう。小さく叩けば小さく鳴り、大きく叩けば大きく響くというのが東洋豪傑の風とされたが、梅棹を豪傑といえるかどうかは別として、そんな趣きを匂わせていて、自称〈湖賊の末裔〉の面影がある。そんな梅棹の片鱗を採集したのが、次のひとくさりである。

—ある座談会から。

モゴール探検記が出たのは

梅棹　一九五六年。

**a**　あれには刺戟を受けましたね。梅棹先生は、たいしたアジテーターや。道を誤やまらした元凶のひとり（笑い）

梅棹　責任を負わんならんな（笑い）

—ある座談会から。

梅棹　進化論が、なぜ日本に出てこなかったか。私なりの仮説でいうと、日本にサルがいたからや（笑い）サルがいないため、人間と動物の間に大きなギャップを設定した西洋では、それを埋めるために、進化論みたいなものを必要とした。日本にはサルがいる。毛が三本足りない（笑い）だけで、人間に近いちゅうことを、ちゃんと知っとった。文明国でサルがいるのは日本だけですねん。

（**a**　ほう、そうですか。

**b**　ほんとかいな。

**c**　梅棹先生はサルどしでしたね。

この愉快さわまる座談会は、ぼくを大いにうれしがらせた。これからの梅棹忠夫の言行を、もっと気を入れて注目してやろうと決意した。

### あらべすく・ど・うめさお

依田　義賢

不勉強というか、世間知らずというか、私はその時まで、梅棹忠夫氏がどういう仕事をしている人か知らなかったのです。その時というのは、NHKのBKで、ラジオ社会時評という番組に、大鋸時生、梅棹忠夫、依田義賢の三人がメンバーに、選ばれた時です。知らないと云えば、大鋸時生氏という人も、知りませんでした。こんなに、知らないで、社会時評もあるまいと思われましょう。まあ、映画人が、知ってる範囲での、常識で、話し合えばよい位に思っていたので、大鋸氏は共同通信の大阪支局長で、演劇評論家で、特に、文楽については、造詣の深いことをその時知り、梅棹忠夫氏は、今売り出し中の、少壮（失礼）文明評論家であると知りました。さて、はじめてお目見得の顔合せ、大鋸時生氏のもじやもじやの髪の毛を（まだ、色は黒かった）無雑作にかきあげた、大柄な人は、大伴の黒主とか時平とかいうのが、頭にうかんだのはその容貌が怪偉であったせいか、大鋸という名が大のこぎり、大鉈という連想になり、大鋸の大が、大黒の字を誘い出したのかもしれませんし、時生が時平となったのかも知れません。もっとも、二回位、逢う頃にはまことに好人物でやさしい眼をしている、ええおっさんだとわかりましたが。さて、梅棹氏。待っていると、遅れて来た彼は、白皙の美男子で、豊富な頭髪は黒々としています。小柄で、やさしい京都弁を歯ぎれよく喋りました。京都弁が歯ぎれがいいというのも、変な話ですが、彼の京都弁はたしかに歯ぎれがいいという感じがするのは、なにをいうにも、絶対自分のいうことは間違いないという風な、独断的な鋭い批評をずばりというからであったのでしょうか。この人がすぐに、佐々木小次郎であると連想したのは、何故だったか、梅棹の棹が、物干棹の棹に通じたのか、爽やかな寸言がすばやく鋭くて、「ええ恰好しい」なところが、さっと空中の飛燕を斬り落すところに、似ているのか、たしかに、彼は一言云ってのけると、物干棹をすうっと肩越に鞘におさめる小次郎のように、自分の言葉に、どうだ、「うまいこといいまっしゃろがナ」と、満足したような、微笑を口辺にうかべました。然し、好漢、小冠者、よい奴、という、いい感じを与えます。大鋸さん、梅棹さん、御免なさい。生意気なわたしは最初にそんな風に、感じたんです。二回、三回と、逢って、話してゆくうちに、大鋸氏は大変な博識でこりゃとても、勝てんと思いだし、梅棹氏は若くしてモンゴルへの新婚の夫人を連れて、探険に出かけた、端貌すべからざる秀才であると知り、尊敬してしまいました。社会時評番組が予定の期間を終って、我々は解散することになったのですが、どうも、別れ難い気持になり、「骨」の同人拡大の話が出た時私は両氏を推せんして、同人に迎えました。それからはすっかり、われおれの仲になってしまったというわけなんです。

どうも、弱りましたな。小生はそれから、梅棹忠夫の、大ファンとなり、彼の合理的な考えに賛成し、カナモジのタイプを打つのに習って、すぐタイプを買い入れ、彼の妻無用論に喝采し、〈なんたる軽薄さ〉いや、私は、大体、彼の影響を受け易いところがあったのです。新しがり屋ですから。しかし、梅棹忠夫の文明論については正しく理解出来ている訳ではありません。例えば、彼は世界連邦提案者である。或は汎神論者である。「梅棹氏曰く。違いまっせ、かなんなあ、もっとすごい文明観ですがナ、わたしは神ちうなもんは信じいしまへンがナ」そんな風に思っている。私は成吉思汗のラジオを書くことがあって、梅棹氏の教導を得ました。その時、きいた、遊牧文化と農耕文化の比較、乾燥地帯と湿潤地帯の区分けなどの史的展望は大きい教示でありました。彼にはトインビー流の（といってもあんまり知らないんですが）西欧文明滅亡の展望があり、東洋文明についての、乃至、未開民族の必成長抬頭の展望があるという様に受け取り、間もなく、東南アジアのラオスあたりへ調査旅行をして帰って来た彼が、社会主義国の国際共産主義運動の分裂必至を話してきかせた時、哀しくも東西文化の分裂を感じ取ったものでした。それよ

り前に、はじめてヨーロッパへゆき、イタリアに旅した私は感想を詩集「ろーま」にまとめたのでしたが、乾燥したローマに、異常なほど惹かれた私は、この文明文化の体質が乾燥地帯に石のように築かれた論理的なものだと承知したのでしたが、その時、梅棹氏は体質的に（或は経験的に）乾燥したものを好み、区分けしたような組み合せを好む人のように思っていて、彼の論調のあまりの劃然さに、不安を覚えはじめました。つまり、私は、分り切れることが、淋しくなって来たのです。

私が乾燥に惹かれましたのは、谷崎潤一郎の陰影礼讃などに参っていて、もともと、浸潤を好む、或は思想に弱い人間であったからかも知れません。この頃、わたしは、大変民族だの民俗だの土着だの風土だの、和辻哲郎ばりの（これもはなはだ浅薄な理解ですが）考えに落着いて、乾燥したものを嫌う風になっても来ていて、つまり農耕文化優秀説風になってるのですが、梅棹忠夫ももし、本来、浸潤種族の人間であったとしたらと、仮定すると、どうだろうかと、思いつき、これはなかなか興味のある命題だとたのしくなりました。彼は本来、非論理を好み、非合理な思考と世界を愛する人間であったとしたら、彼にはその反対に見える表面との葛藤があった筈だからです。

この正月、彼の写真を撮影に行って、「あんたは教主的なところがあると思わはらしまへんか」というと、胃かい瘍の危険にさらされている彼は、あるかなしかの微笑をたたえ「別に、思いまへんなあ。そんなとこはおへんで」と云った。これは、彼がかつて、日本探険で「大本教」を調査、点検したからの、私らしい、連想であったのだが、彼にはお筆先にはなれないが、（女がお筆先になるものですから）お筆先をかついで、才気縦横に布教宣伝をして次代教祖に直るような、ところがあるように、思えてならない。（梅棹氏曰く、それはつまり、ワタシにヤマシ的な才能や大風呂敷のハッタリがあるさかいということどすか）梅棹忠夫は、私にモンゴルの大草原に現われる九曜の太陽のことを話してくれたが、彼がモンゴルへゆき、日本の京都へ帰り、東南アジアへゆき、日本の京都へ帰り、アフリカへゆき、日本の京都に帰るように彼は雄大なとてつもない大きな風土の心から、執拗な、粘着力の強い、いけずなじめついた内面に回帰し、世界大本神のようなものをわがものにしようとたくらんでいたりしたら、まことに、頼もしいではないかと思う。

モウ、西洋はしまいどすな。
東洋人が世界を征服します。

ともかく、色のついた肌をし
　てるもンが、世界を征服し
　ますワ。
こら、しょがおまへン、
数が多おすさかいナ
魚でもどっせ卵をぎょうさん
産みよる奴は、ぎょうさん、
　喰われよっても、
結局は、勝ちますなあ、
思想ちゃうなもんは、
そら、なん時でも、
いろいろ、いえるもンどす。
大したもンやおへん
あんなもンを唯一みたいに
いうとるのは、おかしおす。
お念仏みたいなもんどす。
となえたら、ありがたいもん
　どす。
いっしょうけんめいに、
文明や、文明やいうて、
地球破滅するようなもん作り
　よりますのや
あきまへんなあ人間ちゃう奴は
共産主義、あンなんあきまへ
んな。



結局のとこは、宗教どす。
世界じうが、一つの神さんを
信仰しようなあきまへんなあ。

〈来るでしょうか、そういう
　世界〉
さあ、どうどっしゃろ、

（一九六七・三・一四）

## 或る一面

八尋　不二

梅棹忠夫は「骨」同人群の枯骨老骨の間に在って、若緑鮮やかなる新樹の趣がある。

さしずめ「赤穂浪士」でゆくと、彼は大石主税であり、矢頭右衛門七といった役どころで、むかし私たちシナリオの方の仲間では依田義賢が、そういった前髪の役だったが、その依田君も今では下腹なども出て来て原惣右衛門級になってしまい、若い花形の座は、今や梅棹君の独占ということになってしまった。

京大人文科学研究所には、東方文化の昔から随分知人も多いが、梅棹君とは同じ「骨」の同人でありながら、ずっと顔を見る機会がなかった。

だが、顔は見なくとも、彼とは因縁があった。話は十二年前に遡る。

昭和三十年五月、私たちの仲間で、「時代映画」という雑誌を発刊した。その創刊号の巻頭論文の執筆者が梅棹忠夫で、その表題が、ナント「時代劇からチョンマゲを追放せよ」というのである。しかも、この号の編集テーマが、時代劇は亡びるか、というのだったから、この表題はかなりショッキングな、思い切ったものだった。

この表題からは、聊か鬼面人を威すといった感じを受けるが、内容は意外に着実で、いかにも社会人類学者らしい目のつけ方で、なかなかの卓見だった。いま、その論点の二、三を拾ってみると。

――チョンマゲに、こっけいと醜怪さを認めるような人達が、現に増えつつあり、それは今後とも増えこそすれ、減ることはあるまい。それは単なる個人の好き嫌いの問題ではない。集団の心の動きであり、世相の流れである。日本人は、わが祖先の頭にのっていたチョンマゲをも、次第にケッタイな風習と感じつつある。その事実を無視することは出来ない――

――時代劇からチョンマゲの醜怪なるコッケイを追出す方法が二つある。その一つはチョンマゲを結わず、封建制もなかった時代に取材すること（中略）その二は、文字通り追出すのである。徳川時代でもかまうものか、チョンマゲをやめて、その代り何か他の形を頭にのせる。何をのせるか、それは衆知を集めて、現代人の感覚につながり得る形を発明する――

――映画は新しい歴史の創造であって欲しい。日本歴史の真実は、醜怪と、息苦しさと悲惨と忍従とに満ちていたかも知れないけれど、それをそのまま自然主義的リアリズムで克明に描かれたのでは、現代の国民は意気消沈するだけだ。歴史家の歴史と違うのでもかまいません、われわれ国民に生きる勇気を与え、前途に希望をもたせるたちの新しい歴史が欲しいのです。――等々。

以上で論旨は伝え得ていると思うが、これが今日の如き映画の衰頽（勿論時代劇も）を見る以前に書かれたことに意義がある。当時、私は編集の責任者でありながら、お恥かしいことに、本職の方が忙しいので、この論文を読まなかった。今度、この

プロフイルを書く為めに、急拠旧稿を引張り出して読んだのだが、彼の論旨は、今日の映画界に於て、愈々適切に問題点を衝いている。

梅棹論は彼の万能選手的な多方面の活動振りから推して、自ら群盲撫象図を描くことになると思うので、名著「日本探険」その他の業蹟には敢えて触れず、ここには知られざる彼の一面のみを記すに留める。

（一九六七・一・一）

## 「サバンナの記録」を書いた人のこと

冨岡益五郎

梅棹君から近著「サバンナの記録」を贈られ、大変面白く読んだ。これを基にして「骨」に梅棹君のプロフイルを書かねばならない。ところが近頃単行本として刊行された「文明の生態史観」が世評を呼んでいる。読まずに云うのはおかしいが、学術論著である「生態史観」と「サバンナ」とは極る趣を異にしたものではないかと思う。云ってみれば「サバンナ」は「生態史観」のあぶくのようなものでないだろうか。彼を語るには、だから「生態史観」を読まねば済まされぬ気がして、数軒の本屋に行って見たが何処にもなかった。借りて読むにも、もうぐづついていては間に合わないと思うので、これを抜きにして書くより仕方がない。山前さんは「サバンナ」よりも「史観」には詩がある、と云っていたから想像がつく。プロフイルは学術的批判でなく、脱線することも許されるであろうから、ここで気楽に云わして貰おうと思う。

「サバンナ」はタンガニヤの民話集と云ってもよいのでないか。その意味で私には大変面白かった。彼の文章はうまい。前に購読し、手本にある「日本探検」と「モゴール族探検記」をもう一度取り出して読んで見たが、こうして三冊の本を次々に読んでゆくと、彼が文筆家であるという面が浮び上って来る。梅棹文学と云い得るものを持っていると云っていいだろうと思う。彼は、人類学者で、アルピニスト・探検家で、文筆家だ。アルピニスト作家と云われている人もいるが、アルピニストには名文家が沢山あるものだ。これは因縁関係に結ばれていて面白いことである。彼もアルピニストということから云えばその一人である。ところで、人類学者、アルピニスト・探険家、文筆家という多面的な人間形成を遂げた彼のゲネシスを想像風に描いて見るのも面白い。

京都の西陣の方の書肆に早熟な坊やがあった。幼少にして文学を知り、腕白盛りにも世の常のいたずらなど余りせず、本許り漁っていたと想像する。その中でも坊やの汚れない幼い魂を捕えたのは民話であったらしい。誰にでもあることではある。お伽話は童心の空想力を延ばし、ひょっとすると理性への目覚めの動機になり、滑らかな文章を作る素地を養う。この坊やにはどんな影響があって、複雑な精神構造を形成するに至ったか、それは他から穿鑿できない個人の魂の秘儀だ。多分段々と、民族学への興味、山―この奥には何かしら秘密なものがある―への愛着、これらが複合して人類学への志向と発動して行ったのではないか。

「サバンナ」に盛られている一つ一つの小話はわれわれのなじんできたお伽話を形作っている主題と同類のもののような気がする。しかし、前者のは現実の記録であり、後者のは山の端にいつも懸っている雲のような、ふわりとしたものである。お伽話の場合、昔々…という前句で始まり話者は顔を出さない。「サバンナ」は勿論記録であるから話手が梅棹君であることがはっきり出てくるのだが、物語りの中の一人物であるように霧がかかって了うふしもある。お伽話は、全体に不条理なものがスープの素のように溶けわたっているが。「サバンナ」を読んでいると、おかしな、ふしぎな、おどろくべきという風な言葉がしばしば出て来て、文脈の次元を一寸変えて見せると思えるのに、この転換は中々妙である。彼の文章には「サバンナ」だけではないが、「サバンナ」には目立って、感動したというのが出て来る。この所に、人類学者・探検家梅棹君の全鼓動が聞えるような気がする。幼少の時、民話に養われたあの感動の持続的成長であろうか。

都会のまん中で、礼儀正しい端正な服装をいつも乱さず、慇懃な態度を崩さない―パラドック的で却って彼らしいのである―彼の秀麗な顔貌の中に光る眼差しは「明日からは、また新しいアドヴェンチュアがはじまる」のを期しているようである。こうして彼の行動は、蒙古、樺太、西南アジア、パキスタン、アフリカ、日本内地にも段々半径を拡げてゆく。これは単なる探検旅行ではなく、彼の「思想の表白」と自ら述べている。これらの行動を拡げることによって得た事実を民話のような文章で飾って見せる。面白いことだが、他面学術報告書の方も見たいと思うのであるが、市販されないから一般には無理かとも思う。

近くフランスのスペイン寄りのかくれた孤村へ本年の定着を、京大人文科学研究所の海外調査のメンバーとして、計画中のことを新聞紙上で見た。今準備のため山積する書物を喰い散らしていることと思うのである。

## 活動力のある人

佐野　猛夫

若々しい童顔をいつまでも定着させるこの人、精力的な活動力もこの辺に秘密がありそうに思える。ものごしさわやかに、ニタリと笑って口をつく京都弁もどうしてどうしてその中身はてごわい。モンゴル探険にアフリカ、サバンナへの旅、東南アジヤ、アメリカ、更に近くフランスへと民族の探索の旅ははてしない。ブワナ梅棹、サバンナではきっとこう呼ばれていたことだろう。この親愛度がめざす収獲への接点ともみられるからである。

民族と自然の摂理、その歴史に文化に足をふみ入れ世界史観の新らしい視野の展開へと歩をはこぶ、それはなかなかの仕事だろう。しかしこの人の叡智と瞑想はきっとなしとげずにはおかない。そして論文にエッセイ、随筆に梅棹論の集大成へと歩は大きくはこばれていくことだろう。著書を読みながら私もみつめる一人である。

## 『サバンナの記録』のこと

杉本　長夫

「骨」の同人でありながら、梅棹氏に初めて遇ったのはごく最近のことである。私は彦根の住人ではあるし、彼はマスコミの寵児なので同人の会合でも行き違いになったりしてこれまで顔を合せる機会がなかったという訳だ。

初対面のとき、かねて「骨」二十七号の深瀬基寛氏追悼座談会の記事で、深瀬さんが三高時代の彼のことを、「好顔可憐の美少年」という風に語っておられ、そのイメージが頭のなかにあったので同人中並ぶものなき端正なその容貌に接しても別に

驚きはしなかった。

それから間もなく『サバンナの記録』が送られてきた。昭和四十年十一月、朝日新聞社刊行の本である。これは梅棹氏が京都大学の学術調査隊の一員として、一九六三年の夏、東アフリカに赴いたときの記録である。著者はこれを紀行文とは云わず、現地の未開の人々の人生記録だとことわっておられるが、それはともあれ大変面白い本であることは間違いない、素材そのものの珍しさもあるが、未開の地方の人々の生き方に興味はつきない。

本当の自分になることを恐れたり、心の奥にある本当の感情を殺してしまうのが現代人の傾向であることをノーマン・カズンズがシュワイツアー博士を論じた一文の中で述べていたのを覚えているが、その現代文明人に比べて、ここに紹介された人々の何と純真素朴で自個に忠実なことであろうか。

とりわけ、二番目の女房を買ってその金を分割で払っている漁師の話、逃げた女房の名まえを枕に書いている男、御人好しの開拓者ヒミデイの並はずれたサービス精神、無邪気な反対呪術の話、贈りものを受けた彼らが、気にいらないからといってその品を投げ出した話など、その例はいくつもある。フイクションならざる面白さが充満していて吾々を飽かすことがない。それに文章が簡明で歯切れがよいので楽しく読み通すことが出来た。

## 梅棹さんのこと

安藤　真澄

梅棹さんは、私が骨に入ってから未だ一、二度しかお目にかかっていない。それで梅棹さんのことは骨の前からの連中は良く知っているだろうが、わたしは骨に入ったのも遅くからで、梅棹さんのことは良く知らない。このプロフイルもほんの素描に過ぎない。去年の暮れに朝日新聞社から出た「サバンナの記録」という本を梅棹さんから贈られて、読んでみて大変面白く思った。そこに梅棹さんの姿を思い浮べて愉快だった。

梅棹さんはわたしが紹介するまでもなく、理学博士で、京大の助教授であり、社会人類学専攻である。著書は、この他にモゴール族探検記(岩波書店)、日本探検（中央公論社）等があるが、私は未だ読んでいない。いつか佐々木邦彦画伯の作品を、東南アジアのどこかの大使館で見て、大変懐しく思ったということをいって居られたと、佐々木君から聞いたことがあった。梅棹さんが、どうして人類学を専攻されるようになったか、私は未だ聞いていないので判らないが、人間、世界の人類に対して深い愛情を持っていられる人ではないかと思う。

梅棹さんは一目見て京都生れらしいことは判る。（私も京都生れだが）その態度の柔かそうな肌ざわりを感じる紳士であり美男子である。従来、京都人は関東の人にくらべて、おとなしく優じう不断だとか、肚が黒い、彼奴は何を考えているのか判らないなどといわれて来たのだが、それは京言葉のニュアンスのせいではないかと思う。なんだか肚にこもるので、あいてはたよりなく思うのだろう。それだからと云って肚黒い人間ではない。むしろ、お人よしである。また関東でいうほど土俗的なにおいはない。灰汁はぬけているつもりである。あくとは何かということであるが。

京育ちの梅棹さんが、アフリカの奥地でしかも未開地の土人や、野蕃なけもの等を相手にいく日か寝食を共にされ、つぶさに土人の生態を研究されたことは、それが仕事だといえばそれまでだが、全く生命がけのことでなかったかと思う。勿論、数人の人と共に探検されたことと思うが。

梅棹さんの著書に出てくる、タンガニイカ湖のほとり、カボゴ基地、そのほか全部をわたしは何か目に見えぬものに心惹かれて読了した。沼の辺に住む人間も、けだもの達も、一羽の鳥も、名もない雑草の一輪にも太陽の光はそそがれて、広い意味では同一な自然の恩恵のうちに生育しているのである。これはアフリカの一部で、全部ではない、日本でいえば平家の落ち武者たちの昔住んでいた僻地のようなところだと、ことわってある。

わたしは一昨年北海道にいったとき、札幌で会った詩人の更科源蔵君も、亡びつつあるアイヌの旧い歌詞を集めるのに懸命であった。それは日常生活のアイヌの祈りのなかの唄のようなもので、アイヌと生活を伴にしなければとうてい判らない文句なのである。彼等には古代から文字で現すというものがない、それらのものは皆、口伝で残っているに過ぎない。梅棹さんが、社会人類学に興味を持たれたのも判るような気がする。詩は書いてないと、遠慮されているが、梅棹氏は詩人である。

## 優位な染色体

山前　実治

かれは、つねに「おれは海津あたりの湖賊の子孫だ」とだんじていいはなっている。そういえば先進老大国だった英国の祖先にも海賊がおおくて、優秀な侵略国であったことは、まぎれもない史実がものがたってきている。ぼくたちの〈骨〉の一人梅棹さんも、いまやマスコミの優位な寵児である。かれがすこしばかり、いや、おおいに湖賊のように、または海賊のように頭脳の切れのよさには、まったく驚嘆のほかはない。惜しいことにも昨年の夏亡くした同人の深瀬さんが、いつも「可愛いらしいやつだった」と、かれの三高時代の教えごのことを、目をほそめておっしゃって、「梅棹君はだいぶんこのごろ横道へそれすぎていていかん」とも、ぼくに口洩らされたのをおぼえている。そのときは、学者ってそういうものなのかなあぐらいにたんじゅんなぼくには、わからないままききながしていたのであるが、いまもおもいだされるのだから、わけはしごくたんじゅんなこととはちがっているようだ。梅棹さんが〈骨〉にはいられたのも、深瀬さんの口添えで、たしか祇園の「銀」での例会にでられたのがはじめてで、ぼくはその時が初対面であった。〈骨〉12号（昭和32年8月10日発行）に西山英雄、佐野猛夫、荒木利夫、山前実治、深瀬基寛、富岡益五郎、依田義賢、梅棹忠夫、佐々木邦彦、井上多喜三郎の順で10人のサインが載せてある。めずらしいことで、当時の同人全員が顔をそろえたときでもあった。たしかに、深瀬さんはかれには師弟のこまかいこころづかいをもっていられたように、ぼくには感受されたのである。みなさんが、「サバンナの記録」のことを書かれたので、ぼくは別のことをメモしようとした。しかし「サバンナの記録」の〈ブワナ・トシの歌〉の片寄君は「詩人通信」に現地から絵と文を送ってくれたのでなつかしい。「文明の生態史観」は「比較文明学」の生成・消長・限界を明らかに快くし、壮大な知的構図を大胆に展開する。創見のするどさたくましさは、優位な染色体の持主のしわざなので、さらに期待はおおきい。

# 骨 30

## 目次


| | | |
|---|---|---|
| 樹木の目・邂逅 | 杉本長夫 | 4 |
| 日録 | 富岡益五郎 | 6 |
| 古い空気 | 天野忠 | 8 |
| 隧道にて | 依田義賢 | 9 |
| いたそこに | 八尋不二 | 10 |
| 拒否・鮎 | 山前実治 | 22 |
| 杉本長夫君の profile | 同人 | 12 |
| 英詩と骨 | 大浦幸男 | 18 |
| スマートな爆弾 | 町田トシコ | 20 |
| 表紙・カット | 佐野猛夫 | |


## 同人

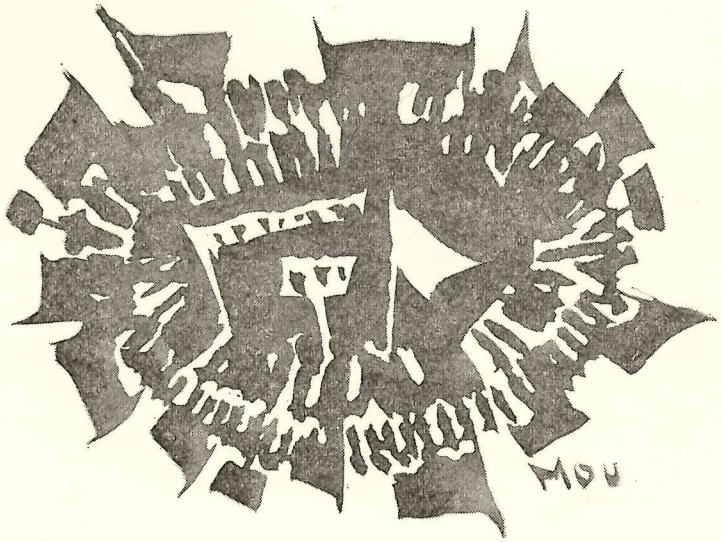
荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九一―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三（〇七五）七〇一―四七八七
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八一―六三八四
大浦幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（〇七五）七八一―二四七〇
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇六）七〇三―一二〇一
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五六一―六九八三
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九（〇七五）七八一―二四七八
杉本長夫　彦根市丸ノ木町三六（〇七四九二）二―五〇一七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷一丁目八七〇
冨岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八一―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草顔成町八（〇七五）五六一―三〇四二
町田トシコ　京都市東山区妙法院前側町（〇七五）五五一―六〇九〇
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八一―二五〇六
山前実治　京都市東山区南梅屋町（文童社）（〇七五）五六一―一六一七
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八一―〇七九六


骨　30号　価 ¥100
昭和四十三年六月二十五日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話 七八一―〇七九六　依田方
〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話 三二―四三八二


30

# 骨

No. 30




1968・6

同人の顔　杉本長夫　撮影　依田

## 杉本長夫君の Profile

### 同年同病相憐

天野　忠

私のことを「いけずで、シャープで、辛辣な批評家」なぞといったふうなことを、「骨」の連中は書いたり云ったりしてくれたが、それこそ私へのいわば「いけず」なお愛想であって全くあたらない。

馬鹿ばかしいほど年を喰ってきたが、いまだに世間識らず、人間知らずのお坊ちゃんであることを残念ながら私はよく承知している。人を見る眼なんてものは、いくら馬齢を重ねても、浅ましい貧乏の底をうろついてきても、おぞましい世間様にこつかれてきても、どうしても身につかない人間だっているものだ。私はそういう世間並の才覚を持てなかったじじくさいお坊ちゃんで終るであろうことを恥づかしく思っている。その人間がいくら親しい「骨」の同人のプロフィルだとて、到底うがったことの一つも書けるわけはない。とにかく杉本長夫とは十年余りのつきあいになるが、はっきり判るのは、私と同年私と同病のあわれを分ち持つ間柄だということである。

私の方の腎臓病は、五年余の我ながら涙ぐましい克己節制のおかげでこのごろどうやら鳴りをひそめているが、長夫のそれはまだ縁が切れぬままで忍苦の暮しがもう何年にもなる。禁酒禁煙はもとより、喰べもの、のみもの一切から塩気を断ち、全収入の三分の一とかの莫大な薬代を支払っての勇敢な斗病生活も、はたから見てしびれをきらす程の歳月を経た。とにかく、両手でかばうようにして長夫は大事に大事に命を守ってきた。その命にしがみついて生きてきた詩のことといえば、長夫の作品は昨今まるみをおびてきて、その上にその円味が病気のかげんか苦味走ってきた。酒ものまず、煙草も喫わず、女色をしりぞけ、カツオの塩辛をなめなくても、ジュース一杯で、歯ぐきまで出して長夫はカラカラと忌憚なく笑うのである。ほれぼれするほどその度胸はいい。その度胸で懸命に命をかばっている姿は更にいい。「骨」にのせる今号の写真のことで、「わしのポーズをとるのにどんな場所がええやろ」と依田義賢と神妙に顔を寄せて相談していたので、横から「便所の窓からぼんやり顔出してるとこはどうや」と云ったら長夫は臭い風にあたったみたいにプイと横を向いた。私は阿呆である。

### 杉本長夫さんのプロフィル

冨岡益五郎

何年もかつて同人のプロフィルを、出る号毎に一人宛皆で書くという定めを、度々失礼して了った。杉本氏で、この企ても最後とするというので、そんなら、うまく書ける筈もないが、失礼するのも工合が悪い感じがするので最後の乾杯を献じたいと思う。プロフィルは半ば親しい仲間内のじゃれ合いであり、紙上パーティーのようなもので、外から見れば、くさいものかも知れないと思うが仲間内では、満更槍玉に上っても不愉快なものでもないだろう。しかし



書く方から云えば、相当気を使うのである。当らぬ褒め方も、けなし方も信義に関るからである。

さて本論に入らねばならぬが、滋賀詩壇の推進者である杉本氏はやっぱり大学の先生という肌合がする。亡き多喜さんは商売をやり乍ら、生業は生業として一途に詩を作り他に余念はなかったと思うが、大学教授の詩人というものは、事何人をとって見ても、オーソドックスな詩を書こうとするものでないかと思う。何をさしてオーソドックスというか、的確に云うことはできないが、これは宿命で、杉本氏も何かそういう匂いがするのである。同じ大学教授でも亡き深瀬氏は、型破りの先生で、詩心を持ちながら詩を書こうとしなかった。だからこの意味の宿命には触れない人であった。滋賀の里人は大変義理堅い、多喜さんの義理堅さには、身に泌みて感じることがあったが、この点では杉本氏も同じような所をフト感じさせる。未だ身に泌みる事柄に一度も出喰さないが、事と次第によってそんな経験に遭うかも知れんと思う。

山前さんから厳しい原稿の催促を受けて、どうにでも早く書き上げなければならない羽目になった。骨自体何十年の知己の集りの感がするが、一人一人の関り合いがそうでない場合はやはり楽に語れない気もする。プロフィルの最後としては貧しい内容であるが、もっと作品に接することの方を楽しみにしたい。

### お長さん

佐々木邦彦

いつか橋本関雪氏邸で、詩人のつどいを催したことがある。

酒がまわると、勝手な気焔があがり「SHINI会」をつくろうといって、席をともにしたのが、依田義賢さん、天野忠さんであった。「SHINI会」を具体的にいうことは、自ら老詩人をうたいあげる忠さんなどは、いいかも知れないが、まだまだ色気の多い依田さんや、ぼくなどはちょっとてれくさい。

「SHINI会」で写真を撮ろうといって、三人ならんだところへ、わしも入れてんか、わりこんで来たのが、俵青茅さん。ここは「SHINI会や」というと「SHINI会」やて、なんやけったいな会をやるんやな。まあ、なんでもええ、わしも入れろ、と、強引だったが、なにか感ちがいをしているのかも知れんと、ともかく写真には、いっしょにおさまった。

そののち、俵さんは天国に引っ越しをしてしまった。「SHINI会」を、感ちがいしたと思ったが、俵さんがほんとうの会員だったかも知れぬ。

杉本さんが、やはり「SHINI会」員の資格があるということで、この話をしたことがある。依田さんや、ぼくら以上に色気のある杉本さんは、そんな会なんかできていても、わしは入らんと、言外にほのめかした。この話はそれっきりだが、というのは「SHINI会」という意識に、身をさらすということは、多分に肺活量にも影響することなので、誰もそれを言葉にすることを、はばかりはじめたのだと、顔をあわせるたびに、うなずかされるからである。

杉本先生はわかい。その柔軟性のある詩精神を、ぼくなどは、いつもうらやましく思っている。わかい学生にかこまれて、とくに女子学生に、人気のある講義をつづけていると、誰かがいったが、女子学生が、ぼくの講義がすてきだといって、

便りくれたと、先生がその便りを大切にしていたことを知っている。二、三にとどまらない。わかさの秘密は、案外、そこいらにあるかも知れぬ。すこぶる通俗的な解釈だが。

京都女子大で、国文の講釈をしている黒田しのぶ女史。その女史と杉本さんとの、因縁は、ずいぶん長いらしい。ぼくもいつのまにか、鼎座の会にひっぱりこまれたかたちになったが、女史は杉本さんを「お長さん」と呼ぶ。べつにあれが長い、これが長いという意味ではなく、名前からうまれた愛称である。ついでにぼくは「邦やん」である。長さん、邦やんと、なんやら助さんというのに、よく似ているようであるが、あらたまって杉本さん、佐々木さんと呼ばれるよりは、親しみがあっていい。

杉本さんはてれ屋である。といえば「SHINI会」の人々は、それぞれそこはかとない、てれ性を持している。てれ性のまま、意固地になったのは忠さんであり、てれながら、土性っ骨をきたえぬいたのは依田さんであり、てれながら詩眼を見ひらいているのが杉本さんである。ぼくなどはさしむき、てれながら画を描いているとでもいえようか。

てれ屋は座談会などで、妙にだまったり、ひどく昂ぶったりする。が、そのてれ性を見ぬいている黒田女史などは、杉本さんとの対談では、相当きわどい話を、ずけずけとやってのける。杉本さんが、防戦に大わらわになると、奇談珍談怪語畸話が、ひっきりなしにとびだす。わかいと、思わず嘆息するのは、ぼくである。これだけわかい、わかいといっておけば、このごろやや病身がちの杉本さんでも、ヨインピンなどの、やっかいにならないですむかも知れない。友情というものである。

その詩について、その人がらについては、それぞれ同人が書くことであろうが、ぼくは「うらばなし」でも書くとしましょうかと、いうと、あんまりいらんことを書きなさんなと、電話のむこうから、てれくさそうな声が聞こえてきた。

## 酒・骨の会・杉本長夫

大鋸　時生

骨のお仲間のお酒っぷりは、出足が早く、割りとお行儀が、よろしい。最初の徳利が取り上げられて、まず五一八秒のちあたりから、燃えなんとし始めるようである。

ある夜。その定刻に、早くも、かく申すぼく、佐野やんは、すでにまっ赤になって饒舌の入口に居た。天野忠さんも、盃数こそ少くとも、ご同様ぽっと頬を色づけてござった。荒木利夫のは、さあ、そろそろ赫くなってやろうかの気構えであり、依田義賢は、ひたすら適量到達をおくらせようと希ってか、ビールのコップにのびる手を、出しては引っこめている。酒豪と言えそうな、西山英雄画伯と八尋不二さんは、恐らくゆうべの酒気が残っているはずなのに、それをうかがわせる隙も見せず、にやにやとご機嫌に寸言を弄し、佐々木邦彦は、折りあらば警句を打ちこもうと、きっかけ待ちの盃を乾していた。山前は、困ったような、困らぬような持ち前の表情で、幹事の裏質を磨いてござる。ちびりちびりの独酌でいて寡黙ではない富岡の益さん。反対に盃をあけるばかりで、聞き役を楽しむ大浦教授。酒があるから、のむのだーの態度は、みごとである。

ここで町田歌骨尼さまが、ご来臨なら、盃に、ぼうふらをわかせつつ、細い目で、面々の勝手気ままな放談を笑ったり、時には、ちりめんじゃこを刻んだ、ちっちゃな口を、とがらせて、おたしなめの言葉があろうところ。同じおたしなめ好き類でも、梅棹忠夫ならどうして、逆説めくが、このご女性のは、やはり、お念仏くさい。なりはいというもののこわさであろう。

さて、杉本長夫のは―こうして三四〇〇秒も過ぎてくると、酒席は、大きく、うねりうねってくる。おのおのが、おのがじしの器量いっぱいの言葉を乱射し合うのが、入れまじって洪水化してくる。その水、甘いか、すっぱいか。清水かー濁水かー澱水かー汚水か。

そんなことを、だれがかまっていよう。ともかくも、なにがしかの栄養を摂取すれば、よいんだと気負い立つから壮観である。

だが、なべて骨のもろもろ達は酒仙たるには、失格条件が多いようである。叛骨などと申して小骨を誇るためでもあろうか。いずれにしろ深瀬老を失い、安藤真澄の病欠が重なって、酒仙族へのゆかりは、とみにうすらいできた。ただし、酒仙が尊いものなのか尊しとすべきかーは、別の問題。気にしないこと、気にしないこと。

そうや、こんどのprofielは、だれやった。杉本や。なまり多き山前の答えがかえってくる。多分、荒木利夫が、うんその順番のはずと、間髪をいれず言ったと思う。こんな時には、後見役めいた口をきくのが趣味に近いから。酔ったきげんになっておらねば、ここで、今までのprofielを省ての依田の所見が始動となって、益さんのもっともらしい低い調子の発言が続き、やがて、雑誌をめぐる討論の展開が、だぁっと発生、話が横道へ横道へ拡がっていくのだが今夜は、どうやらそうならない。

これ幸い、ぼくは、酒をふくみながら杉本長夫君を考える。この、もの優しげにまるまるしい風貌でいて、物に動ぜず、一言居士的でもある近江詩人会のリーダーらしい男のことを、実は余り知ってはいないのに気づいた。でも朝日にのっていたあの詩は、ちょっと好かったぞ。杉本のあたりに目をやると、温厚長者風の忠さんと、その詩について、ぎゃぁ、ぎゃぁやりあっている。もっとも、そのぎゃぁ、ぎゃぁは杉本なにがしの一方通行で、忠さんは、声音ぐらいに負けるもんかーの顔つきで、めづらしく長々と談じている。は、はぁん。ぼくは思いめぐらす。

〈年をとって　ふと過去のくさむらに分け入ると　その奥でひっそりと　ベールをとった花々がある〉　と、うたった先生口調のこの杉本長夫がもつ　欲求不満は、一体なんなのであろうか。その声色の隅々から探ぐってやろと努力するうち　不覚。ぼくは　俄然発酔してしまった。

これを書きながら、さて杉本なにがしは、酒を好むのであろうか。したしまないのであろうか。今にして、どうしても思い出せない。面目ござらぬ仕儀ではある。

## 奥ピンの写真

依田　義賢

杉本君は古いつきあいである。しかし、私は杉本長夫という人をよく知らない。こんなことがあってなるだろうかと思うのだが、知ったようにも、書く

ことが出来ない。どういうわけなのだろう。一口にいえば、温厚な美男教授という風貌であるが、かっきりと、その人の特徴が表に出ていない人というべきであろうか、おとなしく、雑踏の中で、強い、ポーズも声もなく、じっと見つめている、体臭の少い人なのかも知れない。見せびらかすことも、強く表明することもしない、内性的な人がらが、私にそんな風に、思わせるのかも知れない。

同人の顔の写真を撮影するために、春の一日、約束すると、忙しくしている私が、わざわざ時間をさいてくれたと、ひどく恐縮して礼をいわれる。そんなに仰言らなくても、いいですよと、こっちの方がかえって、恐縮する位である。高野川沿いに、あたたかい、汗ばむような陽ざしをうけて、歩いて行った。「橋のあるところで、撮るのが好きなんですよ」というので、橋を求めたが、橋の上で撮影していると知れる写真というものは、むつかしいものである。どんな橋かに、問題がある。いろいろ撮ったが、町はづれなのに、おびただしく、車が通るので、落着いてとれない。慎重にとったつもりが、ピントがあまい、「奥ピン」模様である。奥ピンとは背景また、写すべき対象の面より少し奥にピントが合うことである。これは小生の未熟であるのに、ちがいないが、ズボンやネクタイまで、ピントが合っているのに、顔だけ、ピントが甘くなったのについては、私が杉本君を、甘く見ているという、失礼に通じはしないかと、恐れて、やめた。残雪が白く輝いている、遠い北山を、川上にのぞみ、町はづれの川沿いの街道の感じを出すため、バスの停留所の標識を入れて、撮ったのが、近眼の眼鏡の中で、鋭く眼が光って、きびしい顔にとれて、よいと思った。やさしいまじめな心根の中で、はげしい事物をきびしく見つめようとしている。それが杉本君の人なのかと、出来上った写真を見て、思った。

## 杉本氏の呪文

荒木　利夫

杉本氏の詩集呪文を頂いたのは、ついこの間のように思ったが、奥付をみると昭和三七年九月発行である。呪文とは、どうも一くせありげな名をつけたものと、杉本長夫と呪文とのつながりに違和感を覚えたが、私のこの違和感は、杉本氏の風貌や英文学関係の近代的教養の人ということと、古めかしい呪文という文字づらとに、私が途惑うたのであろう。

呪文の呪はのろい、或る人または人達に災がおこるように念ずる、というのがのろいの本流であるようだ。そうだとすると杉本氏は呪える人であろうか。人の不幸をよろこべるけったいな人であろうか。そうかも知れん。外国には悪魔という非道無慈悲の怖いやつがいる。日本にも神のたたりはあったが、日本のたたる神は、おまつりをして慰めるとおとなしいよい神さんになってしまい、とても外国の悪魔のような手のつけられぬものにはなりきれない。そういう悪魔は外国語の中にいるんだから、外国語のことで飯の食える杉本氏には、習い性となって呪う能力や習慣、発想がある、と思えないこともない。

そんな具合に焦点を絞って、詩集呪文の作品を読みなおすと、なるほど杉本氏は教授になりすました小悪魔のようにも思えぬこともない、「魔女」という詩をうたったりしている。

さて、しかし詩集の名となった呪文という作がある。十銭玉をにぎりしめ、場末のろくろ首の見世物小屋に入りこむ少年のわたしをいたわって、遙かな呪文に憑かれている、といっている。その次には、一つ五銭の、熱い黒砂糖の蜜のあふれるチャン餅を無性にこいしがっている詩が出てくる。総じて上品な身だしなみのよさそうな作品のなかで、この二つのリアルな作品と、呪文とはどういうつながりがあるのだろう。

そうすると、呪はのろいではなく、まじないなのではないか。人に災がおこることを念ずるのでなくて、人の災がなくなることを祈るまじないの方であろうか。忍術使いが印を切って変身するときに、口の中でとなえるのも呪文のようだが、そのように変身をねがう呪文でもなさそうだ。

呪文という、難しい練りにくい、よじれのある言葉をわざわざ詩集の名に選ばせたものは何か。そうだ、受身だ。わが心をしばり、わが動きを阻むもの、空の彼方、時の彼方から、わが心に糸かけるもの、呪文でなくて、なんだろう、故知らぬが。カーストという英語があった筈、いまいましいが。エンジンをかけられぬ、プレスも落下できぬ、感傷的心象風景のオルガン。

こんなこと言ってると、今度は私が意地悪と誤解されて、呪われぬとも限らぬ。つまりは、杉本氏の呪文は、やるせない祈りなのだと私は私をなっとくさせて、杉本氏の呪から逃れることにした。

## 呪文の杉本長夫君

山前　実治

1962年上梓した詩集呪文の格調高い健康な作品に「鳥」がある。整然としたスタイルは紳士でケレン味のないのがいい。すこし細かすぎる程の気遣いがきにならぬでもないが、それはそれでいいと思う。呪文を出版したその年の春ぼくは自分の雑誌に気負立ったことを書いた。

――あたまでっかちで、どこをつついたって、なんら行動性もともなわない、ひょろひょろの足で、しかも擬装されたメカニックのうえばかりみつめて、神経質にしかつめらしく、もっともらしく、そのうえむつかしい日本語ともつかぬ、とつくにびとのことばの直訳ともつかぬ文字を羅列して、おれは前向きの詩を書いているのだと、うそぶいている、いまの多数のひとたちのあまりにも観念的な、ひとりよがりのおしゃべりや、または、ひどいりくつっぽいことばで、これは二次元ないしは三次元などと、詩語らしく、みせかけの、よそおいばかりのこけおどしに、うぎみをやつしているのは、まったく、それこそ狂人のたわごとめいて、やりきれない。こんとんはいいとして、いいかげんに、たしかに整理凝結のときがもうやってきてもいいとおもうのはぼくだけではないとおもうがどうか。――

こうした杞憂にあてはまらないのはもちろんのことながら、杉本さんにあらあらしさや、飛翔を期待するには、あまりにも緻密に詩語にみがきをかけすぎるきらいがないでもない。そのいいくせは、ぼくの独断から察すると、英文学専門の大学教授にありがちのことらしい。もう十七八年もむかしから、ぼくの野人的言動に合致して気安くことばを交わす親友だが、詩についての論議をしたことはない。今この小文を書きながらどうしたことかと思った。五六年前から躰の調子を害ねているのが気になる。健康をとり戻せよ。

31

# 骨 31

## 目次


熊笹　荒木利夫 2
蜜柑　天野忠 4
顔　富岡益五郎 6
怠惰なとき他二篇　杉本長夫 22
安藤真澄と忘れ物　依田義賢 24
抒　山前実治 25
英詩と老人　大浦幸男 8
飲中掬月記　八尋不二 18
「我が感傷的アンソロジイ」への書簡集　端山皓子詩集のこと
十の接点　浜岡昇 10
安藤真澄さん追悼　田中克己 13
ドンな詩人　安藤美紀夫 14
慕童形　阿原寛一 15
大道芸人から豚　半井康次郎 16
表紙・カット　佐野猛夫



同人

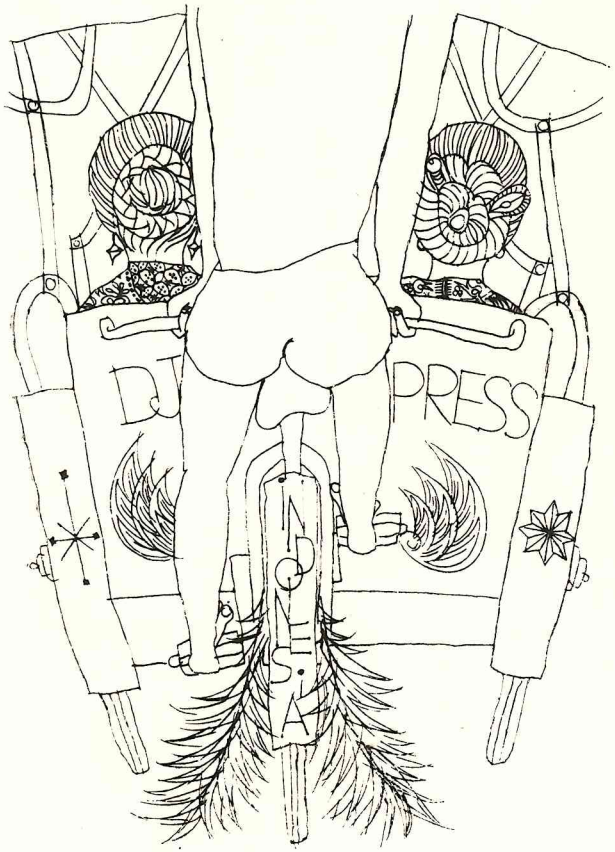
荒木利夫　京都市北区小山東元町二六（〇七五）四九一―二四七四
天野忠　京都市左京区下鴨北園町二の九三（〇七五）七〇一―四七八七
梅棹忠夫　京都市左京区北白川伊織町六六（〇七五）七八一―六三八四
大浦幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（〇七五）七八一―二四七〇
大鋸時生　大阪府八尾市山本町南五の六六（〇六）二〇三一―二二〇一
佐々木邦彦　京都市東山区山科大塚森町一六の八（〇七五）五八一―六九八三
佐野猛夫　京都市左京区下鴨西梅木町一九（〇七五）七八一―二四七八
杉本長夫　彦根市九ノ木町三六（〇七四九二）二―五〇一七
田中克己　東京都杉並区阿佐ケ谷南一ノ四〇ノ八（〇三）三一四―二七八三
富岡益五郎　京都市左京区修学院石掛町二〇（〇七五）七八一―九五八五
西山英雄　京都市伏見区深草願成町八（〇七五）五六一―三〇四二
町田トシコ　神奈川県逗子市桜山町三丁目七ノ一八（〇四六八）七一―四四八六
安田章一郎　京都市左京区吉田近衛町府住宅三〇九（〇七五）七七一―四九二三
八尋不二　京都市左京区下鴨神殿町（〇七五）七八一―二五〇六
山前実治　京都市東山区南梅屋町（文童社）（〇七五）五六一―一六二七
依田義賢　京都市左京区下鴨泉川町五三（〇七五）七八一―〇七九六



骨　31号　価 ¥100
昭和四十三年十一月十五日発行
編集者　山前実治
発行者　依田義賢
発行所　骨発行所
京都市左京区下鴨泉川町五三
電話七八一―〇七九六　依田方

〔骨〕への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル　双林プリント内　山前実治宛
電話二二一―四三八二

# 骨




No. 31　　1968. 11

故佐藤辰三氏

故佐藤辰三氏

# 十の接点

浜岡　昇

## 第一話

戦争直後の事、市の観光課の桑田氏から佐藤さんが入院して居られると聞いて、未だ薄暗い府立病院へ御見舞に伺った。奥様に伺うと自転車で転んで膝の皿を割られたとの事、「暫らくは御好きな酒も駄目ですね。」と云ったら、「いやそれが昨夜スキ焼で一杯やったのですよ、主人は云い出したら聞かないので……浜岡さんからも注意してやって下さい。」と奥様も困って居られたので、それではと病室に入って「先生早く治らねば駄目ですね……。」と云い掛けると、「浜チャン、望月先生（外科部長で写真連盟の審査員）は良い人だね、やはり名医は違うよ、少々酒も飲んで良いと云われた。」と、先手を打たれました。

## 第二話

先生は若人、特に女性が大好きでした。YMCAの写真クラブの為に、態々原稿を作って週に一度来て下さいました。ビワ湖のYMCAのキャンプにお伴した時「キリスト教には般若湯はないのかね、」「キリスト教はワインですよ。」「ワインならブランデーでも良いだろう」と、結局、ウイスキー御持参、小屋の中では若い人達に悪いからと、日が暮れてから砂浜で蚊にさされ乍らの酒宴、水泳パンツを取りに行くのも面倒だ。暗いから見えなければ良いだろうと、ノーフンで腰迄水に浸って「月が出た出た。月が出た。」其処へ天照大神ならぬ女性達、何事ならんと、懐中電灯を持って現われました。先生を中心に男達水から出る事も出来ず。顔を照らされて、面白し、面白し。

翌朝は、先生、若人達より早く起き出して、日の出を撮らなくちゃ、とパンツ一つでカメラを担いでザブザブと湖水の中へ。

## 第三話

或る夜、先生と飲み乍ら、「先生とは何か知ってますか」「先生と云われる程の馬鹿でなしだろう」「違う違う第一に、先生とは先づ生きて居る。即ち、生きるだけが精一杯。第二には、先斗町の先（ポン）、生意気の生で、ポンナマ、即ち、ポンスケで生意気なのを先生と云う。第三が、先に生れた」と教えた処、早速東京で話されたらしく、「浜チャン、東京では関西の様には行かないね。東大の先生に（ポンナマ）の話をしたら怒って居たよ」

## 第四話

YMCAの若人達と、夜の八時過、三条通を歩いて居た時。肩で風を切って来たアンチャン風の二人が、私達の列の中央を突き切って行った。突然立止った老大家、「オイ、コラ」と一喝、アンチャン二人「何を」と振り返った。「何をとは何だ、貴様達は道を歩く礼儀すらも知らぬのか、戻って来い」との大声に、さすがのアンチャンもこそこそと去った。「浜チャン、今日は飲んでないからだけれど、飲んで居る時は、酒の上の喧嘩と思われても困るからね」と。

## 第五話

中川菩提の滝を撮影にお伴した時、滝を撮ってから沢池へ通り抜ける相談をした。先生は何か感違いをされたらしく、沢池なら直ぐ嵯峨へ出られるから行こうと、云われた。

少々無理かと思ったが、先生は一度行った事があるから大丈夫と、歩き出された。沢池を過ぎて暫らくして、気が付かれたらしいが自分で間違ったとは云わず、「浜チャン、大丈夫かね、そろそろ目の前にビールがちらつき出したよ」地図で見ると、⅔は来て居る。今更引返す事も出来ず、先生の道具一式を担いで、雨が降れば川になる様な道を降り始めた。杖を頼りに歩いて居られた先生、今度は「浜チャン、ビールもちらつかなくなった」と樹の根に腰を下ろされた。まさか先生を担いで行く事も出来ず、家内に先を見に行かせると、少し行けば峠で視界が開けて京都の街が見えるとの返事、其処へ登山風の男が二人「今日は、頑張って下さい。お先に」と云って追い越して行った。先生も其の声に元気を取り戻し、「浜チャン、山男同志は気持が良いね」と私に手を取られ乍ら歩き出された。それ以後は人に会う毎に「今日は、頑張って下さい」と声を掛けて会釈された。先生の性質で、良い事は直ちに実行されたのと同時に多分、自分に「頑張って下さい」と云って居られたのだと思う。

## 第六話

北白川の山中へ撮影に行った時、水車小屋の前で滝を撮ろうとすると、「浜チャン、上の杭に木破が引掛って居るから写真にならな

いよ、之で取りなさい」とステッキ代りの一脚を貸して下さった。何とか木切れを取ろうとするが、中々上手に行かない。見て居られた先生は、手前の木破から少し宛取り除いて行かれ、漸く大きな木破も水に流れ去った。あの法隆寺の壁画を撮られた時、写した原板を持って帰り、夜現像して、気に入らぬと亦翌朝撮り直しに行かれた。と伺った事があるが、撮影には大変な忍耐力の持主であった。

### 第七話

或る朝、奥様から「浜岡さん、主人が倒れました」と御電話を頂いた時は驚いた。「奥さん、倒れたと云ってもどんな具合なんですか、中風ですか、事故ですか」とお尋ねしたが、奥様にも詳しくは判らぬとの事であった

暫らく東京で入院後、どうしても京都へ帰ると云われ、新幹線で帰られるのを駅迄お迎えに行った。其の時は、浜チャンが来てくれるとは思わ無かった」と大変喜んで下さった。

「先生、一体どうされたのですか」と問へば「チョット飲み過ぎて、腰が抜けただけだよ」とすまし顔。後で伺ったのだが、東京でよっぱらって省線の中で腰が抜け乗客に担いで貰って降り、お嬢さんの婚家へ担ぎ込まれたそうである。

### 第八話

帰京されて、病院へ直通した時、先生は割合にお元気で、「浜チャン、今後は僕も人物写真を撮るし、本当に良い仕事をするよ、別嬪を撮らなきゃ」と云って居られたが、亡くなられる暫らく前、病床を抜け出して、御近所の奥様方をつかまへては「今度は良くなったら、僕も本当の写真を撮りますよ」と云って歩かれたそうである。

### 第九話

小康を得られたある日、千本釈迦堂のラカンの写真撮影の話をした処、先生は思いついたら直ぐ撮りなさいと、態々一諸に来て、照明の具合等も手伝って指導して下さった。

後程お見せした時バックが悪いから今度は布でも持って一緒に行こうと云って下さったが、終いに実現を見ず再び病床に倒れ、不帰の人となられた。

### 第十話

雪がチラッキ始めた夜中、お宅から電話が掛り「父が亡くなりました」と旭さんから伺った。夜明を待って、お伺いしたが途中は珍らしく大雪で、タクシーの運チャンも困って居た。先生は雪が好きで、雪が降ると、例え二日酔でも、早朝から撮影に出掛けられたと伺って居る。先生の最も親しいカメラマン、小久保善吉氏が来られるのを前夜迄待って居られたそうで、丁度小久保さんの来られた夜同氏や佐久間さんと手を握って亡くなられたそうである。そして亦、御葬儀の日も霊柩車が出発すると　晴れて居た空から雪が降り始め、先生の死を清めるかの様に白い夜となった。



## 安藤真澄さん追悼

田中克己

わたしは昭和二十四年一月七日、京都の上賀茂に転住した。上賀茂からまっすぐ下った父の家へゆく途中に、リアル書房という古本屋があり、そこのいつも本をよんで客を見ない主人が天野忠氏だと知ったのは、日記によると、三月二十日のことである。日記にはまだ寒し、郵便なし、客なしとも書いてある。わたしはこの月はじめに末っ子が生まれ、勤め先は薄給で、疲れ切っていたので、京都で詩人を見つけたのを大変うれしく思ったと記憶する。もっともその前に矢野峰人先生にお会いし、高校以来愛誦の「行春哀歌」の作家と承知していただけに、大いに喜んだおぼえはあるが、これは大先生、天野忠さんは同時代人なのでうれしさがひとしおだったと思う。

忠さんの監事で京都詩人会が開かれたのは六月五日の日曜で、わたしの日記には参会者七名、天野隆一さんだけ名をあげているが、安藤さんとはこの時が初対面だったのではないかと思う。「骨」三〇号によれば、安藤さんは亡くなられた時が、六十四歳というからこの時は四十すぎて、皆若かったのだと思う。

この京都詩人会の第二回は七月三日だったが、わたしは欠席した。安藤さんはきっと出席したことと思う。さて七月二十五日には忠さんに原稿わたし、八月七日には堺町錦上ル大西卯一郎さんのお宅で第三回の詩人会があり、席上、雑誌を出すこと、その名を「コルボウ」とすることときまった。大西さんは久慈徹三の名でたしか北川冬彦主宰の詩誌同人で「肋」というキツイ詩集を出している人と知っていたが、今はおだやかな実業家になっておいでだった。会は六時間ほどつづいたが、安藤真澄さんは、黙ってニコニコしておいでだったような気がする。ただしこの日、ブリントされた詩二篇のうち、一篇は「旅の唄」と題し、下にカッコして「亡き妻に」とあり、旅に出て見たい、というかなしい詩だった。

それから三、四年、いやもっと長かったかも知れないが、年に十回程あう安藤さんはいつも物静かで、杯からちびりちびりと呑み、悲しみは語らず、にこやかだったが、わたしはこのごろになって、すまないことをしたと思う。

お宅を訪ねることもせず、御令息が三人ということも、不断のお仕事も問わず、もとより男やもめの悲しさ不自由さも同情しなかったのは、安藤さんの方にそんな気づかいは無用との御配慮があったかと思うが、昨年九月倒れられ、今年三月再発という御病気はついぞ知らずじまいであった。知って何になるかといわれようが、今は手に入らぬ詩集「大道芸人」は見せていただくべきだったし、「椎の木」の話もしていただくのだった。

実は偶然にもわたしは一昨年三月の復活祭の日、下賀茂の「若づる」という宿屋に泊った。ここは依田義賢さんから五十メートルほどのところなので、寄ると安藤さんを連れて依田さんが帰宅のところだった。「やあやあ」と挨拶し、荒木利夫、山前実治の二氏に電話かけて来てもらい、多喜さんのテープを聞いて、わたしは泣いた。これが安藤さんとのお別れだったが、そんなこととは予想もせず「若づる」まで来てもらって、一室で安藤

さん、依田さんの陶然と酔うのを見て、わたしは煩わしい女子大学生の修学旅行付添いという身分を忘れていた。これが詩人のつきあいだとわたしは思っていたが、今となっては俗なつきあいもしとけばよかったと思う。

「椎の木」という百田宗治さん監修の雑誌の第一次の同人だった由。わたしはこの大阪出身の大詩人を大学生の時、同じく東中野ずまいだったので、おそるおそるお訪ねしたおぼえはあるが、第一次「椎の木」はきっとそれより前のことなのであろう。第四次「四季」に伊藤整・阪本越郎の二同人がなつかしげに話しておいでだが、どちらもわたしより先輩で、わたしの知っている「椎の木」は故高祖保、山本信雄、山村酉之助などという人が書き、あとの二人とは年輩もそう違わず、おつきあいしたがこれも二十五年ぐらい昔のことである。

わたしに出来ることは何もないが、安藤さんの全詩集が出て、わたしがその人柄を好いたと同じく、もっと沢山の人に好いてもらえればと思う。依田さん、荒木さん、山前さんお願いいたします。

下賀茂のやしろのほとり桜咲くころに会
ひしがわかれとなりし
復活をわれは信ずるその日また会はむ人
とぞ定めたまへや
多喜さんよ安藤さんよ年少のわれをかば
ひし人とぞおもふ

## ドンナ詩人

安藤美紀夫

身内の者のイメージというものは、あまり近すぎてぼやけるせいか、それとも、生来の怠惰から父を十分に見つめることを怠ったせいか、とにかく、いまだに私は鮮明な父の像をとらえることができないでいる。おそらくは、父がひとかたならぬお世話をうけたであろう大勢の人たちの、父についての文章を読むとき、私はなおいっそうそのことを感じてきたし、今も感じている。

しかし、私が父のイメージを的確にむすび得ないのは、一つには、父のイメージが、常に母をクッションにして、あらぬ方向に浮びでるという屈折作用のせいかもしれないと思ったりもする。

私がもの心づいたころ、というより、少くとも本に親しみをもつようになった頃、父は詩から遠ざかっていたらしい。家には読むべき本はほとんどなかった。ことに、文学書らしきものは、そうであった。かなり豪華なつくりのゲーテ全集の第十何巻かが一冊あったが、これは「色彩論」その他を収めたものであった。そのほかに、大思想全集の未来派か何かに関するものが一冊あったように記憶しているが、これも、演劇というよりはむしろ美術に関するものであって、おそらく、父は自分の生活の糧である図案に役だつものとして、持っていたものだろう。

しかし、それにもかかわらず、私は、かって父が詩を作っていたことを知っていた。「大道芸人」という詩集の名も知っていた。いつの頃から、だれに聞いてそれを知ったのかは、覚えがない。詩には全く無智だった母が、若い頃の父へのある感慨をこめて、ひとりごとのように語ったのを、子どもの心にとめたからかもしれない。あるいは、戦争のために本職の図案でも追いつめられた父が、苦しまぎれに酔っぱらって、壁のように反応のない家族に、昔の栄光を物語ったことがあったかもしれない。詩をすてたといいながら、百田宗治の色紙を、ずっと二階の仕事場のすみにかけていた父であってみれば、おそらくそんなことは何度かあったにちがいない。

しかし、一日一日の貧しく単調なくらしにとっては、所詮、父の詩などは栄光にも汚辱にも値いしないものだったろう。貧窮問答歌も、喰うべき詩も書かず、祖母をも含めて六人の家族を養いかねていた詩人は、いったい何を考えていたのであろうかと、私は、いまだにその心をはかりかねている。

母は、その父を「ドンな人やさかい」といっていた。詩人としての父に対する評価などでは、もちろん、ない。何人かの家族のくらしを支える一人の男として、もう少し才覚があってもという、恨みに近い気もちの表現だったであろうと思う。他人の借金をせおいこんだ父が、母の晴着を売ろうとして、母が泣いたのは、あれは、戦時中のことだったか、戦後のことだったか、私にはもう覚えがない。ただ、私が、そのとき、そんな「ドンな父」をはげしく憎んだことだけは確かである。

にもかかわらず、私は、詩人としての父をいくらかでも尊敬していたのであろうか。戦時中、勤労動員先の工場の寮から、私は、父の徴用先にいくつかの詩を送り、批評をもとめたことがあった。おそらく、このドンな詩人は、いつのまにか息子が詩を書いていたなどとは、夢にも思っていなかったにちがいない。批評のかわりに、詩などはやめろと、あわてて書いてよこしてきた。

私の頭の中にある父のイメージの混乱は、もう一つ、母の死の時期と、私の少年期のおわりとが重なっていたという偶然によってひきおこされたようにも思う。私は、そのころ、父よりもはるかに強く母にとらわれていた。母の死によって、それはますます強くなった。そして、母を考えることによってしか、父をふりかえることができないという、この奇妙な思いは、今もまだ完全にふりきることはできないでいる。

私に、もし、ほんとうに父の姿がつかめるときがくるとすれば、それは、私が、この母の呪縛から、とにもかくにもぬけだせたときだと思う。

ただ、母にとって「ドンな夫」であった父は、詩人としても、もっともドンな詩人であり、しかも、そのドンな詩人を、私は、このごろやっと、一人ぐらい、あんな詩人がいてもよかったのだと、思いはじめてきていることは、確かである。

## 慕童形

阿原寛一

したはしい安藤兄を、野辺送りしてから、はや七十日ほどが、過ぎてしまった。兄を失ってしまった寂しさが、このごろ、強く胸を打つ。兄が入院してから、暇があれば、日曜日毎に、右京病院を訪ねた。いつも昼ごろであった。自由の利く左手にスプーンをもち、臥しながら食事を口に運んでゆく兄を、看護するのは、つらかった。進まない食事だった。「骨」の同人たちの慰安激励の寄せがきを、見せたり、その人たちの消息を、言葉少な

に、語り合ったりもした。病状や家族のことは、余りふれず、詩の話も殆ど出なかった。病が急変する前の日曜日も、私は病院にいた。兄は珍しくベッドの上に胡坐を組み、手造りの小机を前におき、壁にもたれて食事をした。退院したいような口振りを、みせていた。煙草がきれていた。私は、「わかば」というたばこを買いに行った。一箱を封切り、病人が取り出しやすいように計った。どちらが、その時、言い出したのだろうか、煙草の「バラ売り」の話が出た。二十数年前、何年か過ごした満州K市での、小さな茶食店のことを喋った。兄は、コルボウ詩集の中の、拙作「茶食店」のことを、覚えていた。

米、醤油や、茄子、胡瓜などの食糧雑貨がやっと何とか中国語で、買物出来るようになったころ、私は、城内で、古ぼけた七間房子（家）をみつけた。親切な（？）家主が、早速、湯売場を教えてくれた。狭い胡同を二曲りしたところにあった。毎朝、目覚めると薬鑵をさげて湯を買いにでかけた。茶食店は、その最初の胡同にあった。私はこの店で、朝食代りに、ツアオ　ツー　コウ（中国風カステラ）を二つ喰べ、あつい朝の茶をすすりその日の煙草を、買うことにした。色とりどりの煙草が並んでいる店内の、その各々の煙草の前に、小皿にのせたバラ売りのたばこがあった。一本でも二本でも、心よく頒けてくれた。気の良さそうな、ここの掌櫃（シャンイー）（店主）が、いろいろと、話かけてくるが、その意味は半分も判らなかった。それは、店頭の商品の説明だったり、出入する客の品定め（？）だったり、この店には庶民の匂いがあった。私は、店の片隅の、堅い椅子に坐り、アクセントのきつい中国語を、ただぼんやりと、聞き流していた。……童形の安藤兄が、客の品定めのところで、はずかしそうに笑い、もっと健康なとき、私と出入した、円町の丸八と言う飯店に、よく似ているなあーと言った。

× × × × ×

夏休みをとった午後、私は、深草石峯寺に行った。唯、何となく石羅漢が見たかったからである。訪う人は、殆どいなかった。かたまって並んでいる羅漢よりも、ぽつんぽつんと、草むらや、籔陰に、捨てられたように置かれている羅漢ばかりを見て歩いた。安藤兄の顔をしているものを、探し出しているような気持に駆られた。あの柔和な目と、大きな口元、それと思へば思へる羅漢が、二つほど、見付かった。羅漢には、影がなかった。鼻は欠け、眼の彫りも浅かった。下半身には、苔をつけ、稚拙なままに、立っていた。すっきりとした孤独、めそめそしない孤独、冷々とした孤独、この羅漢の後姿が、そのような寂しさをもっているようにも、思えた。隣接の深草墓園は、寒々としていたが、ここは、暖かった。……

いとけなき童形もあり石羅漢　秋陽うけて恥じ入るがごと。

石峯寺羅漢の顔の二つ三つ亡き友どちの童顔に似て。

## 大道芸人から豚

――マーガンダ――

半井康次郎

枯芝の丘の上の墓へつづく　野辺の畔りに



この一枚の銅版画の印象は、古ぼけた写真のように、すっかり退色してしまった。いまから、かれこれ四十年前のことである。

このように、安藤君と私の長いおつき合いは、なまやさしいものでなかったとおもっている。

安藤真澄が亡くなられた。

吉沢君からハガキを貰って、九月朔日、かれが脳溢血でたおれ、入院したことを初めてしったのである。なんとうかつであったことか。

六月二十二日。その朝であったか、ふと、家内から口にだしたことを、私はだまって、ききながしたことが、あった。

告別式の当日、遺族のほかに、かれが最後まで所属した、骨のグループらの友情にかこまれて、みまもられていた。安藤のひろい交友関係のほども、しのばれて、私はかれの幸せを、いまさらのごとく、あらためておもった。

轟々時代――のなかまである安藤をうしなって、また、ぽかっと大きな穴があいた気がする。いま一人のなかまである「境涯の詩人」関沢げんじ。は、昭和十五年六月、とう病十三年、三十九才で死んだ。

なお安藤君は、戦後の、やけ杭を燃やすように、再び詩をかきだした。みんながそうであったように、そんな時代であった。そのうち、尤も活躍していたのは彼であった。

――ただ一体、安藤のしごとを、だれが、うけつがれることであろうか」について、私はいま考えている。

依田義賢氏も、轟々のなかまであった。しかも、骨の発行者であるばかりでなく、私以上に、依田君は、安藤君とは、顔を合わせることが、多かったようにおもう。

天野隆一、児玉実用、荒木二三氏らの旧友の顔も見えられた。骨の山前氏から、私が古い友人として、山へ（野辺のおくり）行くようにといわれたが、都合でそれがはたせなかったことを、それらの諸氏にお詫びする。

○

安藤君は、生涯を染織図案家で、詩人であった。しかしかれは、図案家であることを、終始おしかくして、ひとに話すことはなかった。生活のために、筆をもちつづけて口すぎにしてきた。而うして、自ら職人をもってあまんじるという風であった。

彼は若いころから、旅が好きであった。牧水の時代のように、のんきな旅をすることなど、考えもできないことであるが、近年は、北海道旅行二回。（北見、紋別―）子供らの疎開先の讃岐。四十二年六月には、奥能登方面へ、吉沢君と同行した、そのほかの場合は、たいてい単身であったようだ。

私はここでかれの詩にふれるつもりはないが、旅を通じてえた、骨に発表する一連の詩作などは、最も対象に、視野が展けたことは、かれの詩の一つの特徴であり、詩に深い、洗練性をくわえたことに気づく。

もう一つ、天野忠氏の、こんどまとめて本になってでた「我が感傷的アンソロジー」における、その中の、安藤真澄に関する感想は、よき友人の理解者の文章として、残ったのである。

大道芸人
豚

――マーガンダ――

かれは昇天というコトバをこのんだように、眠れ、永遠に

（九月十八日）

## 「我が感傷的アンソロジイ」に寄せられた書簡抄

（天野忠あて）

**荒木文雄**

――皆さん面白く読んでおられますように、又面白く読まれるだけの価値あるものと思います。人物評がその人間の真をついているか、否か、はむずかしい問題で、対象になっている当人でもよくわからず、結局は、フイクションを面白がってるような点もあるのですが、それで助かるわけで、実際の真をつかれたらどうにもやりきれないだろうと思います。それでも当人が、ウソだともいいきれないように書くということは、大変なことだろうと思います。本当に御苦労さまでした。老人になって追い追い心細いことですが、そこに何やらあるらしいですが、心細さのなりっぱなしでは、話しになりません。何卒お元気出して健康でいて下さい。

**中江俊夫**

いけずで、かなしい面白いアンソロジイが本になり、先夜はちょうど、それをいただきに訪れたかたちになりましたね。自分の部分については、大いに苦笑し、それこそアイソの良い年寄りのように――もう、あれから年をとりましたからね――にやにやしたわけですが、おそらく、書かれた御当人たちは、きっとみんなそうかもしれませんね。そこが「感傷的」ということなのでしょう。いじわるじいさんは、ほんとに人を怒らしたり、人を傷つけるような痛烈な皮肉を云おうとは思っていないようです。それでこの集の誰もかれも――おそらく片瀬さんをのぞいて――ひとりぼっちで、孤独で、救いようもない連中さえ、つまりたいへんに、しがない能なしの男たちが、すこしほっこらとして、救いようもあるように見えるのが、一番の長所なのでしょう。でも、ここに「わが感傷的アンソロジイ」が、自分も同様、サラッとした戯画化があれば、みんなもっとにやにやしたでしょう。ところが背後で、いたずら好きの天野さんはたのしげです。黙って。

**富士正晴**

――内容しんみりして、まことに行き届いた心持を感じ、これは時々よみかえすために身辺においておくべき本だと思いました。このごろこうした種類の沈んだ文章を書く人も少く、またそれを味い得る人も少なくなったと思います。実に文字通り貴重本です。お礼申し上げます。

**永瀬清子**

――私はゆうべ、とびとびによみ、今日はつとめの机でかくれてよんで、それぞれの詩人たちの、おそらく貴方の雰囲気で、捕えられた蝶々とんぼ類の、たよりなくも、なつかしげな風貌をおもいました。

Minor poets と云ってしまってはいけないかもしれない。でもそれは、一層身に近い姿の詩人たち。

この間石原吉郎氏が、岡山へおいでの時、貴方が、東京の詩人たちよりも、もっと領土をおもちであると思っています。その領土はどこにあるのか、地上にあるのでなくて、空気の中にあるのか、空気網で貴方は、らくらくとつかまえておいでです。

（この間京都で姪の結婚式がありいそいでいき南禅寺の辺ぶらついてかえりました）

**田中克己**

大分永らくお会いしませんが、本日は御本ありがたくいただきました。こんなに私のことを書いていただけたのなら、山前君送ってくれてよかったのにと思います。御文中の杢太郎は、立原道造の遺本売立で、私が「二十円」と値をつけ堀さんが「五円」でいいよとして下さったものです。それを売る位だから、京都の生活の苦しかったことお察しいただけると思います。今は大分楽になりましたが体がまいりました。あなたも御病気なさるとか、私と同じく低血圧で不平ならべながら、永生きなさるのとちがいますか。

多喜さんと武田豊さんとなつかしくよましていただきました。厚くお礼のべさしていただきます。奥様をはじめ私を忘れない人たちによろしく。新幹線にのればと思いながらもおっくうでいけません

お礼かたがた

女子大の図書館にてひっそりと
鋒おさめゐし人をばおもふ



## 端山皓子詩集のこと

端山皓子さんの詩集が、端山さんの最後をみとった神田秀夫氏によって編輯刊行された。昭和八年（二〇才）から昭和一七年（二九才）までの詩約六〇篇を集めてある。

端山さんが詩の投稿を始めたのは昭和七年とのことだが翌八年には早くも注目を浴びた。彼女は、まじり気のない純な感情を、ほどよいふくらみと、ほどよい抑制で格調ある詩の制作をつづけた。昭和一一年に私等は詩誌「朱幃」に端山さんを神田秀夫（石倚しろし）氏と共に迎えた。昭和一六年のはじめ頃端山さんは東京から北支山西省に渡った。北支から京都へ詩稿が送られてきた。北支での詩一一篇がずっしりした重みをもって今度の詩集に編まれてある。そのうちの一篇。

槐樹と雨

槐樹の花と共に散る雨
風もないので追憶までが遠くもの
うい
雀になりたい
落ちた黄色い芯をついばむ
若し円かな夢を大事に一つ〳〵拾
って食べられるものなら――
乾いた土に雨が音立てて吸はれる
何もかもが乾き切ってゐる
何もかもを乾き切らせてしまふ
蒔いた草花も水をやらなければ夕
方よみがへりもしない
パッ〳〵〳〵と、土に音立てる雨
の小銃弾
雲と地との戦争だ
現実ではもっとはげしく
弾丸が山の向ふでうなってゐるけ
れど
こゝではまだ風流な花と共に散る
小銃の弾
乾き切らせてみせるいや、さうは
させないと――
山の向ふの戦争はどうやら空の勝
利にきまったけれど
ここでは空の負けいくさ
槐樹の雀の宿も哀れなほどざんざ
と降っても
あゝ、又乾く
乾きすぎてひどい土埃りだ
雀が槐樹の花でマスクする

北支での各篇はいずれも見事な作で、戦の大陸の、異った、微妙な、苛烈な生活環境の中で、おごりも衒いもなく、静かな目で、静かに書かれた態度は、まことに敬重に値すると、当時私は友と話合ったものだ。その時分いつわりの詩人が多かった気がする。北支へ渡る前に端山さんに佳作が数々あったことは云う迄もない。

神田氏のあとがき「昭和十八年、詩作途絶え、やがて永く筆を執らず」「昭和十九年、敗戦の兆すでに現れ、物価に追いつけず、白麺の入手困難となり」端山さんの「過労いかんともし難し」「昭和二十年、夫の看護空しく、八月十二日（終戦の三日前）」永眠。惜しい詩人を失なった。

二十数年たってこの詩集を出された神田秀夫教授に私は敬意を表する。＜詩集についての問合せは神田氏（東京都太田区山王三ノ一七の二三）又は私に＞（荒木）